HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮沢賢治童話研究 ： その共生思想および自己犠牲への道程
Author(s)	閻, 慧
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12827号
Issue Date	2017-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12827
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67901
Type	doctoral thesis
File Information	Hui_Yan.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文

宮沢賢治童話研究

――その共生思想および自己犠牲への道程――

所　属：北海道大学大学院
文学研究科
言語文学専攻
映像・表現文化論専修

氏　名：閻　慧（エン　ケイ）

学籍番号：〇五一四五〇〇八

目次

凡　例　七頁

序　章　本論の出発点、目的と方法　八頁

1. 「聖人賢治」・「高等遊民」から離れて　八頁
2. 童話らしくない賢治童話の独自性　八頁
3. 賢治テクストを《群》として読む　十一頁
4. 本論文の構成　十二頁

第Ⅰ部　越境・異文化接触・共生　十五頁

第1章　エスペランチスト・宮沢賢治の共生思想　十六頁

1. はじめに――表現者としての宮沢賢治　十六頁
2. エスペラント語の歴史と思想　十六頁
3. 宮沢賢治とエスペラント語の接点　十七頁
4. エスペラント思想と賢治文学における共生願望との共鳴　二十頁
5. おわりに　二十一頁

第2章　賢治文学における越境と近代文明　――「注文の多い料理店」、「氷河鼠の毛皮」を中心に――　二十三頁

1. はじめに――賢治文学における越境の普遍性　二十三頁
2. 「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の物語構造および登場人物の類似性　二十四頁
3. 鉄道文明と越境行為　二十七頁
4. 鉄砲・犬・帰途　三十頁

５．おわりに　三十一頁

第３章　賢治文学における植民地主義と越境への意志　――「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」――三十四頁

１．はじめに　三十四頁
２．〈自然―人間〉原始的交渉の形成――「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」　三十五頁
３．資本の論理の「勝利」――「なめとこ山の熊」　三十八頁
４．賢治が生きた時代――北海道開拓とアイヌ民族社会の解体について　四十頁
５．宮沢賢治と近代日本の植民地主義　四十二頁
６．おわりに　四十四頁

第４章　異人の変奏曲：風の精霊・又三郎と新参者の間　――〈風の又三郎〉論――　四十七頁

１．はじめに　四十七頁
２．「風野又三郎」から「風〔の〕又三郎」へ　四十七頁
３．風の精霊・又三郎の誕生　四十八頁
４．異人の物語から〈異人―人間〉の物語への変奏　五十一頁
５．新謎解き・風〔の〕又三郎　五十四頁
５－１．高田三郎と又三郎の同一化　五十四頁
５－２．子ども共同体の一員となる「又三郎」　五十六頁
５－３．高田三郎の消失は異人殺しなのか　五十七頁
６．おわりに　五十八頁

第Ⅱ部　食物・生死・農業　六十一頁

第５章　ビヂテリアン・宮沢賢治の菜食思想　六十二頁

１．はじめに――ビヂテリアンとしての宮沢賢治　六十二頁
２．ビヂテリアニズムと賢治の仏教信仰・実体験　六十二頁
３．賢治のビヂテリアニズムと徴兵検査体験　六十四頁
４．おわりに　六十六頁

第６章　宮沢賢治における死と食　――「ビヂテリアン大祭」、「フランドン農学校の豚」を中心に――　六十八頁
１．はじめに　六十八頁
２．「フランドン農学校の豚」――食と死の接触　六十八頁
３．徴兵検査体験をめぐる矛盾と葛藤　七十頁
４．「ビヂテリアン大祭」――矛盾の表現と調和　七十五頁
５．おわりに　七十八頁

第７章　宮沢賢治の農業と文学　八十一頁
１．はじめに　八十一頁
２．賢治の出自と農業への目覚め　八十一頁
３．賢治の農業思想と実践――「農民芸術綱要概論」と羅須地人協会　八十三頁
４．賢治と白樺派の人々　八十五頁
５．賢治の農業と文学　八十八頁
６．おわりに　九十一頁

第８章　宮沢賢治における産業組合と北海道　――「ポラーノの広場」を中心に――　九十三頁
１．はじめに　九十三頁
２．宮沢賢治と北海道の農業実践　九十四頁

３．賢治文学と産業組合　　九十六頁
４．「ポラーノの広場」までの改稿と産業組合の成立　　九十八頁
５．おわりに――宮沢賢治における産業組合　　一〇二頁

第Ⅲ部　宮沢賢治の理想世界と自己犠牲　　一〇五頁

第９章　宮沢賢治における自己犠牲　　一〇六頁

１．はじめに　　一〇六頁
２．賢治文学における自己犠牲の表現　　一〇六頁
３．賢治文学における自己犠牲の特質　　一〇七頁
４．おわりに――自己犠牲思想の背景にあるもの　　一〇九頁

第１０章　賢治文学における自己犠牲と武士道思想　　――「グスコーブドリの伝記」を中心に――　　一一二頁

１．はじめに　　一一二頁
２．武士道思想の歴史　　一一二頁
３．武士道思想と賢治文学　　一一四頁
４．「グスコーブドリの伝記」における自己犠牲　　一一七頁
４－１．「グスコーブドリの伝記」の成立　　一一七頁
４－２．ブドリの自己犠牲と武士道思想の共鳴　　一一八頁
４－３．自己犠牲の異なる描き方　　一一九頁
５．おわりに　　一二一頁

第１１章　宮沢賢治の理想世界と自己犠牲　　――「銀河鉄道の夜」後期形を中心に――　　一二三頁

１．はじめに　　一二三頁

２．「銀河鉄道の夜」改稿の経緯　一二三頁
３．自己犠牲のモチーフを描く後期形　一二五頁
４．賢治文学における理想世界とは何か　一二七頁
５．賢治の理想世界と自己犠牲　一二八頁
６．おわりに　一三一頁

第１２章　実験記録から未決の物語へ　――「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって――　一三四頁

１．はじめに　一三四頁
２．初期形〔一〕、〔二〕とは何か　一三四頁
３．初期形〔三〕――ジョバンニの物語の生成　一三七頁
４．変容する後期形　一三九頁
４‐１．ジョバンニと鳥捕りとの対照関係　一三九頁
４‐２．ジョバンニとカムパネルラの間　一四二頁
４‐３．ジョバンニの家族の物語　一四四頁
５．おわりに　一四六頁

結語　本論の成果と課題　一四八頁

参考・引用文献一覧　一五一頁

初出一覧　一六一頁

後記　一六二頁

凡例

一、本論文では基本として西暦を使用した。ただし、引用文の中に年号を使う場合、そのままにした。

二、文中の人名については、敬称を略した。「宮沢賢治」と「宮澤賢治」の表記は、すべて「宮沢賢治」に統一した。

三、賢治独特の用語について、引用文を除き、すべてを統一した。例えば、「イエハトブ」、「イーハトヴ」、「イーハトーヴ」、「イーハトーヴォ」、「イーハトーボ」、「イーハトーブ」などの表記が賢治テクストに存在するが、本論文では、すべてを「イーハトーブ」に統一した。

四、引用に関しては、適宜、旧字を新字に改め、仮名遣いについては出典の表記に従った。必要と思われるものを除き、ルビ・傍点を省略した。また、同一テクストを分析する際に、煩雑さを避けるため、作品に関しては、各章において最初に言及する時にのみ注記した。ただし、第１２章のように、テクストの改稿について論じる時、改めて注記する場合がある。

五、詩を引用した場合、原文の改行箇所は「／」で示し、引用を略した箇所については「[…]」で表記した。引用文内にある括弧などの記号については、原文にあるものについては特に注記しなかった。引用符号「」で示した引用文の中に、また引用符号が使われる場合、『』と表記した。

六、注は各章に通し番号を振り、各章の後に掲載した。また、注の情報が同一である部分について、「同前掲」と簡略に表記し、同じ出典の注が連続する場合、「同前」と表記した。ただし、参照の便を考え、章を改めるたびに、出典も改めて明記した。

七、本論文における漢数字の使用について、以下のように統一した。例：二〇一七年三月、二〇〇九年十月、第二十三巻第十二号、九十八－一〇五頁、五〇〇、一九三〇年代、十年、二十歳。

八、本論文の書式をＡ４用紙に合わせて設定したが、分量は四〇〇字詰め原稿用紙の約五三〇枚に相当する。

序章　本論の出発点、目的と方法

1.「聖人賢治」・「高等遊民」から離れて

宮沢賢治は、日本近代文学研究の分野において、非常に重要な作家の一人である。生前の無名さに比べてみれば、死後の人気作家への転身は、如何にも劇的なものであろう。詩人、童話作家、農業技師、熱心な仏教信者、音楽や美術などの多分野に関わる才能者――世を去った賢治の顔は、多くの人々によって描かれている。これによって、いつの間にか、聖人としての宮沢賢治像が作り出され、一つの望ましい理想像の誕生が宣言された。また、賢治生誕百周年を機に、その作品が数多く映画化・舞台化され、出版物の刊行および記念イベントの開催など、社会的な賢治ブームが引き起こされている。

このような現象に対して、冷静な姿勢を保ち、聖人賢治像を見直そうとする声も存在している。その端緒として、例えば、天沢退二郎は「宮沢賢治論素描」において、「いたるところにいる賢治礼賛者・『賢治教』信者のように、賢治文学の美しさ（ヒューマニズムやモラリズムまで含めて）を情緒的にのみとらえ、『いいなあ、いいなあ』と嘆声をあげる」(1)ことを批判した。また、荒川洋治は『新潮』(2)に「美代子、石を投げなさい」という詩を発表し、作り上げられた〈宮沢賢治〉という虚像に盲目に寄り添う人々を批判した。その後、千葉一幹(3)も同じスタンスを示し、「安易に賢治を肯定しないこと」を強調した。この流れから出てきた代表的な賢治批判論として、吉田司の『宮沢賢治殺人事件』(4)における「高等遊民」としての賢治像に対する批判、また村井紀の「産業資本家宮沢賢治の誕生」(5)に代表される一連の論考を挙げることができる。このように、賢治に「石をなげる」ことは、その神聖化という危険性を防ぐために、有効な手段となっただろう。ただし、吉田と村井の賢治論では、そのテクストを評論の対象としていなかったところに、一考すべき余地が残されている。

〈宮沢賢治〉に対する認識は、〈聖人―遊民〉という二項対立的なシステムから身を脱出し、その魅力的で豊かなテクストの中においてこそ改めて行われるべきであろう。これまで充分に考察されなかった歴史的資料と照らし合わせることで、賢治文学に潜んでいる時代言説との関連が浮上する可能性が存在し、また緻密で丁寧なテクスト分析によって、賢治テクストを読解する可能性が新たに提示されるはずである。

このようなことを念頭に置き、本論文では、賢治テクストと真剣に向き合う姿勢を取り、賢治思想およびその文学の特質を理解することに取り組みたい。先述の作業を行うことで、賢治文学と当時の社会状況との関わりが解明され、そこからまた、賢治文学の特質が理解されるだろう。

2. 童話らしくない賢治童話の独自性

詩と童話の創作を主な文業とする賢治を、小説を中心とする近代

文学史に位置づけるのは難しいことである。このことは、一九六〇年に、祖父江昭二の「宮沢賢治の位置」(6)において、すでに指摘されている。しかし、宮沢賢治の作品は童話といっても、取り上げられた題材やテーマの深刻さから見れば、子どものためのお話という一般的な意味での童話と明らかに異なっている(7)。それにも関わらず、賢治の作品は、独特な想像力を駆使し、多くの読者に新鮮味を与え、人々を魅了し続けている。

賢治の童話は如何なるものであろうか。賢治の唯一出版された童話集『注文の多い料理店』の広告文の中で、「作者の心象スケッチの一部」、「新しい、よりよい世界の構成材料を提供しやうとはする」ものだと、賢治は自分の童話について規定していた。これらの言葉で表現したように、宮沢賢治にとっての童話というのは、心象スケッチという世界に対する唯心的な認識に基づき、「よりよい世界」を構築する文学様式であろう。また童話集の表紙には、「イーハトヴ童話」と記されている。広告文の中で「イーハトヴ」は、著者の心象中のドリームランドだと位置づけている。また、「イーハトヴ童話」という言葉を理解するには、以下の序の内容にも目を向ける必要がある。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道路線やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。

ほんたうに、かしはばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかつたり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立つたりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほりかいたまでです。(8)

この文章から、「イーハトヴ」というのは、賢治の童話世界の構築に素材を提供する場所であることが理解できる。それと同時に、賢治童話には、人間と自然との交流、共感（時には対立）が多く描かれることも予告しているだろう。童話集『注文の多い料理店』に収録された作品だけではなく、ほかの童話作品をも含めて概観すれば、賢治文学では人間が中心的に取り扱われていないことが明らかである。そこに様々な動物や植物が登場し、人間と相互に葛藤し、時には人間との力関係に逆転をもたらしながら、共に生きることがよく描かれている。賢治童話において、人間の文明は、自然の支えによって成り立ち、人間は自然の中に存在するほかの生き物たちによって生かされている。このような特徴を持っている賢治文学を読解するため、その一助として、「共生」というキーワードをピックアップしよう。

初期の賢治書簡を参照してみると、「皆人の又自分の幸福となる様」(9)、「我等と衆生との幸福となる如く吾をも進ませ給へ」(10)、「十界百界もろともに仝じく仏道成就せん。一人成仏すれば三千大千世界山川草木虫魚禽獣みなとも成仏だ」(11)などの内容が述べられ、万物共生への願いがあったことが窺える。

先行研究において、共生という言葉をキーワードとして打ち出し、賢治の共生倫理観の確立について論じたのは、松岡幹夫の宮沢賢治論である。松岡は法華経を、「すべての民衆をもれなく成仏させるた

めに説かれた経典」として認め、賢治が『法華経』の『一切衆生皆成仏道』の精神に強く感化され、そこから万物が遊楽する理想世界を思い描いた」[12]と主張している。勿論、賢治の共生思想の成り立ちには、『法華経』の存在を無視してはいけない。しかし、共生という言葉は、自然と人間との共生、多文化・他民族の共生など、様々な文脈で使われている[13]。そのため、仏教思想との関連だけではなく、更なる広い文脈で、賢治の共生思想を吟味する必要が生じてくるだろう。また、賢治テクストにおいて、共生というテーマがどのように表現されているかについて、松岡の論考ではほとんど触れられることがない。そのため、テクスト分析に基づいて論述を展開する余地がまだ残されている。そこで、本論文では、賢治の実体験および当時の社会状況と結び付けながら、テクスト分析を通じて、賢治の共生思想を透かしてみたい。

まず、植民地主義の文脈から、共生について考える。これに関係する先行研究として、西成彦の論考は注目すべきである。西は入植者と異なる立場にある先住民の視点から、賢治文学を植民地文学、クレオール文学として読むことの可能性を提唱し、植民地主義を批判する賢治像を示唆している。このような論考を踏まえた上で、本論文では、植民地主義に関わる着眼点を、かつての内国植民地である北海道に置き、入植行為がもたらす異文化コミュニケーションの可能性と困難さについて、作品分析を通じて重点的に検討する。また、これに関わって賢治のエスペラント思想、および非常に関心を持っていた鉄道に対する注目は、重要な手がかりを提示してくれると思われる。本論文では、まずこのような論述を通じて、賢治文学を異文化コミュニケーションを描くものとして読み直していく。

それから、賢治の共生思想について考えるには、食問題も一つの重要なテーマである。ビヂテリアンである賢治の実体験と照合すると、徴兵検査を経験することで得られる戦争に対する認識は、食問題と死生問題との関係性を示唆している。この問題を検討する先行研究として、中村晋吾の論考が挙げられるが、具体的なテクストへの言及が欠けているため、不満を覚える。また、関連して、農業に目覚めた賢治像についても、考察の余地がまだ残されている。宮沢賢治の農業思想および実践と彼の文学について論じる際、見逃せない先行研究として、大島丈志の『宮沢賢治の農業と文学』[14]が挙げられる。大島は丁寧な資料調査によって、賢治のふるさとである岩手県の農業実況を解明し、苛酷な自然状況が賢治文学にもたらした影響を明らかにした。ただし、賢治文学に取り上げられた農業要素の背景となる当時の全国的な小作農問題、また産業組合運動の状況などに関して、充分な検討を行ったとは言えない。そこで、当時小作農問題を解決するため、全国的に見ると、先進的な実践が行われた北海道という土地に注目しながら、宮沢賢治の農業と文学について再考を行う必要が生じてくる。この点に関しては、北海道に創立された札幌農学校の存在、また賢治との交流がある人物に対する注目が要請されている。

さらに、本論文で解明していきたい課題はもう一つある。それは、賢治が考えている万物共生の理想世界とその文学における自己犠牲

のモチーフとの関連についてである。自己犠牲というのは、他者のために、自分の時間、力、利益、さらに命を捧げる自己犠牲的行為である。賢治自身は「自己犠牲」という言葉を使ったことがない。だが、その多くの作品から自己犠牲の色合いを感じ取ることができる。

賢治文学における自己犠牲に関する先行研究では、仏教思想との関連性を論じるものが主流と言える。また、仏教思想を基盤とする賢治文学の自己犠牲が、キリスト教からも影響を受けていることが検証されていた。しかし、当時の時代言説と照合するならば、自己犠牲の精神を重視する武士道思想の存在は、無視してはいけない。ゆえに、賢治文学における自己犠牲を理解するには、武士道思想からの影響も加味されるべきであろう。さらに、共生の理想世界の実現に重要な手段として描かれる自己犠牲と、賢治が繰り返して主張する「ぜんたい幸福」の世界観との間に存在するジレンマに関して、従来の研究ではあまり言及されていなかった。そこで、本論文では、賢治テクストにおける自己犠牲のモチーフについて系統的に検討したうえで、〈個人―全体〉の相互関係を考え、自己犠牲と共生世界との繋がりを観照する。

3．賢治テクストを《群》として読む

本論文は、丁寧な作品分析に力点を置いている。そこで、特に注目しているのは、作品間の関連性である。周知のように、宮沢賢治の多くのテクストは、複雑な改稿過程を経ている。改稿プロセスにおいて、かつて創作された作品における人物が、新しい作品に改めて登場することがあり、物語の設定が大きく変化する一方、改稿前後のテクストは緊密な関連性を持ち続けているのもよくあることである。賢治テクストのこのような特徴を理解するに当たって、中村三春はハイパーテクストの理論を援用している。

> ハイパーテクストは、それ自身のみのテクストとしても読めると同時に、あるテクストが別のテクストと、あるヴァージョンが別のヴァージョンとの関係、つまりリンクの中で常に見られなければならないという状況を作り出す。縦横無尽に消し、また書き直し、線を引いて添削し、さらに他作品の草稿の裏までも使用して作成された宮沢の推敲テクストは、全体として、情報量が極度に大きく、またそれゆえにリンクの方向性すら解釈の帰結となるような、極めて特徴的なハイパーテクストであるかのようである（15）。

中村の指摘によって示されたように、賢治テクストを研究対象として取り上げる場合、作品間の関連性への配慮は、不可欠な姿勢であろう。

また、賢治テクストにおける改稿は、作品読解の方向性に影響をもたらしながら、読解の多様性をも示唆している。このような特徴に目を配り、賢治作品を〈群〉として読むことを本論文の基本的な方法とする。『国文学　解釈と教材の研究』の特集「宮沢賢治の作品―《Versions》あるいは《群》として読む」（16）において、宮沢賢治

の単独の作品を組み合わせ、一つのシリーズとして読解することを試みている。同一人物の複数作品への登場、多作品に一貫するモチーフの存在、改稿過程における作品間の相互引用、賢治テクストのいずれの特徴も、それらを《Versions》あるいは《群》として読むことの可能性を照射している。このように読み直すことで、賢治文学の多様な側面が浮かび上がることが期待される。

4. 本論文の構成

本論文は序章と結語を除き、本論の部分はⅢ部12章で構成されている。各部は、「越境・異文化接触・共生」、「食物・生死・農業」、「賢治の共生理想と自己犠牲」というテーマを巡り、それぞれに関わる作家論と作品論によって組み立てられている。

序章では、本論文の基本的なスタンスを示したうえで、研究の目的と主な研究方法について述べている。また、本論文のテーマに関わる先行研究を紹介し、そこに含まれる展開の可能性を指摘する。

以下、本論文の構成を簡単に紹介する。

第Ⅰ部「越境・異文化接触・共生」では、まず、エスペラント語の歴史を辿りながら、柳田国男、新渡戸稲造などの人物との繋がりを糸口として、宮沢賢治とエスペラント語との関連について言及し、エスペラント語の思想と賢治文学における共生願望との共通性を見出す。そのうえで、越境行為による異界体験を描く「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」、植民地主義思想が読み取られる「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」の三部作、それから越境行為による新しい人間関係の形成およびその葛藤を描く〈風の又三郎〉シリーズの作品群を取り上げ、それぞれの角度で作品分析を行う。このような越境モチーフを巡る論述によって、賢治の共生理想の姿を描き出しつつ、その異文化接触に対する見方、また植民地主義思想を眺める視線を解明することができるだろう。

次に、第Ⅱ部「食物・生死・農業」では、賢治文学に頻出する弱肉強食という食物連鎖の正当性に対する疑問から出発し、食問題を巡る検討によって、賢治文学に現れる共生思想の他の側面を素描する。そこで、最初に焦点を当てるのは、賢治のビヂテリアンとしての思想および実践である。また、重要な突破口として、賢治の徴兵検査体験に注意を払う必要がある。それで得られた戦争に対する認識は、賢治文学における食問題と死生問題との繋がりを解明することに、ヒントを提供している。第Ⅱ部の前半において取り上げた分析対象は、「ビヂテリアン大祭」と「フランドン農学校の豚」という両作品である。徴兵検査体験などの一連の人生経験のなかで、農業への関心を持つようになる賢治の農業思想と実践が、第Ⅱ部後半の考察対象である。人生の転換点となる農業への目覚めが、賢治の文学創作とは如何に関わるかも、本論文の解明すべき課題である。これを理解した上で、賢治文学における産業組合について、「ポラーノの広場」の一連の作品に対する分析を通じて論じる。

それから、「賢治の共生理想と自己犠牲」と題する第Ⅲ部では、賢治が考えている理想世界に緊密に関わる自己犠牲のモチーフを巡って検討を行う。賢治文学によく登場する自己犠牲のモチーフは、実

現の困難さを持っている共生理想の解決法でありながら、共生理想との矛盾をも持っている行為でもある。そこで、賢治文学にある自己犠牲モチーフの系譜を整理することで、その様相を提示し、特徴をまとめる。その上で、「グスコーブドリの伝記」および関連作品を取り上げ、自己犠牲が成り立つ背景に存在する要素を見出す。それから、「銀河鉄道の夜」の改稿プロセスを整理し、まず自己犠牲のモチーフを重点的に描く後期形を中心に分析し、個人と全体との関係性を解明する。その後、「銀河鉄道の夜」初期形について検討し、賢治テクストの未決性という特質への接近を試みる。

最後の結語では、本論文各章の内容を整理し、成果と課題を提示する。

注

（1）天沢退二郎「宮沢賢治論素描」『宮沢賢治の彼方へ』筑摩書房、一九九三年一月、二七七－二七八頁

（2）荒川洋治「美代子、石を投げなさい」『新潮』一九九二年六月

（3）具体的には、「宮沢賢治にさからって――文学の多数性をめぐる一考察――」（『宮沢賢治研究 Annual』第四号、一九九四年三月、二〇二－二二二頁）を参照。

（4）吉田司『宮沢賢治殺人事件』太田出版、一九九七年三月

（5）村井紀「産業資本家宮沢賢治の誕生」『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月、四十四－五十三頁

（6）続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第十四巻、日本図書センター、一九九二年二月、三二〇－三二八頁

（7）賢治童話の性質の規定について、具体的に坪田譲治「宮沢賢治の童話について」（続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第十三巻、日本図書センター、一九九二年二月、一三八－一四三頁）、奥山文幸「童話の現実性と現実の童話性」（『近代文学研究』第十五号、一九九七年十二月、一一六－一一八頁）を参照。

（8）『注文の多い料理店』序『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他　本文篇』筑摩書房、一九九五年十一月、七頁

（9）〔書簡四十四〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月二日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』筑摩書房、一九九五年十二月、四十五頁

（10）〔書簡四十六〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月二十三日）同前掲、四十九頁

（11）〔書簡六十三〕保阪嘉内宛（一九一八年五月十九日）同前掲、七十頁

（12）松岡幹夫「宮沢賢治における法華経信仰と真宗信仰」『宮沢賢治と法華経――日蓮と親鸞の狭間で』昌平黌出版会、二〇一五年三月、一九五頁

（13）具体的には、井上達夫「共生」（『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年三月、三四三－三四四頁）を参照。

（14）大島丈志『宮沢賢治の農業と文学』蒼丘書林、二〇一三年七月

（15）中村三春「ハイパーテクスト《稿本風の又三郎》」『係争中の主体　漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月、二七〇頁

（16）『国文学　解釈と教材の研究』第四十一巻第七号、一九九六年六月

第Ⅰ部　越境・異文化接触・共生

本論の第Ⅰ部では、まず、賢治の共生思想とエスペラント語との関わりから出発し、賢治の言語観および宗教観について考察することで、宮沢賢治が抱いている共生という理想主義的考え方を提示する。共生世界への願いを持っている一方で、賢治は自分の文学作品において、その実現の困難さをしばしば描き出している。第2章から第4章にかけて、賢治文学における越境行為に注目しながら、異文化コミュニケーションの葛藤、および共生世界の実現の難しさがテーマ化された作品群に対して、作品分析を行う。

具体的に述べると、まず、「注文の多い料理店」、「氷河鼠の毛皮」を取り上げ、異文化接触の契機となる越境というモチーフについて検討する。次に、童話集『注文の多い料理店』に収録される「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」および「なめとこ山の熊」を取り上げ、植民地主義的文脈から、賢治が持っている越境の意志と共生願望を読み取り、その実現の困難さの原因について考察する。それから、「風〔の〕又三郎」およびその関連作品を取り上げ、初期形から後期形までの改稿プロセスにも注目しながら、異人と人間との境界線を探り、越境行為による新しい人間関係の形成およびその葛藤について考察し、作品の再読解を試みる。

第1章　エスペランチスト・宮沢賢治の共生思想

1．はじめに――表現者としての宮沢賢治

一人の作家としてみると、宮沢賢治は決して複製できない存在である。なぜそう言えるのだろうか。それは、文学表現者としての宮沢賢治の言葉には独特な、とても真似できない特徴がみられるからである。宮沢賢治と言えば、イーハトーブという言葉が有名である。この言葉は、理想郷としての岩手県を意味しており、読者たちをその作品に存在する神秘で、謎が満ちている未知の世界に誘っている。実は、イーハトーブを代表とする賢治の特徴的な用語群は、エスペラントをもじったものが多い。賢治とエスペラントとの結び付きが強いのは、いったいどのような理由があるのだろうか。文学者としての宮沢賢治が、エスペラントを用いて表現することには、どのようなメッセージが込められているのだろうか。

本章では、まず、エスペラントという言語の歴史と思想を把握し、エスペラントとは、どのような言語なのかを明らかにする。次に、宮沢賢治のエスペラント経験およびその背景に存在する人物たちとの関係性を整理し、賢治文学に現れるエスペラント主義の意味を探る。それから、賢治テクストに現れるエスペラント思想に注目しながら、そこに込められるメッセージを読み解くことで、賢治文学を読解する際に、有効で重要なキーワードを提示していく。

2．エスペラント語の歴史と思想

この節では、まず、エスペラントが、どのような言語であるかを解明していこう。一八八七年七月二十六日、わずか四十頁のパンフレットが発行されることによって、エスペラントは世に誕生した。エスペラントは、国際語とも呼ばれ、ロシア領ポーランドに住んでいたユダヤ人眼科医・ルドヴィーコ・ザメンホフによって創造された人工言語の一つである。ザメンホフはロシア語、フランス語、ラテン語、ギリシア語、英語など、ヨーロッパの多くの言語に精通していたと言われている。彼は、言語が人と人を結び付けるのではなく、異なる言語の使用によって、意思疎通が阻まれ、人と人とを引き離している側面に注目した。これこそ異なる民族の間に相互理解が欠け、紛争が生じる原因だと、ザメンホフは考えている。民族間の紛争や戦争を回避しようという願いを込め、ザメンホフは多言語の共通性が高い語彙を集め、その構造を簡単にしたり、学習しやすくしたりすることによって、エスペラントを考え出したのである。

ザメンホフは熱烈な人類同胞愛の使徒である。彼は言語や宗教の相違を乗り越え、全人類が家族のようになることを夢見ているようだ。この考えを理論づけしたのは「ホマラニスモ」であり、「人類人主義」と訳されている。一九一三年九月、ザメンホフは「人類人主義」の内実について述べる「ホマラニスモに関する宣言」を発表した。

私は、人間である。私は、全人類を一つの家族と見なす。私は、人類が互いに敵対するさまざまな人種や民族宗教の集団に分裂しているのは最大の不幸の一つであり、この事態は遅かれ早かれ消滅しなければならず、その消滅をできるだけ促進するのが私の義務と考える。[…]

私は、人びとが民族よりも「人間」という名を重んじるようになる日までは、人間どうしの不和はなくならず、「民族」という不明確な言葉がしばしば民族的排外主義や紛争や乱用の原因となり、またしばしば同じ国や同じ民族の人びとを互いに憎しみ合い分裂させていると認める。したがって、どの民族に属するのかという質問に対して、私は人類だと答える(1)。

このような思想が込められたエスペラントは、その簡便さと覚えやすさによって、すぐに人々に迎えいれられた。ロシアの文豪トルストイやフランスの作家ロマン・ロランがエスペラントを支持する発言をし、エスペラントはまずロシアで盛んになり、その後はヨーロッパ諸国、そしてアメリカへ広まっていた。日本においても、エスペラントは多くの有名人の支持を得ていた。日本において、エスペラントが一般に普及したのは、一九〇六年になってからである。この年の七月、二葉亭四迷が執筆した『世界語』というエスペラント教科書が日本初として出版され、大きな影響を呼んだのである。また、同年、日本エスペラント協会が成立され、第一回日本エスペラント大会も開催された。これらのことから、当時のエスペラントの流行状況が看取できるだろう(2)。

それでは、賢治はどのようにエスペラントを学んだのであろうか。次節では、宮沢賢治とエスペラントとの接点について考察する。

3. 宮沢賢治とエスペラント語の接点

宮沢賢治がエスペラントの独学を始めたのは、一九二二年一月だと言われている。しかし、文献には、それに関する具体的な記録は存在しない。よく知られているように、一九二四年十二月、童話集『注文の多い料理店』が刊行され、その中にイーハトーブなどのようなエスペラントと関連がある言葉が使われている。つまり、それ以前に、賢治はすでにエスペラントの学習を試みていたと考えるのが妥当であろう。

佐藤竜一の分析(3)によれば、賢治がはじめてエスペラントを知ったのは一九一六年五月である。五月二日から十三日、『岩手日報』に六回にわたり、田鎖綱紀が書いたエスペラントを紹介する文章が載せられていた。田鎖綱紀は岩手県の最初のエスペランチストであり、賢治の遠い親戚でもある。当時盛岡に在住していた賢治が、これらの文章を読んだ可能性は高いと推測できる。さらに、『【新】校本宮沢賢治全集』の第六巻において、賢治が創作したエスペラント詩稿が収録されたが、その最初のものは一九一四年に書かれたようである。宮本正男によれば、これらのエスペラントの詩は、文法的に意味の通るものが少なく、エスペラント文学の立場からみると、残念なが

ら文学作品としての水準は低いという(4)。しかし、賢治がその時すでにエスペラントに興味を持ち、勉強し始めていたのは確かなことである。

賢治とエスペラントについて考察する時、当時の社会的背景および関連事物の存在が重要な手がかりを提供している。一九〇六年、日本エスペラント協会が設立され、その翌年に開催された大会には三〇〇名の参加者を集めたが、その後の道のりは決して平坦ではなかった。一九〇八年の赤旗事件、一九一〇年の大逆事件のように、社会主義者が弾圧された結果、社会主義者との結び付きによって、エスペラントが危険視されるようになった。そのため、日本エスペラント大会を開催できない状態が続いた。やがて一九一六年、この大会は久々に開催されることになったが、これこそエスペラント運動が再び高揚期を迎えようとするものである。一九二〇年代前半、第一次世界大戦の終了後、国際連盟が成立し、特に知識人や学生の間に、国際社会と社会平和に対する関心が高まっていった。その中で、異なる民族や国の間の紛争や摩擦を解消することを目指す国際語・エスペラントの学習はいわば風潮となっていた。賢治が愛読していた雑誌『改造』の一九二二年八月号は、「エスペラント研究」という特集を組み、「国際語エスペラント」の連載も始まった。さらに、一九二二年当時、国際連盟事務次長として務めていた新渡戸稲造は、エスペラントの擁護者として、エスペランチスト・民俗学者柳田国男と共同で国際連盟に働きかけ、世界中の公立学校でエスペラント語を教えようという決議を求めた。結果的には、エスペラントは教育現場に採用されなかったが、新渡戸稲造と柳田国男の一連の活動が、日本のエスペラント発展に積極的な影響を与えていたのである(5)。

このような社会的風潮の中において、賢治とエスペラントとの結び付きは、次第に強まっていった。一九二六年四月、賢治は花巻農学校の教師を辞め、羅須地人協会を設立し、その活動に没頭した。そこでは農民の農業活動への支援、オーケストラやレコード鑑賞と並び、エスペラントの普及も重要なテーマの一つであった。十一月、盛岡高等農林学校時代の友人・小菅健吉が賢治を訪問し、彼に対し、賢治は「世界の人々に解ってもらうようエスペラントで発表するため、その勉強をしている」(6)と語っていた。同年、十二月二日、賢治はセロとエスペラントを学び、羅須地人協会の活動に役立てることを目指し、上京した。

上京生活の中、賢治はエスペラントを勉強する一方、その学習の励ましを与えてくれた人物にも出会ったのである。十二月十二日、賢治は東京国際倶楽部の集会に出席していた。フィンランド公使で、言語学者のラムステットの日本語講演が行われていた。ラムステット博士は、エスペランチストとして知られ、もとプラーグ大学教授のアルタイ語学者である。講演を聞いた後、賢治はラムステット公使に農村問題、とくに言葉の問題を聞き、エスペラントで著述するのが一番だと言われている(7)。東京におけるエスペラントの学習状況については、この日に賢治が父・政次郎に書いた手紙によって、理解することができる。

図書館の調べものもあちこちの個人授業も訪問もみなその積りで日程を組み間代授業料回数券などみなさうなって居りましていま帰ってはみんな反端で大へん損でありますから今年だけはどうか最初の予定の通りお許しをねがひます。それでもずゐぶん焦って習ってゐるのであります。毎日図書館に午後二時頃まで居てそれから神田へ帰ってタイピスト学校　数寄屋橋側の交響楽協会とまはって教はり午後五時に丸ビルの中の旭光社といふラヂオの事務所で工学士の先生からエスペラントを教はり、夜は帰って来て次の日の分をさらひます。一時間も無効にしては居りません。音楽まで余計な苦労をするとお考へでありませうがこれが文学殊に詩や童話劇の詞の根底になるものでありまして、どうしても要るのであります(8)。

賢治は、このようなハードなスケジュールを詰めた上京生活を二十日間ほど送っていた。後に、花巻に戻り、羅須地人協会のために奔走した賢治は、生涯エスペラントと縁を切れていない。晩年の佐々木喜善との出会いは、賢治とエスペラントとの接点を考える時、もう一つの重要な出来事である。佐々木にエスペラントの重要性を教えたのは柳田国男である。一九二一年、国際連盟の仕事で、柳田国男はジュネーヴで生活し始めた。国際連盟の場で、言語的ハンディキャップを実感し、それを克服しようとする柳田は、エスペラントに向かい、その重大な意義を認めていた。柳田国男は、ジュネーヴで得られたエスペラントの最新情報および自分の考えを、手紙で次々と遠野の佐々木喜善に送っていた。エスペラントの重要性を教えられた佐々木喜善は、岩手の新聞などにエスペラントを宣伝する記事を頻繁に書いたり、エスペラント講習会を開いたりすることで、積極的にエスペラントの普及に努めていた。

佐々木喜善と賢治との出会いは、一九二八年、佐々木が賢治の書いた文章を引用させてほしいという手紙を送った時である。賢治はこの手紙をもらう前に、すでに佐々木の高名を耳にしたことがあった。この時期から、賢治の身体の状況はだんだん悪くなってきたが、佐々木が病床の賢治のもとにたびたび訪れ、民話、宗教、それからエスペラントについて、濃密な会話が行われたことが伝わっている(9)。このように、岩手におけるエスペランチストのリーダー的存在であった佐々木喜善と親交を持っていることは、賢治にとって、エスペラントとの重要な接点だといえるだろう。

佐々木喜善が発表したエスペラントエッセイ「雪窓閑談」の中で、彼は自分のエスペラントに対する態度を示している。

> ザメンホフ博士はエスペラント主義と謂ふ語に於ける内容の全世界主義と云ふ思想をより多く色濃く、そして愛の緑の色をもつて我々の胸に浸ませ囁き響かせたので御座います。[…]
> 元来斯語は、人間の友愛の持つ限りの最も高い理想の一表現として創出されたものであります。一の宗教的希望であり信仰であるのであります[…]今日世界に於て、既製宗教と云ふもの

が頗る其内実と権威とを失墜しかゝつてある時に際しまして、此の世界平和主義、世界純愛主義なるエスペラントのやうな崇高な大理想、即ち神に倚らない一の宗教に依つて人間愛の抱持と謂ふことも決して無用でないことばかりか、目下の最大急務であること丶思ひまして、斯くゝどくどお話するので御座います（10）。

佐々木にとって、エスペラントで重要なのは、その機能性よりも、「全世界主義」という思想であり、「愛の緑の色」というメッセージでもある。このような世界平和主義の思想が込められているエスペラント思想に対して、賢治は少なからざる共鳴を感じただろう。次節では、賢治文学における共生願望とエスペラント思想との共通性について簡単に述べよう。

4．エスペラント思想と賢治文学における共生願望との共鳴

文学者・宮沢賢治は、エスペランチストとして、自分の文学創作にエスペラントを取り入れることを当然のように試みた。前述したように、賢治のエスペラント文学作品としては、八つの詩稿しか挙げられず、文学的水準についても比較的低いものと評されている。しかし、賢治作品におけるエスペラントの影響は色濃く、その直接的影響をみてみると、たとえば、作中にみられる人名と地名のエスペラント化が挙げられる。「ポラーノの広場」に代表されるが、ポラーノ、イーハトーブ、モリーオ、センダード、トキーオ、ファゼーロ、ロザーロ、ミーロ、テーモなどがそれである。峰芳隆の論において、「イーハトーブ」の語源から出発し、エスペラントの賢治作品用語への影響について言及してきた。峰は賢治文学の特徴的な用語は、「いずれも、語尾は o（オー）、うしろから第二音節が長音になるという、エスペラントの規則通りの命名である」（11）と指摘している。このほか、「貝の火」の主人公「ホモイ」がエスペラントで人々を意味する「ホーモ」に、それから「やまなし」における「クランボン」がエスペラントでのハマキャベツを意味する「クランボ」に、それぞれ由来する可能性が、峰の論によって提示されている。

しかしながら、非常に残念なのは、賢治文学におけるエスペラントの使用は、作中造語の文字表現に止まっていることである。

賢治文学に現れるエスペラント思想との親近性に、より注目すべきであろう。周知のように、賢治は「農民芸術概論綱要」において、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べ、また「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある」と主張している。前にも言及したが、エスペラントの創始者ザメンホフが「人類人主義」を提唱している。個体ではなく、全体を心掛けている点は、賢治とザメンホフに共通しているのである。もちろん、両者が考えている全体のイメージには相違点が存在する。ザメンホフの考えが人類社会に限られているのに対して、賢治が考えている全体においては、人間は絶対的優位にある存在ではなく、植物、また動物、さらに宇宙に存在するすべての生き物がそれに属していると言えよう。

5．おわりに

賢治のこのような考え方は、彼自身の仏教信仰に深く関わっている。周知のように、賢治は仏教信仰の環境に育てられ、幼年の時に、「正信偈」や「白骨の御文章」を暗唱していたという。一九一四年、十八歳になった賢治は、島地大等の『漢和対照　妙法蓮華経』と出会い、深い感銘を覚え、『法華経』に帰依した。「一切衆生皆成仏道」の精神を唱える『法華経』が、賢治に与えた影響は極めて大きい。宇宙に存在する万物の成仏を常に願っている賢治は、共生の世界を目指すことによって、『法華経』の精神を実践しているのであろう。

しかしながら、賢治文学においては、優越感を持っている人間たちの登場によって、自然と生物とのバランスが崩され、そこに異文化コミュニケーションの難しさが現れてくる。このような登場人物の存在に対して、賢治は厳しい批判を行い、人間の特権性をつねに問うている。これからの章で具体的に論じるが、例えば、「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」における動物の命を消費する人間の転落、「なめとこ山の熊」における小十郎と熊の切ない物語など、いずれも異なる種の生き物が、お互いが持っている異文化に接触しながら、世の中に共に生きるための葛藤を描く物語である。このような共生を求める物語において、自分が生きる範囲から逸脱し、越境する行為はむろんそれとともに行われている。もともと存在する境界線を破り、異文化接触の経験を得ながら、他の生き物と新しい関係を築く。このようなプロセスを描く文学としての賢治の作品は、いったいどのような読解の可能性を持っているのだろうか。続いて、具体的な作品を取り上げ、越境・異文化接触・共生というキーワードを巡り、賢治文学を読解していくことを試みよう。

注

（1）ラザーロ・ルドヴィーコ・ザメンホフ「ホマラニスモ宣言」『国際共通語の思想――エスペラントの創始者　ザメンホフ論説集』水野義明訳、新泉社、一九九七年六月、九十八－一〇一頁

（2）当時の日本におけるエスペラント語の流行状況について、三宅史平『エスペラントの話』（大学書林、一九九三年四月）、佐藤竜一「新渡戸稲造と宮沢賢治――エスペラントをめぐって――」（『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治――エスペラントをめぐって――』イーハトーブ・エスペラント会、二〇一〇年十月、二十九－四十四頁）を参照。

（3）佐藤竜一「新渡戸稲造と宮沢賢治――エスペラントをめぐって――」、同前掲

（4）宮本正男「エスペランチスト宮沢賢治」『宮沢賢治研究資料集成』第二十巻、日本図書センター、一九九二年十月、三四一－三五六頁

（5）日本におけるエスペラント運動状況について、田中克彦『エスペラント――異端の言語』（岩波書店、二〇〇七年六月）、大島義夫、宮本正男『反体制エスペラント運動史』（三省堂、一九七四年七月）を参照。

（6）『【新】校本宮沢賢治全集　第十六巻（下）　補遺・資料・年譜篇』二〇〇一年十二月、筑摩書房、三二四頁

（7）同前、三二五頁

（8）〔書簡二二二〕宮沢政次郎宛（十二月十五日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』筑摩書房、一九九五年十二月、二四一頁

（9）これらの事情は、内藤正敏「宮沢賢治と佐々木喜善――異界・エスペラント・宗教――」（安藤恭子編『日本文学研究論文集成　宮沢賢治』若草書房、一九九八年十一月、九十六－一二〇頁）によって検証されている。

（10）佐々木喜善「雪窓閑談」『東北評論』第七十三号、一九二三年一月、十六－十七頁

（11）峰芳隆「宮沢賢治におけるエスペラント」『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、二〇〇〇年二月、十四－十九頁

第2章　賢治文学における越境と近代文明

――「注文の多い料理店」、「氷河鼠の毛皮」を中心に――

1．はじめに――賢治文学における越境の普遍性

異界というのは文学世界によく現れるモチーフの一つである。異界体験をよく描く作家の一人として、宮沢賢治は知られ、実際に彼は異界を描く作品を多く創作していた。「異界」とは何か。その定義について、小松和彦は以下のように述べている。

> 一言で言えば、「異界」とは、「私たちの世界」、すなわち、人びとの日常世界・日常生活の外側にあると考えられている世界・領域のことである。
>
> 私たちは自分たちを取り巻いている世界を、慣れ親しんでいる世界とそうでない世界、友好的な世界と敵対的世界と分ける傾向がある。空間的に近い領域は慣れ親しんでいるので友好的な領域だが、遠くの領域は慣れ親しんでいないために、どうしても危険に満ちた敵対的な性格を賦与される。異界とは、そうした疎遠でそれゆえに危険に満ちていると思う領域のことである(1)。

賢治の文学作品において、このような日常生活の世界の外側にある「異界」は、度々登場し、多様な様相を呈している。四次元、銀河系、シベリア、ベーリング……これらの多彩な異空間について、先行研究ではその由来、意味、描き方など様々な方面で解釈を提示している。ところが、その主だったものは、異界そのものに注目し、解釈するばかりである。本章では、先行研究の着目点と異なり、異界そのものだけではなく、日常世界から異界への移行、つまり越境という行為にも焦点をあわせ、賢治文学の特質について考察することを試みる。

賢治文学において、異界というのはよく現れるモチーフである。それと同時に、異界の出現は、多くの場合に、越境の行為を伴っている。周知のように、賢治の集大成である「銀河鉄道の夜」は、地上から天上までの異界への越境行為が描かれる。その以外にも、「山男の四月」、「かしはばやしの夜」のような民俗的な視点によって考察できる、越境を描く作品も挙げられ、また、「狼森と笊森、盗森」、「鹿踊りのはじまり」のような、人類の発展についての歴史的文脈、あるいは植民地主義的思想に関連させて考察できる作品も挙げられる。

数多くの越境を描く作品の中から、本章では、まず、賢治の初期作品「氷河鼠の毛皮」と「注文の多い料理店」を取り上げ、両作品の物語の構造、登場人物の設定などの類似点を明らかにする。その上で、

越境の手段に焦点を当て、鉄道文明と賢治文学における越境との関係性について考察することにしよう。

2.「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の物語構造および登場人物の類似性

「注文の多い料理店」という童話作品は、賢治生前に出版された唯一の童話集『注文の多い料理店』に収録されている。新刊案内文として、この作品について、以下の宣伝文が書かれている。

> 二人の青年紳士が猟に出て路を迷ひ「注文の多い料理店」に入りその途方もない経営者から却つて注文されてゐたはなし。糧に乏しい村のこどもらが都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まれない反感です(2)。

この案内文に従い、多くの先行研究では、文明対自然の対決という寓意的な読みが続いてきた。作品に登場する紳士たちは「都会文明と放恣な階級」の代表者として、厳しく批判されている。まず、小森陽一は紳士が批判される理由について、それは食物連鎖の体系から特権的に外出することだと述べている(3)。それから、作品に登場する紳士たちについて、当時の社会の中に原型を探し、それは「第一次世界大戦の大戦景気によって成り上がってきた成金のイメージ」(4)だと指摘しているのは、秋枝美保の論である。

先行研究において、作品に登場する紳士は、小森や秋枝によって批判されたが、作品の結末では、結局、犬が蘇ることによって、命を拾い、死によって贖われるほどの懲罰から逃れるのである。犬の死と再生については後にまた触れるが、作品における異界の二重構造にこそまず注目すべきである。

「山男の四月」、「祭の夜」、「かしはばやしの夜」などの作品のように、「注文の多い料理店」においても、特別な空間として現れるのは山の奥である。山奥を舞台とする賢治の作品では、奇異な出来事がよく起こり、いつも異界の雰囲気を呈している。賢治文学における山という異界については、柳田国男の『遠野物語』との伝承関係がすでに多く論じられているが、「注文の多い料理店」において、山の奥に含まれる二重となる異界は、さらに特徴的だと言える。都会の東京から来た紳士たちにとって、山奥はまず彼らが最初に入ってきた異界である。東京から山奥への移動は、一つ目の越境行為として認められる。それから、二つ目の越境行為として、紳士たちの「山猫軒」への進入が考えられる。彼らは山猫の所属地に進入することによって、それまでにない経験を持つようになる。このような二つの越境行為によって、「注文の多い料理店」の異界の二重構造が形成されている。賢治の文学作品の中には、「氷河鼠の毛皮」という童話作品も、「注文の多い料理店」に類似した構造を持っている。

「氷河鼠の毛皮」は一九二三年四月十五日の「岩手毎日新聞」に発表された作品である。十二月二十六日の夜、イーハトーブ発の急行列車がベーリングに向かって行く。氷河鼠の毛皮でできた外套を着るタイチは、酔っぱらって他の乗客に絡んでいることが語られる。

突然の停車で、白熊のような人物が乗車し、タイチを捕まえて連れ去ろうとする。同乗の青年が彼らと交渉し、タイチを危険から救い、列車は再出発する。

「注文の多い料理店」における二重の異界と同じように、「氷河鼠の毛皮」における異界も二重性を持っている。一つの異界は、イーハトーブの人々にとってのベーリングであり、もう一つの異界は、「列車の中」という特別な空間である。このような空間の中に、紳士タイチは非日常的な出来事を経験するのである。これは、二つの作品の物語内容の設定上の共通性である。両作品のどちらも紳士が異界体験をしているうちに、敵対する対象により愚弄されたが、最終的に第三者の調和によって、危険な境地から命を拾う物語として、まとめることができる。

ここで、作品における敵対的関係について、付言しておかなければならない。「注文の多い料理店」に関する先行研究の中では、紳士と山猫との敵対関係を二項対立として捉え、紳士は都市文明の象徴であるのに対して、山猫は自然側の代表だと多く主張されてきた(5)。しかし、このような見方の反論として、山猫も都会的であると指摘している先行研究がある。放恣な紳士と山猫との類似性を最初に提示しているのは田近洵一の論考である。田近は紳士の特徴について、「生命の侵犯者としての自己をまったく意識せぬ道楽ぶりを始め、打算や虚栄心に満ちた言動、自己本位の論理等に見られる傲慢さは、賢治が新刊案内に言う『都会文明と放恣な階級』の、人間的ゆがみを示すもの」(6)だと述べ、「注文の多い料理店」における山猫は、「人力を超えた自然の力は持っておらず、狡知にたけている点で、結局二人の紳士と同様、都会的だ」(7)と結論づけている。田近の主張を継承的に受け入れている論考としては、須貝千里の「その時ふとうしろを見ますと……――『注文の多い料理店』問題――」(8)および五十嵐淳の「『注文の多い料理店』の二項対立を超えて――須貝千里氏の読みを検証する」(9)が挙げられる。

確かに、作品における紳士と山猫の類似性は認められるべきである。しかし、それと同時に、両者の間の対立、あるいは敵対関係も否めない。両者の力関係は固定することがなく、そこに逆転が存在しているのである。狩猟のプロセスにおいて、優位的な紳士が山奥の料理店で逆に注文される。この時、紳士たちが下位にいるのに対して、上位にいるのは傲慢な山猫である。このように見れば、賢治が言及した「放恣な階級」は、単に紳士のことを指しているのではなく、傲慢な山猫のことをも指していることは、十分考えられる。

「注文の多い料理店」と同じように、「氷河鼠の毛皮」における敵対関係についても、同じようなことが言える。緊急停車の後、「人といふより白熊といつた方がいゝやうな、いや、白熊といふよりは雪狐と云つた方がいいやうなすてきにもく〳〵した毛皮を着た、いや、着たといふよりは毛皮で皮ができ〔て〕るといふた方がいゝやうな、ものが変な仮面をかぶつたりえり巻を眼まで上げたりしてまつ白ないきをふう〳〵吐きながら大き〔な〕ピストルを握る」(10)ような登場人物が車室に入るのである。ここに登場する、偽装ができ、ピストルという武器を使っているテロリストは、一体どのような人物であ

ろうか。後の物語の流れで、彼らが動物の毛皮を過分に取るタイチを捕まえ、罰を与えようとする人物だとわかる。しかし、彼らは人間であろうか、それとも、動物であろうか。実に判断しづらいところである。作品では、このような曖昧な設定によって、人間が絶対的な権力者ではなくなり、また動物も必ず被害者の側に位置づけられるというわけではなくなる。これらの動物のようなテロリストたちの逆襲は、人間に対する復讐であるかどうかに関わらず、人間の絶対的権力を崩している。人間が一方的に他の生物を利用し、傷つけるのではなく、逆に、生物の一員として、同じく危険に晒される状況が存在するのだろう。作品において、テロリストの人間と動物の限界を弱化することによって、特権的な人間が、生物の一員として還元されている。このようにみれば、「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の両作品において、対立関係に存在する両側の地位転換の可能性、また人間の特権性の喪失が寓意的に描かれていると言える。

もちろん、両作品は構造上にも共通点を持っていると同時に、紳士という登場人物の設定にも、共通性が見られる。「注文の多い料理店」の冒頭に、「二人の若い紳士が、すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか〳〵する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさ〳〵したとこを、こんなことを云ひながら、あるいてをりました」(11)とあり、近代の象徴的な外相から装備まで、一般人とはっきり区別化されている。それから、「氷河鼠の毛皮」においても、紳士という登場人物は非常に目立つ存在である。列車の中の十五人の乗客の中、紳士だけが「毛皮を一杯に着込んで、二人前の席をとり、アラスカ金の大きな指環をはめ、十連発のぴかぴかする素敵な鉄砲を持つていかにも元気さう、声もきつとよほどがらがらしてゐる」。しかも、紳士が着ている毛皮は、イーハトーブの冬の着物の上に、ラッコ裏の内外套に、海狸の中外套、黒狐表裏の外外套、さらに北極兄弟商会特許の緩慢燃焼外套が重ね着られている。さらに驚くべきは、その上着で、それは四五〇匹分の氷河鼠の頸のところの贅沢な毛皮だけでこさえてあるのである。

以上のような、物語に登場する紳士たちを描いた内容を確認すると、二つの作品における紳士の共通点を見つけることができる。まず、紳士が登場するシーンでは、服装、体型などの外見および持ち道具などから、紳士が一般民衆とは差異化されることが明らかである。これによって、紳士の階級性が強調されていると思われる。このような階級性の強調は、物語の後半に、紳士たちが転落する下地となっている。また、「注文の多い料理店」において紳士たちは山の奥を訪れ、「氷河鼠の毛皮」において紳士は列車の旅を通じて、いつもの活動範囲から離れ、異界への訪問、つまり越境経験をしていることも共通している。さらに、両作品に登場する紳士たちは、いずれも生命の侵犯者としての自己を意識しない存在である。彼らは狩猟活動を行い、しかも、それはお金で生き物の価値を判断し、娯楽を目的としている。これは「なめとこ山の熊」における小十郎とは非常に対照的である。

3. 鉄道文明と越境行為

前節では、「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の両作品の物語構造および登場人物における類似性について分析してきた。これから、両作品それぞれの特徴にも注目しながら、作品の魅力を読みだそう。

まず、注目すべきなのは、「氷河鼠の毛皮」の語りの問題である。空間移動の二重構造と同じように、「氷河鼠の毛皮」の語りも二重構造の形となっている。汽車がイーハトーブ駅から出発した直後、語り手は「こゝまではたしかに私も知つてゐます」と述べ、姿が消える。その後は、「このおはなしは、ずゐぶん北の方の寒いところからきれぎれに風に吹きとばされて来た」というような、冒頭で明記したとおりの、伝聞による語りへと移行していく。このような語りは、物語に無限定の時間性と空間性をもたらし、まさに天沢退二郎が評したように、「宮沢賢治の〈書くこと〉は、くりかえし詩人を、さらには〈語り〉そのものを北へ旅立たせたが、ついにその極限への到着そのものを作中に公開することはない」[12]のである。「氷河鼠の毛皮」に関する早い時期の先行研究として、このような天沢退二郎の論考が挙げられる。それから、作品の主題について、天沢は北方志向の点に着目している。「氷河鼠の毛皮」を発表した翌年に、賢治が津軽海峡を渡って北海道や樺太へ旅に出たことが注目され、「青森挽歌」、「オホーツク挽歌」を同時期に創作したことが重要だと指摘されている。しかし、異なる作品との関連の中で考えることによって、「氷河鼠の毛皮」の意味づけはまた変わってくるだろう。「注文の多い料理店」との繋がりを考える時、前述のように、紳士の人物像が持っている類似性が明らかになる一方、同じ紳士の設定であっても、地域的区別によりもたらされる階層の相違点にも注目すべきである。

「注文の多い料理店」における紳士たちが東京から地方の山奥にやってきたという設定に対して、「氷河鼠の毛皮」に登場する紳士は威張り散らす地方の名士として設定されている。両者を総合することによって、〈東京―地方（イーハトーブ）〉、〈地方（イーハトーブ）―辺境（ベーリング）〉という地域的階層のモデルを見出すことができる。この階層の中に存在するアンバランス的な力関係から、作品に登場する紳士たちとその敵対者の造形が見えてくるはずである。

「注文の多い料理店」における〈東京―地方（イーハトーブ）〉と、「氷河鼠の毛皮」における〈地方（イーハトーブ）―辺境（ベーリング）〉は、いずれも優位的、中心的な場所から下位的、周辺的な場所への移動である。このような遠距離の移動が実現される理由として、鉄道の発達がまず考えられるだろう。ただし、「注文の多い料理店」における越境の手段が明記されていないのに対して、「氷河鼠の毛皮」においては、列車という空間が物語の冒頭からすでに提示されている。周知のように、宮沢賢治の文学作品において、鉄道は頻出するモチーフである。童話集『注文の多い料理店』において、「狼森と笊森、盗森」や「山男の四月」のような、鉄道沿線を舞台とする作品のほか、童話作品「銀河鉄道の夜」、「シグナルとシグナレス」を始め、「青森挽歌」、「岩手軽便鉄道」、「噴火湾」、「冬と銀河ステーション」など、鉄道との関わりのある詩も多数挙げられる。その中、「氷河鼠の毛皮」

に現れるベーリング行きの列車の旅は、賢治の北方志向を反映している作品であろう。賢治が生きていた時代と鉄道との関連に着目した論考はいくつか存在するが、その中で、特に大正時代における岩手県の鉄道建設と賢治文学に注目しているのは、信時哲郎の一連の論考である。信時は賢治の鉄道への関心が強い理由について、以下のように述べている。

> 賢治の青春時代は、岩手軽便鉄道（現・釜石線）が花巻を基点に東進を続けた時代と一致しているからである。県内の鉄道網が次第に整備されていく様子を見るのは当時の岩手県民の誰にとっても喜ばしい、誇らしいことであったはずである。そんな鉄道発展時代に青春時代を送った賢治が鉄道ファンになったのは、ごく自然な成り行きではないだろうか（13）。

当時鉄道建設の発展が急速に進んだのは、日清戦争後の企業熱が、第二次「鉄道熱」の時代をつくり出したからである。さらに日露戦争後、自分たちの地域にも鉄道をつくりたいという動きが各地で起こった。「それは、資本主義が急速に発展すると新しい市場がつくられてきて、その市場に生産した商品を送りこむ有効な輸送手段が必要となってきた」（14）からである。もちろん、当時の鉄道建設は、日本本土に限られているというわけではなく、資本主義の発展がもたらした樺太の植民地化に伴い、北海道および樺太の鉄道建設も盛んに行われていた。「氷河鼠の毛皮」における、北方に繋がる鉄道への描写によって、その時代状況を垣間見ることができるだろう。鉄道ファンとしての賢治は、実際三回ほど北海道に訪れたことがある。これを北海道・樺太の鉄道史に合わせて比較してみよう。一九二二年十一月一日、宗谷線、旭川から稚内までの全線開通、また、その半年後、一九二三年五月一日、稚内と樺太の大泊を結ぶ稚泊鉄道連絡航路が開業した（15）。そのわずかに二か月後、賢治が生徒の就職依頼で北海道を訪問した時、すぐそれを利用し、樺太に旅立った。ここから、賢治が鉄道の開業状況に対して関心を持ち、チェックしていることが明らかとなる。賢治はこのような鉄道旅行を通じて、どのような経験を得たのだろうか。研究者はこれまで、この点について様々な意味を見出してきたが、総じて、この旅は妹・トシのための鎮魂の旅であり、傷心旅行であると結論づけている。しかし、それと同時に、賢治はこのような越境体験によって、普段と異なる体験をも得たのだろう。藤原浩の検証によれば、裕福な家に生まれ、しかも、農学校教師として、水準以上の給与を受けとっている賢治は、急行列車あるいは上等級の列車に乗って旅したのではなく、あえて安い三等車を選んだのである（16）。このような体験は、反発しながらも近代的便益を享受していた賢治にとって、より多くの一般庶民と接する機会となったであろう。賢治はこのような経験によって、普段と異なる世界を発見したはずである。鉄道というのは、賢治にとって、異なる階層に属している人々と共存できる場所だと理解することができよう。

では、鉄道に深い関心を持っている賢治が、「氷河鼠の毛皮」に鉄

道というモチーフを用いるのは、どのようなメッセージを込めているのだろうか。ここでは、鉄道という空間の特徴から考えよう。ヴォルフガング・シベルブシュは『鉄道旅行の歴史　十九世紀における空間と時間の工業化』において、「鉄道には、社会のあらゆる階層が集まり、相異なる運命、社会的地位、性格、態度、習慣、衣服からなる、いわばモザイクがここで形成される」(17)と述べ、鉄道は平等、博愛的な社交関係を樹立するのに重要な役割を果たしていると主張した。無論、鉄道という空間においては、身分の格差などを完全に消し去ることができない。ところが、鉄道の発展と普及によって、乗合という新しい乗車方式が作られ、それまで話したことのない人々が一つの車両の中に乗り合わせ、お互いに警戒心を持ちながら、コミュニケーションを行い、異なる身分、階級の人々の間の人間関係に変化がもたらされてきた。日本の近代化においても、鉄道は不可欠な役割を果たしているのである。

明治政府は、鉄道を「文明の利器」として導入し、日本の近代化に役立てようとした。鉄道は大量輸送と速達を特徴とし、製糸業や織物業、あるいは石炭鉱業など、近代日本の産業を促進した。しかし、鉄道の役割はそれだけではなく、人びとの生活のあり方そのものを大きく変えた。西洋からもたらされた鉄道という「異文化」が導入・定着していくなかで、日本の文化は大きく変容していったのである。

いくつかの事例をあげてみよう。運賃さえ支払えば、性別、身分、年齢、職業、住所に関係なく誰でも鉄道に乗車することができ、鉄道の前では江戸時代の身分制などほとんど意味をなさなくなった。また、江戸時代には関所を越える場合には旅行手形を携えなければならず、大河や渓谷など自然の障害があって旅人を苦しめたが、鉄道はこれらを克服し、移動時間を劇的に短縮し人びとの生活空間を拡大した(18)。

引用で示したように、鉄道の導入によって、人々は身分を越え、更なる大きな生活空間に移動できるようになる。鉄道空間において、異なる身分の人々が平等化されること、つまり、地位が高い階層の人々でも列車という空間の中では、下位にいる人々との身分差異が弱化される。このように考えれば、「氷河鼠の毛皮」では、地方の名士タイチの身分逆転は、鉄道空間であるからこそ、実現できることであろう。「注文の多い料理店」における山奥の西洋料理店と、「氷河鼠の毛皮」における鉄道空間とは、類似するところがある。西洋料理店の看板に、「どなたもどうかお入りください」というキャッチフレーズが書かれ、そこに含まれる平等性に、傲慢な紳士たちが気づいていないことが、結末の紳士たちの転落に繋がっている。

近代的移動手段としての鉄道の普及と広がりによって、紳士の越境行為のための便利な条件が提供される。それと同時に、鉄道空間の中に、紳士の階級性が崩され、異文化と接触する機会、また他の登場人物と平等にコミュニケーションする機会が得られる。このような相対的に平等な環境において、自分自身の優越感と特権性を疑わ

ない紳士たちは、その環境に似合わない階級性を顕著に示しているのである。

4. 鉄砲・犬・帰途

賢治テクストにおいて、このような反発は、紳士の地位逆転によって表現されている。この節では、鉄砲、犬などのモチーフに注目し、両作品における紳士の地位逆転について分析する。まず、重要なスイッチとなる鉄砲の登場に注目してほしい。「注文の多い料理店」において、東京からの二人の紳士は、「すつかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴか〳〵する鉄砲をかついで、白熊のやうな犬を二疋つれて」、山奥に入る。山奥に入りつつ、二つの意外な出来事に遭う。一つは「山猫軒」に入り、イギリス軍隊風の服装および鉄砲と弾丸が没収されることであり、もう一つは、白熊のような犬が泡を吐いて死ぬことである。

小森陽一は、「注文の多い料理店」に登場する紳士たちは「貴族たちの肉食の欲望につき動かされながら、世界を『鉄砲』によって植民地化していった、十七世紀以後の大英帝国イギリスの支配階級の在り方」(19)を真似していると述べ、鉄砲の象徴意義について解釈した。そして、鉄砲が没収されたこと、つまり武装解除されたのは、『二人の紳士』だけではなく、近代日本そのものであり、イギリスの産業革命以降の産業資本主義の中で形成された価値意識総体」(20)だと述べている。植民地化の歴史的文脈に繋がる解釈は興味深いが、武器解除の効果について、小森は言及していない。ここで、鉄砲が没収されることによって、二人の紳士は優位性を失い、山猫の下位に置かれるのである。

それから、鉄砲と同じように、紳士の身分を象徴するモチーフとして、犬の存在を無視してはいけない。物語の冒頭に、犬が狩猟の道具として登場することには意味がある。川島昭夫の検証によれば、歴史上、狩猟というのは、紳士階級の特権として認められた時期がある。「有資格者であるかぎり、いかなる土地の上に住むゲーム（筆者注：当時、とりわけ野兎、うずら、きじを指す。）を捕獲することも自由であるし、逆に資格をみたさない者は、自分の土地に発見したゲームを捕獲してもそれは違法とみなされる。財産資格をみたさない者は、そもそも狩猟する者＝スポーツマンではありえないから、かれが狩猟用の道具、犬を所持することも違法とされる」(21)。ゆえに、「注文の多い料理店」に登場する犬は、紳士たちの階級性を示すコードとしての意味を持っている。作品における犬の死亡と再生は、異界への出入りのしるしとなっていると同時に、紳士の階級性の喪失をも意味している。死亡した犬が結末にまた登場するのは、賢治の設定の間違いであると、評する論者もいる。が、犬は紳士に支配される付属物として再生するのではない。紳士の所有物が山猫軒で奪われてから、いわゆる二人の紳士は、山猫による被支配者となる。彼らの優越性の喪失に伴い、狩猟用の道具としての犬が死ぬ。それから、結末では、犬が蘇り、二人を救うが、これは元々の紳士と同じように上位にある山猫のたくらみが思いのままにならないためであり、また人間と平等な生き物としての再生を象徴的に描くためであろう。

「注文の多い料理店」と同じように、「氷河鼠の毛皮」においても、鉄砲を使用するテロリストの登場によって、紳士タイチの地位が逆転する。赤ひげの乗客の告発を聞き、「黒と白の斑の仮面をかぶつた男がタイチの首すぢをつかんで引きずり起こし」た。混乱の中、黄色いジーンズの上着を着た青年が、機会を掴み、赤ひげのピストルを奪いとって人質にしてしまう。そして、外にいるテロリストたちにこのように叫んだ。

「おい、熊ども。ささまらのしたことは尤もだ。けれどもおれたちだつて仕方ない。生きてゐるにはきものも着なけあいけないんだ〔。〕おまへたちが魚をとるやうなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉れ。」

このように、「氷河鼠の毛皮」の結末において、〈襲う―襲われる〉の緊張感が緩和される。「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の両作品において、威張る紳士たちについては、いずれも嫌悪感を覚えさせられるほどに描かれているが、結局、如何に危険な境遇に置かれたかに関わらず、その階級が消滅するという復讐的な行動は行われない。彼らは救われ、警告が与えられる程度で物語が終わる。両作品において、威張る紳士たちの転落とともに、元々の彼らと類似性のある山猫と熊のようなテロリストが登場する。しかし、これは紳士のような支配階級の再生産を意味するのではない。山猫にせよ、熊のようなテロリストにせよ、最終的には第三者の介入によって、紳士たちとの対立関係を緩和している。これによって、賢治テクストから極端なメッセージを伝えることが避けられている。動物と人間は、同じ生き物として、平等に扱われ、共に生きるという願望が現れ、他の種の生き物を殺したり傷つけたりするのは、自分の生存を維持するための最小限の範囲にとどめてほしいというメッセージが読み取れる。

5．おわりに

本章では、宮沢賢治の「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」との関連に注目しながら、両作品を読み直す試みである。賢治文学における異界のモチーフの頻出から出発し、両作品に現れる越境について分析したのである。

最初に、「注文の多い料理店」と「氷河鼠の毛皮」の物語内容、構造および登場人物設定の類似性を明らかにした。まず、二つの作品における異界の設定についていえば、その二重性が特徴的である。また、階級性が顕著な紳士が登場しているが、対立関係にある登場人物との地位逆転は、これら両作品に共通するものである。賢治作品におけるこのような設定によって、人間としての特権性の喪失が象徴的に描かれていると思われる。

このような両作品の共通性を分析した上で、その異なる語り方および越境の方式に注目し、それぞれの特徴について考察した。「氷河鼠の毛皮」において、鉄道による移動の仕方は、「注文の多い料理店」

と明らかに区別されている。賢治の実体験に結び付けて考えると、賢治文学における鉄道という空間が、異なる身分の人々が共存する場所としての特徴が強調されている。このような空間の中に、乗客たちが異文化と接触する機会を手に入れ、自分の身分を越え、他人とコミュニケーションすることが実現できる。このような経験は、「氷河鼠の毛皮」における紳士の地位転落によって、象徴的に表現されている。「注文の多い料理店」において、鉄道のモチーフが明らかに描かれていないが、西洋料理店という空間に生じる紳士たちの転落を描くことによって、「氷河鼠の毛皮」に類似する考え方が示されている。

二つの作品に対する比較・分析を通じて、賢治にとって、鉄道というのはどのような空間であるか、また、賢治文学において、鉄道空間はどのように描かれるかという点について、あらためて提示した。それと同時に、当時の鉄道文明の発達と賢治作品における越境との関係性が明らかになった。さらに、異文化との接触の機会が与えられた結果として、賢治文学からは、異なる種の生き物と共生する願望を読み取ることができ、それゆえに、その契機となる越境というモチーフの重要性が浮上するのであろう。

注

（1）小松和彦「異界とは何か」『日本人の異界観』せりか書房、二〇〇六年十月、五頁

（2）『注文の多い料理店』広告チラシ（大）『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他（本文篇）』筑摩書房、一九九五年十一月

（3）小森陽一「『注文の多い料理店』」『最新　宮沢賢治講義』朝日新聞社、一九九六年十二月、二四六頁

（4）秋枝美保「〈テクスト評釈〉注文の多い料理店」『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻第六号、一九八六年五月、八十二‐八十三頁

（5）具体的には、伊藤真一郎「『注文の多い料理店』」（『別冊国文学　賢治童話事典』第六号、一九八〇年五月、学燈社、一二七‐一二八頁）、続橋達雄「賢治童話『注文の多い料理店』の一考察」（『野州国文学』第二十一号、一九七八年十月、三五七‐三七一頁）を参照。

（6）田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」『日本文学』第二十六巻第七号、日本文学協会、一九七七年七月、二十一頁

（7）同前、二十四頁

（8）須貝千里「その時ふとうしろを見ますと……――『注文の多い料理店』問題――」『日本文学』第四十七巻第八号、一九九八年八月、十二‐二十四頁

（9）五十嵐淳「『注文の多い料理店』の二項対立を超えて――須貝千里氏の読みを検証する」『国文学　解釈と鑑賞』第七十三巻第七号、二〇〇八年七月、一四〇‐一四七頁

（10）「氷河鼠の毛皮」『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他（本文篇）』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（11）「注文の多い料理店」『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他（本文篇）』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（12）天沢退二郎「幻の都市《ベーリング》を求めて――宮沢賢治の〈書くこと〉の方位――」『《宮沢賢治》論』筑摩書房、一九七六年、六十一頁

（13）信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治――大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」『賢治研究』第三十九巻第十一号、二〇〇五年七月、一‐二頁

（14）原田勝正『鉄道と近代化』吉川弘文館、一九九八年三月、一五六‐一五七頁

（15）北海道の鉄道建設状況について、原田勝正『鉄道と近代化』（同前掲）を参照。

（16）藤原浩『宮沢賢治とサハリン――「銀河鉄道」の彼方へ――』東洋書店、二〇〇九年六月

（17）ヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史　十九世紀における空間と時間の工業化』加藤二郎訳、法政大学出版局、一九八二年十一月、九十頁

（18）高階秀爾、芳賀徹、老川慶喜、高木博志編著、『鉄道がつくった日本の近代』成山堂書店、二〇一四年十一月、ⅳ頁

（19）小森陽一、同前掲、二四六頁

（20）同前、二四〇頁

（21）川島昭夫「狩猟法と密猟」、村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、一九八七年七月、一六四頁

第3章　賢治文学における植民地主義と越境への意志

――「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」――

1．はじめに

宮沢賢治の考古学者としての視線は、植民地主義の展開という歴史的文脈と繋がることによって表出してくる。本章では、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」という、宮沢賢治が考古学者の視線で描く三作品を取り上げ、それを一つの作品群として読むことを試みる。賢治文学における植民地化のモチーフを主に二つの段階に分けるとすれば、まず、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」に現われる農耕民定住に伴う入植プロセスである。この段階では、〈自然―人間〉の間の交流と葛藤がメインに描かれている。次に、資本の論理の介入によって、〈自然―人間〉の二者関係は、〈自然―資本の論理―人間〉の三者関係にまで複雑化していく。そうした状況における人間の葛藤と困惑を描くのが、「なめとこ山の熊」である。

また、こうした歴史的文脈の展開は、賢治文学において、越境への意志によって度々表現されている。越境というモチーフは、賢治テクストでは二つの意味を持つ。一つは入植活動による地理的な越境である。入植というのは、遊牧民あるいは元々他の地域に住む人々が、新しい土地に移住することに伴って行われている行為である。つまり、人々がそもそも活動する範囲の境界線を越える行為である。他方、賢治文学に登場する人物、動物、また植物などの生き物は、異種の存在に対して、何らかの形でお互いに接触し、理解しようとしている。これは、異文化交流という意味での、文化的な越境である。このような二つの意味の越境は、一方では賢治テクストに潜む歴史的文脈の特徴を表し、もう一方では、賢治自身が抱いている共生の願望をも表現している。

本章では、近代日本における植民地主義の展開という歴史的文脈と賢治が抱く越境という個人的理想について、賢治テクストの読解を通じて考察する。そこで、まず、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」における越境表象を確認しながら、三作品に現れる〈自然―人間〉の関係性の変化を中心に分析する。また、賢治文学における〈自然―人間〉の関係性の変化のモデルになるものとして、北海道の開拓状況およびアイヌ民族社会の解体について考察する。その上で、賢治が考えている越境がなぜ困難さに遭遇するのか、また賢治が如何なる視線で植民地主義を眺めているのかを解明する。

2.〈自然―人間〉原始的交渉の形成――「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」

最初に賢治文学から歴史的文脈を読み取ったのは、小森陽一の『最新宮沢賢治講義』[1]である。そこにおいて、小森は「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笊森、盗森」を入植のはじまりを描く物語として読み取っている。作品の構造からみれば、両作品は同じく額縁構造によって構成されている。額縁になっているのは、話し手である巌・風と聞き手である「私」との会話の回路である。かつての人間と自然とが交渉するプロセスは、額縁に囲まれる風景であった。このような額縁構造から、口承文学の特徴が見いだせる。昔の話を聞いた「私」が、それを文字にすることで、「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笊森、盗森」という作品が誕生する。この意味では、この二作品は、入植の歴史の記録だけではなく、口承文学から記録文学へと至る文学発展史の再現とも言える。

では、構造的な共通性を持っている両作品において、描かれる〈自然―人間〉の交渉も、共通するのだろうか。それとも、それぞれ異なるのだろうか。

「鹿踊りのはじまり」と「狼森と笊森、盗森」は、ともに童話集『注文の多い料理店』に収録されている。『注文の多い料理店』広告チラシ（大）[2]では、「鹿踊りのはじまり」について、「まだ剖れない巨きな愛の感情」、「ひとは自分と鹿との区別を忘れ、いつしよに踊らうとさへします」という解説文が掲載されている。「鹿踊りのはじまり」は、北上川の東から田畑を拓くため移住してきた嘉十と鹿の物語である。嘉十が湯治の帰路の途中、手拭いを置き忘れた野原に戻り、六匹の鹿が、手拭いが如何なるものかを検討する過程を目撃したことが語られている。この作品において、人間が一方的に自然を観察する眼差しだけではなく、鹿が異種の人間からもたらされた手拭いを観察する眼差しも細かく描かれている。

> 嘉十はにはかに耳がきいんとなりました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。
>
> 嘉十はほんたうにじぶんの耳を疑ひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです[3]。

このように、嘉十は突然の知覚の変質によって、鹿の世界の感情を共有することができるようになる。一匹目の鹿は「白い長いやづあ」、「縦に皺の寄つたもん」という外見を認知する。二匹目は、視覚の認知以外に、「柳の葉みだいな匂」という嗅覚的認知をする。三番目の鹿は「息の音あ為ないがけあな。口も無いやうだけあな」という聴覚認知と視覚認知の面から確認する。また、四番目の鹿は「おう、柔つけもんだぞ」、「汗臭いも」という触覚的、嗅覚的な特徴を認識する。さらに、五番目の鹿は「舌を出して手拭を一つべろりと嘗め」、「味無いがたな」と味覚から認識する。鹿たちは自分が見たことのない異物に対して、あらゆる手段でそれを認識するように努めている。これと同時に、「嘉助はもうあんまりよく鹿を見ましたので、じ

ぶんまでが鹿のやうな気がして、いまにもとび出さうとし」、鹿のめぐりを見終わった後、「まったくじぶんと鹿とのちがひを忘れて」、一緒に踊ろうとする。鹿の人に対する理解と、人の鹿に対する理解は、同時に相互的に進行しているのである。相互の理解の仕方は異なり、最後に、嘉十の姿を見て驚いた鹿は逃げる。このように異文化交流の困難さを描いてもいるが、賢治は人間と動物との越境を描くことで、異文化交流の可能性を提示している。

そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くなゝめに苔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました［。］

冒頭部分で言及された鹿踊りの「ほんたうの精神」は、異種の生き物がお互いに理解しあうプロセス、すなわち異文化交流の可能性にあるだろう。西成彦は人間と動物との異文化接触の中で用いられた擬人法について、それは「動物たちをかいならすための、文字通り『法』であった」(4)と主張している。しかし、「鹿踊りのはじまり」においては、動物は下位に位置し、人間にコントロールされるのではなく、人間と対等な位置に置かれている。つまり、賢治の擬人法は、動物に対する人間の支配の象徴という西成彦の考え方に収まらない。人間と動物の感情共有が実現したり、風の声も人の言葉に聞こえたりするように、「鹿踊りのはじまり」における擬人法の使用は、自然と人間との調和を表現する方法として理解することができる。

「鹿踊りのはじまり」と同じように、「狼森と笊森、盗森」も入植者と自然が交渉する物語として読むことができる。しかし、その交渉の仕方はまた異なる形式によって現れている。

ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすつかり埋まりました。このまつ黒な巨な巌も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのだそうです。

噴火がやつとしづまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、たうたうそこらいつぱいにんり、それから柏や松も生え出し、しまひに、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけでした(5)。

「狼森と笊森、盗森」においては、このような不毛の地から森になるまでの歴史の経緯を表す描写によって始まる。自然だけが存在し、森の名前すら存在しないことから、これは人間が一方的に自然を支配する前の話だとわかる。それは、名付けることそのものが、言葉を使う人間の痕跡だからである。森を名付けることとともに、人間の入植の歴史が始まるのである。最初に森にやってきた人間は、森の許可を得て、畑を起した。人間は森から木をもらい、家を建て、春に

なり、蕎麦や稗を蒔くことになる。しかし、子ども、農具、粟が消えるようになり、森に行って調べてみると、それは狼森の狼、笊森の山男と盗森の仕業だとわかる。このような悪戯をされる農民たちは、その度にそれぞれの森に粟もちを供えるようになったのである。

『注文の多い料理店』の広告チラシ（大）では、「狼森と笊森、盗森」について、「人と森の原始的な交渉で、自然の順違二面が農民と与へた永い間の印象」だという解説が書かれている。「狼森と笊森、盗森」の物語では、人間が一方的に支配するのではなく、森が代表する自然と人間との間の優位関係はまだ付けられていない。このような二者関係は、〈森の贈与―人間の返礼〉のプロセスによってバランスが取られている。

ただし、「狼森と笊森、盗森」における〈贈与―返礼〉というプロセスにおいて、人間の態度の変化には注目すべきである。狼森の場合は、みんなは子どもをつれて森を出ようとする時、狼どもの「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ」という叫び声が聞こえ、家に帰ってから、自発的に「粟餅をこしらへてお礼に狼森に置いて来」たのである。これらの粟餅は子どもを返すことのお礼であると同時に、狼の脅威に対する畏敬の念、つまり二度と子どもたちを隠さないでほしいという願望をも含まれる。しかし、笊森の場合では、みんなは農具の消失を山男の悪戯だと見なし、狼に対する恐怖感はなくなる。「おらさも粟餅持つて来て呉ろよ」という山男の要求に対して、みんなは「あつはあつはと笑つて」、粟餅をこしらえ、狼森と笊森に持っていった。さらに、粟消失の事件では、みんなは盗森に対して、「名からしてぬすと臭い」という先入観を持ち、粟を奪うのは自分の財産を侵犯することだと認定している。したがって、「少し砂がはいつてゐた」粟餅を盗森に持っていくのは、すでに返礼ではなくなっており、粟の所有権を示す示威行為だと考えられる。

それから森もすつかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと粟餅も貰ひました。

しかしその粟餅も、時節がら、ずゐぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな巨きな巌がおしまひに云つてゐました。

この「人と森の原始的な交渉」の過程において、〈贈与―返礼〉の関係性は、最初に人間の森に対する感謝や畏敬の気持ちに基づき、形成されている。しかし、時間が経ち、新しい土地での入植生活になれると、人口の増加に伴い、人間の自己優越感への自覚は、〈贈与―返礼〉の内実に変化をもたらす。森の贈与は、人間にとって、だんだんあたりまえのことになってしまい、人間の返礼であるはずの粟餅は、かえって自然への贈与のように逆転する。結局、人間社会の発展過程において、〈贈与―返礼〉という互恵関係は、形だけが残され、人間が自然に対して主導的地位を占めることによって崩されていく。作中の人間たちは活動範囲の拡張とともに、自分の権力を拡大し、それを正当化しようとする。これは植民地主義の思考と非常に相似

する事柄であろう。

以上の分析から見れば、いずれも同じく人間の入植を描く物語であるが、両作品における植民地主義的表現は異なる。「鹿踊りのはじまり」の入植プロセスにおいては、入植者と先住者が対等に異文化交流を行う可能性が描かれる。しかし、「狼森と笊森、盗森」の入植プロセスにおいては、先住者に対する入植者の一方的な支配が強くなる傾向が表現される。このような差異は、作品に登場する人間の態度から生じる結果だろう。登場人物だけではなく、両作品の聞き手としての「私」にも注目すれば、明らかな差異が見られる。それは貨幣が代表する資本の論理の介入によって、〈自然―人間〉の関係にもたらされた新たな影響である。次節では、「なめとこ山の熊」を加え、この関係性の変化を確認する。

3．資本の論理の「勝利」――「なめとこ山の熊」

本節において、まず、注目したいのは、聞き手としての「私」と、語られた物語の中の人間との区別である。風や巌が話してくれる話の中に登場する人間とは違い、聞き手としての「私」は商品経済の環境に生きている人間である。「鹿踊りのはじまり」における聞き手の「私」は、結末にしか登場していない。「私」は鹿たちと直接に交流することがなかったが、嘉十と鹿たちのやり取りを一種の美談として、懐かしんでいる。しかし、「狼森と笊森、盗森」に登場する聞き手の「私」は、まったく異質な自然との交渉の仕方をしている。

この森が私へこの話をしたあとで、私は財布からありつきりの銅貨を七銭出して、お礼にやったのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしてゐますから。

「私」が銅貨でお礼をしようとする行為は、貨幣が普遍化することに基づき、人間が資本の論理に従って自然と接することの現れであろう。「鹿踊りのはじまり」に現れるより調和的な〈自然―人間〉構図ではなく、「狼森と笊森、盗森」では、森が「私」の銅貨を拒絶し、人間の処世術に対する違和感を示す。貨幣が代表する資本の論理が人間社会に蔓延することに伴い、資本の論理と自然との間に挟まっている人間の葛藤は、賢治の作品にしばしば出てくるモチーフとなる。「なめとこ山の熊」に登場する猟師・淵沢小十郎はこの典型的な人物である。

作品の構造から見れば、「なめとこ山の熊」は、前述の両作品と同じく額縁構造で構成されている。登場人物の淵沢小十郎は、熊の言葉さえわかり、本当は熊を捕りたくない熊捕名人である。熊たちも小十郎のことが大好きだ。「なめとこ山の熊」はこのように、お互いに愛し合う人と熊との間の葛藤を、傍観者である「私」の目線によって記録する物語である。賢治の作品において、登場人物を矛盾のジレンマに陥らせるのはよくあることである。「よだかの星」において、自分が生きるためにたくさんの虫を食べ、その命を奪うことで苦悩するよだかの姿は小十郎を彷彿とさせるだろう。では、小十郎が熊を殺したくないのに、殺さなければならないのは、なぜなのか。

熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけぁならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまったし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞしるんだ。てめえも熊に生まれたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生まれなよ(6)。

生きるために、小十郎は猟師以外の選択肢がない。この小十郎の熊の死体に対する発言には、運命を変えることができない無力感にあふれている。とくに、熊母子の対話を目撃した後、自分の仕事が熊の平和な生活を毀していることに、小十郎の心理的負債感はさらに強まる。しかし、小十郎は熊を捕ることを止めなかった。彼は町の荒物屋に行き、二円――大きな銀貨四枚を「押しいたゞくやうにしてにかにかしながら受け取った」。荒物屋の旦那さんに一生けん命願ったのに、二円しかもらえなかったものの、小十郎は、「もううれしくてわくわくしてゐる」のだ。

豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と胆を売りに行くときのみぢめさと云ったら全く気の毒だった。[…]
いくら物価の安いときだって熊の毛皮二枚で二円はあんまり安いと誰でも思ふ。実に安いしあんまり安いことは小十郎でも知ってゐる。けれどもどうして小十郎はそんな町の荒物屋なんかへでなしにほかの人へどしどし売れないか。それはなぜか大たいの人にはわからない。けれども日本では狐けんといふものもあって狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまってゐる。こゝでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町のみんなの中にゐるからなかなか熊に食はれない。けれどもこんないやなづるいやつらは世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなって行く。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやうないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわってたまらない。

前述した両作品とは異なり、「なめとこ山の熊」においては、話者は入れ子物語の枠を飛び越し、直接に自分の立場を表すのである。このように、無抵抗の小十郎の代わりに、傍観者である「私」は貨幣を媒介とする商品経済における交換の不平等性を批判する。商品経済の段階では、荒物屋の旦那のような一部の人間が、利潤の追求と資本の蓄積を目指している。彼らはあらゆるものを商品として扱い、お金だけを価値判断の標準とし、資本を持たない人々を搾取する。千葉一幹はこのような貨幣を介した商品経済の交換に潜む媒介性に注目し、賢治の媒介性に対する嫌悪を読み取り、「なめとこ山の熊」を「貨幣という媒介物を経た交換から、物々交換への転回を描いた作品」(7)として評する。作品の結末に、熊の一撃で、小十郎は落命する。まるで物々交換のように、自分の体をなげうつことで、小十郎はこれまで熊を殺してきたことをあがなう。荒物屋の主人が熊に支

払うべき負債を、なぜ小十郎が返済しなければならないのか。それは小十郎が荒物屋の旦那から二円をもらったからである。このような貨幣を介した交換を避けるため、賢治は小十郎に死をもたらし、「貨幣という媒介物を経た交換を拒絶した上で」、「悲壮なまでに美しい」(8)物々交換が実現したと、千葉一幹は述べている。

「なめとこ山の熊」に見られた貨幣を介した交換への嫌悪は、そこに潜む媒介性に理由があると、千葉一幹は指摘している。では、貨幣を介した交換に潜む媒介性は、なぜ嫌われるのだろうか。それは貨幣による交換過程において、必ず犠牲が生まれるからだと考えられる。この犠牲はまず自然の側に現れる。熊が殺されるように、あらゆるものを商品化することによって、〈自然―人間〉の間のバランスは崩壊し、支配者と被支配者の対極分化が生じてくる。次に、犠牲は小十郎のような資本を持たない人々にも生じる。自然と資本の論理の間で板挟みになる小十郎は、結局自分の命を捧げるしかない。このように見れば、「狼森と笊森、盗森」において、近代文明に馴染む話者「私」の森に対する貨幣のお礼が拒否されるのは、このような犠牲を避け、〈自然―人間〉の関係性のバランスを維持するためであろう。

賢治文学に度々現れる自然と人間、また先住民と入植者の矛盾の関係性という課題に対して、賢治は異文化理解という解決策を考えているのである。「狼森と笊森、盗森」における〈自然―人間〉の関係性のバランス維持は、賢治の考え方の一つの表現である。また、「鹿踊りのはじまり」における嘉十と鹿、「なめとこ山の熊」における愛しながら殺しあう小十郎と熊も、言葉が通じ合う風景も、その表現の一つである。ただし、これらの賢治が理想とする異文化理解の解決策は、「なめとこ山の熊」の悲しい結末が示唆するように、貨幣経済の環境において、その実施の困難さが現れてくる。それは賢治自身が置かれた時代においても、まったく同じ状況が見られる。そこで、次節で確認しておきたいのは、賢治が異文化理解の理想を抱く背景にある時代の動きであり、そして、そうした時代を賢治がどのような視線で眺めていたのか、ということである。

4．賢治が生きた時代――北海道開拓とアイヌ民族社会の解体について

「なめとこ山の熊」における荒物屋の旦那、猟師・小十郎、熊の三者のそれぞれの方言配分に注目し、作品を「多言語主義的な実験小説」(9)として評するのは西成彦である。西は宮沢賢治のように、「クレオール言語を生み出す複数言語・複数文化的環境の社会的現実を、[…]寓意としてなぞってみせる文学」(10)をクレオール文学と定義している。西の指摘によれば、賢治は多様な異文化に対して、包容力を持っている人である。現実において、このような賢治文学に現れる異文化のモチーフに、モデルを提供するのは植民地的環境だと考えられる。西成彦は、前に言及した「東北文学論」において、賢治が置かれている植民地的環境の起源を、古代から植民地性質を持っている東北地方から探っている。そこで、本節では、植民地を注視する目線をさらに北のほうへと向け、日本の内国植民地であった北海道

の開拓状況から考察していく。

なぜ北海道の開拓状況に注目するのであろうか。それは内国植民地とされている北海道には、日本の植民政策の起源があるためである。近代日本の言説空間において、「新世界」としての象徴的な意味を帯びている北海道は、異文化の接触と衝突がしばしば上演される土地である。そして、このような北海道は賢治にとって、重要な場所だと言える。彼はその短い生涯で、三回ほどこの土地を訪れた。それによって、賢治自身は、異文化と接触する機会を得ている。秋枝美保が『宮沢賢治　北方への志向』(11)において検証したように、賢治は北方の大地およびそこに生活している先住民族に対して、明らかに関心を持っているのである。賢治文学において描かれる越境の表象、また異文化交流の風景は、異文化の併存・干渉・変容の舞台である内国植民地・北海道の存在とは、関係がないとは言えないだろう。

北海道には、水稲耕作を基本とする弥生文化が到達せず、続縄文文化や擦文文化を経て、アイヌ文化の時代を迎えた。一八六八年、明治政府が蝦夷地を北海道と改称し、開拓使を設置し、北海道に対する領有を宣言した。その後、開拓十年計画が決定され、農業、漁業、鉱工業、商業の資本主義化が構想され、箱館、東京、東北各地、さらに九州で募集された移民を、北海道という新開地に入植させようとした(12)。このような開拓熱とともに進んでいくのはアイヌ民族社会の解体である。明治政府はアイヌ民族の伝統的生活習慣や信仰を禁止し、アイヌ人を平民籍に編入し、勧農政策を実施する(13)。これは、入植者と先住民との間に行われる支配関係の調整である。結果的には、アイヌ民族と和人は同化され、同じ「日本人」のカテゴリーに括られる。このプロセスにおいて、アイヌ民族の抵抗があったものの、その生活権を奪う措置が行われている。

アイヌの生業の一つである鹿猟を例とすると、一八七五年には仕掛け弓、毒矢が制限され、翌一八七六年十一月ケプロン（筆者注：当時の開拓次官の黒田清隆に招聘された前合衆国農務局総裁フォーレス・ケプロンのこと）の助言で鹿猟規則が公布され、有料鑑札制（六〇〇人に限定）、毒矢の禁止を決めたが、アイヌの鑑札料は免除され、またアイヌへの鉄砲の貸与は認められた。[…]しかしやはり和人の鉄砲猟師がエゾシカを大量に射殺し、エゾシカの急減を招いている。鹿肉の缶詰工場もエゾシカの乱獲に拍車をかけた。アイヌたちも目先の収入を得るために、乱獲に走った。こうして一八八〇年には釧路国一円で鹿猟を禁止せざるを得なくなっている。また牧場の拡大もエゾシカの生息地の減少をもたらした。和人の開拓＝侵入は資源そのものの枯渇を結果した(14)。

北海道の開拓過程におけるこのようなエピソードは、「なめとこ山の熊」の物語と、非常に高い照合性を持っているだろう。「日本では狐けんといふものもあって狐は猟師に負け猟師は旦那に負けるときまっている」。熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられるように、エゾシカはアイヌ猟師にやられ、アイヌ猟師は資本の論理に翻弄さ

れ、和人開拓者にやられる。では、北海道が開拓される前に、先住民族・アイヌと熊との関係はどのようなものであろうか。

アイヌ文化の中の宗教的側面では、イオマンテに代表される「送り」は中核の位置を示している。「送り」という行為は、動物などの遺体を土中に埋葬することによって、彼らの霊的存在を別の世でやすらかにさせるための、一種の宗教的儀礼である。これは、動物に、人間と同様の尊厳を認める儀礼だと言える(15)。アイヌ文化におけるイオマンテに見られる基本的な姿勢は神への感謝であり、「神から与えられる『もの』に対する人間の側からの丁重なお返しが『送り』という形式で表現されている」(16)。イオマンテは、動物に限定されるものではないが、ふつう「熊祭」と言われるもので、アイヌ民族の考え方では、最高の形態での「送り儀礼」である。つまり、アイヌ民族社会では、アイヌ(人間)は世界を構成する唯一の主体ではなく、人間以外のあらゆる動植物や自然現象なども尊敬すべき存在である。しかし、北海道開拓の進展に伴い、アイヌ民族は和人の文化に同化され、イオマンテが代表する〈贈与―返礼〉という人間と自然の関係図も崩される。アイヌ民族の伝統的な狩猟の生活方式は、商品経済社会における利潤を求める手段となってしまう。このような北海道開拓期にみられる、アイヌ民族の人々と自然との関係の変化の結果が、「なめとこ山の熊」のような賢治文学において、再演されているのである。

一九二三年、花巻農学校の教師を務める賢治は、生徒を引率して北海道へと修学旅行に出掛けた。後に賢治が書いた「〔修学旅行復命書〕」(17)には、札幌の植物園博物館での見聞について、「道産の大なる羆熊の剝製生徒等の注意を集む」、「階上のアイヌに関する標本並に札幌附近雑草の標本亦よき教材なり」という内容が記録されている。博物館にあるこれらの陳列が、北海道開拓に伴う歴史的事情を賢治に意識させたことは明らかである。それはアイヌ民族社会の解体であり、イオマンテに代表されるアイヌ文化の衰退の歴史状況でもある。北海道の先住民族にこのような衝撃的な影響をもたらしたのは、植民地主義であるということに対して、賢治は無自覚だったかもしれない。しかし、賢治はアイヌ民族の物寂しい歴史状況を視野に入れたに間違いない。一九二七年に書かれた「なめとこ山の熊」の悲壮な物語の背景には、賢治がこの一九二三年の北海道訪問で目にした歴史的状況があると考えられる。

5．宮沢賢治と近代日本の植民地主義

賢治は「なめとこ山の熊」において、自然と資本の板挟みになった小十郎が直面するジレンマを描いている。しかし、小十郎の現実的なモデルを提供するアイヌ民族の状況に対して、それが当時の北海道で行われた植民地政策の結果だと、賢治は無自覚的に受け入れたようである。当時の北海道の植民地主義に対して、賢治の目が向けられているのは、その裏に繁殖する残酷な一面ではなく、農業発展や技術導入など、植民地政策の好影響だと思われる。例えば、一九二三年の北海道訪問で、賢治は「〔修学旅行復命書〕」において、植民館を訪れた後、以下のような感想を述べている。

植民館に赴く。中に開墾順序の模型あり。陰惨荒涼たる林野先づ開拓使庁官により毎五町歩宛区劃を設定せられ、当時内地敗残の移住民、各一戸宛此処に地を与へらる。然も初めて呆然として為すなく、技術者来り教ふるに及んで漸く起ちて斧刀を振ひ耒耜を把る。近隣互に相励まして耕稼を行ふ。圃地次第に成り陽光漸く偏く交通開け学校起り遂に楽しき田園を形成するまで誰か涙なくして之を観るを得んや。恐らくは本模型の生徒将来に及ぼす影響極めて大なるべし。望むらくは本県亦物産館の中に理想的農民住居の模型数箇を備へ将来の農民に楽しく明るき田園を形成せしむるの目標を与へられんことを。

このような記述から、北海道で行われる開拓の結果に対して、賢治が賛美や憧れの態度を持ったのは明らかである。また、賢治の植民地経営に対する考え方の形成には、彼が尊敬する人物たちから受けた影響が認められるだろう。一九二三年の修学旅行では、賢治は北海道帝国大学にも訪問していた。賢治一行を招待したのは、当時の北海道帝国大学総長・佐藤昌介である。北海道帝国大学の前身である札幌農学校は、日本の植民地農業の課題をになって設置されたものである。後に北海道帝国大学になってから、初代総長を務めた佐藤昌介は、花巻出身で、宮沢賢治と同郷である。また、間接的に賢治に影響を与えている内村鑑三、新渡戸稲造は、ともに札幌農学校出身の有名人であり、のちに新渡戸稲造は、植民地経営の専門家ともなっている。賢治が北海道帝国大学を訪問した時、佐藤昌介総長の訓辞も拝聴しているのだが、その要旨について、賢治は「〔修学旅行復命書〕」において、以下のようにまとめている。

要旨まづ新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に処して旧慣弊風を改良し日進の文明を摂取することと榛茨の未開地に当るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する以所（ママ）並に今日は大切なる農業の黎明期にして実に斯土を直ちに天上となし得るや否や岐れて存する処なりといふにあり。

先住民の旧慣弊風を日進の文明によって入れ替えること、北海道開拓の過程におけるこの難題の解決の重要性を、賢治は認めているようである。だが、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、また「なめとこ山の熊」のいずれも、自然と人間との異文化交流の風景を象徴的に描く一方、先住民と植民者との矛盾など、植民地主義の問題点を遠回しに示す。では、なぜ植民地主義に含まれるマイナスの側面は、賢治文学において直接的に明かされなかったのだろうか。それは日本の植民地政策の特徴に関わると考えられる。柄谷行人は「日本の植民地の『起源』」において、日本の植民地政策の特徴について、以下のように述べている。

日本の植民地政策の特徴の一つは、被支配者を支配者である

日本人と同一的なものとして見ることである。それは「日朝同祖論」のように実体的な血の同一性に向う場合もあれば、「八紘一宇」というような精神的な同一性に向う場合もある。[…]こうした「同一性」イデオロギーの起源を見るには、北海道を見なければならない。日本の植民地政策の原型は北海道にある。いうまでもなく、北海道開拓は、たんに野原の開拓ではなく、抵抗する原住民(アイヌ)を殺戮・同化することになされたのである(18)。

つまり、日本植民地主義の考え方では、被支配者と支配者との間の矛盾や衝突は、「同一性」イデオロギーの作用によって、問題視されないようになっている。内国植民地としての北海道の形成は、このような「同一性」イデオロギーの産物である。北海道に強い関心を持っている賢治は、そこから植民地主義の「同一性」に対する認識を持つようになったのだろう。「同一性」イデオロギー作用下の植民地主義思想では、先住者に対する抑圧は隠蔽され、進歩と文明をもたらす同化の論理が強調される。その結果として、先住民の生活方式にも、入植者と同じような資本の論理が導入され、先住者に対する同化が実現される。

しかし、入植過程において、先住民と入植者の矛盾と衝突は実際に存在する。その矛盾と衝突が生じる原因はどこにあるのか。その原因は植民地主義思想にあるのではなく、資本の論理にあると、賢治は考えているようだ。賢治の考えでは、日本の植民地主義思想は同化の論理であり、先住民に進歩と文明をもたらすことは最も重要な役割である。それに対して、資本の論理は不平等性を持ち、先住民と入植者の経済的地位を分化させ、支配される側に犠牲をもたらす。ゆえに、賢治文学において、植民地主義に対する無自覚が現れる一方で、資本の論理に対する批判が行われるのである。

6. おわりに

本章は、宮沢賢治が考古学者の視線で描く三部作――「鹿踊のはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」を取り上げ、各作品に現れる〈自然―人間〉の関係性に注目しながら、分析してきた。北海道開拓およびアイヌ民族社会の解体という歴史状況を考察することに加え、こうした時代状況と賢治文学の照合性を明らかにすると同時に、賢治が考えている越境、異文化交流の困難さの原因、また賢治が植民地主義を眺める視線を読み解いた。

直接な異文化接触を描く「鹿踊のはじまり」では、動物と人間がお互いに観察する目線が注目され、異文化に対する探索、人間と動物との越境が描かれている。同じ入植のモチーフで繋がる「狼森と笊森、盗森」では、自然と人間との間に、〈贈与―返礼〉という互恵関係が形成され、またその関係性の内実が変容する過程が描かれる。その原因は、入植者である人間が自分の権力を拡大し、正当化しようとすることにあり、植民地主義思想の考え方に類似する。両作品に共通する額縁構造の聞き手の異なる行為に注目すると、自然と人間との関係性に変化をもたらすのは資本の介入だということがわかる。「なめとこ山の熊」では、貨幣を交換の媒介とする商品経済の環

境における、自然、資本の論理、人間の三者の葛藤が描かれている。〈自然―人間〉の二者関係に、資本の論理の介入によって、賢治が考えている異文化交流・越境が困難さに遭遇するのである。

三作品に対する分析から、賢治文学の表象と賢治が生きた時代の関連性が見いだせる。賢治の北海道訪問を手掛かりとして考察することによって、「なめとこ山の熊」という作品の背景には、北海道の開拓とアイヌ民族社会の解体の歴史があることは明らかである。しかし、こうした時代状況との関連性が強いものではあるが、「なめとこ山の熊」においては、現実における入植者と先住民との矛盾の原因となる植民地主義思想は、全く批判されていない。その代わりに、資本の論理に対する批判は行われている。それは、賢治の考え方では、近代日本の植民地主義思想は、先住民に進歩と文明をもたらすものであり、自然と人間、また入植者と先住民との矛盾・衝突をもたらすものではないからである。このように、本章の分析を通じて、賢治が近代日本の植民地主義をどのように理解していたのかが明らかとなった。

注

（1）小森陽一『最新　宮沢賢治講義』朝日新聞社、一九九六年十二月

（2）『注文の多い料理店』広告チラシ（大）『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他（本文篇）』筑摩書房、一九九五年十一月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（3）「鹿踊りのはじまり」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他　本文篇』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（4）西成彦「植民地の擬人法」『新編　森のゲリラ　宮沢賢治』平凡社、二〇〇四年五月、三十頁

（5）「狼森と笊森、盗森」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他　本文篇』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（6）「なめとこ山の熊」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（7）千葉一幹「貨幣と言語」『賢治を探せ』講談社、二〇〇三年九月、一二二頁

（8）同前、一三二頁

（9）西成彦「東北文学論」『森のゲリラ　宮沢賢治』同前掲、二十六頁

（10）同前

（11）秋枝美保『宮沢賢治　北方への志向』朝文社、一九九六年九月

（12）北海道の入植歴史について、長井秀夫『日本の近代化と北海道』（北海道大学出版会、二〇〇七年六月）を参照。

（13）『岩波講座　近代日本と植民地1　植民地帝国日本』（岩波書店、一九九二年十一月）には、「内国植民地としての北海道」という節があり、アイヌ民族社会の解体について詳しく述べられている。また、一八九九年基本的国策としての「北海道旧土人法」が制定された後、日本のアイヌ民族をめぐる状況について、高倉浩樹「先住民問題と人類学――国際社会と日常実践の間における承認をめぐる論争」（窪田幸子、野林厚志編『「先住民」とはだれか？』世界思想社、二〇〇九年十一月）を参照。

（14）田村貞雄「内国植民地としての北海道」『岩波講座　近代日本と植民地1　植民地帝国日本』同前掲、九十六頁。また、北海道の鹿と人間の歴史について、詳しくは、藤原英司『北加伊エゾシカ物語――北海道の環境破壊史』（朝日新聞社、一九八五年十月）を参照。

（15）宇田川洋「送り場と考古学」『イオマンテの考古学』（東京大学出版会、一九八九年二月、二頁）を参照。

（16）宇田川洋「アイヌ文化としての送り場」同前掲、一〇四頁

（17）宮沢賢治「（修学旅行復命書）」『【新】校本宮沢賢治全集　第十四巻　雑纂　本文篇』筑摩書房、一九九七年五月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（18）柄谷行人「日本植民地の『起源』」『岩波講座　近代日本と植民地4　統合と支配の論理』岩波書店、一九九三年三月、五頁

第４章　異人の変奏曲：風の精霊・又三郎と新参者の間

――〈風の又三郎〉論――

１．はじめに

宮沢賢治のテクストが活字の変奏によって組み立てられる組曲だと言えば、「風野又三郎」と「風〔の〕又三郎」はその中でも、魅力的な一組だと思われる。多くの宮沢賢治テクストと同じように、この作品は未完成のままに残され、だがその〈推敲途上性〉(1)によって、このテクストの面白さが呈示されているとも言える。賢治が「農民芸術概論綱要」において述べたように、「永久の未完成これ完成である」。「風野又三郎」から「風〔の〕又三郎」までの「未完成」は、いったいどのような「完成」を表現しているのだろうか。本章では、「風野又三郎」を初期形、「風〔の〕又三郎」を後期形と見なし、両者を対照しながら、賢治テクストの改稿について考察する。ではまず、初期形から後期形までの改稿過程を確認していこう。

２．「風野又三郎」から「風〔の〕又三郎」へ

「風野又三郎」から「風〔の〕又三郎」までの改稿状況は、「風野又三郎」草稿における行間筆写稿への参照によって明らかにされている。「風〔の〕又三郎」は、初期形「風野又三郎」のほか、「種山ヶ原」、「さいかち淵」、「みぢかい木ぺん」の要素をも取り入れ、成立するのである。最終形であるべき「風〔の〕又三郎」は結局完成されなかったが、未完成のままに残されることこそ、宮沢賢治テクストの〈未完成＝完成〉という本質を見事に呈示しているのではないかと考えられる。

では、まず、初期形から後期形までの改稿状況をまとめよう。初期形「風野又三郎」の物語は、九月一日に谷川の岸にある小学校に始まる。先生には見えない赤髪の到来者は、子どもたちの中に話題を引き起こす人物となる。翌日、この突然の到来者は風野又三郎と名乗り、子どもたちとコミュニケーションし始める。これから約一週間の間に、子どもたちは学校以外の時間に、山の丘を登り、風野又三郎の飛び歩いた経験談を聞きに行く。岩手山、九州から東京の旅、東京や上海の気象台での見聞、北極と北海道の様子、またサイクルホールの話、さらに風の効用論。このように、風野又三郎と付き合う間に、子どもたちは谷川小学校以外の世界を理解するようになる。この中には、耕一の傘を壊すような出来事もあるが、子どもたちと楽しい時間を過ごした風野又三郎は、九月十日の朝に一郎に別れを告げ、飛び去っていく。

この初期形「風野又三郎」を基礎として、「種山ヶ原」、「さいかち

淵」の内容を取り入れ、大幅に改作した結果が、後期形「風〔の〕又三郎」となる。物語は同じく九月一日の谷川の小学校に始まるが、突然到来する者は異人性を持っている風の童神ではなく、北海道からの転校生・高田三郎となる。物語の内容は、初期形のように、主に風野又三郎が子どもたちに対して一方的に冒険の経験を語るのではなく、高田三郎と子どもたちの共同体との関係が変化する中で、お互いに行動しあうような出来事が多く描かれる。冒頭部分は主に初期形の内容を受け継いでいるが、物語の核心部分には大幅な手入れがなされている。

まず、短編童話「みじかい木ぺん」と深い関連性が見られるのが九月二日のことである。佐太郎がかよの木ペンを取り、泣いているかよの姿を見た高田三郎は、一本だけの鉛筆をかよに与える。次に、九月四日、三郎と一緒に競馬遊びに行った嘉助は逃げた馬を追うため道に迷い、三郎が空を飛ぶ夢を見てから助けられる。この一章の設定は童話「種山ヶ原」と相当な類似性をもつことは明らかである。その後、九月六日、子どもたちと一緒に葡萄を取りに行く三郎は、耕助との間に風についての効害論争を行う。七日と八日の出来事は、先行作品「さいかち淵」の内容を下敷きにし、更に手を加えて成立しているのである。子どもたちは専売局の人かと思われた大人たちから、高田三郎のことを守る。八日に、みんなと川で鬼ごっこをして遊んでいた高田三郎は、悪戯されてから家に帰る。最後に、九月の十二日になるが、月曜日を迎え、再び登校する子どもたちは高田三郎の姿を見つけられず、そこで彼がまた北海道の学校に転校すると、先生から聞かされる。

初期形から受け継がれている内容はあるが、他の作品から内容を引用したり、手入れをしたりすることによって、後期形はだいぶ異なる作品となっている。宮沢賢治テクストのこのような改稿の特徴について、序章にも言及したように、中村三春はハイパーテクストの理論を援用しながら、賢治テクストに含まれるハイパーテクストの時間性と空間性を露呈させる。空間性は作者が相関テクストを相互に引用したり、編集したりする過程に含まれるが、時間性は読者が初期テクストを読んだ上で、そこから受容する要素を後期テクストの読解に持ち込む行為によって現れる。〈風の又三郎〉の場合では、つまり、初期形における風の精霊・又三郎が、後期形において継承されるということである。そこで、本章では、初期形「風野又三郎」と後期形「風〔の〕又三郎」が持っている継承性を踏まえた上で、それぞれの特徴を把握し、賢治テクストを再読解することを試みる。

3. 風の精霊・又三郎の誕生

物語は、九月一日、「そのしんとした朝の教室のなかに　どこから来たのか　まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子どもひとり」(2)の突然の出現によって始まる。この見知らぬ子どもの出現は、子どもたちの日常生活の静かさを破っていくこととなる。初期形においては、強い好奇心を持っている子どもたちの疑問に対して、彼は自ら風野又三郎と名乗る。

一郎がまだはあはあ云ひながら、切れ切れに叫びました。
「汝ぁ誰だ。何だ汝ぁ。」
するとその子は落ちついて、まるで大人のやうにしっかり答へました。
「風野又三郎。」
「どこの人だ、ロシヤ人か。」
するとその子は空を向いて、はあはあはあ笑ひ出しました。その声はまるで鹿の笛のやうでした。それからやっとまじめになって、
「又三郎だい。」一郎と耕一とは思はず叫んで顔を見合わせました。[…]
「そんだらあっちこっち飛んで歩くな。」一郎がたづねました。
「うん。」
「面白いか。」と耕一が言ひました。すると風の又三郎は又笑ひ出して空を見ました。
「うん面白い。」

このような会話によって、風野又三郎は子どもたちの幻想に存在する風の精霊・又三郎と合体する。また、飛んで歩くという行動方式による豊富な旅行経験が、これから風野又三郎が子どもたちに語りかけていく素材となる。村の小学校にいる子どもたちにとって、風野又三郎の到来は、今まで知らなかった世界のことを理解する機会となる。

初期形とは異なり、後期形においては、この突然の外来者の身分が明かされる前は、子どもたちとのコミュニケーションがない状態である。子どもたちがこの新参者はいったい誰であろうと一所懸命に考える時、風がちょうど教室を通るのである。すると、五年生の嘉助が「あゝ　わかった　あいつは風の又三郎だぞ」(3)と叫んだ。この後、先生はこの子が北海道から転校してきた新入生高田三郎であるということを説明するが、高田三郎はすでに風の精霊・又三郎として、子どもたちの脳裏にイメージを残している。

では、子どもたちの幻想に存在する風の又三郎は誰なのか。宮沢賢治の童話「雪わたり」、「イーハトーブ農学校の春」、「ひかりの素足」においては、風の又三郎によく似た描写も現れている。また、「さいかち淵」、「鳥をとるやなぎ」、「二人の役人」、「祭の晩」、「ざしき童子のはなし」、「紫紺染について」などの作品に、山男やざしき童子などの精霊たちも登場している。これらの異人のような存在の登場から、宮沢賢治童話作品と民俗学との関連性が連想されるだろう。この問題はすでに多くの論者によって言及されている。「風野又三郎」と「風〔の〕又三郎」の中に登場する風の精霊・又三郎は、新潟・岩手などで知られている「風の三郎」伝説から取材された人物である、ということは、ほぼ定説として知られている。民俗学辞典において、風の三郎に関連する説明は、以下のように書かれている。

①「カゼノサブロウ」
新潟・福島両縣などには風の神をこの名で呼んであるところ

がある。新潟縣東蒲原郡太田村では舊六月二十七日に風の三郎の祭りをする。朝早く村の入口に吹きとばされそうな小屋をつくる。それを通行人に打ちこわしてもらって風に吹きとばされたことにし、風の神に村を除けて通ってもらうことを祈る。この村では風の神を新羅三郎義光だという者がある。隣の部落石畑でも同様の小屋を三郎山という山の頂上につくる。この邊では風が吹くと子どもたちが「風の三郎さま、よそ吹いてたもれ」と聲を揃えて唱える（4）。

②「風祭」

農耕儀礼の一種で、農作物を風の被害から守るために行われる儀礼。二百十日前後のころに台風の被害から作物を守ろうとするもので、中央日本に多くみられる。二百十日、すなわち新暦九月一日にやる地方は多いが、これを正月や盆に行う例もある（5）。

③「風の神と子供」

南風が人の姿で現れ、子どもたちを尻尾に乗せて空を飛んで山へ運ぶ。風の神の親が子どもの北風に命じて、子どもたちを家に送り届けさせる（6）。

以上のいくつかの説明を参照すれば、賢治テクストに登場する風の精霊・又三郎と子どもの相関性、また物語が発生する時間と風祭の時間の一致性などによって、「風野又三郎」および「風〔の〕又三郎」に登場する風の精霊・又三郎と、日本民話における風の三郎との類似性が明らかになる。

しかし、賢治テクストに登場する風の精霊は、三郎という名前の前に、「又」という二重、反復の意味を表す一文字が加えられる。これによって、どのような差異が生まれるのだろうか。吉田文憲はこの点に注意を払い、「又」の意味を調べ、賢治テクストにおける「又」と比較しながら、考察した。結論として、「又」を「怪異な、かつ事象の変化・変身を促すブラック・ホールのメタモルフォーゼのような場所」（7）としている。魅力的な解釈であるが、「又」の意味を拡大解釈するきらいがあると思われる。賢治テクストに登場する風の精霊・又三郎は、民話の風の三郎から由来する者だと理解するならば、又三郎に対する認識は、大人と子どもの間に共通するものである。しかし、初期形と後期形のテクストにおいて、この二つのグループの人間の、風の精霊・又三郎に対する反応は明らかに異なっている。これはテクストの読解に重要なヒントを提供してくれるだろう。

前述の内容で明らかになったように、初期形と後期形のいずれにおいても、風の精霊・又三郎は子どもたちの心の中に存在し、彼らの想像力を満たす魔力を持つ異質者である。ただ、この存在は潜在性を持ち、日常生活においてあまり意識されていない。だが、見知らぬまれびとの出現によって、子どもたちの心に密かに存在する風の精霊・又三郎が意識され、喚起されるのである。初期形における「変てこな鼠いろのマントを着て水晶ガラスか、とにかくきれいなすきと

ほった沓をはいて」いる風野又三郎は言うまでもないが、後期形に登場する高田三郎も「変てこな鼠いろのだぶ〔だ〕ぶの上着を着て白い半ずぼんをはいてそれに赤い革の半靴をはいてゐる」ため、普通の子のようにも見えない。

しかし、テクストに登場する大人たちは、風の精霊・又三郎のことを知らないようである。まず、初期形では、このことはテクストの初めにおける小学校の先生の反応から容易に読み取られる。九月一日の朝、先生が学校に来てから、子どもたちはみんな運動場に整列する。しかし、「誰の眼もみんな教室の変な子に向いてゐ」ることに対して、先生は全くわけがわからず、「何があるのかと思ったらしく、ちょっとうしろを振り向いて見ましたが　なあになんでもないといふ風で」子どもたちの方を向く。また、子どもたちが髪の赤い人について尋ねる時も、先生が困り、逆に「髪の赤い人がこゝに居たのですか」と疑うようになる。これによって、風の精霊・又三郎に対する、大人と子どもの異なる反応が明白に描かれる。

後期形においても、同じ状況が提示されている。

「一郎、いまお汁できるから少し待ってだらよ。何して今朝そったに早く学校へ行がないやないがべ。」

お母さんは馬にやる〔一字空白〕を煮るかまどに木を入れながらききました。

「うん。又三郎は飛んでったがも知れないもや。」

「又三郎って何だてや。鳥こだてが。」

「うん又三郎って云ふやづよ。」一郎は急いでごはんをしまふと椀をこちこち洗って、それから台所の釘にかけてある油合羽を着て下駄はもってはだしで嘉助をさそひに行きました。

一郎が言う又三郎に対して、お母さんは明らかにその存在を意識できない。また学校で、嘉助は又三郎の行方を聞くと、先生は「又三郎って高田三郎か」と確認し、又三郎と呼ばれる者に対する、明らかな違和感を示す。つまり、賢治テクストにおいて、風の精霊・又三郎は、子どもだけが認識できる存在である。

「風の三郎」伝説から取材したものであるが、「又」の一文字を加えることによって、新しく生まれる風の精霊・又三郎は、民話としての伝承性を失っている。風の精霊・又三郎の存在は、先生を始めとする大人たちが子どもたちに教えるおとぎ話に登場する人物ではない。賢治テクストにおいて、彼は子どもたちだけが理解できる存在であり、子どもたちが作り出した伝説の主人公である。見知らぬ風野又三郎と高田三郎が子どもたちの前に現れる時、風の精霊・又三郎に生命が与えられ、新参者の風野又三郎・高田三郎と共同し、物語を作り上げるのである。

4．異人の物語から〈異人―人間〉の物語への変奏

では、初期形と後期形における異なる新参者は、子どもたちの幻想世界に存在する風の精霊・又三郎と、どのような物語を演じているのだろうか。本節から、初期形と後期形それぞれの特徴を踏まえ

ながら、この問題について考察する。

まず、初期形に登場する風野又三郎はどのような存在だろうか。先生には新参者が見えないゆえ、子どもたちの好奇心がさらに引き出される。この異質の者はいったい誰だろうということを絶えず考えている子どもたちは、次の日、やっと風野又三郎に話しかける機会を得る。風野又三郎という新参者の名前は、子どもたちが知っている風の精霊・又三郎を彷彿とさせる。加えて、風野又三郎は自慢のように「僕はどこへでも行くんだよ」と述べる。これらのことが、「谷川の岸」という閉鎖的な空間の中に生活している子どもたちに、広い外の世界をよく知り、いろいろな面白いことを話してくれる外来者への期待感を持たせることは間違いない。彼らが知り合ってから、風野又三郎は自分が冒険した経験を子どもたちに話す。閉鎖地域の小学校に通い、しかも基礎教育しか受けられない子どもたちに比べると、風野又三郎はまるで全知全能のように見える。初期形において、突然到来する風野又三郎と子どもたちの幻想に存在する風の精霊・又三郎は異なる次元の存在であるが、異人性や超能力の所有といった特徴については、ほぼ一致している。つまり、子どもたちの風の精霊に対する想像は、風野又三郎の登場によって裏付けられるのである。

これにより、子どもたちの現実世界にふいに到来する風野又三郎は、精霊のように認知されるため、最終的に突然、村から離れていくことも違和感を与えないだろう。初期形の「風野又三郎」は、完全に異人の物語として成立している。

では、後期形「風〔の〕又三郎」はどうなるのだろうか。大幅な改稿によって、後期形では、非現実的要素が削除され、現実により密着する形になったと考えられる。後期形における最も重要な改稿は、風の童神・風野又三郎が転校生・高田三郎に変えられたという設定である。高田三郎は、父のモリブデン鉱脈の採掘のため、村の小学校にやってくる。土佐亨が指摘したように、モリブデンが戦争に伴う重工業や兵器の発展、需要と密接な関係にあり、モリブデンというモチーフの登場は、当時日本の帝国主義の進展および軍国主義の膨張、海外侵略の時代背景に深く関わっている(8)。このほか、北海道という場所の表出にも注目すべきである。転校生高田三郎は、北海道で春日明神を見たことがある。東北開発の神として知られている春日明神への言及は、内国植民地としての北海道の開拓状況を反映しているだろう。これらの点に注目し、「風野又三郎」の一連の作品を帝国の拡張イメージを描くものとして読解するのは、米村みゆきの論(9)である。以上のような読解の視点と異なり、本章では、異文化コミュニケーションを描く物語として、作品の読解を試みる。

「風〔の〕又三郎」では、突然到来する者が大人である先生には見えない存在ではなくなり、初期形における「一向怖がる風もない」風野又三郎とも異なる。後期形に登場する高田三郎は「きょろきょろこっち（筆者注：子どもたち）を見るだけ」で、転校生としての緊張感を持っている。また、前述のように、初期形における風野又三郎が、自ら話し出し、子どもたちに外の世界の面白さを教えるような、主導的な役割を果たすのとは異なる。後期形における高田三郎――

一人の心細い新参者としての、すでに存在する子どもたちの共同体への参入が描かれている。このように、後期形の場合、子どもたちの目に見えている高田三郎は、まず転校生として存在する。それと同時に、幻想の中に存在する風の精霊・又三郎と絡み合いながら、同一化したり、分離したりするのである。後期形において、「三郎」と「又三郎」は子どもたちの現実世界と幻想世界に同時に存在すると言えよう。

天沢退二郎は「風〔の〕又三郎」における「三郎」と「又三郎」という名称の使用は、無原則の混用ではなく、それなりの意味を持っていると指摘している。

> 「九月一日」「九月四日」で子どもたちが「又三郎」と呼んでいるのに話者が地の文で「三郎」といって区別しているのは、話者が子どもたちとの間に距離を置いている、ということになります。これが、〔九月五日〕では二つを混用し、「九月七日」「九月八日」「九月十二日」では地の文ももっぱら「又三郎」というようになるのですから、これは、次第に話者が、子どもたちの意識に身を寄せて行ったのだ、と考えることができます（10）。

無原則の混用ではないという指摘に対しては、確かにその通りだと思われる。ただし、具体的に分析する場合、天沢は話者の立場の転換だけで問題を解消しようとする。後期形における「三郎」と「又三郎」の使用は、子どもたちと高田三郎の関係の変化に伴い、もっと複雑な状況を呈示している。ここでは、子どもたちの意識の変化そのものを無視してはいけない。後期形において、子どもたちの高田三郎に対する認識は始終不変なものではなく、現実の転校生と幻想の精霊の間で揺らぐのである。つまり、「三郎」と「又三郎」の区別は、天沢が述べた話者の立場の転換を表現する以外に、子どもたちの高田三郎に対する認識の変化をも表現している。具体的に言うと、「三郎」と呼ばれるのは先生、物語の語り手、また子どもたちに見えている転校生「高田三郎」のことであるのに対して、「又三郎」と呼ばれるのは、子どもたちの幻想に存在する風の精霊・又三郎のことである。また、物語の後半になると、子どもたちと高田三郎との関係はますます親密になるが、そのため「又三郎」が高田三郎のあだ名としても用いられていることも考えられる。

要するに、後期形は普通の人間の子――高田三郎の介入によって、初期形のようなより単純な異人の物語ではなくなり、〈風の又三郎―高田三郎〉の物語に発展すると言える。後期形では、子どもたちにとって、高田三郎は単なる一人の転校生ではなく、時々神格化された風の精霊・又三郎の身代わりでもある。また、初期形においては、風野又三郎と風の精霊・又三郎が高度に統一されている。しかし、後期形においては、高田三郎と風の精霊・又三郎は幻想と現実、人間と神のパラドックスの中に絡み合い、合体と分離の運動状態に置かれるのである。また、非合理な風の精霊が学校という合理的な空間に残存している。こうしたパラドックス的な要素が後期形のテクストに同居している。これこそ、後期形の最も興味深いところである。

初期形「風野又三郎」から後期形「風〔の〕又三郎」までの登場人物の設定の変化は、宮沢賢治のもう一つの長編童話「銀河鉄道の夜」を思い出させる。その初期形に登場する、内的独白を続ける主人公ジョバンニのように、初期形の風野又三郎も饒舌な登場人物だと言える。また、「銀河鉄道の夜」後期形におけるジョバンニが大人しくなり、また沈黙するようになることと同様に、後期形「風〔の〕又三郎」に登場する高田三郎も会話が少なくなっている。このような饒舌から沈黙への逆転は、後期形にどのような影響をもたらしたのだろうか。次節では、風の精霊・又三郎、子どもたち、また転校生・高田三郎の三者が構築する関係図の動きを見ていこう。

5. 新謎解き・風〔の〕又三郎

天沢退二郎は『謎解き・風の又三郎』において、全編を貫く唯一にして最大の謎は、「高田三郎は風の又三郎か」という問題だと述べている(11)。この最大の謎を巡って、従来の研究の主張を整理しておきたい。まず、民俗学の視点では、貴種流離譚として「風〔の〕又三郎」を捉え、そこから高田三郎は風の又三郎であるという主張がある(12)。しかし、その一方、押野武志は後期形を「風の又三郎ごっこ」として捉える。

> 《高田三郎は風の又三郎なのか、そうでないのか?》
> 以後この命題を軸にして物語は展開する。しかし、本当に風の又三郎なるものの存在を子どもたちは信じていたのだろうか。嘉助ですら高田三郎が単なる転校生でしかないことを知っていたのではないか。逆にこう問い直してもよい、高田三郎は「風の又三郎」を演じきれるのかと。
> 嘉助が他者を突然何の了解もなく「風の又三郎」と名づけることにより、その少年が単なる転校生に過ぎないという現実的認識を無視して、つまりは子どもたちに新しい謎の創造を突きつけることによって、子どもたち固有の時空が現前する(13)。

前述したように、高田三郎と風の精霊・又三郎を現実と幻想という二つの次元の存在として区別すれば、後期形を新構造において見直すことは可能である。続いて、高田三郎と風の精霊・又三郎の同一性に焦点を当てるのではなく、押野が指摘した、子どもたちが、高田三郎は「単なる転校生に過ぎないと言う現実認識」を無視したことを切り口としたい。そこから、子どもたちのこの行為によって構築される〈現実の高田三郎―幻想の風の又三郎〉の関係を中心に、またそこに潜んでいる〈人間―異人〉の境界線を探りながら、〈新謎解き・風〔の〕又三郎〉を行う。

5-1. 高田三郎と又三郎の同一化

現実世界に存在する高田三郎は、いったいどのように幻想世界の風の又三郎と結び付くのだろうか。初期形の物語の発展を促進する饒舌な風野又三郎の代わりに、後期形の中で、誰がその役割を果たしているのだろうか。まず、いくつかの偶然の出来事から見ていこ

う。

九月一日の教室で、嘉助と一郎がこの変な子を発見する時、「風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱や栗の木はみんな変に青じろくなってゆれ、教室のなかのこどもは何だかにやっとわらってすこしうごいたやうで」ある。風とはじめて現われる子どもの動きとの一致を見つける嘉助は、その子を風の又三郎と名付ける。また、先生の紹介によれば、この転校生は高田と呼ばれる。ところが、嘉助は先生に「高田さんの名は何て云ふべな」と尋ね、先生は「高田三郎さんです」と答える。この答えに対して、嘉助は勢いよく、「わあ、うまい、そりや、やっぱり又三郎だな」と感嘆する。嘉助のこの発見に対して、笑った大きな方の子どもらがいると同時に、「何か怖いといふ風にしいんと」する三年生の下の子どもたちもいる。だが、この時点で、嘉助の胸中では、高田三郎と風の又三郎がすでに同一化されているのである。

外部から突然やって来たばかりの転校生は、疎外される存在として、すぐに子どもたちとうまく付き合うことができない。九月二日の運動場では、誰もが遊びの相手になってくれないため、高田三郎は一人で歩き始める。その時、風が又吹き始め、「草はざわざわ波になり運動場のまん中にさあっと塵があがり［…］黄いろな塵は瓶をさかさまにしたやうな形になって屋根より高くのぼ」るのである。すると、嘉助はまた「そうだ。やっぱりあいづ又三郎だぞ。あいつ何かするときっと風吹いてくるぞ」と言う。この時、このように思うのは嘉助一人ではなく、孝一（14）のように賛成する子もいる。これらの一連の偶然の出来事によって、後期形の冒頭において、〈高田三郎―風の又三郎〉の同一化がまず実現される。また、この同一化の過程において、嘉助が重要な役割を果たしたのも明らかなことである。

九月四日、日曜日になると、みんなと少しずつ親しくできるようになってきた高田三郎は、一郎たちと一緒に出かけるようになり、みんなを競馬に誘うのである。だが、一匹の馬が逃げたため、三郎と嘉助は一所懸命に追っている。途中、嘉助は「ぐるぐる廻り、たうたう深い草の中に倒れてしま」う。やっと起き上がった嘉助は三郎と馬の跡をつけて行くが、道がだんだん見つけられなくなり、一郎の名前を叫びながら道を探す嘉助は、結局疲れきり、草の中に倒れてしまう。

もう又三郎がすぐ眼の前に足を投げだしてだまって空を見あげてゐるのです。いつかいつもの鼠いろの上着の上にガラスのマントを着てゐるのです。それから光るガラスの靴をはいてゐるのです。

又三郎の肩には栗の木の影が青く落ちてゐます。又三郎の影はまた青く草に落ちてゐます。そして風がどんどんどんどん吹いてゐるのです。又三郎は笑ひもしなければ物を云ひません。たゞ小さな唇を強そうにきっと結んだまゝ黙ってそらを見てゐます。いきなり又三郎はひらっとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがギラギラ光りました。

嘉助が夢の中で見た高田三郎の様子である。彼の潜在意識下において、高田三郎は風の精霊・又三郎の化身に間違いない。このように、両者の同一化は、ここであらためて強調されている。目覚めた嘉助は、すぐ一郎たちに救われる。みんなびっくりしたが、帰り道に団子を食べ、競馬を通じて、高田三郎との関係は一層深まったと考えられる。また、嘉助は高田三郎が「風の神」、「風の神の子っ子」であることをますます信じるようになる。こうして、後期形の前半における〈高田三郎―風の精霊・又三郎〉の同一化が実現するのである。

5・2. 子ども共同体の一員となる「又三郎」

競馬という子どもたちとの共同経験によって、高田三郎と子どもたちとの距離感は解消されていった。これに続いて、高田三郎と子どもたちとのコミュニケーションはさらに広がっていく。

九月六日、耕助の提案でみんなは葡萄を取りに行く。嘉助が高田三郎を誘う。耕助は「わあい、あそご〔又〕三郎さ教へるやないぢゃ」と反対する。だが、それを知らない三郎は、喜んで嘉助の誘いに乗る。みんなが葡萄をとっている時に、高田三郎は栗の木に登り、幹を揺さぶって耕助に水をかける。高田三郎の悪戯に対して、耕助は「うあい、うあいだが、又三郎、うなみだぃな風など世界中になくてもいゝなあ、うわあい」と繰り返して言う。単なる子どもの悪戯であるが、耕助の中で、高田三郎と風の精霊・又三郎が同一視されるがゆえに、風の効害についての論争を惹き起こしている。このなりゆきで、高田三郎は風の代弁者となってしまう。しかし、この論争を通じて、耕助はいたずらされることの怒りをだんだん忘れ、三郎との仲直りができる。ここでの高田三郎は後期形の中では最も饒舌であるが、このようなコミュニケーションによって、子どもたちとの関係は一層親しいものとなる。最後に、一郎が三郎に五房の葡萄を与え、「みんなは下のみちまでいっしょに下りてあとはめいめいのうちへ帰った」のである。

次の日に、また嘉助の誘いで、高田三郎はみんなと一緒に泳ぎにいく。子どもたちの泳ぎ方が変だと感じる三郎は笑うが、自分が川の底に達することができないため、逆に子どもたちに笑われてしまう。この時点で、高田三郎は自分の弱点を子どもの前で暴露していることから、子どもたちにとって、彼はもう特別な存在ではなく、ごく普通の子どもとなる。しかも、河原の向こうから発破をする大人たちが現われる時、子どもたちは三郎が煙草の葉を取ったせいで、彼を掴まえようとする専売局の人だと思い込み、みんなで協力し、三郎を囲んで守る。この時、高田三郎はすでに子どもたちの共同体の一人となっており、みんなが距離感を持っていた転校生ではない。「又三郎」というのも、子どもの中に存在する風の精霊に対する呼び方ではなく、彼に対する親しさを示すあだ名となっている。

しかし、高田三郎は子どもの中で、普通の子としては、長くはいられなかった。九月八日の鬼ごっこでは、鬼になる三郎は「髪の毛が赤くてばしゃばしゃしてゐるのにあんまり永く水につかって唇もすこし紫いろ」の様子で、また子どもたちに風の精霊・又三郎のイメージを浮かび上がらせる。その後、上の野原のあたりに雷が鳴り、夕立が

来る。このうちに、三郎は「何だかはじめて怖くなったと見えてさいかちの木の下からどぼんと水へはいってみんなの方へ泳ぎだ」すということになる。

ここで、高田三郎はどうして「怖く」感じるのだろうか。また、この後、彼にすぐ聞こえてくる「雨はざっこざっこ雨三郎　風はどっこどっこ又三郎」という声は、どのような声だろうか。この「誰ともなく」叫んでいる声は、高田三郎にとって、彼を帰らせる叫びであろう。子どもたちは何も知らずに、その不思議な声に答えるが、そろそろ北海道に帰らなければならないことを予感する高田三郎には、その声が気味の悪いものに聞こえたと思われる。「いま叫んだのはおまへらだちかい」と、高田三郎が子どもたちに聞くのは、自分を探しにくる人であるかどうかを確認するためであろう。三郎の反応からは、こちらの生活にも慣れ、仲良くなった子どもたちと離れたくないような気持ちが看取できる。言い換えると、高田三郎はこの共同体の一員としての意識を持っているのである。

後期形に登場する高田三郎／又三郎は、子どもたちに他者を認識する機会を提供している。高田三郎が谷川小学校に生活している十日間ぐらいの間に、子どもたちの彼に対する認識は固定せずに、風の精霊・又三郎と普通の子の間に揺動している。大庭みな子が述べたように、風の又三郎は「認識しなければならない風に似た他者の姿」(15)である。他者に対する認識は、決して定まって変わらないものではなく、まさにこの揺動の状態から生成するのではないだろうか。

5・3．高田三郎の消失は異人殺しなのか

物語の結末では、高田三郎は子どもたちにさよならを言う時間もないぐらいに急いで谷川の小学校から離れる。高田三郎の到来と別離はあまりにもあわただしいので、彼がもう小学校から離れたことが先生によって告知された後、高田三郎のことが最も気になる嘉助は、まだそのことを受け入れられず、「さうだないな。やっぱりあいづは風の又三郎だったな」と叫ぶ。しかし、先生はすでに立ち去っており、残っているのは、高田三郎の行方を疑う嘉助と一郎の二人である。このような結末において、一つの疑問が残されている。それは、一郎と嘉助が疑ったように、高田三郎はいったいどこにいくのだろうか、という問いである。

民俗学の立場(16)から、この結末について解釈する論者がいる。天沢退二郎はテクストに現われていない九月九日から十一日までの三日間に注目し、この三日間の間に、村の大人たちが高田三郎に対して異人殺しに相当する行為――殺害、埋葬、証拠湮滅――を行ったかもしれないと述べている(17)。

しかし、この後期形に対する分析について、違和感を覚えるところがある。まず、明確にすべきなのは、この村に突然到来した者が高田三郎という転校生であるということである。一人のびくびくする転校生が、村の大人たちに殺意を呼び起こすような恐怖感を持たせる存在であるとは考えにくい。天沢の論において、村の人々に恐怖感をもたらす異人は――それが本当に存在するとしたら――風の精

霊・又三郎のことであろう。しかし、前に述べたように、後期形における風の精霊・又三郎は、子どもたちの幻想だけに存在し、高田三郎の到来によって喚起される存在である。しかも、大人たちは又三郎の存在を理解できない。従って、又三郎の存在を知らない大人たちが、彼を異人として殺すのは、不可能なことだと思われる。

ただし、これは大人の登場がテクストの中に機能していないということではない。初期形と後期形のもう一つの顕著な区別として、後期形における大人たちの機能が挙げられる。先生が果たす伝達の機能はいうまでもないが、このような伝達によって、転校生高田三郎と風の精霊・又三郎の間の境界線が引かれるのである。また、嘉助が果たしている高田三郎と風の精霊・又三郎を同一化させる役割に対して、大人たちはその逆方向の力学的作用を持ち、両者を分離させていく。

「先生お早うございます。」嘉助も云ひましたが、〔すぐ〕
「先生、又三郎今日来るのすか。」ときゝました。先生はちょっと考へて
「又三郎って高田さんですか。えゝ、高田さんは昨日お父さんといっしょにもう外へ行きました。日曜なのでみなさんにご挨拶するひまがなかったのです。」「先生飛んで行ったのすか。」嘉助がききました。「いゝえ、お父さんが会社から電報で呼ばれたのです。お父さんはもいちどちょっとこっとへ戻られるさうですが高田さんはやっぱり向ふの学校に入るのださうです。向ふにはお母さんも居られるのですから。」
「何して会社で呼ばったべす。」一郎がきゝました。
「こゝのモリブデンの鉱脈は当〔分〕手をつけないことになった為なさうです。」

高田三郎がここから離れる理由は、お父さんが仕事のために転任することにある。また、「向ふにはお母さんも居られる」ことが理由の一つとしてわざと挙げられることからも、後期形に登場する大人たちが、高田三郎の行動に強い影響を与えていることは疑いようがない。つまり、後期形には、力学的影響関係を持っている大人の世界と子どもの世界という二つの世界が存在する。子どもの世界においては〈異人―人間〉の物語が上演される。しかし、大人の視線から見れば、この世界には異人が存在しないはずである。

6．おわりに

本章は「風野又三郎」から「風〔の〕又三郎」までの改稿について考察したものである。初期形から後期形までのテクスト変遷は、異人の物語から、風の精霊・又三郎と転校生高田三郎が共同して作り上げる物語への転換を実現させる。両作品のどちらも、異文化コミュニケーションを描く作品として読むことができる。初期形においては、風野又三郎が絶対的な優位性を持ち、子どもたちに外の世界のことを教えるという設定である。それに対して、後期形では、主人公の〈北海道―村―北海道〉という移動が描かれる一方、子どもたち

の世界の内部における物語の展開が描かれている。

多くの先行研究では、主に幻想の次元に注目し、異人性も持っている風の精霊・又三郎に重点を置き、分析を行っている。それに対して、本章では、先行研究に無視された子どもたちの意識の世界、また、賢治テクストが持っているハイパーテクストの時間性に注意を払い、初期形と後期形の間の継承性をまず読み取った。風の精霊・又三郎は、子どもたちの共同体だけに流通する伝説中の人物として現われ、子どもたちの現実世界に到来する風野又三郎／高田三郎とともに、異なる物語内容を呈することが明らかにした。

初期形における幻想上の風の精霊・又三郎と外からやって来た風野又三郎は、異人性と超能力を持つという類似性によって、子どもたちの中で同一化する。しかし、後期形において、幻想の風の精霊・又三郎と現実の転校生高田三郎との関係は不安定な状況に置かれる。後期形では、子どもの世界と大人の世界が分かれ、嘉助が現実の高田三郎と幻想の風の精霊・又三郎を同一化させる機能を果たすのに対して、テクストに登場する大人たちは、現実と幻想に存在する両者を引き離す力を持っている。このように見れば、後期形「風〔の〕又三郎」は、大人と子どもとの境界、また「現実」の転校生と幻想の風の精霊との境界を同時に描き出す物語として見なすことができる。

以上のように、本章では、初期形と後期形の継承性を把握しながら、両者の異なる物語内容について考察してきた。賢治テクストにおける、子どもたちの世界だけに存在する風の精霊・又三郎の誕生、また高田三郎「異人殺し」説への批判は、ある意味で、賢治テクストの読解を民俗学の視点から解放する試みとなっただろう。

注

（1）中村三春は、「ハイパーテクスト《稿本風の又三郎》」（『係争中の主体　漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月、二七〇頁）において、宮沢賢治のテクストは「〈推敲途上性〉」が刻印された、本質としての未完成性を帯びたテクスト」であると指摘した。

（2）「風野又三郎」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』筑摩書房、一九九五年六月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（3）「風〔の〕又三郎」『【新】校本宮沢賢治全集　第十一巻　童話〔Ⅳ〕　本文篇』筑摩書房、一九九六年一月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（4）高志路五ノ六「カゼノサブロウ」、民俗学研究所編『綜合日本民俗語彙　第一巻』平凡社、一九五五年六月、三五五頁

（5）大塚民俗学会『日本民俗事典』弘文堂、一九七二年二月、一四一頁

（6）稲田浩二『日本昔話通観　第二十八巻　昔話タイプ・インデックス』同朋舎、一九八八年九月、二五二頁

（7）吉田文憲「『又』の呪力、『又』の誘惑――『風の又三郎』について（Ⅱ）」『現代詩手帳』思潮社、第四十二巻第七号、一九九九年七月、一五四頁

（8）土佐亨「『風の又三郎』私見――モリブデンの意味――」『香椎潟』第二十六号、一九八一年三月、一四九－一五八頁

（9）米村みゆき「『風野又三郎』の〝啓蒙〟――飛行と帝国主義」『国語と国文学』第七十五巻第二号、一九九八年十月、二十八－四十二頁

（10）天沢退二郎「九月二日の謎」『謎解き・風の又三郎』丸善ライブラリー、一九九一年十二月、五十八頁

（11）天沢退二郎、「結論―高田三郎は風の又三郎なのか」同前掲、二〇三頁

（12）詳しくは、阿部正路「民俗文学としての『風の又三郎』」（『宮沢賢治』第五号、洋々社、一九八五年四月、七十四－八十三頁）、多田幸正「『風野又三郎』と『風の又三郎』―又三郎から高田三郎へ」（『賢治童話の方法』勉誠社、一九九六年九月）を参照。

（13）押野武志「『風の又三郎』の構造」『宮沢賢治の美学』翰林書房、二〇〇〇年五月、一八六－一八七頁

（14）「九月二日」という章の前半において、他の部分では「一郎」となっている人物の名は、「孝一」となっている。『【新】校本宮沢賢治全集　第十三巻（下）　ノート・メモ　本文編』（筑摩書房、一九九七年十一月、二九二－二九六頁）に収録された「風の〔又〕三郎」創作メモにおいて、「孝一」という名前があり、さらなる改稿において、「一郎」を「孝一」に変更する予定であったことがわかる。

（15）大庭みな子「『風の又三郎』、風に似た他者の認識」『国文学解釈と教材の研究』第二十三巻第二号、一九七八年二月、一五〇頁

（16）小松和彦『異人論　民俗社会の心性』（筑摩書房、一九九五年六月）を参照。同書において、小松は日本の伝説や昔話に現われる異人殺し行為について分析し、そこから異人に対する恐怖心と、それを排除する思想を読み取っている。

（17）天沢退二郎「九月九日－十一日の謎」同前掲、一八一頁

第Ⅱ部　食物・生死・農業

第Ⅰ部では、エスペラントチストとしての宮沢賢治像を探りながら、賢治が抱いていた共生思想について考察してきた。宮沢賢治は自分の文学創作において、越境行為の葛藤、異文化コミュニケーションの難しさなどを度々描いている。当時の植民地主義をめぐる言説を参照しながら、賢治文学における共生願望の実現の困難さが表現されている。その一方、共生思想から、弱肉強食を代表とする食物連鎖の正当性に対する疑問も浮上するのである。

他種の命に対して、どのような姿勢をとるべきなのかは、賢治の中で常に考えられていた課題であろう。それについての思索は、賢治文学において、しばしば食を巡る問題として取り上げられる。以下、第Ⅱ部では、食の問題を巡って、賢治の共生思想について検討し、その生命観、戦争観、それから農業思想と芸術観について考察を行う。これによって、賢治文学の底流に存在するものを見出そうとする。その切り口として、賢治が持っているもう一つの顔・ビヂテリアンとしての賢治像をまず提示したい。賢治がエスペランチストでありながら、ビヂテリアンでもあることは、共生思想によって繋がっていると考えられる。

第Ⅱ部では、まずビヂテリアンとしての宮沢賢治像を描き出し、続いて、賢治の食問題に対する思考に深く関わる「ビヂテリアン大祭」、「フランドン農学校の豚」などの作品について考察する。ここでは、賢治文学と彼の徴兵検査経験との関連をも考慮し、そこから賢治の戦争観を描き出すことを試みる。

次に、賢治の一連の実体験に関連し、彼が農業に対する関心を持つようになる経緯を辿りながら、その農業思想と実践について、考察を行う。具体的には、賢治の農業思想が最も反映される「農民芸術概論綱要」およびその実践活動である羅須地人協会の活動をも考察の対象として取り上げる。この部分では、賢治と白樺派の代表人物・有島武郎、武者小路実篤と対照しながら、考察することで、賢治の農業思想および実践の特徴を見極めたい。

それから、第Ⅱ部の最後に、賢治の農業に対する思考の転向が現れる「ポラーノの広場」およびその関連作品を中心に、考察を行う。そこで、賢治とのゆかりがある場所・北海道との関連性に注目し、賢治の北海道訪問の経験に基づき、そこに出会った人々からの影響、また賢治文学における産業組合と北海道との関連性について考察することにしたい。

第５章　ビヂテリアン・宮沢賢治の菜食思想

１．はじめに――ビヂテリアンとしての宮沢賢治

宮沢賢治は菜食主義者としての側面を持っていた。一九一八年五月十九日、宮沢賢治は親友・保阪嘉内への手紙の中に、「私は春から生物のからだを食ふのをやめました」(1)と伝え、はじめてビヂテリアンになることを宣言した。しかし、賢治は最初からビヂテリアンだったというわけではない。佐藤隆房によれば、賢治は菜食主義者の書いたものを読んだこともあり、そのことを考えてみたこともあったが、どちらかといえば好みは肉食で、よく肉を食べたという(2)。では、賢治がビヂテリアンになったのは、如何なる経緯があったのだろうか。

そこで、本章では、賢治の実体験を踏まえ、彼がビヂテリアンになった理由について考察する。それから、先行研究の観点を整理しながら、賢治のビヂテリアン思想の背景に存在する要素を見出し、賢治童話が成り立つ条件そのものの中に、どのような問題が組み込まれているかについて、検討する。これによって、賢治文学の再検討に有効な視点を提示することを試みる。

２．ビヂテリアニズムと賢治の仏教信仰・実経験

賢治がビヂテリアンになったのは、まず彼が宗教心に厚い家庭に生まれ育った事実と深く関わっている。幼時から仏教に親しみ、十八歳の時に『漢和対照妙法蓮華経』を読んで感銘を受け、それに対する信仰が篤実になった。仏教経典に提唱されている「輪廻転生」、「山川草木悉有仏性」などの教義は、賢治のビヂテリアニズムの底流となっている。「ビヂテリアン大祭」において、以下のような一節がある。

> 総ての生物はみな無量の劫の昔から流転に流転を重ねて来た。流〔転〕の階段は大きく分けて九つある。われらはまのあたりその二つを見る。一つのたましひはある時は人を感ずる。ある時は畜生、則ち我等が呼ぶ所の動物中に生れる。ある時は天上にも生れる。その間にいろいろの他のたましひと近づいたり離れたりする。則ち友人や恋人や兄弟や親子やである。それらが互にはなれ又生を隔ててはもうお互に見知らない。無限の間には無限の組合せが可能である。だから我々のまはりの生物はみな永い間の親子兄弟である。異教の諸氏はこの考をあまり真剣で恐ろしい思ふだらう。恐ろしいまでこの世界は真剣な世界なのだ(3)。

このような内容から、賢治に影響を与えた仏教思想の存在が明白に現れている。先の保阪嘉内宛の手紙の中で、賢治はビヂテリアンになると宣言した後、自分の心境について、以下のように述べている。

私は春から生物のからだを食ふのをやめました。けれども先日「社会」と「連絡」を「とる」おまじなゐにまぐろのさしみを数切たべました。又茶椀むしをさじでかきまわしました。食はれるさかながもし私のうしろに居て見てゐたら何と思ふでせうか。「この人は私の唯一の命をすてたそのからだをまづさうに食ってゐる。」「怒りながら食ってゐる。」「やけくそで食ってゐる。」「私のことを考へてしづかにそのあぶらを舌に味ひながらさかなよおまへもいつかわたしのつれになつて一諸に行かうと祈ってゐる。」「何だ、おらのからだを食つている。」まあさかなによつて色々に考へるでせう。[…]

おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切つて輝くそらに飛びたつその道の開かれたこと、そのみちを開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にしても何でもない。この人はむかしは私共とおなじ力のないかなしい生物であつた。かなしい生物を自ら感じてゐた。あゝこの人はとうとうはてなき空間のたゞけしの種子ほどのすきまをものこさずにその身をもって供養した。大聖大慈大悲心、思へば泪もとゞまらず　大慈大悲大恩徳いつの劫にか報ずべき。

ねがはくはこの功徳をあまねく一切に及ぼして十界百界もろともに仝じく仏道成就せん。一人成仏すれば三千大千世界山川草木虫魚禽獣みなともに成仏だ(4)。

このような心境を語ったことによって、賢治のビヂテリアニズムの仏教的理論根拠を理解することができるだろう。しかしながら、賢治のビヂテリアン問題は、仏教信仰だけに還元することができない。現実生活の中の実体験は、賢治がビヂテリアンになったことを直接に誘発していたと考えられる。

「賢治の菜食の原動機は、本や思考の結果にもたらされたのではなく、殺される動物に痛みを直感するという本能的なものであったのだ」(5)と、鶴田静は『宮沢賢治の菜食思想』において述べている。鶴田は、賢治が盛岡中学校に在籍していた時期の出来事を調べ、「自らの手で動物を殺したのではないが、その起点としての兎狩りの体験と、通過点としての屠畜の見学、そして到達点としての肉食、しかも家畜の肉のなかでもあまり一般的でない馬の肉を食べるという体験から、賢治の菜食の最初の動機づけを、食肉となる動物への、純粋な憐れみとするのは正しい」(6)と指摘している。盛岡高等農林学校時代の賢治は、「岩なべて／にぶきさまにて／ながむを含む／屠殺場の崖」(7)という歌を詠んだことがある。賢治は下宿する盛岡市にある下米内屠牛場の周りに散歩した時、夕もやの色に染めた屠殺場の崖のような壁を見、その中に人間の食物となるために、奪われた無数の命を思い浮かべただろう。一九一八年二月、賢治は実際屠殺場の中に入っていた。当時まだ機械化されていなかった食用肉の処理法を目撃することは、賢治にとって、忘れがたい出来事であろう。それから、詩の下書稿の中に、「おもむろに屠者は呪したり雪の風／鮫の黒肉わびしく凍るひなかすぎ」(8)という俳句がある。寒い冬の中に、呪する屠者の冷酷さと凍る魚の身体の冷たさとが呼応しながら、

鮫を不憫に思う雰囲気を作り上げている。

以上に述べたように、賢治がビヂテリアンになった背景に、彼の仏教信仰および一連の実体験によって生じる動物に対する憐憫と同情が存在する。ただし、従来の研究では、賢治のビヂテリアン問題を考える際に、賢治が書いた書簡から、ビヂテリアン思想を反映する内容のみを抜き出して考察し、その前後の内容との関連を無視するという傾向があった。これに対して、書簡の内容を全体的な文脈から考察し、賢治の菜食思想と徴兵検査体験との関係性を示唆したのは、中村晋吾の論考(9)である。

3．賢治のビヂテリアニズムと徴兵検査体験

前に引用した保阪嘉内への手紙の中に、賢治は自分の菜食志向を告白していた。この一節が、賢治自身が徴兵検査について述べる箇所と連続していることは軽視してはいけないと、中村晋吾が指摘している。

一九一八年四月二十六日、賢治は徴兵検査に参加した。その結果は、「第二乙種」である。検査の中で、賢治は軍医の聴診器に当てられ、「君は心臓が弱いね」と言われた。そして、「さあどうですか」と、賢治が医者に声をかけるうちに、軍医はほかの方向に向いてしまったのである。これは、賢治自分自身が、一つの尊敬されるべき命としてではなく、単なる物理的な身体として扱われる、はじめての経験である。この命をモノ化する経験について、保阪への手紙の中に、賢治は、「心臓が弱いかどうか私もしりません。けれども人並に山が歩けるのを見るとそんな弱いのでもない様です。私はしかしこの間、からだが無暗に軽く又ひつそりした様に思ひます」(10)と、あまり愉快ではない口調で語っていた。このような内容と、「生物のからだを食ふのをやめた」というビヂテリアンとなった宣言との連続は、「自分のからだ」から「動物のからだ」への接続が、賢治の中で行われたことを示したと理解することができる。徴兵検査で得た自分のからだが「無暗に軽く又ひつそりとした」感覚は、人間に命を奪われた動物たちが持っている気持ちのように、実感できたと考えられる。

それゆえに、同じ書簡において、賢治はまた屠殺場の体験について言及していた。「屠殺場の紅く染まつた床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつきました。転倒した豚の瞳にこの血がパっとあかくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだものの生を得ました。これらを食べる人とても何とて幸福でありませうか」(11)と。豚が殺される悲惨さが描かれ、食べる側と食べられる側のどちらも幸せになれない状況の悲しさとそれに対する無力感が現れている。

徴兵検査が賢治の考え方にもたらした影響は、その前に書かれた書簡内容との比較によって理解することもできる。一九一八年二月二十三日、父政次郎宛の書簡の中に、同じ動物が屠殺される出来事、また戦死に対して、徴兵検査後とは真逆の態度が示されている。

> 戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象

に御座候　その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺されるゝ者も皆等しく法性に御座候　起是法性起滅是法性滅といふ様の事たとへ（先日も屠殺場に参りて見申し候）、牛が頭を割られ咽喉を切られて苦しみ候へどもこの牛は元来少しも悩みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議なる様の事感じ申し候それが別段に何の役にたつかは存じ申さず候へども只然くのみ思はれ候）若し今年十一月以後も自由なる様に候はゞ愉快に又働き得る事と存じ候へどもまた仮令兵営に入り候とも私としては少しも難義は無之、色々兵営内の模様等も御調べ下され候はゞ自づと明なる事と存じ候　様々変てこなる小説等を御覧下され私などもその様になるか等御心配下され間敷候。生活としては単純に有之、殊に人と人との関係等は只服従せしむる器械のみにて万事解決つく事に有之私の身体とて多くの同級生（兵役を終へたる人もあり）と異なる所なく衣服とて食物とて決して御心配下さる様の事無き様に御座候　殊に一年志願兵は半年は学課のみに有之候（12）

徴兵検査を経験する前に、賢治は戦争中の殺す、殺される行為を、感情的見方で見なすのではなく、非常に理性的に、法性として認識していた。実際、徴兵検査の結果は「不合格」であったため、賢治は徴兵される可能性がないということになった。しかしながら、徴兵検査の経験によって、その前に欠けていた、いのち・からだのモノ化、また、命が奪われるという戦争のリアル感に対する認識が、賢治の中に明らかに生じてくるのである。賢治がビヂテリアンになったのは、ちょうど徴兵検査を経験した時期である。このような合致は偶然ではなく、賢治の実体験との関連性は否めないと考えられる。

勿論、賢治が徴兵検査を受けることは、当時の時代背景にも緊密な繋がりを持っている。賢治が生きたのは、日露戦争後という比較的に安定していた時期であったが、日本の動き全体が、「世界戦争」（13）という構造に規定されていると、西谷修が指摘している。さらに、賢治がこのような時代状況にどのように対応するかについて、西は以下のように述べている。

賢治は戦争にどう対処したかと言うと、戦争を思想的に考えてそれに基づいて善悪の判断を下そうとしたり、それに政治のレベルで実際的に関わったりといったことは全然せずに、市井の人間としてまず徴兵検査に向き合うわけですね。［…］そこで賢治は徴兵検査を受けるという単にそれだけのことを通し、戦争とは人を殺しに行くことだと了解したうえで、殺すことそのものと向き合うわけです。殺すとは、あるいは自分が殺されることになるかもしれないけれど、殺すとはどういうことか、と。それにどうやら賢治がベジタリアンになるのもその頃のことで、「生存する」ということをかなりつっこんで考えている節があります（14）。

盛岡高等農林学校の卒業を迎えた賢治にとって、質屋の家業を継

ぐという宿命を待つ一方、徴兵される可能性もあった。徴兵検査を受ける背後に、如何なる経緯と葛藤があるのかについて、また言及することにしよう。ここで、まずその結果からみれば、徴兵検査の体験は、賢治が命や生存などについて思索することの重大な契機となった。そこで、賢治はこれらの問題を食の問題に繋げ、文学作品において表現しようとしている。

徴兵検査の経験によって、賢治は少なくとも、精神上で戦争に向き合う機会を得た。殺すことに対する認識が鮮明になる一方、殺される可能性の存在をもある程度で認識し覚悟していたはずである。

4. おわりに

先に言及した中村晋吾の論において、「賢治童話が成り立つ条件そのものの中に戦争や徴兵の問題が組み込まれている」(15)という指摘がある。これは、賢治童話の再検討に新たな視点を提示している。ただし、賢治文学における死と食の問題について、中村は具体的に論じていない。そこで、次章では、「ビヂテリアン大祭」と「フランドン農学校」という二つの作品を中心に、賢治における死と食の問題について考察を行う。それと同時に、そこに組み込まれている戦争と徴兵の問題に対し、賢治がどのように考えているかについても、検討していく。

注

（1）〔書簡六十三〕保阪嘉内宛（一九一八年五月十九日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』筑摩書房、一九九五年十二月、六十九頁

（2）佐藤房隆『宮沢賢治――素顔のわが友（最新版）』富山房、二〇一二年三月、七十二頁

（3）「ビヂテリアン大祭」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』筑摩書房、一九九五年六月。以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（4）〔書簡六十三〕同前掲、六十九－七十頁

（5）鶴田静「賢治のビヂテリアン宣言」『宮沢賢治の菜食思想』晶文社、二〇一三年六月、四十頁

（6）同前、四十五頁

（7）〔歌稿三十三－b〕（一九一六年）『【新】校本宮沢賢治全集　第一巻　短歌・短唱　本文篇』筑摩書房、一九九六年三月、一八〇頁

（8）『【新】校本宮沢賢治全集　第六巻　詩Ⅴ　本文篇』筑摩書房、一九九六年五月、三〇七頁

（9）中村晋吾「徴兵忌避者としての宮沢賢治――徴兵検査とその周辺――」『国文学研究』第一六〇号、二〇一〇年三月、六十二－七十三頁

（10）〔書簡六十三〕同前掲、六十八－六十九頁

（11）〔書簡六十三〕同前掲、六十九頁

（12）〔書簡四十六〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月十三日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』同前掲、五十－五十一頁

（13）天沢退二郎、西谷修「賢治、あるいは夜と戦争」（『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月）を参照。「世界戦争」について、それは「原理的に誰もが戦争を逃れられない、誰もが多かれ少なかれ死に向き合う状況で、その中でそれまでとは違った生存の構造や生存感覚が浮かび上がる」（十一頁）と、西谷が述べている。

（14）同前、十二頁

（15）中村晋吾、同前掲、七十一頁

第６章　宮沢賢治における死と食

――「ビヂテリアン大祭」、「フランドン農学校の豚」を中心に――

１．はじめに

賢治文学において、食物連鎖はよく現れるモチーフの一つである。その具体的な表現として、弱肉強食という関係を問う作品の系列が形成されている。第Ⅰ部で取り上げた「注文の多い料理店」、「氷河鼠の毛皮」、「なめとこ山の熊」などの作品はこの系列に入れることができる。この一連の作品の中に、特に特権を自覚する人間の介入によって、自然の食物連鎖が破壊される危険性が繰り返して描かれ、問題の焦点となっている。

それに対して、賢治文学においては、食物連鎖から逃走しようと考えている動物たちが、しばしばその失敗に遭うような、悲しみに満ちた物語もよくある。例えば、「蜘蛛となめくじと狸」において、過剰な食物を得るため、主人公たちは自然の摂理から逸脱する行動を取るが、それがそのまま自分に返り、死という罰を受ける物語が語られる。また、「よだかの星」の中に、「僕はもう虫を食べないで飢えて死のう」(1)と、生態的に食物連鎖を拒否しようとするよだかは、結局「僕は遠くの遠くの空の向こうにいってしまおう」と決意し、空高く星を目指して飛びつづけ、ついに星になっている。これらの作品を通じて、食物連鎖に縛られている悲しみを読み取ることができる。この意味からみれば、共生理想を抱いている賢治は、その実現の困難性を食の問題としても表現しているのである。

本章では、「フランドン農学校の豚」および「ビヂテリアン大祭」という作品を中心に取り上げ、賢治文学における食問題および賢治の戦争観について考察する。食問題と戦争とは、一見関係がないように見えるが、宮沢賢治の場合、両者は「死」というキーワードによって結び付けられている。まず「フランドン農学校の豚」に注目し、作品における〈殺す―殺される〉という関係は如何なるものなのかについて考察する。次に、賢治が最初に死に向き合う契機となる徴兵検査体験について検証し、その経験で得た戦争に対する考え方および賢治の内面における矛盾と葛藤を明らかにする。その上で、「ビヂテリアン大祭」について考察し、そこに表現された賢治の思想の葛藤面に触れながら、物語のどんでん返しの結末の持つ意味について追究していきたい。それから、このような考察によって、賢治の死生観と戦争観との関連をさらに明らかにすることを目指す。

２．「フランドン農学校の豚」――食と死の接触

賢治テクストにおける死の問題は、よく食の問題と結び付けなが

ら描かれている。「フランドン農学校の豚」という作品はその一例である。「フランドン農学校の豚」は賢治生前未発表の作品であり、初期形が存在している。初期形の創作期間は、一九二二年の後半から一九二三年の前半までと推定され、最終形は一九三〇年頃と考えられている。全体から見れば、初期形と最終形の内容は大きく変更されていない。重要な加筆がされた箇所として、強制肥育後の豚と生徒との会話、また豚が殺された後の風景描写が挙げられる。物語の内容を一言でまとめると、これは一匹の豚が殺される前に、心と体が経験した二重の苦痛を描く物語である。フランドン農学校で肥育される一匹の豚が、愉快な生活を送っているうちに、国の王様から「家畜撲殺同意調印法」が布告される。農学校の校長は死期の近づくことを知らない豚に、死亡承諾書への調印を迫ったが、豚は最初は怯えながらそれを拒否した。屠殺されると気づいた豚は、神経性栄養不良に罹り、肥えた体は痩せてしまう。農学校教師と助手が肥育器を用い、豚を強制的に太らせる。その後、校長が再度訪れ、無理矢理に豚に調印させる。そして、豚は殺される運命を避けられず、きれいな月夜に命を失う。

豚の死体は、分解利用できる部品の集合体とみなされている。豚の毛は「ラクダ印の歯磨楊子」や、豚の体を洗う「ブラッシ」に利用され、「厚さ一寸の脂肪の外套」や肉はもちろん、食料となるだろう。豚は単に死ぬのではなく、その死体は処理され、商品として再利用されるのである。[…]豚の死は、人格的な死ではなく、非人称的な死なのである(2)。

死を描く多数の作品の中の一つであるが、他の作品と決定的に異なるのは、豚は八つに切り裂かれたという点だと、押野武志が指摘している。

「フランドン農学校の豚」における死のモノ化が達成されるには、「家畜撲殺同意調印法」の存在が重要である。この法律の内容は、「誰でも、家畜を殺さうといふものは、その家畜から死亡承諾書を受け取ること、又その承諾証書には家畜の調印を要する」(3)ということである。このような法律の頒布は、形式上は家畜に死亡を拒否する権利を与えている。つまり、家畜が死にたいと思わない限り、殺されることがないはずである。しかし、実際のところ、その頒布によって実現されるのは、家畜を屠殺するという行為の一般化および正当化である。

そこで、その結果として、「牛でも馬でも、もうみんな、殺される前の日には、主人から無理に強ひられて、証文にペタリと印を押したもんだ。ごくとしよりの馬などは、わざわざ蹄鉄をはづされて、ぼろぼろなみだをこぼしながら、その大きな判をぱたっと証書に押したのだ」。このように見れば、実質的には強者の思惑によって都合よく作られた法律でしかない。法律というのは、統治者と被統治者の間に存在する一種の契約として、お互いの権力と義務を規定するものである。しかし、「フランドン農学校の豚」における「家畜撲殺同意調印法」は、家畜に全く理解されていないところに、テクスト設定

の奇妙さを読み取ることができる。農学校の豚が自分の感想を語る時、それに対するコメントとして、「日本語だらうか伊太利亜語だらうか独乙語だらうか英語だらうか。さあどう表現したらいゝか。さりながら、結局は、叫び声以外わからない。カント博士と同様に全く不可知なのである」。擬人法の使用によって、豚が人間の言語能力を持つように見えても、実際人間と豚との間に理解の不可能性が存在するのである。このような状況において、人間が作り上げた法律は、人間だけにとって意味があり、家畜にとって〈詐欺ゲーム〉のルールに等しいものとなろう。

最もかわいそうなのは、意味が分からなくても、その法律に従わなければならない家畜たちである。被害者であるはずの家畜は、人間が作った〈詐欺ゲーム〉の中に命を失うのである。フランドン農学校の校長が、豚に調印を求める時、「実は相談だがね」という建前を言いながら、実際、承諾書の強制性を示している。神経性栄養不良に陥る豚は、また強制的に肥育され、殺される前に、「腐りがたく」することも考慮されるゆえ、屠殺された豚は、間違いなく食品になることがわかる。この「あんまり哀れ過ぎる」物語の結末に、「つめたい白い雪の中　戦場の墓地のやうに積み上げられた雪の底に豚はきれいに洗はれて八きれになって埋まった」光景が描かれる。「戦場の墓地のやうに」という比喩は、その屠殺された豚の悲惨さを表現している一方、賢治テクストにおける一つの重要なメッセージをも示唆している。

戦場において、〈殺す―殺される〉というのは、強者と弱者との勝負によって形成する力関係である。これと同じように、「フランドン農学校の豚」における豚の死も、弱肉強食の原理に従って生まれた結果に違いない。このように、〈殺す―殺される〉と〈食べる―食べられる〉という二組の関係図は、賢治テクストにおいて、弱肉強食の力原理によって関連づけられると言えよう。こうして、食の問題は、死との関連性によって、命の尊厳にも関わるようになり、ついに深刻でまじめに考えなければならない問題となる。

3．徴兵検査体験をめぐる矛盾と葛藤

食の問題と死の問題と結び付ける理由は、賢治の実生活の中に存在すると考えられる。前章に述べたように、一九一八年四月、賢治が受けた徴兵検査は、彼に死に対するリアルな認識をもたらしていた。これからの一節では、当時の時代状況と繋げ、賢治はどのような社会状況で徴兵検査を受けたか、また戦争に対してどのような考えを持っているかについて考察する。

賢治が生きていた「世界戦争」時代においては、日清・日露戦争、第一次世界大戦が相次いで起こった。徴兵制を始めとする国民の戦争動員に関する制度は、改変が加えられる時期となる。加藤陽子の指摘によれば、はじめての総力戦であった第一次世界大戦の経験が反映されたのは一九一八年と一九二七年の徴兵令改正である(4)。賢治が徴兵検査を受けたのは、ちょうどこのような徴兵政策の重要な変動期である。一九一八年三月三十日、「徴兵令中改正」（法律第四十二号）が頒布されている。具体的な改正ポイントは、以下のようなも

のである。

ⅰ中学校またはこれと同等以上の在学生の猶予制（それまでは満二十八歳まで猶予）を全廃した。従来までは、徴兵検査自体を猶予していたが、とにかく適齢に達したものは全員検査を受け、合格者に対しては、卒業まではその学校のレベルに応じた年限だけ入営を延期する措置である徴集猶予に変えた。一年志願兵として合格した者は入営まで、在郷軍人の扱いを受けることになるため、演習召集や種々の手続きを軍との間にとり結ぶことになった。

ⅱ師範学校卒業者に対する六週間現役兵制をやめ、その訓練期間を延長し一年現役兵制とした（この条項のみ施行は大正十三年から）。

ⅲさらに、従来、満十七歳以上二十八以下で中等学校卒業程度の学力を有する者には、経費自弁で一年志願兵制の途を開いていたが、この改正では年齢を満十七歳以上二十二歳未満に下げ、恩恵に浴する特権層を意識的に制限した。

ⅳ外国に在る者の滞留中の猶予は、二十歳前から外国に在る者に限ることとし、合法的に忌避するための外国ゆきに歯止めをかけた。これまでは「韓国、露国領沿海州、露国領薩哈嗹、清国、香港、澳門以外ノ外国ニ在ル者」とした。韓国が落ちている点は韓国併合のためであるが、一九一一年の辛亥革命で清国が倒れた後の中国を「支那」と呼称している点など興味ぶかい。

ⅴ海軍兵を従来のように沿海地方に限って徴集するのではなく、全国各地から採ることにした(5)。

このような改正は、「総力戦」、「総動員」の意図を示し始めたことを意味している。また、一九一八年のシベリア出兵により、「総力戦」、「総動員」の意識が国民の中に広がっていた。米田利昭の「宮沢賢治とシベリア出兵」(6)によれば、賢治は「烏の北斗七星」、「氷河鼠の毛皮」などの作品を通じて、シベリア出兵を強く意識していたことが看取される。賢治が書簡の中で、はじめて徴兵検査について言及したのは一九一八年二月一日に、父政次郎に送った手紙の中である。もうすぐ卒業を迎える賢治は、自分の進路について、父と相談する内容が書かれている。書簡の前半に、関豊太郎教授に稗貫郡土性調査の件で誘われたことが述べられ、後半に徴兵の問題について、以下のように述べられている。

次に徴兵の事に御座候へども右に就ては折角御思案下され候処重ねて申し兼ね候へども来春に延し候は何としても不利の様に御座候　斯る問題はその為仮令結果悪くとも本人に御任せ下され候方皆々の心持も納まり候間何卒今春の事と御許し下され度候　仮令、半年一年学校に残るとしても然く致し下され候はゞ入営も早く来々年よりは大低自由に働き得る事に御座候右御願候は左の理由に御座候［…］

一、父上の御勧めに従ひ万一却て戦死等の事有之候とき誠に

御互に不本意なるにより

一、御心配を更に来年に延す事御申し訳けなきより［…］

一、若し首尾よく除隊し得るときは直ちに来々年より自由に幾分たりとも御役に立ち得るより、

一、小生の今年検査を受けるにならひて本年の検査を恐れざる友人等あるにより申し候

以上色々御怒りを戴く様の事のみ申し上げ候へども最早今度限り御願ひ上げ候間今度は就れなりとも御処知下され何卒御返事願ひ上げ候

小生の只今の目算にては三月中は勉強四月に至りて学校の図書館に通ひ旁々岩手郡の土性調査に手伝ひ、五月検査を受け合格ならば十一月迄にて勉強を許し戴き或は花巻にて行ひ得る飴製造工業の下地位を作り置き十二月より入営、若し不合格ならば六月迄学校の土性調査に手伝ひ旁々幾分の見学をも致し七月頃よりは沃度製造或は海草灰の製造、或は木材乾溜乃至炭焼業に直手致しつゝ今後の研究を致したくと存じ候（7）

書簡の内容によれば、賢治は卒業してからすぐ徴兵検査を受ける希望を伝え、その理由および今後の計画についても明白に述べている。賢治のこのような態度に対して、多くの先行研究では、それは賢治が徴兵を忌避せず、早いうちに兵役の義務を服し、また早く自由の身に戻りたい、という意味で理解されている（8）。しかし、書簡の中で言及された「来春に延し候は何としても不利の様に御座候」という内容について、その理由を究明し、賢治の徴兵制に対する態度を考え直すのは中村晋吾である。中村は、しばらく後の二月十三日に父政次郎に送った書簡にある、「一年志願を終へたる友人教官等の話しにても極めて呑気なる為に鈍くなると申し候」（9）という内容に注意を払い、賢治は「一年志願兵制度」を強く意識していたと述べている。

ここで、一年志願兵制度とは何かについて、簡単な説明を加えよう。一年志願兵制度は一八八九年一月の徴兵令大改正に創設された制度である。満十七歳以上満二十六歳以下の官公立中学校以上の学校の卒業者に限り、服役中の費用を自弁することを条件とし、普通三年間の服役年限を、一年で終了するという制度である。一年志願兵制度には、各種の恩典が伴っている。服役年限の短縮のほか、服役する一年間の中でも、自宅あるいは営外の居住地から通勤できる特典も与えられている。また、昇給の速さ、卒業までの入営延期も特典として挙げられる（10）。この制度は、一九一八年の徴兵令改正の際に改訂されていた。「従来は満十七歳以上満二十八以下だった資格を、満十七以上満二十一歳以下とする。満二十三歳を限り入営を延期するが、存学している学校の修業年限に応じてさらに四ヵ年以内の延期を認める。これまで一律に二十八歳まで、中等学校から大学まで学校の区別なく一律に猶予していたので、学籍をおくだけで修学の実のない者が往々にしてみられたのを改善するための改正だった」（11）。このような非常に優遇措置がある制度を意識する賢治の態度について、中村は以下のように述べている。

一八九六年八月生まれである賢治はこの時点（一九一八年二月）で二十一歳であり、「来春」の時点で二十二歳、同年の八月に二十三歳になる。一九一八年春の時点で検査を翌年に延期した場合、改正法において同年の八月には賢治は志願兵の年限を越えてしまう。もっとも新しい制度が施行されるのは一九一九年の十二月であるので、この年の春に徴兵検査を受けた場合には志願兵の受験自体は可能だが、新法施行の直前であり、年限にあまりにも近いものは選抜基準において差別される、すなわち「不利」となってしまう可能性があると賢治が考えたとはいえまいか(12)。

このように、中村は〔書簡四十三〕から、賢治と父政次郎とのやり取りの中で言明されていない内容は、一年志願兵の志願をめぐるものであったと指摘していた。また、中村は、「一年志願兵は事実上、戦場、中でも前線に出ることから逃れる途方となっていた」(13)と述べ、賢治は「不本意」の戦死を避けるため、一年志願兵制度を意識していたと主張している。

賢治の一年志願兵制度に対する関心に気づいた中村の目線は、非常に鋭いものだと評価できる。しかし、一年志願兵への関心は、戦死に対する拒否態度によるものであるという主張に対しては、違和感を覚える。ここで、中村の論証過程における瑕疵について、注意を喚起したい。一九一八年の徴兵令改正が頒布されたのは三月三十日であり、二月一日すでに書簡を父に送った賢治は、一年志願兵制度の年齢制限が変更されることを事前に知るはずがない。つまり、少なくとも、父に、徴兵検査を受けることについて相談した時点で、賢治が早く徴兵検査を受けようとする理由の中に、年齢制限のことは考慮されていなかったと思われる。つまり、中村が述べたような、賢治が戦死を避けるために苦心を重ねたとするのは、とても断言しがたいことである。

では、賢治は戦死に対して、いったいどのような態度を持っているのか。以下の書簡の内容によって、その一側面を理解することができる。

> 今晩等も日露国交危胎等と折角評判有之定めし御心痛の御事と奉察候へども総ては誠に我等と衆生との幸福となる如く吾をも進ませ給へと深く祈り奉り候間何卒色々と御思案下されず如何になるとも知れぬ事に御劬労下さらぬ様斯て御身体をも傷め候はゞ誠に皆々の嘆きに御座候間万事は十界百界の依て起る根源妙法蓮華経に御任せ下され度候。誠に幾分なりとも皆人の役にも立ち候身ならば空しく病痾にも侵されず義理なき戦に弾丸に当る事も有之間敷と奉存候。
>
> 若し又前生の業今生の業に依り、来年昨来年弾丸に死すべき身に候はゞ只に今に至りて嘆くとも何の甲斐か候べき。
>
> 義ある戦ならば勿論の事にて御座候。
>
> 何卒折角の御心配には御座候へども私一人は妙法蓮華経の前

に御供養願上候。勿論私の身体の劣れる故に或は別段の戦とても無く或は戦にも死せず候はゞ決して空しくは過ぎ終る積にては無之殖産の業にせよ、科学にせよ或は願の如くに法を弘むるにせよ就れによるも何卒皆々様の幾分の御恩をも報じ奉る積りに御座候

［…］戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候　その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺されるゝ者も皆等しく法性に御座候　起是法性起滅是法性滅といふ様の事たとへ（14）

書簡のやり取りによってわかるように、父政次郎は、もし賢治が徴兵されるならば、戦場に出て、戦死の憂き目に遭うことを非常に恐れている。しかし、政次郎の態度と異なり、賢治は戦死に対する恐れを全く示していなかった。賢治にとって、戦争はただ一つの「法性」に従う現象でしかない。つまり、どのような現象も「均しき」ことであるため、戦死というのは特別に扱われる必要がないということである。

賢治の戦死に対する態度について、押野武志による言及がある。押野は賢治のシベリア出兵願望に注目し、それは「父や家業への反発とそこからの離脱願望」（15）として認識し、「賢治の目的はただ、法性として戦争のために死ぬということにあった」（16）と述べている。賢治が徴兵検査を受ける理由に、家業への反発があることについては、改めて言及することにしよう。ここで、注意すべきなのは、賢治の戦死を恐れないという態度は、自分自身に限っているということである。戦争は法性に従う現象であるという認識は、「義ある」戦争に対して、恐れずに受け入れる態度を示している。賢治にとって、このような戦争の中で戦死に遭うのは、仕方なく受けるべきことであろう。しかし、これは、賢治が戦争の中で命を惜しまないということを意味するというわけではない。賢治は無論戦争の悲惨さを知っているし、特に戦争における殺生行為に対して抵抗感を持っているようである。『アザリア』に掲載された賢治の文章の中に、「戦が始まる、ここから三里の間は生物のかげを失くして進めとの命令がでた。私は剣で沼の中や便所にかくれて手を合わせる老人や女をズブリズブリと刺し殺し高く叫び泣きながらかけ足をする」（17）という内容が書かれている。これによって、賢治の中にある、戦争の鮮烈な殺生イメージが浮かび上がる。一九一八年二月に書かれたこの文章は、法性に従う戦争の悲惨の一面を、賢治がはっきり意識していたことを示唆している。

特に、徴兵検査を受けた後の、保阪嘉内宛の手紙の内容を確認すれば、国民の体を均質のモノとして扱う徴兵検査の経験は、確かに賢治にとって不愉快なる思い出であった。その経験は、戦争の、人間を区別なしに扱う特性を、賢治に認識させていた。それゆえ、戦争のために、大切にされるべき命が軽視され、単に身体で貢献することは、賢治にとって受け入れがたいことであっただろう。しかも、自分が戦死するより、もっとつらく感じられるのは、他人を殺すことによる負い目である。

このように見れば、賢治が戦争に対して持っているのは、支持か反対かのどちらかを選択する態度ではなく、複雑な葛藤と矛盾が絡んでいる感情だと考えられる。このような気持ちで徴兵検査を受ける賢治は、この体験を通じて、文学創作に必要な想像力を得ている。次節では、このような賢治の内面が抱えている矛盾と葛藤が、どのような文学的な手法によって表現されるのかについて、「ビヂテリアン大祭」という作品を取り上げ、考察を試みる。

4.「ビヂテリアン大祭」――矛盾の表現と調和

従来の研究では、賢治の生命観、宗教観などについて考える時、よく「ビヂテリアン大祭」を取り上げ、それをビヂテリアニズムに関する知識を論述する文献として評価している(18)。この作品は生前発表されなかったが、創作期間は一九二三年頃と推測されている。「私は昨年九月四日、ニュウファウンドランド島の小さな山村、ヒルテイで行はれた、ビヂテリアン大祭に、日本の信者一同を代表して列席して参りました」(19)。「ビヂテリアン大祭」は、まず、「私」が代表するビヂテリアンの基本的な思想を概説し、次いで大祭の朝から配られた反ビヂテリアンのパンフレットの内容を紹介する。ビヂテリアンをその精神によって分けると、「あらゆる動物はみな生命を惜しむこと」から動物の肉を食べないとする「同情派」と、肉類と乳汁を多く摂取するゆえ病気に罹ることを予防するために肉食をしないとする「予防派」がいる。また、その実行の方法によって、動物質のものは全く食べてはいけない「絶対派」、動物の命そのものを奪わなくても得られる乳製品と卵などを食べる「折衷派」、それから、非常の場合に、仕方なく動物の肉を食べる、できれば植物をとる「大乗派」がいる。このようなビヂテリアンの存在に対して、「シカゴ畜産組合」と名乗るビヂテリアン反対派は、人口（食料）経済論、動物心理学、生物分類学、比較解剖学、自然過程説という五種類の論拠を示すパンフレットを配り、ビヂテリアンに対する反論を述べる。これはテクストの導入部である。

その後、大祭は本番に入り、ディベートの形で展開している。この作品に現れる議論という形式について、天沢退二郎と色川大吉はその珍しさを評価している(20)。激しい議論は作品の主体部分となるが、その内容は、「シカゴ畜産組合」のパンフレットの意見に対する反駁、「キリスト教神学」および「仏教教学」の立場から発表された肉食容認・奨励の意見およびその反論、さらに一般宗教的精神からの反論によって構成されている。かなり激しい論争が行われることによって、弁証法的な会話が展開し、ビヂテリアンとその反対派の勝負がつけにくい境地に至る。しかし、作品の結末に、神学博士を始めとするビヂテリアン反対派は次々と改宗し、論議のすべては大祭の余興であるという設定が呈されている。このような読者を茫然とさせる結末に対して、島村輝は以下のように、違和感を示している。

> それまでの議論への関わりが真剣であればあるほど、それは単なる「余興」としてすますことのできない、いわば参加者への「裏切り」行為である。そのことが「私」には〈ぼんやり〉する

ほどの強い違和感として感じ取られたに違いない。[…]それはビヂテリアンの実践そのものに対する疑問、無力感、挫折感を背後に秘めているという意味で、ビヂテリアンとしての「私」にとって致命的な不信であると言えるだろう(21)。

島村の指摘を踏まえ、論争そのものおよびそこに含まれる言語問題に注意を払い、賢治テクストの共約不可能性を抽出したのは中村三春である。中村の指摘によれば、賢治テクストにおける共約不可能性にこそ、テクストの新しい読解の可能性が含まれている。「ビヂテリアン大祭」という作品は、共約不可能性を表現する典型的なテクストとして、言い換えれば、矛盾調和のできないことを表現している(22)。これは賢治が世界の在り方をリアルに描いているとも言えるだろう。賢治の中に存在する矛盾が解消できないように、論争は終わることができない状態に陥る。しかし、「ビヂテリアン大祭」の結末では、終わらない論争に、調和的な結末が加えられている。このような結末は、読者にとってはすっきりしない、納得できない気持ちをもたらす一方、そのどんでん返しの設定によって、テクストの奇妙さが現れている。では、この結末の奇妙さを味わう前に、まず「ビヂテリアン大祭」のテクストでは、どのように賢治が生きた世界のリアリティを表現しているかを考察しよう。

賢治はビヂテリアンとして、菜食思想の実践に疑問を持っていなかったわけではない。これは彼によって書かれた書簡の内容によって伺うことができる。一九二一年八月十一日付の関徳弥宛の手紙の中に、菜食思想を実現する困難さを表現する内容も書かれている。

七月の始め頃から二十五日頃へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になってしまって燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思って断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれをきっかけにして脚が悪くなったのでした。然るに肉食をしたって別段感情が変るでもありません。今はもうすっかり逆戻りをしました(23)。

また、前章で言及した保阪嘉内宛の書簡の中に、ビヂテリアンになることを宣言してから、すぐ「先日『社会』と『連絡』を『とる』おまじなゐにまぐろのさしみを数切たべました」(24)という、ビヂテリアンの原則に違反する行為について告白していた。ビヂテリアンとしての初宣言はもちろん重要な意味を持っているが、よく吟味すると、その直後にあるビヂテリアンとしての肉食行為についての告白も非常に興味深いのではないか。肉食の理由としての「社会」と「連絡」をとることは、食生活の営みによって、他の生物との繋がりを維持するという意味であろう。肉食を辞めることは難しくないかもしれないが、食物連鎖から離れて、他の動物に依存せずにいられるのは確実に難しいことである。そのため、肉食をするのは必然なこととなる。このように見れば、ビヂテリアンであることと、肉食する行為との矛盾が、賢治の中に存在することが明らかである。

「ビヂテリアン大祭」に登場するビヂテリアンたちとは異なり、実際、賢治のビヂテリアニズム信仰は、それほど単純なものでも、篤実なものでもなかった。しかしながら、「ビヂテリアン大祭」のテクストで提示された論争の白熱状態と同じように、ビヂテリアンになる理由は確実に存在すると言っても、それを批判する、あるいは肉食する理由が消えるというわけではない。ここで、どちらが正しいか、どちらがこの論争に勝利するかを問うことには意味がない。むしろ、こうした二つの流れが論争状態で膠着することにこそ、意味が成立するのである。賢治テクストの重要な意味は、まず矛盾をそのまま提示することにあると思われる。

このような矛盾状態は、他の作品と対照することによって、理解することもできる。例えば、「フランドン農学校の豚」において、人間の言語が理解できる豚のイメージが作り上げられ、動物にも感情があることが強調されている。それに対して、「ビヂテリアン大祭」において、人間が動物はかわいそうということをなぜ知っているのかという問いがかけられ、それは「たゞこっちが可哀そうだと思ふだけ」だと反発し、「全体豚などが死といふやうな高等な観念を持ってゐるものではない」と、人間が勝手に動物の心理を推測する態度が、風刺されている。このように、賢治文学における矛盾する様相から、彼がはたしてどちらの立場に立っているのかを読みとることは極めて難しい。もっと正しく言えば、このような矛盾をそのまま表現することにこそ、賢治の真意があるのではないか。

このような矛盾状態は、賢治文学における戦争についての描写にも現れている。「烏の北斗七星」という作品において、主人公は戦うことについての悩みを、「あしたの戦でわたくしが勝つことがいゝのか、山烏が勝つのがいゝのかそれはわたくしにわかりません」(25)と告白する。また、山烏を葬る結末近くのところに、「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうにはやくこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません」と、自己犠牲の願望を述べている。殺される相手に対して不憫に思う一方、戦いは避けることができない。また、戦場における自分の戦死より、他人を殺すことがもたらす負い目のつらさが、賢治のテクストにおいて表現されている。

だが、現実生活の中で、殺人をしたくない賢治は、戦争から遠ざかるのではなく、むしろ逆に徴兵検査を受けていた。それは、賢治にとって、戦争は法性に従うもので、個人の意志で避けられるものではないと考えているからである。それゆえ、殺生したくないものの、戦争の殺し合うという原理から身を抜くことができない。これと同じように、殺生したくないのに、食物連鎖の原理から逃れることができない生き物たちは、賢治と同じ運命の道を歩んでいるだろう。戦闘と食は、賢治のテクストによく関連づけられているモチーフである。「烏の北斗七星」において、「お腹が空いて山から来」た山烏が殺されるだけではない。「ビヂテリアン大祭」においても、「たゞさへ食物が足りなくて戦争だのいろいろ騒動が起こってるのに更にそれを半分に縮減しやうといふのはどんなほかに立派な理くつがあっても正気の沙汰と思はれない」という箇所があり、賢治テクストにおけ

る食料と戦争との緊密な関係を示唆している。

戦争ほど、人に死を鮮烈に感じさせるものはない。ところが賢治テクストの場合、日常生活において当たり前だと思われる食生活には、戦争に負けないぐらいの殺し合いとその残酷さが潜んでいる。それゆえ、「フランドン農学校の豚」や「ビヂテリアン大祭」などの作品に、動物が殺されることが悲劇的に表現されている。現実生活の中で、賢治は徴兵検査の不合格ということで、殺人忌避と戦争に行くことの矛盾が自然に解消された。しかし、文学創作の中で、賢治は容易に解決できない矛盾をそのまま提示し、戦争に対する葛藤を、食の問題として表現している。

先ほど、賢治テクストの重要な意味はまず矛盾をそのまま表現することにあると述べた。そのほか、「ビヂテリアン大祭」のように、矛盾を放置するのではなく、結末にオチのある手法で矛盾を解消しようとするものもある。この逆転の手法により、賢治テクストには面白さが溢れるのである。「ビヂテリアン大祭」の結末では、多くの異教徒は自分の誤りを認め、ビヂテリアンになることを宣言する。これによって、ビヂテリアンと異教徒との調和しえない論争が、無理矢理に調停されている。このように納得しがたく、ビヂテリアンの勝利だとは思えないような設定は、結末における一つ目の逆転である。結局、これらのすべてが「お祭りを賑やかにする為に祭司次長から頼まれて一つしばゐをやった」という、もう一つのドラマティックな転回で、テクストは収束する。そこで、「私」はこのことを知ってから、「あんまりこのあっけなさにぼんやりしてしまひました。あんまりぼんやりしましたので愉快なビヂテリアン大祭の幻想はもうこわれました」と述べる。ディベートによって、自分の勝利、あるいは相手によって納得できるまで説得されることを求めていたはずの「私」は、このような「事実」に対して、失望感を抱いている。

賢治テクストに現れる矛盾の様態は、一方を諦めない限り、調和は不可能となる。こうした矛盾の共約不可能性を認めた賢治は、どちらかの勝利で作品を収束することを避け、オチのある結末を設定したと考えられる。類似する表現手法が用いられた作品として、「猫の事務所」も挙げられる。猫の事務所に務める四番書記のかま猫は、ほかの三人の書記にからかわれながら、結局仕事を取り上げられる。しかし、これらの事情を知った獅子は、猫の事務所を解散すると命じる。このような、リアリティを超えるどんでん返しの手法は、賢治に特徴的な表現法だと言えるだろう。これで、論争そのもの自体の戯曲化が実現され、矛盾の共約不可能性が弱化されている。

5．おわりに

食の問題をよく描いている賢治テクストにおいては、死のイメージの共通性によって、それを戦争の問題と結び付けて考察することができる。本章は「ビヂテリアン大祭」および「フランドン農学校の豚」を中心に、賢治文学において、食と戦争とはどのように繋がり、どのような関係性を持っているかについて、考察してきた。

賢治テクストがこのような戦争に関わる様態を提示することには、彼の徴兵検査の経験が前提にあると考えられる。徴兵検査を受ける

前後の、賢治と父政次郎、また親友保阪嘉内との手紙交流の内容を考察することによって、戦争に対する賢治の矛盾を読み取った。戦争は法性に従う一つの現象であり、個人の意思で避けることができない。このような戦争観を持っている賢治は、自分が戦死に遭うことを恐れず、平気で受け入れる態度を示している。ところが、他人を殺すこと、つまり殺生に対しては、賢治はつねに負い目を感じているのである。賢治の戦争観について考える際に、このような葛藤を感じている人間らしい賢治像から出発することを念頭に置くべきであろう。

賢治テクストにおいて、殺すことに対する抵抗感と戦争の避けがたさとの対立、これは、殺生したくないものの、食物連鎖から逃れられない苦悩を、彷彿させるのである。「ビヂテリアン大祭」や「フランドン農学校の豚」など、賢治テクストにおいて、このような矛盾と葛藤が表現されている。その背後にある、賢治の徴兵検査の経験が、彼の文学創作に想像力をもたらす源になっていることを無視してはいけない。その一方、現実生活において、賢治がビヂテリアンの問題、また殺生の問題について感じている葛藤と矛盾は、文学の中では、美学的な風景描写との対照、またどんでん返しの手法などによって、その調和法が提供されていると言えよう。

注

（1）「よだかの星」『【新】校本宮沢賢治全集　第八巻　童話Ⅰ　本文篇』筑摩書房、一九九五年五月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（2）押野武志「死を巡る言説――『フランドン農学校の豚』を読む――」『日本文学』第四十三巻第二号、一九九四年二月、三十－三十一頁

（3）「フランドン農学校の豚」『【新】校本　宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月。以下の同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（4）具体的には、加藤陽子「時代を刻する思想と徴兵制の変遷」（『徴兵制と近代日本』吉川弘文館、一九九六年十月）を参照。

（5）加藤陽子「第一次大戦の影響」『徴兵制と近代日本』同前掲、一六三－一六四頁

（6）米田利昭「宮沢賢治とシベリア出兵」『日本文化研究』第二号、二〇〇〇年三月、一五四－一六三頁

（7）〔書簡四十三〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月一日）『【新】校本　宮沢賢治全集　第十五巻　書簡』筑摩書房、一九九五年十二月、四十三－四十五頁

（8）例えば、米田利昭「宮沢賢治とシベリア出兵」（同前掲）、西谷修「戦争」（天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年六月）などにおいては、このような主張がなされている。

（9）〔書簡四十六〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月十三日）『【新】校本　宮沢賢治全集　第十五巻　書簡』同前掲、五十一頁

（10）一年志願兵制度について、詳しくは、菊池邦作「一年志願兵制度」（『徴兵忌避の研究』立風書房、一九七七年六月）を参照。

（11）加藤陽子、同前掲、一七六頁

（12）中村晋吾、「徴兵忌避者としての宮沢賢治――徴兵検査とその周辺――」『国文学研究』第一六〇号、二〇一〇年三月、六十四－六十五頁

（13）同前、六十五頁

（14）〔書簡四十六〕同前掲、四十九－五十頁

（15）押野武志「徴兵免除の負い目」『宮沢賢治の美学』翰林書房、二〇〇〇年五月、二三五頁

（16）同前

（17）「復活の前」『アザリア』（第五号）『【新】校本宮沢賢治全集　第十六巻（上）補遺・資料・補遺・資料編』筑摩書房、一九九九年四月、二八四頁

（18）例えば、原子朗「ビヂテリアン」（『新宮沢賢治語彙辞典』筑摩書房、二〇一三年八月、六〇六頁）や鶴田静『宮沢賢治の菜食思想』（晶文社、二〇一三年六月）を挙げることができる。

（19）「ビヂテリアン大祭」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』筑摩書房、一九九五年六月。以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（20）具体的には、天沢退二郎「収録作品について」（『新編銀河鉄道の夜』新潮文庫、一九八九年六月）、色川大吉「賢治の国柱会とベジタリアン大祭」（『宮沢賢治研究 Annual』第六号、一九九六年三月、二七四－二八〇頁）を参照。

（21）島村輝「『ビヂテリアン大祭』」『国文学　解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一九九三年九月、一一〇頁

（22）具体的には、中村三春「ブルカニロのいない世界――『ビヂテリアン大祭』の終わらない論争から――」（『係争中の主体　漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月）を参照。

（23）〔書簡一九七〕関徳弥宛（一九二一年八月十一日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』同前掲、二一八頁

（24）〔書簡六十三〕保阪嘉内宛（一九一八年五月十九日）同前掲、六十九頁

（25）「烏の北斗七星」『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他　本文篇』筑摩書房、一九九五年十一月、以下の同テクストの引用は同じ出典に拠る。

第7章　宮沢賢治の農業と文学

1. はじめに

宮沢賢治――詩人、童話作家、ビヂテリアン、エスペランチスト…これまでの論述では、すでに宮沢賢治のいくつかの顔を描き出してきた。これ以外にも、農学校教師、農民運動家、農民作家の側面など、宮沢賢治は農業との深い関わりのある人間としても、広く知られている。本章では、宮沢賢治のもう一つの顔――農民としての宮沢賢治――を描き出してみたい。そこで、まず前章で言及した問題を改めて本章の出発点としよう。

一九一八年四月、賢治は進学を断念し、徴兵検査の延期を勧める父と対立しながら、自ら執拗に検査を受けようとした。その理由として、法性に従う戦争を避けがたいという考えがまず挙げられる。しかし、賢治はなぜこれほどに検査の延期を拒否し、急ぐのだろうか。押野武志によれば、これは賢治の「父と家業への反発とそこからの離脱願望」(1)の作用である。いったいどのような家業が、賢治に命を失うことも恐れないぐらいの嫌悪感をもたらすのだろうか。本章では、まず、賢治の人生軌跡に重大な影響を与えている出自の問題について、考察を試みよう。

2. 賢治の出自と農業への目覚め

賢治が生まれた実家・宮沢一族は、花巻では有名な地方財閥である。父政次郎は町会議員の財産家であり、母イチは巨万の富を築く実業家で花巻銀行などの頭取をする「宮善」の娘である。賢治の家は、質・古着屋を経営している。このような家で、長男として生まれた賢治は、子ども時代から何の不自由もない生活を送ることができた。加えて、賢治は成績が優秀で、盛岡中学校を卒業してから、さらに盛岡高等農林学校に入学し、当時ではかなりの高等教育を受けていた。盛岡高等農林学校農芸化学科を出、研究生として地質土壌肥料の研究を続け、また上京し国柱会に関わったりし、自由に好きな勉強をしたりした。花巻に戻り、花巻農学校の教師を四年間つとめ、後に開拓農業を試み、かたわら自費で童話集や詩集を出版するまでに至ったのである。賢治の「経済生活（＝生活費、遊興費、勉学費）が生涯父政次郎の財産で賄われていること」(2)に注意を払った吉田司は、賢治を「高等遊民」という特権的な階級として捉えている。

また、「遊民」賢治がはじめて「天職」を得る東北砕石時代に注目し、そこに産業資本家の誕生を見出したのは、村井紀である。

> 私が天職だというのは、このポストで、彼はいわば「野原の富をいまの三倍もできるやうにする」（「ポラーノの広場」昭和六年？胃稿（ママ））ことに着手しているからである。父政二郎が取締役をつとめ、株主であった東北砕石で、この農業技師は、水を得た魚のように活躍を始めるからである。

彼は、農民たちの「肥料設計」の相談にのるかたわら、社長鈴木東蔵に見込まれ、この会社に技師として入ると、資金面から生産管理・営業販売とすべてにわたって猛然と活動を開始し、このボロ会社を建て直し、その近代化と急成長に貢献している。つまりここには産業資本家宮沢賢治の誕生がある(3)。

吉田司と村井紀は、それぞれ、それまで世間に知られていなかった賢治の一面を提示している。この意味で、両者の主張の意味は非常に大きい。ところが、賢治の出自に関して、彼自身が選択できなかった箇所にだけ焦点を当てることには、どうも違和感を覚えるしかない。どのような家に生まれたかという問題より、むしろこのような家に生まれ賢治が、如何に自分が歩く道を選択したかに、重点を置くべきであろう。

殷実なる生活環境を提供してくれる家庭に対して、賢治自身は非常に複雑な感情を持っている。そこに頼りつづける一方、周知のように、賢治は父に抵抗しながら、自分の家業に対しても、はっきりとした嫌悪感を持っているのである。千葉一幹の検証(4)によると、賢治が嫌悪感を持つようになるのは、盛岡中学校に入学して以降、世間の人々の評価によって芽生えたものである。境忠一によれば、賢治が家業を忌避する原因は、彼が「零細な生活者である階級のひとたちを相手に、その利息などで一家が生きてゆくなどという家をつぎたくない」(5)という気持ちを持っていたからだという。

しかし、確かに吉田司が指摘したように、賢治の経済生活は生涯、父政次郎の支援から離れたことはなかった。このような嫌悪と依存が共に賢治の中に存在する状況は、徴兵検査の時には、すでに現れていた。一九一八年、卒業を迎えた賢治は、宮沢家の長男として、家業を継ぐのは避けがたい運命であった。しかし、二月一日に、父宛の書簡の中に書かれた将来についての計画の中には、家業を継ぐことについて、一言も言及されていなかった。それをできる限り延したいため、早く徴兵検査を受け、兵役に服することを、賢治が強く希望している。中村晋吾が指摘したように、そこで、賢治の目に付いたのが、一年志願兵という制度である。しかし、「志願兵は原則として『費用自弁』であり、少なくとも年間で約二〇〇円という費用を負担せねばならないことだ。また、『中学校以上卒業』という条件そのものが、あくまでも中産階級以上の階層にしか志願を可能にしていない」(6)。費用自弁という条件に満足するため、賢治は嫌悪感を持っている家から経済的援助を受けなければならない。こうした賢治自身が置かれた状況は、彼の内面における葛藤や矛盾が生まれた源となる。前章で述べたように、一年志願兵制度というのは、多くの特典が付されている制度である。年限が短縮される以外にも、昇進の速さも一つの特典として挙げることができる。もし賢治が徴兵検査に合格すれば、一年志願兵として徴兵され、服役の間に昇進する場合、賢治はそのまま軍隊に残り、全く異なるその後の人生の道を歩んだかもしれない。勿論、このような連想は、あまりにも飛躍的すぎる。徴兵検査の不合格によって、賢治の徴兵の道は閉ざされた。しかし、その後、賢治の農業への目覚めは、彼にもう一つの道を開いたのである。

賢治が盛岡高等農林学校に入学してから、三十七歳の短い生涯の幕を閉じるまで、人生の三分の一の時間は、農業に関わっていた。しかし、このように農業に多くの時間と力を捧げた賢治ではあるが、最初は農業に対する関心がなかったのである。盛岡高等農林学校に進学するのは、農業の振興や農民を救うためではなく、単純に地元の上級学校だから、実家から汽車で一時間の距離で、親の目が届く範囲にあるため、進学の希望が許可された。農林学校に進学しても、農業に従事する気持ちがなく、妹トシ宛の手紙の中に、「学校を出てからの仕事の見当もつきました――則ち木材の乾溜、製油、製薬の様な就れと云へば工業の様な仕事で充分自信もあり又趣味もある」(7)と語っていた。卒業直前の父政次郎への手紙の中にも、化学工業関連の飴製造、沃度製造、海草灰製造、木材乾溜、炭焼業(8)などを挙げ、農業への関心は、まったく見られなかった。賢治の農業への目覚めは、一九二一年十二月、稗貫農学校（後に花巻農学校と改定）の教諭になってからのことである。

> 従来家業に従事している際に生活に困った農民が質草を持参して訪れることがあったが賢治自身は町場で生活していたし、盛岡中学校でも盛岡高等農林学校でも級友は皆エリート階級であったから、農家の貧困ぶりを目のあたりにしたのは、恐らく農学校の子弟と接したのが始めてでは無かったろうか(9)。

田口昭典が述べたように、賢治は農学校に勤務することによって、貧困な農民の生活を向上しようという使命感を持つようになっている。そこで、賢治は農業と真剣に向かいあい、自分なりの農業活動を展開していったのである。

3．賢治の農業思想と実践――「農民芸術綱要概論」と羅須地人協会

一九二五年六月、保阪嘉内宛の手紙の中に、賢治は「来春はわたくしも教師をやめて本統の百姓になって働きます　いろいろな辛酸の中から青い蔬菜の毬やドロの木の閃きや何かを予期します」(10)と伝え、翌年四月、賢治は花巻農学校の仕事を辞め、下根子桜で自炊生活を始め、実際の農耕生活に関わるようになった。同じ年の夏ごろ、賢治は羅須地人協会を開設し、農民に対する農事相談の技術指導、無料肥料設計などを行っていた。羅須地人協会の活動は、農事指導のみならず、芸術活動の面においても、意欲的に行われていた。このような実践活動の指導思想として、「農民芸術概論綱要」が挙げられる。

一九二六年一月、学年末の退職を控えて、賢治は花巻農学校で、最後の学期を迎えた。一九二六年一月十五日から三月七日まで、農村振興の中堅人物を養成するため、岩手国民高等学校は、花巻農学校に開設された。国民高等学校というのは、デンマークで始められたものであり、農閑期を利用し、農業青年に対する再教育を行う制度である。そこで、講師を委託された賢治は、「農民芸術」という科目を担当し、「農民芸術概論」を講義した。その講義用の文章として作

られたのが「農民芸術概論綱要」(11)である。「綱要」は序章から結論まで、全十章によって構成され、農民芸術の目的、理念などを短い命題の形で表現している。これは非常に哲学的なもので、理解しづらい部分もあるが、賢治の思想を反映する芸術論として、重要な価値を持っている。

この「綱要」は、様々な思想家の影響が反映されており、それを理解するため、いくつかの重要な先行研究をまず挙げる必要がある。一つは、上田哲の「宮沢賢治と室伏高信」(12)である。上田は室伏の『文明の没落』と「綱要」を比較しながら、『文明の没落』に提示される文化の根本は芸術と宗教であるという思想が、賢治の農民芸術思想の底流となっていることを指摘している。もう一つ重要な論考は、多田幸正の「宮沢賢治とウィリアム・モリス」(13)である。多田は賢治とモリスを比較し、農民芸術とモリスが主張した、「Art is man`s expression of his joy in labour」という芸術観との親近性を指摘した。

こうした思想の基盤に基づき、賢治は「序章」の中で、「いまわれらにはただ労働が、生存にあるばかりである」(14)と述べ、農村の現状を意識した上で、農民の労働の中に、芸術と創造の喜びを見出そうという目的を宣言している。「綱要」の中において、最も特徴的なのは、賢治の宇宙意識の現れである。

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある
正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

賢治の思想はすでに人間社会のレベルを超え、生物全体と「宇宙感情」の通じるところに、幸福を追求しようとしている。このような思想の傾向は、「銀河鉄道の夜」を代表とする賢治晩年の文学創作にも現れている。また、賢治は「実生活を肯定しこれを一層深化し高くせんとする」と提唱し、詩歌、音楽、絵画、演劇、建築と衣服、土地設計と工芸美術を農民芸術の分野に組み込もうとしている。このような農民芸術の思想が述べられる「綱要」は、後に羅須地人協会の実践活動の指導思想となった。

国民高等学校閉校後まもなく、賢治は農学校を退職した。その理由は当時の、学校の形骸化に直接に関わっている。河野基樹の指摘によれば、「賢治は、農学校に勤務するなかで、学生が、役人や代用教員になるための学歴を所得するための手段として在学しているという実態に突き当った。農家の子弟は他業種へ転業していく。それに伴って教員の農業軽視も募っていた」(15)という。このような状況を根本的に改善するため、賢治の中に、学校ではなく、他の形での農業指導を行う考えが浮上する。そこで、羅須地人協会の開設があったのである。「農民芸術概論綱要」にある「おれたちはみな農民である／ずゐぶん忙しくしごともつらい／もっと明るく生き生きと／生活をする道を見つけたい」という内容から、羅須地人協会は農民生活の向上を目指していることが伺われる。

羅須地人協会の活動は、大雑把に言えば、技術と芸術による農村

生活の向上運動である。技術というのは、稲作指導と肥料設計がメインとなる農事指導であり、芸術というのは、音楽鑑賞と演劇上演を中心とする文化活動の展開である。賢治の詩「第三芸術」を読解し、それと「農民芸術概論綱要」との連続性を読み取り、芸術と技術との接続を解明したのは、大島丈志である。大島の考察(16)によれば、賢治が求める理想状態は、こうした技術と芸術との接続によって実現されるはずである。

しかし、問題となったのは、現実として、羅須地人協会の活動における技術と芸術がうまく接続できなかったことである。平等な理想世界を求める一方、賢治に相談しに来る農民たちは、科学知識が比較的に少ない人々であり、賢治のことを先生と呼び、賢治を完全に指導者として位置づけている。また、芸術の面において、賢治のように詩や童話の創作に足を踏み出す人がほとんどなく、賢治が提唱した農民芸術というのは如何なるものかを、本当に理解できる人もいない。このような状況から考えれば、賢治が求めている理想世界における技術と芸術との接続は、なかなか厳しい境遇にあったのである。

賢治の羅須地人協会で行われる活動に対して、「社会主義教育を行っているとの風評もあり、日時不明（三月か）であるが、花巻警察署長伊藤儀一郎の事情聴取があった」(17)ため、羅須地人協会の活動は長く続けられず、一九二七年の三月に休止した。これはあくまでも羅須地人協会の活動が中止した直接の理由である。本質のところにある芸術と技術との接続の困難性、また賢治の農民芸術思想の超越性に、羅須地人協会の活動が破綻する根本的な原因があったのではないか。

しかし、当時の日本において、農村生活を向上するために、思索したり、積極的に実践したりする文学者は賢治だけではない。白樺派の代表人物・武者小路実篤、また有島武郎も農村生活を改善するため、それぞれ独自の行動を取っていた。次節では、賢治とこれらの文学者を比較して考察することによって、賢治の農業思想と実践を当時の日本社会の中で位置づけたい。

4．賢治と白樺派の人々

宮沢賢治の農業実践活動と白樺派の代表人物のそれとの共通点は容易に連想することができる。村井紀は「産業資本家宮沢賢治の誕生」において、賢治と白樺派との類似性を意識し、それに言及している。

> 宮沢賢治には、日本神話を戯曲にしたり、童話を書いた白樺派に似たところがある。東北の白樺派というと語弊があるかもしれないが、花巻では「財ばつ」といわれる家に長男として生まれたこの男は、白樺派同様恵まれた環境から、古い価値の秩序に反抗し、たとえば父親（家）の宗教を真宗から「国柱会」に改宗させようとしたように、急進的な思想を育てていた。しかし、大岡昇平が大正文学について言ったように「父に反抗しながら、完全に反抗するのはこわい」（『少年』）といった甘さが、この男の場

合も、その急進性にはつきまとっている。そこには甘ったれた「和解願望」があり、白樺派のラディカル有島武郎のように宗教（内村鑑三）そのものに反抗したわけでもなかった。ともあれ、白樺派のひとびとが農場を解放し、「新しい村」を作ったように、彼は仲間を集めて農村サークル「ラス地人協会」を作り、その童話の世界でも一種の近代的な農村ユートピア（「ポラーノの広場」）を構想していた（18）。

激動の大正時代において、敏感な文学者たちは理想世界の構図を考え、またそれを実践していた。人道主義を目指した白樺派の文学者たちは、農業に目を向け、それぞれの農業実践を行っていた。伊藤信吉は、武者小路実篤の〈新しき村〉、有島武郎の農場解放、また宮沢賢治の羅須地人協会という、三つの農業活動をユートピア実践活動と見なし、それぞれの特徴を見出した。「宮沢賢治の実践に倫理的性質が濃厚だったことはいうまでもないし、有島武郎にしてもそれは社会主義的であると同時に、多くの私有財産を所有する者の倫理的・道義的観念を含んでいる。武者小路実篤は多分に文学的・浪曼的だった」（19）という。

こうした賢治と白樺派との関係性についての論述があるものの、十分に論じられているとは言いがたい。そこで、本節では、賢治と白樺派の人々との関係性をさらに考察することで、賢治の農業思想および活動の特徴を見極めたい。

一九一八年十一月、十年の構想を経て、武者小路実篤の新しき村の建設は、宮崎県日向において始まっていた。最初は八人の村民が、自ら土地を開拓し、水田と田畑を作りながら、文学、絵画、演劇や音楽などを勉強し、独自の農村生活を営み、村民数は八年後に五十人に達した。「新しき村」を創設する理由について、武者小路は「新しき村小問答」において、「僕たちは現社会の渦中から飛び出して、現社会の不合理な歪なりに出来上った秩序からぬけ出て、新しい合理的な秩序のもとに生活をしなほしてみたいと云ふ気もするのだ。つまり自分達は今の資本家にもなりたくなく、今の労働者にもなりたくなく、今の社会の食客的生活もしたくない、さう云ふ生活よりももつと人間らしい生活と信じる生活を出来るだけやりたいと思ふのだ」（20）と述べている。このように、当時の農村問題から出発し、新しい形で農村生活を改善しようとする試みは、賢治の考えと非常に高い類似性を持っているだろう。

実篤と賢治の思想および理想世界を追求した実践に対して、分銅惇作は羅須地人協会運動と〈新しき村〉とは、「共通した思想的地盤に根ざしており、大正ヒューマニズムの限界を指摘することができ」（21）ると述べ、賢治の「地主対小作人の関係について階級的認識が欠けている」点をも指摘していた。

これに対して、非常に鮮明な階級意識を持ち、農場解放の実践を試みたのは、白樺派のもう一人の代表人物・有島武郎である。有島は子どもの時から横浜英和学校において欧米風の教育を受けていた。それとともに、家庭では厳しい武士的スパルタ教育を受け、彼が生涯悩んだ二元対立の端緒を生み出した。一八九六年九月、有島は札

幌農学校に進学し、そこで、親友森本厚吉などの影響で、キリスト教に近づき、入会した。アメリカ留学中、彼は在米の社会主義者金子喜一の影響で、社会主義にも触れ、特にクロポトキンを愛読した。アメリカの帰途、ロンドンにクロポトキンを訪問した。帰国後、母校の農科大学の英語教師として赴任した有島は、社会主義研究会に加わった。このように、第一次世界大戦後の内外状勢を目の当たりにして、階級対立の社会に生きる矛盾にぶつかった有島は私有財産を否定し、自分が労働者を搾取する有産階級であることに罪の意識を抱くようになった。ここで有島思想の一つの特徴として、彼は自分が第四階級（22）の人間になれると思っていなかったことが挙げておきたい。

私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。私が新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰おうとは思わない。第四階級のために弁解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切った虚偽も出来ない。今後私の生活が如何に変ろうとも、私は結局在来の支配階級者の所産であるに間違いないことは、黒人種がいくら石鹸で洗い立てられても、黒人種たるを失わないのと同様であるだろう。従って私の仕事は第四階級者以外の人々に訴える仕事として始終する外はあるまい。[…]どんな偉い学者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭領であれ、第四階級的な労働者たることなしに、第四階級に何者かを寄与すると思ったら、それは明らかに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によってかき乱されるの外はあるまい（23）。

有島はこのように、「宣言一つ」の中に、インテリの敗北を訴えていた。「宣言一つ」の内容によって、有島の悲観的主義者の一面が現れている。それと同時に、彼が北海道狩太農場解放という、財産放棄の行為によって、第四階級と連帯した所以をも伺うことができるだろう。階級に対して敏感である有島と違い、武者小路実篤と宮沢賢治は、階級に対する認識などはあまりなかった。二歳の時、父親の病没を経験した実篤は、貧窮した少年期を過ごしていたため、貧しい労働者階級に対する優越感を感じていなかったのは事実である。宮沢賢治の場合、経済の面では、何の不自由もない少年期を送っていたが、階級の区分、また主義による社会性質の規定などの問題に対して、あまり興味を持っていないようである。階級と主義より、資本の論理のもとで、それによって翻弄されている「本統の百姓」の存在が、賢治により強く意識されているのであろう。それゆえ、賢治の作品の中では、資本の理論に対する批判は度々行われたが、その代わりに、共産主義あるいは社会主義へ接近することはない。「農民芸術概論綱要」で提示したように、賢治が求めているのは、人間社会の範疇を超え、宇宙までにおよぶ全生物が共生する理想世界である。

中学校に入ってから、家業に対する認識が深まる中、賢治ははじめて有島武郎と同じように、自分の出自に対する負い目を持つようになった。ただし、有島の、第四階級になれないという考え方と異なり、賢治は自ら農民になることを積極的に試みていた。この点につ

いて、伊藤信吉は賢治を有島武郎と比較しながら、「有島武郎における農場解放――私有財産の放棄も自己犠牲にほかならないが、宮沢賢治にはそのように放棄すべきものがなかった。この詩人にあったのは農村協同体の夢とそのための農的実践だけで、自己犠牲のほかに実践のための方法論や手段を持たなかった」(24)と述べている。自己犠牲による部分が多いという指摘であるが、では、賢治のこうした農業活動の実践は、如何に評価されているのだろうか。

> 賢治はあくまで農民と平等にその一員になろうとした。あえて粗食に徹したのも、農民以上の食事をしないという決意であった。しかしこの賢治の姿勢が農民にどれだけ評価されたかは別である。[…]賢治が如何に農民の一員になろうとしても、それ自身矛盾した試みであった。農業技師は農民ではないし、詩人も農民ではない。農民は賢治をあくまで指導者としてつき合っていたので、たかが数反の畑を耕す農民としてつき合っていたのではない(25)。

持田恵三の考察によれば、賢治の農民への転身は成功したとは言えないものであった。ところが、比較的高給で安定した農学校教師の職を捨ててまで、実際に農村活動に入ったという、賢治のこの行為にある献身的な精神は、認めるべきであろう。

さて、農民問題を解決するための実践者としてではなく、文学者として、三人はどのように創作活動に取り組んでいたのだろうか。武者小路実篤と有島武郎は、自分の農業に関する思想あるいは実践について、文学創作また評論・随筆の中にも表現していた。『生まれ出づる悩み』、『運命の訴え』、『酒狂』、『宣言一つ』など、貧しい農村生活の現状に触れつつ、有島の階級意識を反映させた小説や評論が挙げられる。また、「新しき村」の同名機関誌『新しき村』において、武者小路実篤は詩歌、随筆などの形を通じて、自分の新しい農村建設の思想を、次々と表現しようとしている。しかし、賢治の場合は、状況は少し異なっている。羅須地人協会に関わる内容は、賢治の童話作品に一切登場していなかった。農業に関わる作品が多い賢治であるが、その中に農民運動に関する内容としては、産業組合のことしか表現されていない。

また、同じ白樺派の同人である武者小路実篤と有島武郎は、お互いの交流があり、その中で、誤解される出来事もあったが、全体的に見れば、その交流はお互いの農業実践に好影響をもたらしたことが多い。それに対して、賢治の農業実践のための努力は、周囲の多くの人に理解されず、その実践は孤立無援の状況にあった。しかし、これは賢治の思想と実践が当時の時代状況から遊離していることを意味するわけではない。当時大きくクローズアップされる文学思潮の中に、そのイメージを掴むことができる。

5．賢治の農業と文学

一九二〇年代は、賢治が農業活動を展開していた時期と重なり、農民文学とプロレタリア文学が当時の日本で芽生えていた。南雲道

雄によれば、『農民文芸』または『農民文学』という言葉が、その意味・内容を模索しつつ運動のかたちをみせはじめたのは一九二〇年代のはじめ、関東大震災に前後する。日本の社会は第一次世界大戦後の深刻な経済不況・農村窮乏化の進行など、民衆は生活の不安と苦しみにあえぐ一方、大正デモクラシーの昂揚と労働者・農民運動の激化で大きく揺り動かされていた時期にあたる」(26)。賢治が農民運動に目を向けたのは、こうした当時の時代背景と深く関わっているのであろう。

当時の日本文壇において、このような社会状況を直接的に反映した文学風潮として、プロレアリア文学と農民文学は非常に強い存在感を持っていた。一九二〇年前後から三〇年代前半にかけて、資本主義社会の矛盾の深刻化および労働者階級による闘争は、プロレタリア文学の作品の中に表現されている。プロレタリア文学の誕生は一九一七年のロシア革命からの影響が大きい。実際、「種蒔の人」、「文芸戦線」、「戦旗」などの機関誌によって、貧困、社会体制、戦争問題をめぐる時事的文学活動が展開されている。

賢治の「農民芸術概論綱要」において提唱される、〈労働＝芸術〉という芸術観と、当時高揚した政治意識と社会変革意識との接近は、容易に想像できる。賢治はマルクス主義と無政府主義に深く関わることがなかったものの、それと接触する契機は確かに存在したのである。この点について、松岡幹夫は以下のように当時の状況を述べている。

賢治の中で自己犠牲より宇宙的自己への志向が高まった羅須地人協会時代を中心とする時期に、彼は、労働党の活動や無政府主義への関心を芽生えさせている。昭和二(一九二七)年に起きた金融恐慌は都市部の労働者だけではなく農村にも大きな打撃を与え、労働運動が高まりをみせた。昭和三(一九二八)年二月に行われた第一回の普通選挙制度による衆議院選挙では、多くの共産党員が労働党から立候補し、同党は無産政党の中で最大の得票数を獲得している。賢治はこの選挙で労働党を支援したのであるが、そこに賢治の共生倫理観が社会思想として本格的に展開される契機も存したはずである(27)。

しかし、新校本宮沢賢治全集・書簡集の中に収録されている「年月日不詳」の書簡「不2」の中に、次のようなプロレタリア文学に対する違和感が示されている。

何べんも申し上げてゐる通り私は宗教が分かってゐるでもなし確固たる主義があって何かしてるでもなしいろいろな異常な環境(質屋とか肺病とか中風とか)から世間と違った生活のしやうになった(強い人ならばならなくても済むわけです)だけのことでいまでもその続きなのです。文芸へ手は出しましたがご承知でせうが時代はプロレタリア文芸に当然遷って行かなければならないとき私のものはどうもはっきりさう行かないのです。心象スケッチといふやうなことも大へん古くさいことです。そ

ここで只今としては全く途方にくれてゐる次第です。たゞひとつどうしても棄てられない問題はたとへば宇宙意志といふやうなものがあってあらゆる生物はほんたうの幸福に齎したいと考へてゐるものかそれとも世界が偶然盲目的なものかといふ所謂信仰と科学とのいづれによって行くべきかといふ場合私はどうしても前者だといふのです（28）。

この書簡は、日付が不明なものの、羅須地人協会時代に賢治と関わりがある人物・小笠原露宛の手紙であることがわかっている。これによって、賢治がこの書簡に述べた意見は、羅須地人協会時代のものであると推測することができるだろう。こうした書簡が示すように、賢治は自分の活動をプロレタリア文芸とはっきり区別している。それでも、羅須地人協会の活動は、当局によって、社会主義教育を行う危険性があると見なされた。当時、プロレタリア文学者たちの多くは、平和、民主主義、生活向上を求めたため、官憲の弾圧が強くなることにより、治安維持法の違反で検挙された。

このような当時の時代状況の絡み合いから見れば、賢治と農民文学との関連も浮上してくる。農民文学は、プロレタリア文学とほぼ同時に生まれた文学風潮で、農民問題や農村生活を主な題材として扱われる。一九一八年の米騒動、また一九二二年の日本農民組合の結成は、農民文学が盛んになった契機である。プロレタリア文学の機関誌「種蒔の人」、「文芸戦線」などにおいても、農民問題が扱われており、農民文学にも属する作品が多く掲載されている。

プロレタリア文学と農民文学（29）とは、共通点を持っている一方、相異する部分もはっきりしている。プロレタリア文学の中に、都市部で新興した工場労働者たちの生活を描く作品が多く存在し、この意味で、その取材範囲は農民文学より大幅に広い。それに対して、農民文学の作品の中には、貧しい農村生活や農民が置かれた苦境を描くものだけではなく、農村生活を描くことによって、郷土愛を表現する作品も存在する。この面から見れば、農民文学は「郷土文学」あるいは「地方文芸」との同義性が強い。

賢治が行った実践活動は、プロレタリア活動に近い部分があり、また農民の精神向上に尽力した点から見れば、その思想は、プロレタリア文学、あるいは農民文学と、精神的共鳴を持っているに違いない。ところが、心象スケッチを描く詩集『春と修羅』、イーハトーブを舞台とする童話集『注文の多い料理店』、また宇宙意識が現れる「ポラーノの広場」、「銀河鉄道の夜」などの作品から伺えるように、賢治文学にはプロレタリア文学や農民文学と明白な距離感が示されており、どちらのジャンルにも属さない。

しかし、賢治の農業実践から影響を受けながら、自分の文学創作に取り組む人物がいる。それは盛岡高等農林学校で、賢治の教えを受け、その教えを一生かかって実践しようとした松田甚次郎である。松田は当時のベストセラー『土に叫ぶ』の作者であり、若い農民の十年間にわたる運動の実践記録を執筆した。松田甚次郎の思想と実践について、その「思想の背景には、必死になって宮沢賢治の思想を共有しようとする何かがある」（30）と評価されている。このように、賢

治の農業実践活動が持っている影響力は、農民文学者の創作にまで及んでいる。

6．おわりに

では、賢治文学における農業は、どのような姿で現れているのだろうか。そこに存在する唯一の農業組織・産業組合は如何なる経緯で現れ、またどのように描かれるのだろうか。この一連の問題について考える時、一つのゆかりのある場所を無視してはいけない。それは有島武郎の農場解放が行われた場所・北海道である。賢治と北海道との関連に注目することで、賢治文学の考察には、一つの有効な視点が提示されるだろう。次章では、北海道に目を向け、産業組合のモチーフが現れる「ポラーノの広場」を中心に考察する。

注

（1）押野武志「徴兵免除の負い目」『宮沢賢治の美学』、翰林書房、二〇〇〇年五月
（2）具体的には、吉田司「不思議な階級」『宮沢賢治殺人事件』（文藝春秋、二〇〇二年一月）を参照。
（3）村井紀「産業資本家宮沢賢治の誕生」『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月、四十六頁
（4）具体的には、千葉一幹「家業への嫌悪」（『宮沢賢治――すべてのさいはひをかねてねがふ――』ミネルヴァ書房、二〇一四年十二月）を参照。
（5）境忠一「家」『評伝宮沢賢治』桜楓社、一九六八年十月、二十九頁
（6）中村晋吾「徴兵忌避者としての宮沢賢治――徴兵検査とその周辺――」『国文学研究』第一六〇号、二〇一〇年三月、六十五頁
（7）〔書簡三十〕宮沢トシ宛（一九一七年一月十六日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』筑摩書房、一九九五年十二月、三十六頁
（8）〔書簡四十三〕宮沢政次郎宛（一九一八年二月一日）（『【新】校本　宮沢賢治全集　第十五巻　書簡』同前掲）を参照。
（9）田口昭典「宮沢賢治と農業」『国文学　解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一九九三年九月、四十九頁
（10）〔書簡二〇七〕保阪嘉内宛（一九二五年六月二十五日）『【新】校本宮沢賢治全集　第十五巻　書簡　本文篇』同前掲、二二八頁
（11）以下「綱要」と略記する。
（12）上田哲『宮沢賢治　その理想世界への道程』明治書院、一九八五年一月
（13）多田幸正「宮沢賢治とウィリアム・モリス」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　宮沢賢治Ⅱ』有精堂、一九八三年二月
（14）「農民芸術概論綱要」『【新】校本宮沢賢治全集　第十三巻（上）　覚書・手帖　本文篇』筑摩書房、一九九七年八月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。
（15）河野基樹「宮沢賢治と岩手国民高等学校―官製社会教育の狭間で―」『近代日本文学思潮史の研究―思索的転進の諸相―』プランニング２１、二〇〇〇年八月、一五六頁
（16）大島丈志「詩『第三芸術』から『農民芸術概論綱要』へ　『技術』と『芸術』の継承に関する考察」『宮沢賢治の農業と文学　苛酷な大地イーハトーブのなかで』蒼丘書林、二〇一三年六月
（17）『【新】校本宮沢賢治全集　第十六巻（下）　補遺・資料　年譜篇』筑摩書房、二〇〇一年十二月、三四三頁
（18）村井紀「産業資本家宮沢賢治の誕生」同前掲、四十四頁
（19）伊藤信吉『ユートピア紀行――有島武郎・宮沢賢治・武者小路実篤』講談社、一九七三年、三〇六頁
（20）武者小路実篤「新しき村小問答」『武者小路実篤全集　第二十三巻』新潮社、一九五六年、二五三頁
（21）分銅惇作「人びとの心に生きる賢治像」『宮沢賢治の文学と法華経』水書房、一九八七年八月、九十四‐九十五頁
（22）フランス革命の時、国王・貴族を第一階級とし、僧侶を第二階級とする。それに反抗した一般民衆、つまり、ブルジョアとプロレタリアを第三階級と言う。この階級から分化してきた労働者階級は、第四階級と呼ぶ。有島武郎「宣言一つ」における「第四階級」は、特に都市の工場労働者のことを指す。（「宣言一つ」『日本近代文学大系　第三十三巻　有島武郎集』（角川書店、一九七〇年三月）を参照。）
（23）有島武郎「宣言一つ」（初出『改造』一九二二年一月号）引用は、『「宣言一つ」をめぐる論争』（平野謙、小田切秀雄、山本健吉編『現代日本文学論争史（上巻）』二〇〇六年九月、未来社）に拠った。
（24）伊藤信吉、同前掲、三〇七頁
（25）持田恵三『近代日本の知識人と農民』家の光協会、一九九七年六月、二二二頁
（26）南雲道雄「初期農民文学概観」『現代文学の底流――日本農民文学入門』リオジン出版センター、一九八三年六月、十四頁
（27）松岡幹夫「宮沢賢治における法華経信仰と真宗信仰――共生倫理観をめぐって」『宮沢賢治と法華経』論創社、二〇一五年三月、二三〇頁
（28）〔書簡不2〕（年月日不明、下書四）『【新】校本宮沢賢治全集　第十三巻　書簡　校異篇』一九九七年十一月、筑摩書房、一四四頁
（29）農民文学とプロレタリア文学との関係について、詳しくは高橋春雄「農民文学論史ノート」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　プロレタリア文学』有精堂、一九七一年十月）を参照。
（30）南雲道雄「記録文学の系譜」『現代文学の底流――日本農民文学入門』同前掲、一一三頁

第8章　宮沢賢治における産業組合と北海道
――「ポラーノの広場」を中心に――

1．はじめに

宮沢賢治は生涯で三回、北海道を訪れた。第一回は一九一三年の盛岡中学校の修学旅行。二回目は一九二三年、サハリンまでの一人旅。三回目はその翌年の五月、花巻農学校の教員としての修学旅行引率である。このうち、とりわけ二回目と三回目の北海道訪問が、賢治文学に与えた影響は大きい。二回目は、最愛の妹トシが亡くなった翌年で、賢治は悲しい思いに向き合い、妹の幻影を求めて北海道まで足を運んだ。その後、北海道を舞台とする挽歌群が次々と発表された。二回目の悲しみに満ちた一人旅に対し、三回目の北海道訪問は楽しい旅である。「〔或る農学生の日誌〕」において、農学生三年生である「僕」の北海道への修学旅行のことが書かれている。作品における修学旅行のコース――「津軽海峡、トラピスト、函館、五稜郭〔郭〕、えぞ富士、白樺、小樽、札幌の大学、麦酒会社〔ヽ〕博物館、デンマーク人の農場、苫小牧、白老アイヌ部落〔ヽ〕室蘭」(1)――は賢治の北海道訪問の行程と、ほぼ同じである。しかも、修学旅行前の期待感、また親から許可がもらえない時の辛さ、さらに本決まりの時の喜びも細かく描かれている。これらによって、北海道に対する憧れと親近感を賢治文学から読み取ることができる。

賢治における北海道体験に関する先行研究には、主に二つの傾向が見られる。まず、賢治の足跡に基づき、訪れた場所、乗車状況などの事実調査が主な内容となる論考が挙げられる(2)。また、賢治の北海道体験と文学との関連について考察を行い、賢治の詩を主な研究対象とする傾向も挙げられる(3)。このほか、賢治が妹の幻影を求める思いに注目し、「青森挽歌」、「オホーツク挽歌」などの一連の挽歌群を考察する際に、北海道体験への言及も散見されている。北海道における縄文文化およびトシの死に関わる賢治の第二回北海道訪問が多くの注目を集めるのに対して、近代日本における北海道の特質と賢治文学との関わり、また第三回の北海道訪問について、言及する論考がほとんどない。

そこで、本章では、賢治の三回目の北海道訪問に注意を払い、札幌農学校に関わる人脈と賢治との関係を整理し、童話作品「ポラーノの広場」およびその関連作品を考察する。これによって、賢治の文学創作において、北海道体験、ないしは北海道への眼差し、そうした背景から浮かび上がる産業組合への関心が、いかなる形で作品化されたのかについて解明する。

2．宮沢賢治と北海道の農業実践

賢治の北海道体験と彼の文学創作との関わりについて、鶴見俊輔が「限界芸術の創作」において、指摘したことがある。「北海道の何を見ても、それにひきくらべてうかんでくるのは故郷岩手県の風物であり、故郷における労働のありかたである。故郷での生活は、ここで新しくとらえられ、どういう方向に改作されるかを新しく模索することをとおして、見なれた生活が対象によって新しい意味をもつようになる」(4)という。賢治の芸術創作の特徴をよく示すものとして、鶴見は北海道への修学旅行の復命書を挙げ、そこに記される内容は、賢治にとっての限界芸術だと主張している。北海道という存在が持つ重要な意味について考察する際に、「〔修学旅行復命書〕」は見逃せない資料である。この賢治が執筆した修学旅行の報告書において、修学旅行の日程と感想が詳しく書かれている。その中に、以下のような注目すべき一節がある。

一行は午前十時半
北海道帝国大学に至る。門を入るや学生二名出迎へ講堂に案内す。此の日総長旅行出発を延期して一行を待つ。
蓋しその花巻出身なるによる。即ち総長より生徒に対し一場の訓辞あり。要旨まづ新開地と旧き農業地とに於る農業者の諸困難を比較し殊に后者に処して旧慣弊風を改良し日進の文明を摂取すること榛茨の未開地に当るよりも難く大なる覚悟と努力とを要する所以並に今日は大切なる農業の黎明期にして実に斯土を直ちに天上となし得るや否や岐れて存する処なりといふにあり。引率者は立ちて答辞を述べそれより学生食堂に於て菓子牛乳の饗を受く。牛乳甘美にして新鮮且つや勧の切なるまゝに恐らくは各人一立を超ゆるまで総長の好意を辞せざりしが如し(5)。

当時、北海道帝国大学総長を務めていた佐藤昌介は、一八五六年南部藩士佐藤昌蔵の長男として岩手県花巻に生まれた。一八七四年に上京し、外国語学校で学び、一八七六年札幌農学校に入り、クラーク博士について農学を学んだ。佐藤総長が旅行出発を延期し、賢治引率の生徒を歓迎したことから、花巻出身の総長が同郷の一行を重視していたことがわかる。『【新】校本宮沢賢治全集』に収録された年譜によれば、会見中、佐藤総長は「得意の大農論を説いたことであろうし、生徒たちは、此の郷土出身の偉人が自分らと同じくひどい南部弁であることに尊敬と親愛を覚えたにちがいない」(6)という。農学専門学校出身の偉大な同郷人・佐藤昌介は、農学を目指す賢治にとって、憧れの存在であっただろう。そこで、北海道で出会った人物およびその思想が賢治に与えた影響を具体的に捉えるため、北海道農業発展の歴史を辿ってみよう。

一八六九年開拓使庁の設置に伴って形成し始めた北海道農業は、「おおよそ四十年を経た明治末年から大正初年にかけて、その成立基盤をほぼ形成し終えたとされる」(7)。最初、北海道の領有を早急に確立することを目指し、屯田兵制度が実施された。それと同時に、

ほとんど未開の野原に近代的な生産様式を導入するため、札幌農学校が開設され、多くの外国人技術者や教育者が招かれ、欧米の農業技術や理念などを導入した。欧米農法と在来農法と比較しながら、日本農業の担い手である小農を批判する立場から、佐藤昌介が提唱したのは、「大農論」(8)である。その中心思想として、佐藤は「我国労力的農業を変して資本的農業と為し過小農的農業組織を変して比較的大農組織と為し乃ち先つ内容を改めて根底を固ふし以て世界農業に一歩を進むることなからざるべからず」(9)と述べている。ただし、北海道の土地はアメリカの独占的経営を容れるほど広大ではない状況を考慮した上で、佐藤は大農経営について、「単純ナル栽培的大農経営ハ本道ノ気候風土之ヲ許サス。必スヤ農牧混同ニ出テサルヲ得ス」(10)と強調している。しかし、北海道農業の実際は佐藤の期待のように発展できず、大農経営の挫折から小作農場制、大地主・零細小作制が支配的となる。ただ、佐藤の「大農論」の考え方は消えるわけではなく、札幌農学校の伝統的学説として継承されたのである。

小作問題の状況を理解するには、それに深く関わる地主制の形成と発展過程を把握しなければならない。一八八六年、北海道土地払下規則および国有未開地処分法に拠る無償付与の実施が行われ、北海道における大土地所有制は急速に進んだ。とくに一八九〇年代、佐藤が提唱する大農場経営が多く試みられた。だが、「札幌農学校同窓会農場を除いてほとんど失敗に終わり」(11)、後に小作農場に転換するに至った。「かくて、地主的大土地所有（貸付地主）と農民的零細所有（自作農）、無所有（小作農）との間の不均等が激しくなった。そしてそれが根因となって、小作農のみならず多くの自作農の経営、生活を不安定にし、自然災害や経済変動による没落にさらすとともに、原生地力の掠奪経営を余儀なからしめた」(12)のである。この小作問題に対して、北海道庁は札幌農学校教授新渡戸稲造の指導のもとに、「北海道小作条例草案」を作成し、小作農への土地付与および自作農の扶植政策が唱えられた。小作問題の解決過程において、重要な役割を果たした新渡戸稲造も、賢治にとっては未知の人物ではない。新渡戸は賢治が在籍していた盛岡農学校で訓話を行ったり、産業組合中央会岩手支会長に選出されたりしたことで、賢治の心に焼き付いていた人物であったことは間違いない。

ところで、新渡戸が提唱した新墾地における自作農の扶植の制度によって、自作地が小作地を上回るようになる。加えて小作人の作り出した余剰分がすべて地主の手に移った。この経済的重圧および農場規則による人身的隷属は、地主と小作人の矛盾の深刻化を導いた。また、このような矛盾は、第一次世界大戦の外延的拡大によって引き延ばされ、一九一八年の米騒動、ロシア革命の時期を経て、戦後恐慌を迎え、地主と小作との矛盾は爆発し、北海道農業の再編成が要請される。こうした、地主制の調整と農民層の分解の過程において、有島武郎による農場解放という衝撃な事件が起きた。一九二二年、有島武郎は「狩太共生農団信用組合」を設立し、旧小作人を結集し、土地共有・相互扶助の協力精神を基とする農民団体を作り出した。農場解放後、農場運営の協力と指導を依頼されたのは、有島の長年の友人、北大教授森本厚吉である。彼は有島の不労所得のために

抱く精神的苦痛を理解し、土地共有の原理的正しさおよび実践の意義を肯定する。しかし、実現の困難さを認識する森本は、共生農団を当時の産業組合法に従い、産業組合の長所を発揮し、小作組合を作り、「相当年限、組合員と社会そのものゝ訓練を行ふて、適当の時期の来るのを待ち、更に一層徹底的の処置をとらん」(13)と述べる。

以上述べた北海道における農業発展の歴史は、主に小作問題およびその解決を巡って展開されている。賢治が生きていた東北地方は、同じく深刻な小作問題を抱いていた土地である。農民問題に深い関心を持っている賢治は、北海道の人々が行った農業実践――佐藤昌介が提唱した大農経営、新渡戸稲造が主張する小作農扶植政策、また有島武郎が行う農場解放を、当然視野に入れていた。特に、有島の農場解放は、共産農団(14)と名乗りながら、産業組合の性質を持っていたため、異色な出来事として、賢治の目を引いたと思われる。農場解放の翌年、賢治は十年ぶりに北海道を訪れた。この二回目の訪問と三回目との間に、有島武郎と中央公論社記者の波多野秋子の心中自殺が挟まれている。この事件が新聞紙上を賑わし、それが契機となって有島の農場解放の事件がさらに広い範囲で、人々に注目された。賢治の北海道訪問とこのような事件の時間的合致、また賢治が札幌農学校に対し高い関心を持っていたことから見れば、賢治にとっても、有島の農場解放のニュースは既知の事柄であったに違いない。しかしながら、賢治はこれらのことについて、どのように考え、受容したのかについては、直接言及することはなかった。そこで、賢治の農業政策に関わる文学作品について考察することで、上述の同時代言説等との関連性を浮かび上がらせたい。

3. 賢治文学と産業組合

本章で中心的に取り上げるのは「ポラーノの広場」およびその関連作品である。「ポラーノの広場」は賢治生前には未発表であり、賢治の多くの作品と同じように、繰り返し改稿がなされた作品である。「ポラーノの広場」は一九二七年六月以降、ひとまず脱稿し、その後の手入れは一九三一年から一九三三年までに行われたと推測される。関連作品として、短編童話「毒蛾」、初期形「〔ポランの広場〕」、戯曲「ポランの広場」が挙げられる。「毒蛾」は、一九二二年七月に、盛岡で起こった毒蛾事件の直後に書かれたものである。文部局の巡回官「私」がイーハトーブ地方の首都マリオ市に出張中に、毒蛾事件に遭遇する経験談が主な内容である。結末におけるコワック大学での記事を除き、「ポラーノの広場」の第五章「センダード市の毒蛾」とほとんど一致する。初期形「〔ポランの広場〕」は一九二四年二月から一九二六年三月までのある時期に創作されたのであるが、部分的に欠落するため、便宜的に「〔ポランの広場〕」のタイトルが付された。「〔ポランの広場〕」の第三章部分を下敷きに劇化したものとして、「ポランの広場」をタイトルとする劇曲がある。一九二四年八月五日付の『岩手日報』に掲載された記事によれば、「ポランの広場」、「飢餓陣営」、「植物医師」、「種山ヶ原」の四部作は、一九二四年八月十日に、花巻農学校で公開上演された(15)。賢治自身が付けたタイトル「ファンタジー」の意味が示すように、初期形の「〔ポランの広場〕」

および戯曲「ポランの広場」は、幻想的な要素が溢れる作品である。

それに対し、後期形「ポラーノの広場」では、初期形の幻想的な内容が削除され、産業組合に関する内容が加筆されている。これによって、「ポラーノの広場」は現実的な物語として読めるようになる。本稿では、加筆された産業組合に注目する。

当時の全国規模での小作紛争に対して、人々は積極的にその解決法を探っていたのである。前節に述べたように、札幌農学校文化圏の人物たちの実践もそれにあたる。この時期の賢治も農民運動に足を踏み出し、羅須地人協会の活動を始めていた。ただし、同じ個人の発想に基づく農民運動であったが、宮沢賢治と有島武郎は異なる観点から、行動をとっている。自分の所属階級に強い負い目を持っている有島武郎は、社会主義思想の影響で、私有財産を悪として認識し、土地の所有問題に焦点を置き、農場解放を実践した。それに対して、宮沢賢治は自分の出自に負い目を持っているが、教師を辞め、当事者として農民になる道を選び、農民問題を解決しようとしている。一九二六年四月一日から、花巻農学校の教師を辞めた賢治は、花巻川口町下根子に自給自足の生活を始め、昼間は周囲の田畑で農作業に従事し、夜には農民たちを集め、農業指導や文化活動を行っていた。これは賢治が提唱した「農民芸術」の実践として理解することができる。活動時間が短いものの、羅須地人協会は、賢治の生涯における非常に重要な農業実践活動の一つとして認められるべきである。しかし、このような実践活動は、賢治の文学作品において、一切その姿が見えず、羅須地人協会の活動が開始する直前に創作された「ポランの広場」においても、それについての言及がなされていない。それに対して、羅須地人協会の活動が休止した年の六月に脱稿した「ポラーノの広場」においては、産業組合の存在が現れてきた。

産業組合というのは、一九〇〇年、当時の農政官僚平田東助が産業組合法を制定することによって誕生したシステムである。その目的は、資本主義の発展に伴って没落した中小生産者が自らの経済的立場を保護することにある。一九二七年の金融恐慌および一九二九年に始まる大恐慌が農村経済に悪影響をもたらし、産業組合は当時の時代状況に合わせ、中小生産者の利益を守る政策を出し、存在感を強める契機を迎えた(16)。いずれも同じく農民生活状況の改善を目的とする活動であるが、なぜ、賢治が自分の文学作品の素材としたのは、羅須地人協会ではなく、産業組合だったのであろうか。この問題を検討するため、賢治文学における産業組合の内容をまず確認しよう。

賢治文学に産業組合の姿が最初に登場するのは、「春と修羅　第二集」に収録されている「産業組合青年会」である。この詩稿において、

「部落部落の小組合が／ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち／村ごとの〔〕またその聯合の大きなものが／山地の肩をひととこ砕いて／石灰岩末の幾千車かを／酸えた野原にそゝいだり／ゴムから靴を鋳たりもしやう」(17)というような産業組合の事業内容が描かれる。この事業内容は、「ポラーノの広場」における産業組合と比べても大きな差異が存在しない。だが、「ポラーノの広場」における明るい結末の雰囲気とは異なり、この詩においては、やや暗い雰囲気が基調

となっている。

この詩に対する分析を通じて、賢治における産業組合問題について検討した先行研究として、まず山内修の論考が挙げられる。山内は賢治の農村改革に対する関心を前向きの姿勢として読み取り、賢治が「産業組合を農村の現状を救うひとつの方法であるとみなしていた」(18)と述べている。しかし、それに対して、島村輝はこの詩において、産業組合青年会に対して好意的に描かれていないと述べ、そこから賢治が産業組合に対する否定的な態度を読み取っている(19)。両者の論考は、賢治における産業組合について論じるものの、産業組合が重要なモチーフとして用いられる「ポラーノの広場」について簡単に触れる程度で済ましていることに、問題があるように思われる。

「産業組合青年会」だけではなく、賢治における産業組合と童話作品「ポラーノの広場」と繋げて考える論考として、堀澤光儀の論が挙げられる。堀澤は近代協同組合の元祖であるイギリスロッチデールの先駆者たちが提唱する「相互扶助と社会的平等と友愛の世界」という理想は、賢治の「ポラーノの広場」に驚くほど似ていると述べている(20)。また、日本の資本主義発展のなかで産業組合を客観的に捉えようとした先行研究として、西山泰男の論考がある。西山は、「地主の土地変換要求に対しての譲歩を迫り、小作農との『共存同栄』が叫ばれ、農業倉庫業、加工事業の振興」(21)という当時の時代状況から、「ポラーノの広場」の出現条件が整うと述べた。ただし、両者の論考では、「ポラーノの広場」の具体的な内容についてほとんど触れていないような状況に止まり、賢治の文学作品における産業組合に対する姿勢がどのようなものなのかについても、具体的に描かれていない。そこで、賢治における産業組合問題を究明するため、産業組合に深く関わる「ポラーノの広場」およびその改稿を含め、作品全体から考察する必要があると考えられる。

4.「ポラーノの広場」までの改稿と産業組合の成立

「〔ポランの広場〕」から「ポラーノの広場」までの改稿を考察する際に、まず、登場人物の設定の変化から着手するのが有効だと考えられる。それは、登場人物の設定の変化に伴い、作中における登場人物の構図が変わり、テクスト読解を異なる方向に導くからである。

「〔ポランの広場〕」において、最初に注目すべきなのは〈子ども―大人〉という二項対立の構図である。ファリーズ小学校の生徒ファゼロは、野性の少年であり、ぶっきら棒な話し方で「私」と会話する。ファゼロは幼い時、一回ポランの広場に行ったことがある。「お菓子だってオーケストラだっていくらでもある」(22)から、ポランの広場はファゼロにとって、喜ばしい存在である。このようなところから、ファゼロの遊び好きな子どもとしての性格が現れてくる。これに対して、作中の「私」は、いつも仕事の忙しさを口にする博物局の第十六等官である。ファゼロが話した広場に興味を持つようになり、同行する。ポランの広場に行く途中、「私」は「空の奇麗だったこと」、「天の川がｘといふ字の形にぼんやり白くかかってゐ」るのを見、また「ポラン広場衣裳係」および蜂たちの手助けで仮装する。超現実

で神秘に満ちている世界が広がっている。ポランの広場に着くと、楽しい宴会の最中で山猫博士が「私」とファゼロをからかったのに対して、ファゼロは「顔をまっかにして眼も燃えるばかりぶりぶり怒って」歌で反撃する。山猫博士とファゼロの紛争は決闘まで発展したが、これらのすべてを目撃する「私」は、決闘後、部外者のようにファゼロに関心を払わず、自分の仕事のことを思い出し、先にポランの広場から離れてしまう。それから、二回目の広場探しについて、「私」とファゼロはそれぞれの目的を持ちながら出発する。ファゼロは遊び心でポランの広場に行くのに対して、「私」はこの頃「考へた天の川のほんたうの構造を演説してみたかった」のだ。以上から見れば、ファゼロと「私」はポランの広場を探しにいく同行者ではあるが、いつも仕事中心の生活を送る「私」は、気性が激しい子どもであるファゼロにとって、まったく異なる大人の世界の存在である。

しかし、後期形「ポラーノの広場」において、〈大人―子ども〉の対立的な構図は身分の〈高―低〉および経済状況の〈優―劣〉の構図によって入れ替えられる。このような転換は「私」と山猫博士の二つの人物設定の変化によって実現される。まず、「ポラーノの広場」における「私」は、同じく博物局の役員であるが、初期形の第十六等官から第十七等官まで位階が下がる。一等だけの差異で、大差ではないかもしれないが、官位を下げるという改稿行為そのものは重要である。知識層の身分、つまり普通の農民よりある程度の優位性を維持しながら、もっと低い官位に置かれることによって、「私」は農民が親近感を持ちやすく、直接に接する人物となる。これが、物語の後半において、農民と知識層の下層官吏との連合という下地を提供する。これに対応して、初期形における小学生ファゼロは、子どもの身分から「貧しい少年農夫」ファゼーロに変身する。彼は初期形のように、ぶっきら棒な言い方で「私」を挑発するのではなく、低い身分でわずかな給料しかもらえない「私」と親近感を生じやすい位置におかれている。また、後期形においては、弟のファゼーロと一緒に地主テーモのところに働くロザーロがはじめて登場する。ロザーロの登場を始め、同じく身分が低く、経済的な苦境におかれる人々の存在感が強調される。それと同時に、「ポラーノの広場」では、初期形のファゼロが直面する孤立無援の状況が改善され、ファゼーロと同じ立場をとっている仲間が増え、下層労働者たちは一つのグループを形成する。

「きみはファゼーロって云ふんだね。宛名をどう書いたらいゝかねえ。」「ぼく、ひまを見付けておまへんうちへ行くよ。」「ひまって今日でもいゝよ。」「ぼく仕事があるんだ。」「今日は日曜日ぢやないか。」「いゝえ、ぼくには日曜日はないんだ。」「どうして。」「だって仕事をしなけぁ、」「仕事ってきみのかい。」「旦那んさ。みんなもう〔行〕って畦へはいってるんだ。小麦の草をとってゐるよ。」

「ぢやきみは主人のとこに雇はれてゐるんだね。」「ああ、」「お父さんたちは。」「ない。」「兄さんか誰かは」「姉さんがゐる。」「どこに、」「やっぱり旦那んとこに。」「さうかねえ、」「だけど姉さん

は山猫博士のとこへ行くかも知れないよ。」「何だい。その山猫博士といふのは。」「あだ名なんだ。ほんたうはデステゥパーゴって云ふんだ。」

「デステゥパーゴ？ボー、ガント、デステゥパーゴかい。県の議員の」「えゝ。」「あいつは悪いやつだぜ。あいつのうちがこっちの方にあるのかい。〔1〕」「ああぼくの旦那のうちから見え……」（23）

下層民衆のグループの形成に対応し、山猫博士という人物の設定も変化している。後期形において、山猫博士は少し変わった悪戯好きな人物ではなく、地方の名士、県の議員であり、また「密醸会社」の持ち主でもある。初期形における幻想の雰囲気が溢れるポランの広場は、後期形では俗化され、山猫博士が選挙のために酒宴を挙げる場所として利用される。さらに、後期形では、ファゼーロの雇い主、地主テーモが新しく登場する。彼はポラーノの広場で挙行された酒宴に登場し、山猫博士に対する恐れを示し、機嫌を損ねないように気をつける。政治家と結び付き、利害関係を持っているのがわかる。こうして、山猫博士と地主テーモによって統治層のグループが形成される。「ポラーノの広場」において、貧しくて身分の低い人たちと、お金持ちで社会的地位が高い政治家および地主の連盟との対立関係が形成されるのである。このように改稿された「ポラーノの広場」において、雇用労働者と雇い主、すなわち下層の農民たちと統治階級との衝突が、「私」とファゼーロの対話の直後に描かれている。

「おい、〔1〕こゝら何をぐづぐづしてるんだ。」うしろで大きな声がしました〔。〕見ると一人の赤い帽子をかぶった年老りの頑丈さうな百姓が革むちをもって怒って立ってゐました。「もう一くぎりも働いたかと思って来て見るとまだこんなとこに立ってしゃべってやがる。早く仕事へ行け。」

この両者の対立への解決策として、産業組合の可能性が示唆され、その設立が要請されている。「みんなで一生けん命ポラーノの広場をさがしたんだ。けれどもやっとのことでそれをさがすとそれは選挙につかふ酒盛りだった」というひどい現実に対して、ファゼーロやロザーロなどの人々は、不満を持っていると同時に、自ら生活環境を改善する強い願望を持っているはずである。

「むかしのほんたうのポラーノの広場はまだどこかにあるやうな気がしてぼくは仕方がない。」

「だからぼくらはぼくらの手でこれからそれを拵えやうでないか。」「さうだあんな卑怯な、みっともないわざとじぶんをごまかすやうなそんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行って歌へば、またそこで風を吸へばもう元気がついてあしたの仕事中からだいっぱい勢いよくて面白いやうなさういふポラーノの広場をぼくらはみんなでこさえやう。」「ぼくはきっとできるとお

もふ。」

このように、新しいポラーノの広場の誕生が宣言される。「ファゼーロの組合ははじめはなかなかうまく行かなかったのでしたが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。私はそれからも何べんも遊びに行ったり相談のあるたびに友だちにきいたりしてそれから三年后にはたうたうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつく」ったのである。

ファゼーロたちの組合が立派に発展する内的要因について、以下の二点が考えられる。一つは、キュースト（私）が協力するということ。知識階層に属する下層官吏キューストが、初期形のように自分の仕事ばかりを考える部外者ではなくなり、農民たちに対して同情心を持ち、農業活動の指導を行う協力者となる。もう一つ、産業組合のリーダーになれる人が現れたということ。ファゼーロは山猫博士との決闘後、皮を買う人に出会い、その人に連れられ、センダード市で皮に関する技術を習得する。加えて、ファゼーロは自分の不遇な運命に対し、強い忍耐力と向上心を持ち、自分と同じ境遇の下層労働者の状況をよく知っており、この点からも、産業組合のリーダーとして適切な人選だといえよう。

「〔ポランの広場〕」から「ポラーノの広場」までの改稿において、以上述べたような人物設定を中心とする変更だけではなく、社会環境の変化も注目すべきところである。「〔ポランの広場〕」の舞台は神秘的な野原である。柏の林の中に野原のいろいろな子どもが集っているファリーズ小学校がある。「木沓にかれくさをつめてはい〔こ〕てゐたり本がなくてかはりに白樺の皮を机の上にひろげて置いたり」するように、そこの生徒たちは古風な生活を送っている。初期形におけるポランの広場は、このような野原の一部として、その神秘さが重点的に描かれている。しかし、後期形「ポラーノの広場」では、都市部は野原から分離されている。キュースト（私）が住んでいるモリーオ市と、ファゼーロたちが生活しているイーハトーブという郊外の場所との対比が形成される。これによって、「ポラーノの広場」におけるファゼーロの失踪による移動経緯は特徴的となる。最初に小作人として、地主に雇われるファゼーロが、センダード市に出て、工場労働者になって修業し、また農村に戻り、農村の産業化を促す物語として、「ポラーノの広場」をまとめることができる。新しいポラーノの広場には、「みんなでいろいろに使って〔で〕きるだけお互のいるものは拵えやう」とし、ハム、皮類、醋酸とオートミルを生産し、「モリーオ〔の〕市やセンダードの市はもちろん広くどこへも出るやうになる」のだ。ファゼーロたちの産業組合では、農業の営みだけではなく、商品の製造および販売が行われる。つまり、製造業、商業がともに発展するシステムを形成するのである。

ファゼーロたちの産業組合は、初期の困難な状況を乗り越え、立派に発展していく。産業組合が成立してから七年後、「友だちのないにぎやかなながら荒さんだトキーオの市」にいる「私」のところに、ファゼーロたちから「ポラーノの広場の歌」が書かれた手紙が届くのである。

つめくさ灯ともす　夜のひろば／むかしのラルゴを　うたひかはし／雲をもどよもし　夜風にわすれて／とりいれまぢかに　年ようれぬ／まさしきねがひに　いさかふとも／銀河のかなたに　ともにわらひ／なべてのなや〔み〕を　たきゞともしつゝ、／はえある世界を　ともにつくらん

この歌の中に、ファゼーロたちの産業組合の発足から今後の発展までが歌われている。歌の前半に描かれる昔のポラーノの広場の風景は、「私」にとって、懐かしい思い出である。歌の後半に、産業組合が「銀河のかなた」まで発展するという、未来への展望が描かれる。これによって、賢治が産業組合に託した希望が表現されている。

5．おわりに――宮沢賢治における産業組合

では、賢治文学に登場する産業組合は、現実とどのように関わっているのだろうか。経済危機、政治危機が充満している激動の大正時代において、理想的な農民共同体の夢は敏感な神経を持っている作家たちによって実践されていた。前章で言及した伊藤信吉は、有島の「狩太共生農団」、宮沢の「羅須地人協会」、武者小路の「新しき村」の三つの共同体実験を取り上げ、日本近代文学とユートピア実践との関わりについて論じた(24)。伊藤の論を踏まえ、賢治の「ポラーノの広場」の時代背景を視野に入れ、武者小路実篤の「新しき村」と対照させ、分析を行うのは黄英の「ポラーノの広場」論(25)である。このような賢治と武者小路との関連性を述べる論考が存在するのに対して、有島と賢治の関係性、とりわけ産業組合の性質を持っている有島農場解放に対する賢治の関心については、あまり重視されていない。しかし、前述のように、有島武郎の農場解放は、賢治を刺激した出来事であろう。「ポラーノの広場」の改稿における産業組合の加筆も、それに関係していると考えられる。ただし、有島農場の解放方式と異なり、「ポラーノの広場」では、農民の自主性を発揮し、自発的に産業組合を作る内容が描かれている。ここから、上層所有者が下層農民を解放するという、有島農場解放にあった一つの難点を理解し、そこに注意を払った賢治の姿が看取できる。

もちろん、この時期に、賢治が産業組合に関心を持ったのは、一九二〇年代から三〇年代にかけての小作問題の深刻化、また産業組合の発展という大きな時代背景から生じるものである。宮沢賢治の文学作品に産業組合のモチーフが取り入れられるのも、いきなりのことではなく、賢治自身が産業組合に対する関心を持つようになってから、長期のプロセスを経た結果である。

産業組合のモチーフを始めて取り上げた「産業組合青年会」について考える時、まずそこに記されている「一九二四、一〇、五、」という日付に注目すべきである。この日付によって、賢治がこの時期からすでに産業組合に関心を持っていたことが明白となる。その背景には、一九二四年五月の、賢治の北海道訪問が存在すると考えられる。北海道への訪問を契機に、賢治は当時の北海道の農業実態を見聞し、また自分が生きている東北地方における農村問題の解決に

ついて考える機会を得た。小作問題を解決するため、札幌農学校文化圏の人物たちが行った農業実践、特に有島の農場解放は、当然賢治の農村問題に対する思考にヒントを提供している。ただし、この時期において、賢治の産業組合に対する態度はまだ積極的だとは言えない。「産業組合青年会」の内容によれば、賢治は産業組合に対して、期待と疑念を同時に持っていることが理解できる。この詩によって表現されるのは、まさにこの時期の賢治が抱いた悩みとそれに対する思索である。

一九二六年、賢治は自分なりに農民運動に足を踏み出し、羅須地人協会の活動を始めた。この活動の直前に創作された「〔ポランの広場〕」において、幻想性があふれるポランの広場に対する憧れは表現されているが、現実的な農業実践の状況は明白に取り入れなかった。一九二七年三月、羅須地人協会の活動は敗北に終り、その反省として、賢治は産業組合に真剣に目を向け、農民運動の成功に必要な要素を考え始めたと考えられる。その結果として、「ポラーノの広場」は複雑な改稿を重ね、強い現実味を持つようになり、階層グループの形成に伴い、悪徳政治家・地主連盟と小作人との矛盾が焦点化される。このような矛盾の解決法として、ファゼーロたちの自発的な産業組合実践が取り上げられる。また、産業組合の成立の要件としては、有能なリーダー・ファゼーロと、それに協力してくれる知識層の下層官吏、それから自ら生活を改善しようとする農民たちの努力などが考えられ、それらに対応する人物設定の変更が行われている。ただし、文学作品に現れる賢治の産業組合に対する考えは、あまりにも楽観的過ぎる。産業組合に農村問題が解決される希望が託されるだけで、その実践過程における困難や挫折を捨象する傾向は認めざるを得ない。

注

（1）「〔或る農学生の日誌〕」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話［Ⅲ］　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月、二五三頁

（2）たとえば、渡部芳紀「宮沢賢治文学散歩」（『国文学　解釈と鑑賞』第五十一巻第十二号、一九八六年十二月、一四二‐一五七頁）、松岡義和『宮沢賢治北紀行』（北海道新聞社、一九九六年四月）、それから藤原浩『宮沢賢治とサハリン』（東洋書店、二〇〇九年六月）は、このような先行研究に属している。

（3）秋枝美保の『宮沢賢治　北方への志向』（朝文社、一九九六年九月）は代表的な論考であるが、賢治の詩に対する考察によって、賢治誕生百年の賢治ブームの背後の精神性と縄文文化、アイヌ文化との親和性が検証された。

（4）鶴見俊輔「限界芸術の創作」『限界芸術論』筑摩書房、一九九九年十一月、五十三頁

（5）「〔修学旅行復命書〕」『【新】校本宮沢賢治全集　第十四巻　雑纂　本文篇』筑摩書房、一九九七年五月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（6）『【新】校本宮沢賢治全集　第十六巻（下）補遺・資料　年譜篇』筑摩書房、二〇〇一年十二月、二七五頁

（7）千葉燎郎「北海道農業論の形成と課題――第一次大戦前を対象に――」湯沢誠編『北海道農業論』日本経済評論社、一九八四年一月、三頁

（8）佐藤昌介の「大農論」について、崎浦誠治「北海道農政と北大」（北海道大学編著『北大百年史　通説』ぎょうせい出版、一九八二年）、高岡熊雄「佐藤昌介先生の『大農論』に就いて」（『北海道農会報』第三十九巻第四六四号、一九三九年八月）を参照。

（9）佐藤昌介「論説　農会に対する希望」『北海道農会報』第一巻第三号、一九〇一年三月、四頁

（10）佐藤昌介「北海道庁に対する献策」中島九郎『佐藤昌介』河崎書店新社、一九五六年九月、一一九頁

（11）千葉燎郎、同前掲、十二頁

（12）湯沢誠「北海道の小作問題と北大」湯沢誠編『北海道農業論』同前掲、二〇〇頁

（13）森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』（河出書房、一九五六年十二月、七十一頁）を参照。

（14）「共産農団」というのは、有島武郎自身がこだわった名称であったが、官憲に許されないだろうという森本厚吉の現実的判断から、「共生」と名乗った。詳しくは、有島武郎研究会編『有島武郎事典』（勉誠出版、二〇一〇年十二月）における「私有農場から共産農団へ」、「森本厚吉」などの項目を参照。

（15）『【新】校本宮沢賢治全集　第十六巻（下）　補遺・資料　年譜篇』（同前掲、二七四頁）を参照。

（16）当時の産業組合状況について、武内哲夫・生田靖「わが国における産業組合思想の系譜」（『協同組合の理論と歴史』ミネルヴァ書房、一九七六年）を参照。

（17）「産業組合青年会」『【新】校本宮沢賢治全集　第三巻　詩［Ⅱ］』筑摩書房、一九九六年十月、一三八頁

（18）山内修『宮沢賢治研究ノート』一九九一年九月、河出書房新社、一四五頁

（19）島村輝「『ポラーノの広場』と『産業組合』」『国文学　解釈と鑑賞』第七十四巻第六号、二〇〇九年六月、一六四‐一六八頁

（20）堀澤光儀「宮沢賢治と産業組合」『新日本文学』第三十九巻第七号、一九八四年七月、六十‐六十二頁

（21）西山泰男「産業組合から賢治文学者へ」『宮沢賢治』洋々社、一九九八年三月、二〇五頁

（22）「〔ポランの広場〕」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（23）「ポラーノの広場」『【新】校本宮沢賢治全集　第十一巻　童話［Ⅳ］　本文篇』筑摩書房、一九九六年一月。以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（24）伊藤信吉、『ユートピア紀行――有島武郎・宮沢賢治・武者小路実篤』講談社、一九七三年

（25）黄英は「現実世界におけるユートピアの再構築――『ポラーノの広場』――」（『宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築』花書院、二〇〇九年二月）において、個と全体の調和の問題に焦点を当て、賢治と武者小路との全体の調和を目指すという理想の共通性を明らかにした。そのうえで、ユートピアの「生成、崩壊、再構築」を描く賢治文学において、「ポラーノの広場」はユートピアの再構築を描く作品だと、評価している。

第Ⅲ部　宮沢賢治の理想世界と自己犠牲

今までの論述では、賢治の共生思想はどのように文学によって表現されているかについて、考察してきた。賢治文学において、共生思想はまず異文化コミュニケーションの過程およびその困難さを描くことで表現されている。また、食の問題における弱肉強食の正当性に対する反発と疑問を巡る検討において、賢治の共生思想も表現されている。第Ⅰ部と第Ⅱ部の考察では、賢治の共生理想が自らの文学作品において表現されている一方で、その実現の困難性も同時に示唆されている。このような葛藤の中に、つねに悩んでいる賢治は、そこから自分自身、それから、彼と同じように苦悩を抱く命のために、救済の道を見つけている。この救済の道こそ、自己犠牲の道である。以下、第Ⅲ部では、第Ⅰ部と第Ⅱ部の内容を踏まえ、賢治が考えていた共生理想の実現法としての自己犠牲について考察する。賢治自身が使ったことのないこの言葉が、如何に賢治文学のキーワードになりえたのか、賢治は自己犠牲の思想をどのように形成し、その背後にどのような時代背景と実体験があったのか。第Ⅲ部では、まず、これらの問題を解明し、その上で、賢治文学に現れる自己犠牲のモチーフについて、具体的な作品分析を通じて、その様相を見極めよう。

具体的に述べると、まず、第９章では、自己犠牲というキーワードの意味について考え、賢治文学における自己犠牲の系譜をまとめ、その自己犠牲思想に関する先行研究を整理する。続く第１０章では、「グスコーブドリの伝記」およびその関連作品を中心に、賢治の自己犠牲思想の形成に存在する要素について考察する。この章では、先行研究を踏まえた上で、仏教思想、キリスト教思想からの影響のほか、賢治が自己犠牲思想を形成した背景として、武士道精神に焦点を当て、両者の関係性について重点的に考察する。第１１章と第１２章では、賢治文学の集大成だと言われる作品――「銀河鉄道の夜」を取り上げ、考察を行う。まず第１１章では、「銀河鉄道の夜」の改稿過程を整理した上で、自己犠牲というテーマを巡り、「銀河鉄道の夜」後期形を中心に作品分析を行う。次に、第１２章で、複雑な改稿によって成立した初期形に目を向け、改稿が作品の読解にもたらす変化および未決性について論じる。このような第Ⅲ部の考察によって、賢治文学における自己犠牲と共生思想との関連性を明らかにし、賢治文学の特質についても究明する。

第９章　宮沢賢治における自己犠牲

１．はじめに

本章では、まず、賢治文学において自己犠牲のモチーフがどのように表現されているかを、具体的なテクスト内容によって考察し、これに基づき、賢治文学における自己犠牲モチーフの特質を見出す。それから、賢治文学における自己犠牲の背景にどのようなものがあるかについて、先行研究を整理しながら考察を行い、賢治の自己犠牲思想について更なる考察の可能性を提示する。

２．賢治文学における自己犠牲の表現

賢治文学の中で、自己犠牲という主題が明確に定着するのは、人生の最後までに改稿などが加えられた「グスコーブドリの伝記」と「銀河鉄道の夜」においてである。しかし、それ以外にも、かなり早い段階で、自己犠牲精神の持ち主は、賢治の作品にも多く登場し、様々な形態をとりつつ、自己犠牲という行為を実践している。

賢治文学における自己犠牲は、自発的な行為であるが、単純に喜んで実行しようとする行為ではない。その背後に葛藤が溢れる思いが満ちているのである。その典型的な例は「よだかの星」である。よだかは自分が多くの羽虫を殺すため、負い目を感じ、その自責の念に駆られ、「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまひません。」(1)と、自分の命を棄てようとする。この場合、よだかの希望は、単なる贖罪の行為として理解することができる。その後、「私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでせう」という言葉が語られ、他人のため何か役に立ちたいという考えが表明される。これによって、贖罪の行為ははじめて自己犠牲として、成り立つのである。このようなよだかの自己犠牲に似ているのは、「銀河鉄道の夜」における蠍である。虫を多く食ったゆえ、自分の罪を意識し、他人の導きになるため、自分の体を燃やし、永遠に銀河の夜空に光るようになる。このように、食物連鎖から脱出できない生き物たちは、殺生に対する負い目を感じながら、単に自分の命を捨てるかわりに、何か他人の役に立ちたいと考えている。このような気持ちは、賢治文学における自己犠牲の原動力である。そして、このような自己犠牲精神を持っている登場人物はほかの作品にもしばしば現れる。次に、いくつかの例を挙げよう。

「二十六夜」

親はかの実も自らは口にせなんぢや、いよいよ餓えて倒れるやうす、疾翔大力これを見て、はやこの身を以て親の餌食とならんものと、いきなり堅く身をちぢめ、息を殺してはりより床へと落ちなされたのぢや。その痛さより、身は砕くるかと思へども、なほも命はあらしやった(2)。

「土神ときつね」

「わしはいまなら誰のためにでも命をやる。みみずが死ななけぁならんならそれにもわしはかはってやっていゝのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云ひました。その眼も黒く立派でした(3)。

「マリヴロンと少女」

「私はもう死んでもいいのでございます。」

「どうしてそんなことを、仰っしゃるのです。あなたはまだまだお若いではありませんか。」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないのでございます。あなたが、もし、もっと立派におなりになる為なら、私なんか、百ぺんでも死にます。」(4)

「山男の四月」

山男はもう支那人が、あんまり気の毒になつてしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、鰯の頭や菜つ葉汁をたべるかはりにくれてやらうとおもひながら答へました(5)。

これらの例で示したように、賢治文学における自己犠牲者たちは、つねに他人のことを念頭におき、他人のため、無私に自分の力を尽くしている。これらの例は、「銀河鉄道の夜」において、「もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて鳥をとってやってもいゝ」(6)と語る鳥捕り、また、「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」と考えているジョバンニの姿をも連想させるだろう。以上のように、賢治文学において、自己犠牲は頻出するモチーフなのである。では次に、賢治文学における自己犠牲行為の特質について考えよう。

3．賢治文学における自己犠牲の特質

まず、賢治文学における自己犠牲行為の一つの特徴として、その受益者の範囲の中に、自己犠牲者の敵対側までが含まれることが挙げられる。

「もう二年ばかり待って呉れ、〔〕おれ〔も〕死ぬのはもうかまはないやうなもんだけれども少し残した仕事もあるしたゞ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまへの家の前でちゃんと死んでゐてやるから。毛皮も胃袋もやってしまふから。」(7)

「なめとこ山の熊」において、自分を殺そうとする猟師に対しても、熊は自分の命を惜しみなく捧げることができる。また、「烏の北斗七星」においても、烏の大尉は、「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひませ

ん」(8)と、戦場での立場を捨てるまで、自己犠牲の決意を表現している。しかし、これらの作品の中に、自己犠牲の決意が語られる一方、それがもたらす結果はほとんど現れていない。自己犠牲の好影響を明白に描き出すのは、「グスコーブドリの伝記」においてである。

三日の後、火山局の船が、カ〔ル〕ボナード島へ急いで行きました。[…]すつかり仕度ができると、ブドリはみんなを船で帰してしまつて、じぶんは一人島に残りました。

そして次の日、イーハトーブの人たちは、青ぞらが緑いろに濁り、日や月が銅いろになつたのを見ました。けれどもそれから三四日たちますと、気候はぐんぐん暖かくなつてきて、その秋はほぼ普通の作柄になりました(9)。

この結末から見えるように、賢治文学における自己犠牲者たちは、無私の自己犠牲を果たすことによって、他人の生活によい影響をもたらしている。賢治文学における自己犠牲の主題について、天沢退二郎は、「ひとのほんとうの幸福のために自己を犠牲にする、自己犠牲者の精神・視点に焦点がしぼられていることを特質としており、それ以外の視点はほとんど問題にされていない」(10)と主張し、「《宮沢賢治》の場合、自己犠牲は自己犠牲者の立場から、報酬も復讐も求めぬ無私性を本質としている」(11)と述べている。では、考察の視点を改めて自己犠牲者たちに向けてみると、自己犠牲という行為は、その受益者ではなく、自己犠牲者たち自身にとって、いったいどのような意味を持っているのだろうか。これから、「学者アラムハラドの見た着物」という作品の内容を通じて、自己犠牲者にとっての自己犠牲行為の意義について検討しよう。

学者のアラムハラドは、塾で十一人の子どもを教えている。ある日、アラムハラドは子どもたちに一つの問いを投げかけている。「人が何としてもさうしないでゐられないことは一体どういふ事だらう」(12)と。タルラという子は、「人は歩いたり物を言ったりいたします」と答える。それで、アラムハラド先生は、「お前はどんなものとでもお前の足をとりかへないか」と続いて質問する。そこで、タルラは「私は飢饉でみんなが死ぬとき若し私の足が無くなることで飢饉がやむなら足を切っても口惜しくありません」と答える。アラムハラドはこの答えを聞き、涙があふれ、次のように語っている。

「さうだ。おまへには歩くことよりも物を言ふことよりももっとしないでいられないことがあった。それでこそ私の弟子なのだ。お前のお父さんは七年前の不作のとき祭壇に上って九日禱りつゞけられた。お前のお父さんはみんなのためには命も惜しくなかったのだ」

このような自己犠牲の思想が現れるやり取りの後、アラムハラド先生は、「人が歩くことよりも言ふことよりももっとしないでゐられないのはいゝことです。[…]すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。善と正義とのためならば命を棄てる人も多い」と述べ、「人は

ほんたうのいゝことが何だかを考へないでゐられないと思ひます」と結論をつけている。この作品で示唆したように、自己犠牲の行為は、「いゝこと」を考えるのを前提としている。善と正義のようないいことを見出し、その実現のために実践しようとする行為の一つとして、自己犠牲が考えられる。自己犠牲は、自分の「いゝこと」という認定に対する、責任を取る行為である。自己犠牲行為の実践を通じて、自分の考えが認められ、自己の価値の最大化を実現することができる。

賢治文学には、自分の人生に対して、無力感・敗北感・劣等感を抱いている登場人物がよく現れる。彼らにとっての自己犠牲行為は、「いゝこと」を考えたり、実行したりすることの証明であり、自分の生き甲斐を実現する唯一の方式であるかもしれない。自己犠牲というのは、自分の存在に罪意識を感じ、自ら自分の存在を消すのではなく、みっともない自分であっても、かつて存在したことに意義を付与する行為であろう。

ただし、ここで注目すべきは、賢治文学における自己犠牲行為の形式として、死に赴くのが圧倒的に多いということである。自己実現の仕方として、これはあまりにも極端な方式であろう。他の動物を食べることでしか生きることができないという生物自身の本能、あるいは将来の可能性が溢れる若さを無視しながら、賢治テクストにおける自己犠牲者は、毅然として、死を選ぶのである。賢治の文学において、死はどのようなイメージを持っているのだろうか。「銀河鉄道の夜」で提示したように、たとえ死んだ後でも、鉄道のような特別な空間において、生者たちは死んでしまった自己犠牲者たちにまた会うことができる。言いかえれば、賢治文学の世界において、死は終わりではない。これは、賢治文学の中で構築される時空間においてこそ実現できることであろう。

4．おわりに――自己犠牲思想の背景にあるもの

では、このような自己犠牲の表現が呈される背景には、どのような要素が存在しているのだろうか。この問題について、多くの先行研究が論じてきた。その中で、圧倒的に多いのは、賢治の自己犠牲思想を彼の仏教信仰に結び付けて論じたものである。例えば、吉田玉水は、賢治文学におけるみんなの幸せのための自己犠牲から、「賢治の人生の支柱となった仏教思想に基づく『衆生救済』『他者救済』の意識がうかがえる」(13)と述べている。賢治が法華経信仰を通じて自己犠牲の精神を学び取ったことは明らかである。しかし、その一方、賢治が唱えた自己犠牲精神と『法華経』において説かれる自己犠牲精神との間に、微妙な差異が存在すると、松岡幹夫が指摘している。

「賢治が考えた自己犠牲はおよそ自己の罪悪性への深刻な嫌悪をともなっていたが、『法華経』の実践観にそのような自己嫌忌の思想はまったくない」(14)のである。松岡は、賢治の自己犠牲思想は、法華経への親近性を持つというより、実家の浄土真宗の思想に近いと述べている。賢治の自己犠牲思想から読み取った仏教思想は、研究者によって異なるものの、自己犠牲の精神やその行為は、多くの先行研究において、ポジティブに評価されている。

しかし、その一方、自己犠牲という語彙に含まれるネガティブなニュアンスに注意を払い、賢治文学に描かれる「他者の幸福の為に喜んで命を捧げる行為を、賢治の意向をくみ取れば、我々は《捨身布施》と名付けるべき」(15)だと、大塚常樹が指摘している。大塚は自己犠牲という語彙の使用について、異なる意見を提示したが、仏教思想の賢治文学における形象化に対して、肯定的な態度を持っている。

これらの自己犠牲的行為を肯定的に捉える立場に対し、見田宗介は異なる意見を示した。見田は賢治が法華経を信仰するため、国柱会運動に身を投ずることを自己犠牲の行為と見なし、そこから、自己抑圧の構図を読み取り、自己犠牲は「抑圧的な支配のもとで身を粉にして働くことをも美化する道徳として利用されうる」(16)と述べた。このように、見田は自己犠牲の崇高性ではなく、その危険性を指摘している。見田の見解は鋭いもので、それまであまり注目されていなかった自己犠牲行為の一面を提示している。ただしこの見解は、賢治の国柱会入会などの経験を自己犠牲行為と見なし、国柱会の国家主義的特徴にすぐに連結させ、賢治文学における広い意味での自己犠牲を、国のための犠牲という狭い意味での自己犠牲に接近させようとするきらいがある。

自己犠牲は従来、様々な分野で重視される概念であるため、賢治文学における自己犠牲を解釈するには、仏教思想のみを抽出するのでは不十分であろう。そこで、賢治文学の自己犠牲について、新たな解釈を提示したのが、佐藤泰正の「賢治とキリスト教――『銀河鉄道の夜』再考――」(17)である。周知のように、キリスト教の教義においても、自己犠牲の考えは見られる。『ヨハネ福音書』には友の為に命を捨てる以上に大きな愛がないというように、キリスト教では、自己犠牲は愛だとされている。佐藤の論では、賢治がキリスト教に対して深い興味を持っていたことが検証されている。その上で、「銀河鉄道の夜」における青年教師、またカムパネルラの死は、キリスト教の自己犠牲精神の現れだと主張されている。

自己犠牲という表現の使用について、前述の先行研究においても、大塚のように、その妥当性を疑う論者がいる。しかし、これは仏教思想という特定の文脈において、得られる結論である。本論文では、一般的な理解に基づき、賢治文学によく現れる、他人のため、またある目的を達成するため、大切な命を捧げようとする行為あるいは考え方を、自己犠牲と呼称する。

次章から、これらの先行研究を踏まえた上で、「グスコーブドリの伝記」および「銀河鉄道の夜」という二つの、自己犠牲精神を最も反映する作品を分析することで、賢治文学における自己犠牲の行為についてさらに考察を深めよう。

注

（1）「よだかの星」『【新】校本宮沢賢治全集　第八巻　童話Ⅰ　本文篇』筑摩書房、一九九五年五月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。
（2）「二十六夜」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』筑摩書房、一九九五年六月
（3）「土神ときつね」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』同前掲
（4）「マリヴロンと少女」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月
（5）「山男の四月」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話[Ⅴ]・劇・その他　本文篇』筑摩書房、一九九五年十一月
（6）「銀河鉄道の夜」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。
（7）「なめとこ山の熊」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話[Ⅴ]・劇・その他　本文篇』同前掲
（8）「烏の北斗七星」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話[Ⅴ]・劇・その他　本文篇』同前掲
（9）「グスコーブドリの伝記」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話[Ⅴ]・劇・その他　本文篇』同前掲
（10）天沢退二郎「《宮沢賢治》と《アーサー王・聖杯》・補足」『明治学院論叢』第五六一号、一九九五年三月、四頁
（11）同前
（12）「学者アラムハラドの着物」『【新】校本宮沢賢治全集　第九巻　童話Ⅱ　本文篇』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。
（13）吉田玉水「宮沢賢治文学における自己犠牲概念――自己犠牲までの道程――」『愛媛国文研究』第三十八号、一九八八年十二月、三十三頁
（14）松岡幹夫「宮沢賢治の共生倫理観」『日蓮仏教の社会思想的展開　近代日本の宗教的イデオロギー』東京大学出版会、二〇〇五年三月、二八二頁
（15）大塚常樹『グスコーブドリの伝記』『国文学　解釈と鑑賞』第六十一巻第十一号、一九九六年十一月、一六〇頁
（16）見田宗介「焼身幻想」『宮沢賢治　存在の祭りの中へ』岩波書店、二〇〇一年六月、一五四頁
（17）佐藤泰正「賢治とキリスト教――『銀河鉄道の夜』再考――」『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、二〇〇〇年二月、二十‐二十六頁

第１０章　賢治文学における自己犠牲と武士道思想

――「グスコーブドリの伝記」を中心に――

１．はじめに

本章では、自己犠牲の精神を重視する武士道思想と関連づけ、賢治文学における自己犠牲について考察する。まず、武士道思想が普及する過程を確認しながら、賢治が生きた時代までの武士道思想の変容状況を把握する。次に、賢治と関わりのある人物たちの武士道思想に焦点を絞り、賢治文学における自己犠牲と武士道思想との関係性を概観する。それから、自己犠牲のモチーフが最も典型的に現れる「グスコーブドリの伝記」およびその関連作品を取り上げ、武士道精神は如何に表現されているかについて具体的に考察し、賢治文学における自己犠牲に対する再考を行う。

２．武士道思想の歴史

では、なぜ賢治文学について考える時、武士道思想が浮上するのだろうか。まず、時代状況の理由を挙げると、賢治が生きた時代は、武士道が盛んに議論された時代であった。本節では、武士道の歴史を辿りながら、賢治が生きた時代までの武士道思想の変容過程を簡潔に辿ってみる。

武士道という言葉を定義づけるのは難しい。それはこの言葉の意味が、時代の変遷に伴ってずっと変化しているからである。鎌倉幕府から大政奉還に至るまでの約七〇〇年間、武士道という言葉は、支配階級である武士の道を表す多くの言葉のうちの一つである。「武士道」のほかに、「侍道」、「武士の道」、「士道」などがあった。武士道という言葉が、はじめて使われたのは、室町時代の末期、伴信友本の『塵国記』の中であったが、一つの行動様式として明確に述べているのは、高坂弾正の『甲陽軍艦』である。それ以降、山本常朝の『葉隠』や大道寺友山の『武道初心集』など数少ない文献の中に、武士道という語が現れたが、明治時代以前には、あまり使われていなかった。武士道という語が一般的に使われるようになるのは、明治維新以降、日清戦争で日本が勝利をつかみ取った後のことである(1)。

日清・日露戦争の勝利の影響で、国家主義が噴出し、それに伴い、武士道思想の再解釈も積極的に行われていた。十九世紀末期、武士道思想を論じ、関心を集めた論文として、山岡鉄舟と福沢諭吉によるものがある。山岡鉄舟は西洋から輸入した科学技術、物質主義の考え方に対して、否定的な態度を示し、武士道こそが日本の伝統的精神だと強調した。これに対して、福沢諭吉は「痩我慢の説」において、武士道を中心的に扱ってはいない。しかし、両者の、武士道を、

日本を象徴するシンボルとして認め、その復活によって、日本をより良い国として作り上げたいという動機は、共通している(2)。

このような言説は、武士道の人気を高めていった。二十世紀の初頭になり、武士道思想の普及に、大きな影響を与える人物がまた出てきた。この時期の典型的な武士道言説には、井上哲次郎のような国家主義者によるものと、新渡戸稲造、内村鑑三のようなキリスト教徒によるものの二つがある。このうち、国家主義的なものが圧倒的に多数であり、新渡戸稲造の『武士道』に代表される、キリスト教徒によるものは少数派であった。両者は共に武士道を日本民族の道徳、国民道徳として認めているが、国家主義者とキリスト教徒というそれぞれの立場から、異なる重点を置き、武士道の徳目を論じている。

「明治憲法」、「教育勅語」および「軍人勅諭」の頒布によって、日本は擬似家族国家として成立し、神格化される天皇に服従し忠誠を尽くすことが求められた。熱烈な国家主義者としての井上哲次郎は、武士道思想を論じる時、こうした忠君愛国の精神を度々強調し、国体思想への系統を明白に述べている。井上は日本の民族精神を武士道精神と呼びかえ、武士道という概念は無条件で受け入れられなければならないと主張した(3)。このような日本国家主義の色合いが強い武士道観と対照的なのは、キリスト教徒である新渡戸稲造の武士道論である。

当時の国家主義者は天皇神権説を信仰し、君主への無条件の服従を強調している。それに対して、新渡戸は天皇象徴説をまずはっきり打ち出し、君主への無条件の服従を批判し、君主の気紛れや妄念邪想のため自己の良心を犠牲するのは、本当の武士道の忠義ではないと指摘した(4)。その上で、新渡戸はキリスト教義と親和性が高い、道徳システムとしての武士道思想を作り上げていた。後に具体的に述べるが、賢治文学における自己犠牲と共通性を持っているのは、この新渡戸の武士道思想だと考えられる。

最初に英文で書かれた『武士道』は、一八九九年アメリカで出版され、一九〇八年、桜井鷗村による訳で日本でも出版された。『武士道』は現在まで読み継がれ、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトにも愛読されたことは、よく知られるエピソードであろう。『武士道』の序文では、新渡戸は執筆の動機として、ベルギーの法学者ド・ラブレーから宗教教育のない日本で、道徳教育はどのように授けられるのかと聞かれ、即答できなかったことを挙げている。そこで、新渡戸は十年ほどの時間をかけ、自分の正邪善悪の観念を形作るのは武士道であったと気づき、『武士道』という本を書き上げた。その基調となる第一章「道徳体系としての武士道」では、新渡戸は以下のように記している。

> 武士道 chivalry は、日本の標章である桜の花にまさるとも劣らない、わが国に根ざした花である。それはわれわれの歴史の植物標本箱に保存される干からびた古い美徳ではない。私たちの間にあってそれは、いまだ力と美を持つ生きた存在である。そしてそれは、なんら実体的な形を持たないが、道徳的雰囲気の香り

を漂わせ、私たちがなおその魅力のもとに置かれていることを気づかせてくれる。

それを育んだ社会的条件は、すでに消え失せて久しい。しかし、現在はもう消滅した遠くの星々が、いまなお私たちに光を投げかけているのと同様、封建制の子である武士道の光は、その母なる制度より長く生き続け、いまも私たちの道徳の道を照らしている(5)。

この本において、武士道はその起源から語られるが、淵源には、儒教と仏教の存在があると指摘されている。また、武士道について、正直、勇気、仁愛、礼儀、誠実、名誉、忠実、克己、切腹、敵討ち、日本刀といった徳目や物事を巡って論じられている。これらの論述によって、封建社会における統治階級の政治的武士道に、近代国家における国民の精神的武士道のイメージが加えられ、武士道が日本の民族道徳システムとして確立された。さらに、武士道の後に平民道(6)の到来を期待する新渡戸は、武士道の感化とその将来といった問題まで言及している。

以上、武士道思想の変容の歴史を辿ってみた。このような、武士道言説が盛んに議論された時代に生きていた宮沢賢治が創作した作品には、新渡戸稲造を代表とする武士道思想との共通性が見られる。次節では、まずその関係性を概観してみよう。

3. 武士道思想と賢治文学

ここで、まず付言しておきたい。前章で提示したように、賢治文学における自己犠牲について、従来の研究では、仏教思想との関連性がよく論じられ、次に、キリスト教の影響も検証されている。本章で、賢治における自己犠牲を武士道精神と関連づけて論じるのは、先行研究の主張を否定するわけではない。賢治文学における自己犠牲に対する仏教思想からの影響は、無論無視してはいけない。賢治文学における自己犠牲は、人間中心主義を遥かに超えるという特徴を持っている。これは、やはり万物皆仏、山川草木悉有仏性という、仏教の世界観を基盤とするものであろう。ただし、当時盛んに議論された時代言説および賢治を巡る人脈から見ると、賢治における自己犠牲について考える際に、キリスト教や武士道などからの影響も加味される必要があると思われる。そのため、新渡戸稲造や内村鑑三のようなキリスト教徒による武士道言説は注目に値するのである。

新渡戸稲造は、一八六二年南部藩士の子として生まれ、東京外国語学校に学び、札幌農学校に第二期生として入学し、日本の歴史上重要な役割を果たした人物の一人である。札幌農学校時代に、キリスト教を信仰するようになり、これを契機に、武士道という日本人の道徳意識の基礎を再発見することができた。新渡戸稲造の武士道思想は以下の三つの独特の特徴を持っている。まず、前節でも強調したが、新渡戸の武士道思想は、道徳システムとしての性質を持っている。徳目の中に、君主への忠義は美徳として認められているが、「武士道は、われわれの良心を君主の奴隷となすべきことを要求し

なかった」(7)と指摘した。つまり、新渡戸の武士道思想は、天皇制を基盤とする国家主義や国体と繋げて論じられる武士道言説とは明白に区別されている。次に、新渡戸は武士道思想の淵源には仏教、儒教などの存在を指摘する一方、「孔子の仁の思想――仏教の慈悲の思想もこれに加えよう――は、キリスト教の愛の観念に到達する」(8)と述べ、武士道思想はキリスト教に親和性を持つことをも認めている。それから、『武士道』の第十七章「武士道の未来」において、新渡戸は武力で建てられた国家は永遠の存在にはなれないと指摘し、戦闘を仕事とする武士の武士道は、封建制の終焉とともに消え去る運命にあることを認識した。そして、これから長く生き延びるのは、平和に繋がる道徳としての武士道であると、新渡戸は強調している。

では、新渡戸のこれらの武士道思想はどのようにして賢治に知られたのだろうか。新渡戸稲造と宮沢賢治との関わりは、従来の研究では、あまり重視されていない。しかし、同じ岩手出身の新渡戸稲造は、賢治にとって、強い存在感のある人物のはずである。新渡戸が第一高校の学長として盛岡農学校に訓話に行ったのは、ちょうど賢治が入学した年であった。また、後に賢治が訪れた北海道帝国大学の前身は札幌農学校であり、そこで、新渡戸は学生時代を送っていた。賢治が札幌農学校に強い関心を持ち、新渡戸稲造の存在を知っていたことは間違いない。さらに、盛岡高等農林学校の図書館には、賢治の専門である農学についての新渡戸の著書はもちろん、それ以外にも、『武士道』(一九〇八年)、『修養』(一九一一年)、『世渡りの道』(一九一二年)など、多数の新渡戸の著書が所蔵されている(9)。賢治はこれらの著書を読み、新渡戸稲造の武士道思想にも触れただろう。そして、新渡戸のこれらの思想は、賢治文学の自己犠牲の表現に反映されたと思われる。

『武士道』において、自己犠牲の概念は「女性の教育と地位」という一章ではじめて明白に打ち出された。「武士道の全教訓は自己犠牲の精神がすみずみまで浸透しており、それは女性だけではなく男性にも要求された」(10)ということが強調されている。新渡戸のいう「自己犠牲」は、具体的に義、仁、忠などの徳目に現れている。「義は、自分の身の処し方を、道理に従い、ためらわず決断する心を言う――死すべき時に死に、討つべきに討つことである」(11)。新渡戸は著名な武士林子平の言葉を引用し、義の概念を説明している。次に、仁について、従来王者の徳として認められているが、新渡戸はそれを慈悲、惻隠の心として認識し、「弱者、劣者、敗者に対する仁は、特にサムライにふさわしいものとして、いつも賞賛された」(12)と述べている。それから、武士にとっての最も大きな名誉――忠である。忠義の武士は、主君の身代わりとして死に赴き、自己を犠牲し、国家に仕える。こうした徳目は、新渡戸の武士道思想における自己犠牲の判断標準となるだろう。

しかし、ここで注意しなければならない点がある。新渡戸は『武士道』において、君主と国のための犠牲を認めたが、「自分自身の良心を、主君の気まぐれな意志や酔狂や妄想のために犠牲にする者に対して、武士道では低い評価が与えられた」(13)と述べ、盲目の自己犠牲を強く批判した。日本型家族国家ナショナリズムは、天皇制を基

盤とし、天皇と国家を重ねるという特徴を持っている。このような国体と結び付き、天皇＝国家への無条件の服従に繋がる自己犠牲を宣伝するのは、井上哲次郎を代表とする国家主義者の武士道思想である。前述のように、天皇象徴説およびデモクラシーの平民道を提唱する新渡戸は、その反対の立場に立ち、盲目の自己犠牲を批判し、義理・仁愛の徳目に従う自己犠牲を賞賛している。では、次に、こうした新渡戸稲造の武士道思想は、賢治文学とどのように対応するのかを確認する。

自己犠牲のモチーフは賢治の早期作品にすでに姿を現わしている。童話集『注文の多い料理店』に収録されている「烏の北斗七星」から、自己犠牲の色合いが感じ取れる。烏の大尉は義勇艦隊を引率し、敵の山烏を撃沈し、少佐へ昇進する。だが、敵の死骸を葬る許可を求め、マヂエルの星にこのように祈る。

> あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません（14）。

敗者をいたわり、自分の敵に対しても慈悲を持ち、平和の道を立てる。これは新渡戸の武士道思想に提唱されている仁の徳目である。「烏の北斗七星」における烏の大尉は、仁の美徳を持っている武士を彷彿させるだろう。「戦場のなかに駆け入って討ち死にすることは、たいへん簡単なことで、とるに足らない身分の者にでもできる。生きるべき時に生き、死ぬべき時にのみ死ぬことを、本当の勇気というのだ」（15）。新渡戸は徳川光圀の言葉を引用し、武士に要求される勇気について解説している。烏の大尉が戦場で、命を惜しまずに敵と戦うのは確かに勇気ある行為である。ところが、戦士という職業を超え、人を殺さずに済む理想世界のために、自分の命を捧げようとすることこそ、新渡戸が賞賛した武士道の「大勇」であろう。

ここで、誤解を招きやすいところについて、注意を喚起したい。新渡戸の武士道思想は決して自死を慫慂するものではない。『武士道』において、「真の武士にとっては、いたずらに死に急ぎ、死を恋いこがれることは、臆病に似た行為」（16）だと述べ、死ぬほどではない理由による死を卑怯と見なしている。また、新渡戸の武士道論が提唱する自死による自己犠牲は、自分が信じる義理、徳目に基づき、死ぬ価値の有無を判断し、他者あるいは自分の責任を負うために行う行為である。

それから、新渡戸稲造を代表とする武士道精神とキリスト教思想との関係について、付言することがある。新渡戸の武士道論では、『聖書』の内容が度々引用され、武士道思想とキリスト教の親和性が指摘されている。これは、彼と同じく士族の子弟で、札幌農学校出身の友人・内村鑑三によっても、主張されている。佐藤泰正の「宮沢賢治とキリスト教――内村鑑三・斎藤宗次郎にふれつつ――」（17）において、賢治と内村鑑三との関わりはすでに検証されてきた。しかし、内村鑑三の武士道に関する重要な発言については、触れられて

いない。そのため、ここで紹介しておきたい。新渡戸の『武士道』より五年前の一八九四年、内村は英文で『日本と日本人』という書物を書いた。その中に、彼は代表的な五人の日本人を紹介し、日本人の精神は篤実、献身の武士道精神に他ならないと述べた(18)。西洋化のプロセスにおいて、内村は武士道をキリスト教に匹敵できる日本の道徳システムとして見なしている。一九二八年八月二十六日、札幌における「武士道と基督教」という講演では、内村は「武士道は神が日本人に賜ひし貴き光であると信じ［…］其内に基督教に似寄りた る多くの貴き教えがあ」(19)ると述べている。内村はキリスト教と武士道の共通点として、勇気がある、恥を重んじる、弱者を憐む、義務責任を果たすなどの点を挙げ、武士道の台木に基督教が接木される(20)ことを期待している。両者の融合に対して、新渡戸も同じ態度をとっているが、内村はより徹底した考え方を持っているようである(21)。内村鑑三の存在を身近に感じる賢治は、内村の武士道に対する発言をも知っていたはずであろう。賢治文学における自己犠牲に武士道とキリスト教の要素が共存する点についても、内村、新渡戸と共通する考えが見られる。

次節では、「グスコーブドリの伝記」およびその関連作品を取り上げ、賢治文学における自己犠牲について、作品分析を通じてさらに具体的に考察しよう。

4.「グスコーブドリの伝記」における自己犠牲

4-1.「グスコーブドリの伝記」の成立

一九三二年三月、雑誌『児童文学』（第二冊）に発表された「グスコーブドリの伝記」は、賢治が生前に発表した数少ない作品の一つである。この作品は、賢治文学において自己犠牲を描く典型的なものだと言える。その先駆作品として、ばけものの物語「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」（以下は「ネネムの伝記」と省略）および、下書稿「グスコンブドリの伝記」がある。生前未発表の「ネネムの伝記」の執筆時期は、一九二一、二二年頃と推定されている。「ネネムの伝記」の物語は、人間世界と区別されているばけものの世界を舞台とする。人間世界とばけもの世界は明確な境界を持ち、もし人間世界に姿を現わせば、出現罪として罰せられる。しかし、ばけものの世界といっても、自然災害としての飢饉や火山の噴火が存在する。飢饉のため、両親は森に去り、妹のマミミも連れ去られ、ネネムは独立し、昆布取りとなる。十年後、フゥフィーボー先生の教室に入り、試験に合格して世界裁判長になる。マッチの押し売りの裁判を通じて出世し、またサンムトリ火山の爆発を正しく予言するネネムは、結局自分の慢心で出現罪を犯し、自ら辞職するのである。

「ネネムの伝記」から大きな改作を経て、下書稿「グスコンブドリの伝記」（一九三一年頃）となり、さらに筋立てをほとんど変化させずに、量的に約三分の二に縮小され、「グスコーブドリの伝記」が成立するのである。「ネネムの伝記」から「グスコンブドリの伝記」までの過渡的段階を示すものとして、「ペンネンノルデ」メモ(22)が現

存する。改作メモを確認すると、ネネムの伝記とブドリの伝記との連続性が見える一方、ブドリの伝記における人間による自然現象の管理が明白なテーマとなることもわかる。また、賢治の多くの作品の改稿過程で示された傾向と同じように、「ネネムの伝記」から「グスコンブドリの伝記」までの改稿は、幻想から現実に近づくプロセスが見られる。

「ネネムの伝記」から「グスコンブドリの伝記」までの改稿は、ネネムの立身物語からグスコンブドリの献身物語への転換を実現させる。飢饉のために、家族が離散し、ブドリは独りぼっちとなる。森へ出て働き、その後、教育を受け、火山管理局の技術者にまで成長する。冷害を防ぐため、ブドリは身を挺し、カルボナード火山を噴火させ、人々を救う。このような物語の流れは、「グスコーブドリの伝記」でも変わらず、自己犠牲のモチーフも共通している。ただ、両者の自己犠牲に対する描き方は異なっている。従来の研究では、「ネネムの伝記」から「グスコンブドリの伝記」までの改稿は多く論じられるのに対して、二つの〈ブドリの伝記〉の改稿変化はあまり重視されていない。そこで、本稿では、「グスコンブドリの伝記」から「グスコーブドリの伝記」までの変化にも注意を払い、自己犠牲のモチーフについて考察する。

4-2. ブドリの自己犠牲と武士道思想の共鳴

まず両者の共通するモチーフとしての自己犠牲の特徴を確認し、ブドリの自己犠牲の精神と武士道思想との共通性を考察しよう。

物語の冒頭に、「森」という一章が置かれ、飢饉のために家族を失い、独りぼっちになるブドリが家から森へ出るまでのことが語られている。森へ出ることによって、ブドリは森の世界で大きな試練に遭う。森に出るブドリは、最初にてぐす工場で雇われるようになる。この間、工場主は鬼のようにブドリたちを酷使し、彼らに生きられるだけの食物しか与えない。一季節の仕事が終わると、ブドリだけが工場の留守番を命じられる。てぐす工場の仕事を通じて、ブドリの忍耐力が鍛えられる。留守番中、偶然の機会にブドリは十冊の本を得る。勉強に夢中になるブドリの姿から、強い向上心が見えてくる。次の年になり、てぐす工場は去年と同じ仕事を始める。しかし、火山噴火の影響で、てぐす虫が全滅する。工場主が引き上げ、ブドリも仕方なく、そこから離れ、野原へ出ていく。そして、ブドリは赤ひげの男に出会い、彼に使われ、沼ばたけで働くようになる。しかし、それからの年は旱魃の影響で、凶作が続き、沼ばたけの仕事がなくなり、ブドリはそこから離れ、イーハトーブの町を目指す。沼ばたけで、毎年凶作の為に苦しむ人々を見、ブドリはみんなのために勉強し、自然災害を取り除こうとする使命感を持つようになる。そのため、ブドリはクーボー博士のもとで勉強し、試験に合格してから、イーハトーブ火山局に就職する。ブドリはいろいろ活躍しながら、数年間が経つ。ある年、冷害の発生が予測され、ブドリはみんなを冷害から救うため、火山を爆発させ、命をかけることを自ら選ぶのである。

このような物語の流れは、二つの〈ブドリの伝記〉において、ほぼ

共通する。ブドリは生活の困難に対し、不撓不屈の精神と強い忍耐力を持っている。また、自然災害のために苦しむ人々に対して、惻隠の心を持っている。これは、最後に、ブドリが自己犠牲を選ぶ行為の原動力となろう。命を失うことを知りながら、徹底的に責任感を持ち、死に対して毅然たる態度を取る。家族離散、失業、居場所の喪失など、ブドリは何度も人生の絶境に陥ったことがある。その場合には、生きることより死ぬことは簡単かもしれないが、あえて生きることこそ、真の勇気が要る行為である。

> 天の将に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を労せしめ、その体膚を〔窮〕餓せしめ、その身行（行動）を空乏せしめ、其の為さんとする所（意図）を拂乱せしむ。心を動かし性を忍ばせ、其の能くせざる所を曽益（増益）せしむる所以なり（23）。

新渡戸稲造は『武士道』において、このような孟子の言葉を引用し、「忍耐とくもりのない良心であらゆる災禍や困難に抵抗し、耐え」（24）る武士の精神を激しく賞賛する。賢治文学に描かれるブドリは、新渡戸が賞賛した大任を担う理想像に適合するモデルであろう。人生の難局に直面する時、それを避けるための死は、武士道思想において不名誉の死である。ところが、より大きな使命を全うするため、毅然と死を選ぶことは、武士道の教えである。イーハトーブの人々を冷害から救うため、命を捧げるブドリの姿から、新渡戸が提唱した武士道の精神が見えるだろう。

二つの〈ブドリの伝記〉において、このような自己犠牲のモチーフが共通しているが、その描き方には差異が存在する。これによって、こうした武士道思想の自己犠牲に対する賢治の見方は、その異なる側面が提示されている。次に、この点について具体的に考察する。

4-3. 自己犠牲の異なる描き方

まず、「グスコンブドリの伝記」の結末で、ブドリが献身を決意する内容からみよう。

> クーポー大博士が云ひました。
> 「きみはどうしてもあきらめることができないのか。それではこゝにたった一つの道がある。それはあの火山島のカルボナードだ。あれは今まで度々炭酸瓦斯を吹いたようだ。僕の計算ではあれはいま地球の上層の気流にすっかり炭酸瓦斯をまぜて地球ぜんたいの温度の放散を防ぎ地球の温度を七度温にする位の力を持ってゐる。もしあれを上層気流の強い日に爆発させるなら瓦斯はすぐ大循環の風にまじって地球全体を包むだろう。けれどもそれはちゃうど猫の首に鈴をつけに行く鼠のような相談だ、あれが爆発するときはもう遁げるひまも何もないのだ。」ブドリが云ひました。「私にそれをやらせて下さい。私はきっとやります。そして私はその大循環の風になるのです。あの青ぞらのごみになるのです。」（25）

危険性を十分知っているブドリは十日後にカルボナード島に行った。「それから三日后イーハ〔ト〕ーブの人たちはそらがへんに濁って青ぞらは緑いろになり月も日も血のいろになったのを見」、「ブドリのために喪章をつけた旗を軒ごとに立て」、彼の死を追悼する。このように、「グスコンブドリの伝記」において、自己犠牲をするブドリの英雄としてのイメージが作り上げられている。このプロセスにおいて、ブドリ自身の英雄的献身の強い意欲に窺える。そこにはブドリの能動性が見えてくる。むろん、この能動性は個人の見栄を張るためではなく、そこには自分の犠牲により、みんなが幸せになるという信念が潜んでいる。結果からみれば、グスコンブドリの犠牲が好影響をもたらす。「三四日の後だんだん暖かくなってきてたうたう普通の作柄の年になり［…］たくさんのブドリのお父さんやお母さんたちはたくさんのブドリやネリといっしょにその冬を明るい薪と暖かい食物で暮らすことができた」。しかし、この幸福の実現の仕方はあまりにも単純過ぎるきらいもある。火山の噴火をコントロールし、自然の規律を変えるのは、決して一人の犠牲者の出現によって、解決できる問題ではないが、「グスコンブドリの伝記」のこのような設定から、意欲的な自己犠牲者としてのブドリ像を読み取ることができる。

これに対して、雑誌発表形「グスコーブドリの伝記」において、自己犠牲のモチーフは、ブドリの自己認識に重点がおかれを描かれる。「グスコーブドリの伝記」の結末では、人々がブドリのために旗を立てる内容が削除され、ブドリが自己犠牲する前の姿勢も変わっている。

ブドリは帰って来て、ペンネン技師に相談しました。技師はうなづきました。

「それはいい。けれども僕がやらう。僕は今年もう六十三なのだ。ここで死ぬなら全く本望といふものだ。」

「先生、けれどもこの仕事はまだあんまり不確かです。一ぺんうまく爆発しても間もなく瓦斯が雨にとられてしまふかもしれませんし、また何もかも思つた通りいかないかもしれません。先生が今度お出でになつてしまつては、あと何とも工夫がつかなくなると存じます。」老技師はだまつて首を垂れてしまひました(26)。

「グスコンブドリの伝記」のように、自分が犠牲になれば、みんなが救われるのだという自信が見えなくなる。ブドリの慎重な考え方からは、その犠牲行為に潜んでいる不確定性を読み取ることができる。これによって、自己犠牲の必要性が疑われるだろう。そして、クーボー先生との対話から、ブドリの自分自身に対する見方が提示されている。

「先生、私にそれをやらしてください。どうか先生からペンネン先生へお許しの出るやうお詞をください。」

「それはいけない。きみはまだ若いし、いまのきみの仕事に代れるものはさうはない。」

「わたしのやうなものは、これから沢山できます。私よりもつともつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑つたりして行くのですから。」

このように、自分は特別な存在ではなく、自分の代わりはいくらでもいるとして、自己犠牲しても惜しくないという気持ちが強い。ブドリのこのような発言は、賢治晩年の手帖に書かれた「雨ニモマケズ」に出てくるデクノボーと呼ばれたい人物像を連想させるだろう。二つの〈ブドリの伝記〉において、自己犠牲のモチーフが共通に描かれているが、その異なる描き方によって、武士道精神に接続する、意欲的な自己犠牲者ブドリから、デクノボー精神が溢れる自己犠牲者ブドリへの転化が提示されているのである。

5．おわりに

従来の研究において、賢治文学における自己犠牲は、よく仏教思想と関連づけて論じられ、その後、キリスト教との関連も検証されている。しかしながら、賢治が生きた時代の言説状況などを考えると、賢治文学における自己犠牲を理解するには、武士道精神も加味する必要がある。

そこで、本章では、武士道の歴史を踏まえた上で、従来あまり重視されてこなかった新渡戸稲造と賢治との関係を検証することで、賢治文学における自己犠牲は、新渡戸の武士道との共通性があることが認められた。また、新渡戸と共通する武士道思想を持っている内村鑑三の言説をも確認したが、これによって、賢治文学における自己犠牲に、武士道精神とキリスト教精神が共存することが理解できた。

それから、「グスコーブドリの伝記」を中心に、賢治文学における自己犠牲と武士道精神との関係について、具体的な作品分析を通じて考察してきた。まず、ブドリの自己犠牲と新渡戸を代表とする武士道思想とは、共通する部分を持つことが明らかになった。また、二つの〈ブドリの伝記〉において、自己犠牲に対する描き方の差異も提示することができた。これによって、意欲的に自己犠牲を果たすブドリ像と、デクノボー的な自己犠牲精神を持っているブドリ像が提示されることで、賢治の自己犠牲に対する考え方の変化が見られることを明らかにした。

注

（1）武士道という語の使用にまつわる歴史について、古川哲史「武士道という語のはじまり」（『武士道の思想とその周辺』福村書店、一九五七年）、アレキサンダー・ベネット『『武士道』という言葉』（『武士の精神とその歩み――武士道の社会思想史的考察――』思文閣、二〇〇九年四月）、笠谷和比古『『武士道』という語の登場」（『武士道　侍社会の文化と倫理』NTT出版、二〇一四年二月）を参照。

（2）山岡鉄舟と福沢諭吉の武士道言説について、佐伯真一『『武士道』の誕生と転生」（『戦場の精神史　武士道という幻影』日本放送出版協会、二〇〇四年五月）を参照。

（3）井上哲次郎の武士道思想について、菅野覚明「明治武士道」（『武士道の逆襲』講談社、二〇〇四年十月）を参照。

（4）高橋富雄「新渡戸武士道」（『武士道の歴史』第三巻、新人物往来社、一九八六年）を参照。

（5）新渡戸稲造『現代語訳　武士道』山本博文訳、筑摩書房、二〇一〇年八月、十七‐十八頁

（6）新渡戸稲造は雑誌『実業之日本』（一九一九年五月一日号）に「平民道」を発表し、武士が消滅した後、デモクラシーは平民道だと指摘し、民本思想を基とする平民道の時代が来るべきだと主張した。本稿は、『新渡戸稲造全集』第四巻（教文館、一九六九年）に収録される「平民道」を参照。

（7）新渡戸稲造『現代語訳　武士道』山本博文訳、同前掲、一〇五頁

（8）同前、一九二頁

（9）盛岡高等農林学校編『盛岡高等農林学校図書館和漢書目録』（一九三七年三月）を参照。

（10）新渡戸稲造『現代語訳　武士道』山本博文訳、同前掲、一五八頁

（11）同前、三十七頁

（12）同前、五十九頁

（13）同前、一〇六頁

（14）「烏の北斗七星」『【新】校本　宮沢賢治全集　第十二巻　童話Ⅴ・劇・その他　本文篇』筑摩書房、一九九五年十一月、四十四頁

（15）新渡戸稲造『現代語訳　武士道』、山本博文訳、同前掲、四十四頁

（16）同前、一三六頁

（17）『国文学　解釈と鑑賞』第四十九巻第三号（一九八四年十一月）に収録された佐藤泰正の論文において、賢治は「内村氏の著書なども沢山読んだ」という宮沢清六の証言を載せ、賢治の友人、また内村鑑三の高弟でもある斎藤宗次郎を通じて、内村の存在が賢治にとってさらに身近になったとも述べられている。

（18）高橋富雄「代表的日本人道」（『武士道の歴史』第二巻、同前掲）を参照。

（19）内村鑑三「武士道と基督教」『内村鑑三全集』第三十一巻、岩波書店、一九八二年、二九二‐二九三頁

（20）内村鑑三『武士道と基督教』（『内村鑑三全集』第二十二巻、同前掲、一六一頁）を参照。

（21）新渡戸稲造と内村鑑三の武士道に対する考え方の異同について、詳しくはミシェル・ラフェイ「新渡戸稲造と内村鑑三の武士道」（『基督教学』第四十五号、二〇一〇年、三十‐三十九頁）を参照。

（22）『【新】校本宮沢賢治全集　第十一巻　童話［Ⅳ］　校異篇』（筑摩書房、一九九六年一月、四十五‐四十七頁）を参照。

（23）孟子「巻第十二　告子章句　下」『孟子（下）』小林勝人訳、岩波書店、一九七二年六月、三一四頁

（24）新渡戸稲造『現代語訳　武士道』山本博文訳、同前掲、一三七頁

（25）「グスコンブドリの伝記」『【新】校本宮沢賢治全集　第十一巻　童話［Ⅳ］本文篇』筑摩書房、一九九六年一月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（26）「グスコーブドリの伝記」『【新】校本宮沢賢治全集　第十二巻　童話［Ⅴ］・劇・その他　本文篇』同前掲、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

第１１章　宮沢賢治の理想世界と自己犠牲
――「銀河鉄道の夜」後期形を中心に――

１．はじめに

本章は、賢治文学の集大成だと言われる作品「銀河鉄道の夜」を取り上げ、その後期形に重点を置き、賢治文学における自己犠牲のモチーフと彼の理想世界との関係について明らかにすることを試みる。

そこで、まず、「銀河鉄道の夜」の改稿の経緯を確認した上で、後期形の成立におけるカムパネルラの水死、それから、カムパネルラの父についての加筆に注目する。従来の研究では、実際に登場していないジョバンニの父が重視される一方、カムパネルラの父の存在が無視されるきらいがある。そのため、後期形の改稿内容において、カムパネルラの父はどのような人物として描かれているかを、まず解明する必要がある。また、後期形の結末において、カムパネルラは死に遭う。カムパネルラの水死にいったいどのような意味が込められているのだろうか。これらの問題を明らかにすることによって、後期形を読解する方向性が提示されると考える。

次に、賢治文学に現れる理想世界について考察する。賢治文学に繰り返して現れる異者たちが共生のために努力する描写は、賢治が抱くどのような理想を表現しているのだろうか。そして、このような理想世界は、自己犠牲のモチーフとは、どのように関わるのだろうか。本章では、これらの問題点から出発し、またこれらの問題点を解明することを目指し、「銀河鉄道の夜」という作品を賢治文学において位置づけながら、賢治文学の読解の重要なキーワード――自己犠牲について再考したい。

２．「銀河鉄道の夜」改稿の経緯

「銀河鉄道の夜」は、ほぼ十年間にわたって改稿を重ね続けられた、複雑なテクスト推移の様相を呈する作品である。この作品は、賢治の死によって未完のままに残されたが、一九三四年文圃堂版賢治全集の出版により、はじめて活字化された。その後、一九三九年に出版された十字屋版全集、また筑摩書房の一九五六年と一九六七年に編集された賢治全集の二回の刊行を経て、いままでの本文変遷の主なプロセスが示された。一九七〇年と一九七三年、天沢退二郎と入沢康夫両氏は充分な時間をかけ、『「銀河鉄道の夜」とは何か』というテーマを巡って、二回の対談を行った。この対談をきっかけに、両氏による原稿調査は、まず一九七四年の『校本宮沢賢治全集』の刊行によってその成果が公となり、さらに、一九九五年の『【新】校本宮沢賢治全集』[1]においては、「第一次稿」から「第四次稿」までの四段

階のテクストが活字化された。

原稿の現状から推定される四次稿の成立順序によれば、初期形〔一〕から後期形までに行われた七段階の推敲は次のようになる。それぞれの推敲過程は①～⑦の順に表記する(2)。

①鉛筆による下書きの完成　→初期形〔一〕（第一次稿）
②ブルーブラックインクによる手入れ
③青インクによる一部清書　→初期形〔二〕（第二次稿）
④鉛筆による大幅の手入れ
⑤ブルーブラックインクによる一部再清書　→初期形〔三〕（第三次稿）
⑥鉛筆による手入れ
⑦黒インクによる手入れと改編　→後期形（第四次稿）

新校本全集の刊行によって、各次稿を独立のヴァージョンとして吟味することが可能になったのは紛れもない事実である。ただし、ここでさらに注意すべきなのは、四次稿を独立したものとして考える際にも、右の推敲過程によって形成された四次稿は一つの流れでつながり、切断することができない、ということである。「銀河鉄道の夜」の改稿推移は、いくつか重要なシークェンスと要素とを組み合わせることによって表示することができる。

A：銀河鉄道の乗車風景
B：検札、青年と姉弟の乗車理由（海難）
C：銀河祭
D：ジョバンニの内的独白
E：午後の授業、活版所、家
F：実験告知
G：カムパネルラの水死、カムパネルラ父の登場

初期形〔一〕：A＋F
初期形〔二〕：B＋初期形〔一〕
初期形〔三〕：C＋D＋初期形〔二〕
後期形：E＋（初期形〔三〕－D－F）＋G

初期形〔一〕から後期形までの対応関係は、右のように、整理することができる。「銀河鉄道の夜」の三つの初期形の改稿について、次章では具体的に論じるが、本章では、まず、初期形から後期形までの改稿に注目する。その最も重要な改稿内容として、カムパネルラの父の登場およびカムパネルラの水死に関する加筆が挙げられる。これらの改稿がなぜ重要であるかと言えば、この二人の登場人物に関する改稿によって、「銀河鉄道の夜」後期形は自己犠牲のモチーフを強く描き出す物語として理解できる方向に導いているからである。

ではなぜこのように主張できるのだろうか。次の節で、具体的に考察しよう。

3．自己犠牲のモチーフを描く後期形

まず、カムパネルラの父という登場人物から見てみよう。

カムパネルラの父が実際に姿を現すのは、後期形の結末においてである。しかし、カムパネルラの父は、この前に加筆された冒頭三章において、すでに強い存在感を示している。「午后の授業」という一章で、先生の質問に答えられないジョバンニの頭に浮ぶのは、カムパネルラと一緒に、彼の家で本を読む風景である。

> いつかジョバンニの眼のなかには涙がいっぱいになりました。さうだ僕は知ってゐたのだ、勿論カムパネルラも知ってゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと。すぐお父さんの書〔斎〕から巨きな本を持ってきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした(3)。

カムパネルラの家に書斎があり、専門的な本や雑誌などが所蔵されることによって、カムパネルラの父は知的な人物であると考えられる。カムパネルラが宇宙についてよく知ることができたのは、このような、「博士」である父の存在に関係があることに間違いない。銀河の旅の途中、川の向こうの野原に「黒いけむりは高く桔梗いろのつめたさうな天をも焦がしさう」なまっ赤の火を発見したジョバンニは、「あれは何の火だらう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだらう」と質問する。そこで、カムパネルラは「蠍の火だな」と答える。この後、難破船から乗車した少女によって蠍の火のエピソードが語られている。

> 「蠍の火って何だい。」ジョバンニがききました。「蠍がやけて死んだのよ。その火がいまでも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聴いたわ。」「蠍って、虫だらう。」「えゝ。蠍は虫よ。だけどいゝ虫だわ。」「蠍いゝ虫ぢゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるのを見た。尾にこんなかぎがあってそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ。」「さうよ。だけどいゝ虫だわ。お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蠍がゐて小さな虫やなんか殺してたべて生きてゐたんですって。するとある日いたちに見付かって食べられそうになったんですって。さそりは一生けん命遁げて遁げたけどたうたういたちに押へられさうになったわ、そのときいきなり前に井戸があってその中に落ちてしまったわ、もうどうしてもあがられないでさそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云ってお祈りしたといふの、
>
> あゝ、わたしはいままでいくつのものの命をとったかわから

ない、そしてその私がこんどいたちにとられやうとしたときはあんなに一生けん命にげた。それでもたうたうこんなになってしまった。あゝなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまっていたちに呉れてやらなかったらう。そしたらいたちも一日生きのびたように。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。って云ったといふの。そしたらいつか蠍はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよるのやみを照らしてゐるのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん仰ったわ。ほんたうにあの火それだわ。」

蠍のエピソードは、自己犠牲の精神を明らかに提示している。「蠍の火」とはっきり名前が言えるカムパネルラは、この物語の内容をすでに本などで読んでいた可能性があるだろう。しかし、このエピソードが語られる時点では、カムパネルラと蠍とは、まだ無関係のまま、作品において存在している。後期形の結末では、次のような内容が加筆されている。銀河鉄道の旅から戻ってきたジョバンニは、カムパネルラの姿を見つけられなくなる。この加筆された内容によって、カムパネルラと蠍の火との内的関連が示唆されている。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へ入ったよ。」「どうして、いつ。」「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやらうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこったらう。すると「カムパネルラ」がすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」「あゝすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

加筆された内容では、カムパネルラが級友を救うため、水死に遭い、自己犠牲的な行動をとっている。カムパネルラのこの行為に対して、作品の結末では、カムパネルラのお父さんは「時計をじっとみ「つ」めてゐた」ほどの冷静さで、「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」と、息子の自己犠牲的な死を認めている。元々存在する、青年教師とかほる姉弟が海難の中で、他人を救うため、海に沈んだエピソード、それから蠍の火のエピソードと照合されることによって、「銀河鉄道の夜」後期形において、自己犠牲のモチーフが重点的に描かれるようになっている。

銀河鉄道に乗車する乗客の中には、他人のために、自分の大切な命を捧げる登場人物が多く存在している。これに対して、銀河鉄道の旅が終わり、ジョバンニ一人だけが生者として母のもとに還る。だが、旅の中に、ジョバンニは鳥捕りの幸せのため、「自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいい」と思い、また、「僕はもうあのさそりのやうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまはない」と述べ、自己

犠牲の意志をも表明しているのである。このように、「銀河鉄道の夜」における主要な登場人物は、いずれも自己犠牲の行動を取ったり、自己犠牲の精神を持っていたりしている。このように、「銀河鉄道の夜」の後期形は、改稿によって、自己犠牲のモチーフが強調される物語となっている。

では、賢治が人生の最期において加筆し続けた「銀河鉄道の夜」において、なぜこのような様相が呈されているのだろうか。自己犠牲のモチーフの浮上には、どのような考えが込められたのだろうか。この問題を考えるには、「銀河鉄道の夜」に繰り返して現れる「ほんたうの幸」、「みんなの幸」というような、賢治の希望や理想を表す言葉に注目し、賢治が考えている理想世界の姿を確認する必要がある。そこから、疑問を解く手がかりが見つけられるだろう。

4．賢治文学における理想世界とは何か

「銀河鉄道の夜」において、それぞれの背景を持っている乗客たちが、銀河鉄道に乗車し、異文化間の交流を経験することが描かれる。その中に、異文化が最も衝撃的にぶつかる出来事として、神様を巡る論争がある。ジョバンニたちが乗っている列車がまもなくサウザンクロスに着く前、青年教師とかほる姉弟が下車の仕度をしている。その時、ジョバンニたちと別れたくないかほる姉弟の様子を見た青年教師は、ジョバンニと「ほんたうの神さま」について、論争を展開している。

「天上なんか行かなくたっていゝぢゃないか。ぼくたちこゝで天上よりもっといゝとこをこさえなけぁいけないって僕の先生が云ったよ。」「だってお母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだわ。」「そんな神さまうその神さまだい。」「あなたの神さまうその神さまよ。」「さうぢゃないよ。」「あなたの神さまってどんな神さま〔〕ですか。」青年は笑ひながら云ひました。「ぼくほんたうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんたうのたった一人の神さまです。」「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です。」「あゝ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたうの神さまです。」「だからさうぢゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんたうの神さまの前にわたくしたちとお会ひすることを祈ります。」

ジョバンニと青年教師が信仰する神さまが異なり、正面からぶつかって論争を行うものの、最後に相手のために祈ることで、終止符が打たれる。このように、対立双方の論争は、決着をつけずに保留される形で、自分が理解できない他者の存在を認める姿勢が示されている。「烏の北斗七星」に登場する敵の死を惜しむ烏の大尉もそうであるし、「なめとこ山の熊」に登場する熊が自分を殺そうとする猟師を恨むのではなく、自ら命を捧げることまで実行するのも、他者に対する包容力の極限の表現だと言えよう。

このように、賢治文学においては、異文化の交流や衝突を描くことによって、異なる考え方や立場に対する包容力のある世界が成り

立っている。このような無私の世界において、賢治が考えている「自己」と「他人」、あるいは「みんな」との関係は、如何に理解するべきであろう。「銀河鉄道の夜」における特徴的な言葉の表現として、「ほんたうのみんなの幸」がよく現れている。もちろん、このことは、「銀河鉄道の夜」だけではなく、他のところからも窺える。例えば、詩「宗谷挽歌」(4)の中に、「みんなのほんたうの幸福を求めてなら／私たちはこのまゝこのまっくらな／海に封ぜられても悔いてはいけない」という箇所がある。また、「雨ニモマケズ」(5)においても、「慾ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシズカにワラッテヰル」、「ミンナニデクノボートヨバレ」ることを願いながら、東西南北の人々のために奔走する姿が描かれている。さらに、「農民芸術概論綱要」(6)において、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という名言も残され、「ぜんたい」のイメージが強く描かれている。このいくつかの例で示されるように、賢治が考えている幸福は、みんな、つまり「ぜんたい」の幸福である。この「ぜんたい」は、自らの生活の周辺の人々はもちろん含まれるし、自分と異なる文化・宗教信仰・成長経験を持っている者たちも含まれている。そのほか、「烏の北斗七星」や「なめとこ山の熊」などの作品で現れたように、自分と敵対する立場の者たちですら、この「ぜんたい」の中に含まれている。

ただし、この「ぜんたい」の中において、一種の特別な者たちが非常に強い存在感を示している。それは、自己犠牲者たちである。「ぜんたい」の幸福というのは、すべてが幸福になれなければならないという意味を持っているはずだが、賢治文学に現れる自己犠牲者たちは、自分のからだを焼いたり、川で溺れたりし、結果的に見れば、他人からの勧誘や強要ではなく、自発的に死という形の自己犠牲を果たしている。このように見れば、これらの自己犠牲者たちは、幸せになれるわけがなく、「ぜんたい」から疎外され、しかも、自ら不幸を選んだようにさえ見える。賢治が自分の作品によって表現する、みんなが幸せで、共生できる理想世界において、自己犠牲者たちはいったいどのように位置づけるべきであろうか。賢治の思想や文学を理解するには、彼が考えている理想世界と自己犠牲との関係を明らかにすることが要請されている。

5．賢治の理想世界と自己犠牲

賢治の自己犠牲と共生思想との関連性に触れる先行研究として、松岡幹夫の「宮沢賢治の共生倫理観」(7)が挙げられる。そこで、松岡は「雨ニモマケズ」という詩を取り上げ、分析している。「雨ニモマケズ」において表現されたように、「東ニ病気ノコドモアレバ／行ッテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ／南ニ死ニサウナ人アレバ／行ッテコハガラナクテモイヽトイヒ」という、弱者救済の実践を行う主人公は、自己犠牲の精神をもって、多様な共生を支援している姿から、賢治が抱いている共生思想が読み取られるという。このように、松岡は、自己犠牲精神と共生思想との関連性に着目したものの、そこに含まれているパラドックスを看過しているのである。

賢治文学に現れる自己犠牲思想の特質、特にそれと賢治の理想世界との関係性を究明するため、本節では、自己犠牲の動機から考えたい。そこでまず、「よだかの星」の存在にこそ注目すべきであろう。「銀河鉄道の夜」における蠍と同じように、よだかも弱肉強食の因果律のために苦しんでおり、そこから離脱することを機に、自己犠牲の願望を持つようになっている。

（あゝ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行ってしまはう。）(8)

このような逃走願望は、星に対する「どうか私をあなたの所へつれてって下さい。やけて死んでもかまひません」という願いの繰り返しによって、表現されている。しかし、「いゝや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん」という星の返事からわかるように、よだかが希求しているのは、単純に死に赴くことではない。ある意味で、それは今の生よりもっと上のレベルの自己実現である。

この世界のつらさから離れ、遠くの星に行きたいというよだかの願望について、西田良子は、それが『厭離穢土・欣求浄土』という仏教思想の形象化であり、自分の力をふりしぼり、命とひきかえに悲願を成就するよだかの姿は、正に、捨身成仏した仏陀の姿である」(9)と述べている。西田が主張するように、よだかと蠍のエピソードから、捨身供養の仏教思想を読み取ることができる。その一方、佐藤泰正が「賢治とキリスト教――『銀河鉄道の夜』再考――」(10)において検証しているように、「銀河鉄道の夜」において、賢治がキリスト教に深い関心を持っていたことは明らかであり、賢治テクストにおける自己犠牲には、キリスト教思想の存在も無視してはいけない。友のために命を捨てることは愛であるというキリスト教教義から考えれば、青年教師の苦悩の果てに迎えた覚悟の死にも、ザネリを救うために命を失うカムパネルラの事故死にも、キリスト教の自己犠牲の精神が現れている。仏教思想、キリスト教思想、また前章に言及した武士道思想のいずれの影響にせよ、賢治テクストにおける自己犠牲者たちは、他人のため、みんなのために役立つことを、最高の目標と見なしていると言える。

「私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりをだすでせう」というように、ほかの虫を食べて生きる生活より、自分の小さな命が有意義なものになることが実現することを、よだかが強く望んでいるようである。第9章で言及したように、「二十六夜」、「山男の四月」、「マリヴロンと少女」などの作品において、このような登場人物も多く存在しているのである。また、童話作品「虔十公園林」においては、多くの子どもを喜ばせ、「何千人の人たちに本統のさいはひが何だかを教へる」(11)杉並木を植えることは、主人公の虔十にとって、人生の生き甲斐である。自分の生き甲斐を認める虔十

十と同じように、命を失うにも関わらず、自己犠牲できること自体が、賢治テクストにおける自己犠牲者たちにとっての生き甲斐であり、幸せそのものであろう。

このように考えれば、賢治テクストにおける「ぜんたい」と自己との関係について整理することができる。世界「ぜんたい」、つまりみんなの幸福を理想として目指している賢治の文学世界において、「ぜんたい」の幸福を実現するため、個人の犠牲は必要なものだと思われる。個人の犠牲は、賢治テクストにおいて、自ら犠牲となることを求める場合が多い。その中に、よだかと蠍のような、自己嫌悪のため救済を求める登場人物もいるし、またグスコーブドリやカムパネルラのような、他人のために自分の命を捧げる登場人物もいる。どのような理由であっても、これらの登場人物にとって、自己犠牲は自己実現の行為であり、自分の世界観や価値観を実践する行為でもある。それゆえ、他人や世界「ぜんたい」の幸福のために、命を捧げることで自己犠牲をする登場人物たちは、一見「ぜんたい」から疎外されているが、実は自分なりの方式で自己の幸福を実現していると理解することができる。そして、賢治が自分の文学作品に提示している生きることの形は、決して物理的な命の存続だけではない。星になったり、風になったり、また光る火になったりすることなど、まさに多様な生きる形が認められている。

「ぜんたい」と自己との関係性を理解した上で、次に、賢治文学における自己と他人との連帯感の問題について考えよう。自己と他人との連帯感という問題、言い換えれば、自己犠牲の恩恵を受け取る側、あるいはその結果を受けざるを得ない人々にとって、自己犠牲という行為は、いかに受け止められるべきかという問題である。「銀河鉄道の夜」において、乗車中のカムパネルラが突然にお母さんのことを思い出し、その許しを求める内容を見てみよう。

> 「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」
> いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。[…]
> 「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした。

「銀河鉄道の夜」の結末に、カムパネルラは級友を救うために、水死に遭うことが明かされている。このような結末に至る時点で、カムパネルラがお母さんの許しを求める内容を改めて振り返ってみよう。自分の子どものことを大切にしている母親にとって、子どもの自己犠牲行為の結果は、実に受け入れがたいことであろう。また、カムパネルラのお母さんだけではなく、彼に救われるザネリにとって、カムパネルラの自己犠牲は返済できない、一生の負債に相当するものであろう。

カムパネルラの行為は、一瞬の判断によって決行されたのかもしれない。しかし、それと同時に、周りの人々は、彼の自己犠牲行為を、

それぞれの立場で受け止める必要がある。このプロセスにおいて、そもそも他人の幸福のために行う自己犠牲の行為は、それを受け取る側にとっての不幸、あるいは悲しいことになる可能性も存在しているのであろう。賢治テクストにおける自己犠牲は、自己犠牲者本人から納得できる行為であっても、他人との連帯感が欠如していることも認めざるを得ない。このように考えれば、賢治が考えているみんなの幸せの世界は、簡単に実現できることではなく、理想的な色彩が強いものだと考えられよう。

6. おわりに

本章では、「銀河鉄道の夜」後期形を中心に、賢治文学における自己犠牲のモチーフと彼の理想世界との関係について考察してきた。「銀河鉄道の夜」後期形までの改稿において、カムパネルラの水死、それから、カムパネルラの父についての加筆は、作品の読解に重要な方向性を示唆している。「銀河鉄道の夜」後期形に加えられた冒頭三章において、カムパネルラの父は知的な人物として存在感を示している。カムパネルラは、後期形の結末に、級友を救うため、水死に遭うことが明かされる。このような自己犠牲的な死に対して、カムパネルラの父は黙認する態度をとっている。また、「銀河鉄道の夜」に自己犠牲精神の持ち主が多数登場することに鑑みれば、「銀河鉄道の夜」後期形は、自己犠牲のモチーフを強く描き出す物語としてみなすことができよう。

次に、このような自己犠牲のモチーフと、「銀河鉄道の夜」によく現れる「みんなの幸い」という願いとの関連性について考察する際に、賢治文学に現れる理想世界の姿を明らかにする必要がある。そこで、異者に対する包容力の豊かな表現など、賢治テクストの特徴を整理することによって、賢治が考えている「ぜんたい」が幸せで、共生できる理想世界の姿が現れてくる。しかし、本論の第Ⅰ部で論じてきたように、このような理想世界は、その実現するプロセスにおいて、度々困難に遭遇するのである。自己犠牲との関連性の問題においても、世界「ぜんたい」の幸せと、それを実現するための個人の犠牲との対立が生じてくるのである。

世界「ぜんたい」の幸せが求められる賢治の文学世界において、一見「ぜんたい」から疎外される自己犠牲者たちは、殺生の負い目から脱出しようと思い、また、自分の一介の命で有意義なことをしようとする願望を持っている。それゆえ、彼らは他人のために役に立つ自己犠牲行為を行うことで、自己実現が成就でき、自分なりの方式で幸せを手に入れたと考えられる。ただし、賢治文学における自己犠牲者たちには、他人や社会に貢献する一方、その自己犠牲行為の結果を受け取る側との連帯感が欠けているところも存在する。その一面を考えれば、賢治が考えているみんなが幸せである世界は、美しいものでありながら、理想的な色彩が強いものだと言えよう。

ただし、本章では、「銀河鉄道の夜」における自己犠牲を理解するうえで、もう一人の重要な人物・ジョバンニについて考察する余裕がなかった。カムパネルラの考え方を間近で感じ取ることができるジョバンニは、カムパネルラの行動をどのように見ているのだろう

か。自己犠牲行為の認識者としてのジョバンニは、そこに内包される限界をどのように受け止めているのだろうか。これらの疑問を解くため、次章では、「銀河鉄道の夜」の改稿を巡って考察を行い、そこから変容するジョバンニの人物像に注意を払い、賢治文学の未決性について考える。

注

（1）以下「新校本全集」と略称する。

（2）推敲過程に関しては、入沢康夫監修・解説『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』（宮沢賢治記念館、一九九七年三月）を参照。

（3）「銀河鉄道の夜」後期形『【新】校本宮沢賢治全集　第八巻　童話「Ⅰ」　本文篇』筑摩書房、一九九五年五月、以下同テクストの引用は同じ出典に拠る。

（4）「宗谷挽歌」『春と修羅』補遺、『【新】校本宮沢賢治全集　第二巻　詩Ⅰ　本文篇』筑摩書房、一九九五年七月

（5）「雨ニモマケズ」『【新】校本宮沢賢治全集　第十三巻（上）　覚書・手帖　本文篇』筑摩書房、一九九七年八月

（6）「農民芸術概論綱要」『【新】校本宮沢賢治全集　第十三巻（上）　覚書・手帖　本文篇』筑摩書房、一九九七年八月

（7）松岡幹夫「宮沢賢治の共生倫理観」『日蓮仏教の社会思想的展開　近代日本の宗教的イデオロギー』東京大学出版会、二〇〇五年三月

（8）「よだかの星」『【新】校本宮沢賢治全集　第八巻　童話Ⅰ　本文篇』筑摩書房、一九九五年五月

（9）西田良子「まことの世界の追求」『日本児童文学』第十四巻第二号、一九六八年二月、五十二頁

（10）佐藤泰正「賢治とキリスト教――『銀河鉄道の夜』再考――」『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、二〇〇〇年二月、二十‐二十六頁

（11）「虔十公園林」『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月

第１２章　実験記録から未決の物語へ

――「銀河鉄道の夜」の改稿をめぐって――

１．はじめに

前章で行われた「銀河鉄道の夜」の改稿経緯に対する整理によって、作品の全体的構成についてある程度把握することができた。また、初期形から後期形までの重要な加筆に注目することで、後期形における重要なモチーフである自己犠牲について考察してきた。賢治テクストにおける複雑な改稿プロセスは、作品の読解に影響をもたらし、多様な読解の可能性を示唆している。そのため、「銀河鉄道の夜」を読解するにあたり、後期形だけに注目し、また後期形を一つの方向に局限して考察するのは、非常に不十分なことであろう。そこで、「銀河鉄道の夜」の三つの初期形にも目を向け、賢治文学を考えるための必要な視座について考える必要が生じてくる。

「銀河鉄道の夜」を考察する際に、各次稿の形成の間の改稿過程をどのように受け止めるかは、避けがたい問題となる。ところが、従来の研究においては、「銀河鉄道の夜」の改稿問題が焦点となっているものの、初期形〔三〕と後期形との間に行われる手入れを中心に論じるものが圧倒的多数である。だが、松澤和宏が指摘したように、「初期形内部での変容、すなわち［…］初期形二から初期形三にかけての変化がこれまで看過されてきたきらいがある」(1)。そこで、本章では、新校本全集に収録された「銀河鉄道の夜」のテクストを参照し、松澤の指摘に注意を払い、まず初期形〔二〕から初期形〔三〕までの変容を把握し、ついで初期形〔三〕から後期形までの改稿について考察することにしよう。

２．初期形〔一〕、〔二〕とは何か

現存する原稿八十三枚のうちに、初期形〔一〕に組み込まれる原稿はわずかに十五枚しか残されていない。前半のうち大部分の原稿がないことを承け、初期形〔一〕の冒頭では、ジョバンニ、カムパネルラ、女の子と弟、青年らはすでに、現実空間から離れ、直接に銀河鉄道の幻想世界に登場する。ジョバンニを代表とする銀河鉄道の乗客たちは、青い橄欖の森を過ぎ、銀河鉄道の旅を続ける。海豚の登場がもたらす汽車が海の中を走っているかのような錯覚、きらきら燃えて光っているとうもろこしの木の葉が作り出す夢幻感覚の現れ、さらに「白い鳥の羽根を頭にかざりたくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番へて一目散に汽車を追って来る」(2)インディアンの登場など、不可思議で神秘感が溢れる雰囲気が作り出される。このような旅は姉弟と青年たちが降りたサウザンクロスまで続き、その

直後ジョバンニはついにカムパネルラの消失を迎える。一人でも「ほんたうの幸福が何だかきっとさがしあてるぞ」と決意したジョバンニだが、セロのような声が聞こえ、次いで銀河鉄道の旅が実験だったことがブルカニロ博士によって明白に語られる。ただ、結末で、「博士ありがたう、おっかさん。すぐ乳をもって行きますよ」(3)と叫んで走りはじめたジョバンニの行為は、彼が日常生活を送っている現実世界の存在を提示するばかりで、そこで物語は終わっている。このような結末における、ジョバンニの母と切符、また二枚の金貨の唐突な出現は、初期形〔一〕の段階では、解明できない問題として残されている。

初期形〔二〕では、青いインクの清書が初期形〔一〕の前に加えられたが、全体的な容貌は初期形〔一〕と殆ど同じである。ところが、初期形〔二〕における、いくつかの加筆の箇所には注目すべきだと思われる。まず、初期形〔二〕の冒頭部分において、ジョバンニは車掌から検札を求められる。切符に関するこの加筆は、ジョバンニが三次元の現実世界から来たことを提示しながら、結末で、彼の現実世界への回帰を示唆する。

また、初期形〔二〕では、青年と姉弟が銀河鉄道に乗る理由、つまり海難に遭遇する内容が配された。海難事件の経緯を聞き、涙を流しているジョバンニが、自分の家族のことを思い出す内容も加筆されている。

（あゝ、あの大きなパシフィックの海をよこぎらうとして、この人たちは波に沈んだのだ。そして私のお父さんは、その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかって、僕に厚い上着を着せやうとしたのだ。それを心配しながらおっかさんはあの小さな丘の家で牛乳を待ってゐらっしゃる。僕は帰らなけぁいけない。けれどもどうしてここから帰れやう、いったい家はどっちだらう。）ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまひました。

「もう帰りたくなったって。そんなにせかなくてもいゝ。まだ二分もたってゐない。まあ安心しておいで。いつでもその切符で帰れるから。」またあのセロのやうな声がどこかでしました(4)。

この加筆の結果、初期形〔一〕と共通している結末では、ジョバンニが急いで家に戻る理由、また彼自身が家に帰ろうと思っている、自発的な意志を持つことが明らかになった。

以上の二箇所の加筆によって、初期形〔二〕における切符というモチーフの重要性が現れてくる。

「あゝではさよなら。これはさっきの切符です。」博士は小さく折った緑いろの紙をジョバンニのポケットに入れました。そしてもうそのかたちは天気輪の柱の向ふに見えなくなってゐました。ジョバンニはまっすぐに走って丘をおりました。そしてポケットが大へん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。林の中でとまってそれをしらべて見ましたらあの緑いろのさっき夢の

中で見たあやしい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました(5)。

初期形〔二〕の結末では、ジョバンニが切符に包まれる二枚の金貨を入手する。初期形〔一〕では意味不明の切符は、ブルカニロ博士の実験が始まる前に、実験協力者のジョバンニに配られた、つまり、彼を他の乗客と見分けるためのしるしの意味を持っていると理解することができるだろう。このジョバンニが特別視されていることについては、また後述しよう。

以上の分析によれば、初期形〔一〕と〔二〕において、質的な差異はほとんどないと言えるが、初期形〔一〕から初期形〔二〕までの変容から、幻想世界と現実世界はジョバンニの切符によって結び付けられていることは明らかである。また、結末にジョバンニに与えられる二枚の金貨は、実験協力者としての彼に対する謝礼だと見なすことができる。さらに、もう一つ注目すべきことがある。初期形〔一〕、〔二〕の主な内容は、ジョバンニと青年、姉弟をめぐって語られるが、これらの銀河鉄道の乗客を操作するのはブルカニロ博士である。

「ありがたう。私は大へんいゝ実験をした。私はこんなしづかな場所で遠くから私の考を人に伝へる実験をしたいとさっき考へてゐた。お前の云った語はみんな私の手帳にとってある。さあ帰っておやすみ。お前は夢の中で決心したとほりまっすぐに進んで行くがいゝ。そしてこれから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい。」(6)

このように、ブルカニロ博士は、ジョバンニの銀河鉄道の旅が実験であったということをジョバンニに明らかにする。ブルカニロ博士の全能性に注意を払うと、初期形〔一〕と〔二〕における、ブルカニロ博士の実験という枠組みの重要性が浮上する。この実験の枠組みを重視すれば、初期形〔一〕と〔二〕は、彼が語る実験報告とみなすことができよう。さらに、初期形〔三〕では、ジョバンニが降車する前、黒い大きな帽子をかぶる大人が一冊の本を持つ姿が表れるという内容が加筆される。本の中で実験方法が強調され、またそこに書かれた地理と歴史についての記録は、ブルカニロ博士の実験内容を記録する手帖と重なると考えられる。初期形〔三〕におけるこのような加筆は、初期形に一貫するブルカニロ博士の実験という枠組みを改めて明示する。

ただし、先ほど言及したジョバンニが持っている自発的な意志の生成を始め、初期形〔三〕になると、ジョバンニは全能のブルカニロ博士に従うのではなく、自発的に物事を多く考える人物となる。初期形〔三〕におけるジョバンニに関する大幅な改稿は、「銀河鉄道の夜」のジョバンニの物語への変化を導くのである。そこで、次節では、このジョバンニの変容を、本格的に重要視されるべき問題として扱おう。

3．初期形〔三〕――ジョバンニの物語の生成

初期形〔二〕に対して、初期形〔三〕では、鉛筆での大幅な手入れがなされている。無論、この改稿には重大な意味がある。それを説明する前に、まず初期形〔一〕、〔二〕から初期形〔三〕にかかる改稿の内容から確認していこう。

初期形〔一〕、〔二〕とは異なり、初期形〔三〕の冒頭には「ケンタウル祭の夜」という一章が位置している。祭りという特別な日の風景について、現実世界に対する描写が冒頭部分のメインとなっている。結末の部分を先に確認すれば、初期形〔三〕は全体的には、ブルカニロ博士の実験という枠組みを持っており、実験参加者としてのジョバンニおよび彼と関係する人物が、重点的に描かれている。これは初期形〔三〕の冒頭部分から確認することができる。

ジョバンニのお父さんは、そんならっこや海豹をとる、それも密猟船に乗ってゐて、それになにかひとを怪[我]させたために、遠くのさびしい海峡の町の監獄に入ってゐるといふのでした。ですから今夜だって、みんなが町の広場にあつまって、一諸に星めぐりの歌をうたったり、川へ青い烏瓜のあかしを流したりする、たのしいケンタウル祭の晩なのに、ジョバンニはぼろぼろのふだん着のままで、病気のおっかさんの牛乳の配られて来ないのをとりに、下の町はづれまで行くのでした(7)。

楽しそうな祭りの時間を過ごしている人々に比べ、父が入獄しているという事情を負いながら、病気の母のために奔走しているジョバンニの大変な家庭状況が示されている。これらの事情を契機に、初期形〔三〕におけるジョバンニの内的独白が加筆され、多感で内省的なジョバンニの人物像が浮かび上がる。ジョバンニがこのようになった理由は、主に家族状況と学校の人間関係という二つの面にあると推測できる。

一方、引用で示したように、ジョバンニの父は不在であり、彼にとっての精神的な支えは欠如している。また、級友のザネリが「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」と投げつけるように言われることで、ジョバンニはどのように対応していいかがわからず、狼狽してしまう。級友にからかわれるという悩みは、明らかに不在の父と関連している。それと同時に、重病の母の世話がジョバンニ一人の身に課され、いろいろと彼を苦労させる。加えて、銀貨一枚さえほしいというように、経済状況の困窮を表す内的独白が加筆される。それゆえ、ジョバンニはお金を稼ぐため、勉強と仕事を両立しなければならない状況に陥っている。

さらに、学校ではジョバンニと級友たちの関係も打ち解けていない。学校で誰とも遊ばず、たったひとりになってしまう孤独なジョバンニの姿が描かれるが、これではザネリにからかわれるのも自明の理かもしれない。さらに、優秀で賢い級長であるカムパネルラと友達になることを、ジョバンニは強く望んでいる。しかし、このような憧れこそ、ジョバンニとカムパネルラの間に、実際に存在する距離感を示唆するのである。

このような厳しい現実に直面するジョバンニは、強い逃走の願望を持っている。

（ぼくはもう、遠くへ行ってしまひたい。みんなからはなれて、どこまでもどこまでも行ってしまひたい。それでも、もしカムパネルラが、ぼくといっしょに来てくれたら、そして二人で、野原やさまざまの家をスケッチしながら、どこまでもどこまでも行くのなら、どんなにいいだらう。カムパネルラは決してぼくを怒ってゐないのだ。そしてぼくは、どんなに友だちがほしいだらう。ぼくはもう、カムパネルラが、ほんたうにぼくの友だちになって、決してうそをつかないなら、ぼくは命でもやってもいい。けれどもさう云はうと思っても、いまはぼくはそれを、カムパネルラに云へなくなってしまった。一諸に遊ぶひまだってないんだ。ぼくはもう、空の遠くの遠くの方へ、たった一人で飛んで行ってしまひたい。）(8)

このように思っているうちに、野原から汽車の音が聞こえ、ジョバンニはいつの間にか銀河鉄道の旅を始める。この流れから考えてみれば、初期形〔三〕に描かれる銀河鉄道の旅は、ジョバンニの現実世界から逃走する旅だと理解することができよう。

それでは、ジョバンニの逃走の旅はどのような結末を迎えるのだろうか。銀河鉄道の旅を経験したジョバンニおよび彼の人間関係は、どのように変化していくのだろうか。まず、旅の中で、ジョバンニとカムパネルラとの関係の変化から見ていこう。

初期形〔三〕におけるカムパネルラは、頭も人柄もよく、級長の設定である。引用からジョバンニのカムパネルラに対する憧れの感情が明白に読み取られる。しかし、一見学校でクラスメートたちに尊敬され、みんなと仲良くしているカムパネルラだが、他人がうらやむ生活の陰には、ジョバンニと同じように、悩みを抱いているのである。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか。」
いきなり、カムパネルラが、思ひ切ったといふやうに、少しどもりながら、急きこんで云ひました。
［…］
「ぼくはおっかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだらう。」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえてゐるやうでした(9)。

乗車中、カムパネルラが母から許しがもらえるかどうかについて、ジョバンニに話かける。このように、そもそも自分にとって遠い存在であるカムパネルラと、一緒に銀河鉄道の旅を経験するジョバンニは、カムパネルラの悩みを知るようになり、その後、みんなの幸福を共に探していくと約束する。こうして、銀河鉄道の旅の前に、ジョバンニが望んでいたカムパネルラと友達になることは、お互いに理

解することにより実現の可能性が高まったと考えられる。ただし、旅の最後になると、カムパネルラの姿が消えている。この設定については、次節で後期形と対比しながら、また言及しよう。

次に、ジョバンニの家族の問題について考えよう。初期形〔三〕において、ジョバンニの悩みと深く関わる父の問題を解決するのは、入獄中の父の帰還ではない。その代わりに、ブルカニロ博士が現われ、「これから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい」とジョバンニに伝える。無論、ジョバンニにとって、父の不在は、ブルカニロ博士の出現によって穴埋めできるものではない。しかし、銀河鉄道の旅、つまり実験に参加する前に、ジョバンニが直面する孤立無援の状況に比べると、ブルカニロ博士という頼りになる人間の存在は、彼の精神上の負担の幾分かを軽くするだろう。

さらに、初期形〔一〕、〔二〕と同じように、ジョバンニは最後に二枚の金貨を得るようになる。金貨を獲得するエピソードは初期形〔一〕から初期形〔三〕までに共通しているが、初期形〔三〕では、金貨はブルカニロ博士からの実験協力の謝礼としてだけではなく、そこに現実的な意義がはじめて付与される。なぜなら、初期形〔三〕では、ジョバンニはこの二枚の金貨の獲得によって、母のために牛乳を買うことができ、ゆえに勉強と仕事の両立、また生活の窮状をある程度は緩和できると推測できるからである。苦しい現実から逃走したかったジョバンニであるが、銀河鉄道の旅を経験してから、現実世界に戻ると同時に、彼を苦しませていた問題が解決される。これで、初期形〔三〕ではジョバンニの逃走願望は解消され、最終的にはハッピーエンディングへと収束すると言えよう。

4. 変容する後期形

しかし、「銀河鉄道の夜」後期形は、このような円満な結末を否定する形を呈している。後期形で行われる改稿は、初期形〔三〕までに形成された物語の構造に大きな変化をもたらしている。本節より、初期形〔三〕から後期形までの改稿について検討しよう。

4-1. ジョバンニと鳥捕りとの対照関係

後期形における改稿は、まず冒頭と結末の部分で行われている。冒頭部分「午后の授業」、「活版所」、「家」という三章が加筆され、日常生活を送っているジョバンニが登場する。

授業のあと、ジョバンニは家に帰らず、活版所に行き、活字を拾う仕事をする。そこでは、『よう、虫めがね君、お早う。』と云ひますと、近くの四五人の人たちが声も立てずこっちも向かずに冷くわら」う。このような冷たい待遇に遭ったジョバンニは、文句を言わずに、「何べんも眼を拭ひながら」、活字を拾う。仕事を終え、銀貨をもらった彼は顔色がよくなって威勢よくおじぎをし、活版所から飛び出して家に帰る。疲れているジョバンニは家に帰っても、あまり休めず、まもなく母のために牛乳をとりに行く。体が弱い母のために奔走するという設定は、初期形〔三〕とほぼ同じであるが、そこに登場するような青白い、元気がない少年ではなく、後期形においては、ジョバンニは疲れながらも苦境に耐え、積極的に仕事と母の世話をす

ることを努める少年となる。

加えて、後期形の結末では、ブルカニロ博士は登場しない。つまり、初期形の、ジョバンニは理由がよくわからないまま、幻想世界を旅した後、博士から礼金をもらえるという状況とは異なり、後期形におけるジョバンニは、自分の労働によって、お金を稼ぎ、ブルカニロ博士の経済上の支援から独立する。このように考えてみれば、他人に依存するジョバンニから、自立するジョバンニまでの変容は、初期形〔三〕から後期形にかけての一つの反転だと思われる。

しかも、ジョバンニ自身のこの反転は、銀河鉄道の旅人のもう一人――鳥捕りと対照しながら描かれたと考えられる。初期形〔一〕と初期形〔二〕において、鳥捕りはほとんど存在感を持っていない登場人物である。このような得体の知れない鳥捕りは、初期形〔三〕と後期形においては、鳥を捕まえる商売人として登場し、同時にジョバンニの感情を波立たせる登場人物としての役割を果たしている。なぜそうなったのであろうか。少し具体的にみてみよう。

ジョバンニはなんだかわけもわからずににはかにとなりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジョバンニの持ってゐるものでも食べるものでもなんでもやってしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立って百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝといふやうな気がして［…］

「僕はあの人が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は大へんつらい。」ジョバンニはこんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともないと思ひました（10）。

鳥捕りが再度列車から突然に消失した後、ジョバンニの鳥捕りに対する同情が描かれている。鳥捕りの突然の消失に対し、ジョバンニとカムパネルラは、まず鳥捕りの行方について疑問を持ち、その後「一体どこでまたあふのだらう」と想像する。二人がこのように予感できるのは、鳥捕りが列車から消失し、また列車に戻ってくるという往復移動を、二人が一度目にしていたからである。しかし、このような予感の直後、ジョバンニは鳥捕りが邪魔であると感じ、そのつらさをカムパネルラに語る。これはいったいどのような気持ちであろうか。この疑問を解くには、まず、鳥捕りがどのような人物なのかについて考える必要がある。

従来の研究では、鳥捕りを銀河鉄道における不思議な存在として扱い、そのモデルを盛んに探し出そうとしてきた。中村文昭は鳥捕りを「救われない魂」とし、「粗暴で他人に対するおもいやり、優しさに欠ける異教徒」であるザネリに相当するものと評する（11）。吉江久弥は、セロの声を中心に考察を行い、「鳥捕りが、学者風の痩せた人がそうであったように、ブルカニロ博士の別の姿」だと主張す

る(12)。また、別役実の論では、ジョバンニの父が北の海でラッコの猟をしているかもしれないということに留意し、動物を狩るという職業の共通性に注目し、鳥捕りがジョバンニの父親の分身であると主張する(13)。これらの見解は、それぞれの視点で鳥捕りの特徴を捉えている。だが、ジョバンニが鳥捕りに抱く感情に注目すると、それはジョバンニがザネリ、ブルカニロ博士、父のいずれに対して抱く感情とも完全に一致してはいない。では、まず鳥捕りに対する描写から確認してみよう。

「ここへかけてもようございますか。」

がさがさした、けれども親切さうな、大人の声が、二人のうしろで聞えました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

「えゝ、いゝんです。」ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑ひながら、荷物をゆっくり網棚にのせました。[…]

赤ひげの人が、少しおづおづしながら、二人に訊きました。

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか。」[…]

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまへる商売でね。」(14)

鳥捕りが登場する場面である。ジョバンニたちに話をかける時、恐縮しながらも、声は親切である。加えて行動の丁寧さと微笑みの様子は、先行研究における残酷な殺生のイメージ(15)と結び付かない。言動が慎重な鳥捕りは商売の仕事に携わる。ジョバンニとの会話の中にみえる「毎日注文があります」という内容によって、鳥捕りが忙しく働いていることが推測できる。しかし、その一方、ぼろぼろの外套を着ている状況から、彼の生活は経済的に裕福ではないことも考えられる。このような鳥捕りの存在は、経済的に苦しみ、お金を稼ぐために一所懸命に活版所に通い、働くジョバンニを彷彿させるだろう。つまり、〈労働―賃金〉という交換関係の共通性から、鳥捕りとジョバンニとの照応関係が明らかに現われるのである。

しかしながら、鳥捕りとジョバンニとの共通性が描かれる一方、両者の差異も提示されている。後期形の冒頭に、銀河鉄道の乗客たちが検札を要求される場面を思い出そう。ジョバンニが持っている切符を、鳥捕りは「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、ほんたうの天上へさへ行ける切符だ。天上どこぢゃない、どこでも勝手にあるける通行券」(16)だとびっくりする。鳥捕りは列車で銀河の野原の間を往復し、鳥を捕る人物である。つまり、鳥捕りはある種の閉鎖空間に囲まれ、そこから逃げ出すことができない。それに対して、ジョバンニは「どこにも勝手にあるける」切符を持っている。鳥捕りのびっくりする反応から、彼のジョバンニに対する羨望を読み取ることができる。こうして、境遇が共通である二人の異なる運命が示唆される。つまり、ジョバンニにとっては、銀河鉄道の旅は

〈どこまでも行ける〉旅であり、鳥捕りにとっては、この旅は〈どこまでも行けない〉旅ということである。

しかし、鳥捕りはジョバンニが持っている切符の特別さを十分に認識できるのに対して、ジョバンニはそれを認識できていないようである。苦しい現実から銀河鉄道の旅で逃走したいジョバンニは、自分の境遇と似ている鳥捕りと出会うことで、これからも彼のように永遠に〈労働―賃金〉という関係性に囚われ続けるのではないかと、自分の未来に対する不安を連想する。これこそジョバンニが鳥捕りのことを邪魔のように感じる理由だと考えられる。

こうして、初期形〔三〕と後期形におけるジョバンニの鳥捕りに対する感情の違いが生じてくる。初期形〔三〕において、ジョバンニの経済的な困窮を解決するため、ブルカニロ博士から金貨をもらうエピソードが設定される。それに対して、同じく困窮する鳥捕りは、自力でお金を稼がなければならない。後期形になると、ジョバンニと鳥捕りとの対応関係は、活版所で労働するジョバンニについての加筆によって明らかになる。つまり、ジョバンニの鳥捕りに対する同情は、単に他人に対する感情ではなく、自分自身の境遇から生まれる共感も含まれると考えられる。また、邪魔のように思えたという感情については、カムパネルラとも関わるため、次節でカムパネルラについての改稿を確認してから、再び言及しよう。

4-2. ジョバンニとカムパネルラの間

では、後期形におけるカムパネルラに関する改稿が、作品の読解にどのような影響をもたらしたかについて考察したい。

初期形〔三〕においては、ジョバンニのカムパネルラに対する憧れは明らかであり、銀河鉄道の旅は二人が親密な関係を結んでいく旅として理解することができる。しかし、後期形では、カムパネルラは子どもたちが憧れるような設定ではなく、普通の子として登場する。

後期形の二人の関係は、次の冒頭に加筆される「午后の授業」で、カムパネルラがジョバンニに対する思いやりを示す出来事から、変化し始める。ジョバンニが答えられない質問に対して、先生はカムパネルラを指名し、答えを求める。しかし、先生の質問を聞き、すぐ手をあげたカムパネルラも、ジョバンニに配慮し、答えない。

> 僕は知ってゐたのだ、勿論カムパネルラも知ってゐる、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書〔斎〕から巨きな本をもってきて、ぎんがといふところをひろげ、まっ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになったので、カムパネルラがそれを知って気の毒がってわざと返事をしなかったのだ、さう考へるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあは

れなやうな気がするのでした（17）。

このジョバンニの心理描写から、彼にとって、カムパネルラは自分の幼い時期からの友達であることは明らかである。しかし、このような親密な関係はジョバンニにとっては自明なことであっても、カムパネルラは、二人の関係の親密さに対して、確信を持っていなかったかもしれない。なぜなら、それはこのごろのジョバンニが、「朝にも午后にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云はないやうになった」からである。また、授業の後、みんなが星祭のために集り、相談する時も、ジョバンニはそれに参加せず、アルバイト先に行くため急いで学校から出るのだ。つまり、カムパネルラからすれば、幼馴染みの友人であったジョバンニが、自らの意志で自分と疎遠になっているように感じているはずである。

後期形では、このように、それぞれ異なる認識を持っているジョバンニとカムパネルラであったが、銀河鉄道の旅の中で、カムパネルラは自分の悩みをジョバンニと語り合い、どこまでも一緒に行こうと約束する。これらの内容は初期形〔三〕とほぼ同じだが、後期形の前半に設定される二人の関係から見れば、この銀河鉄道の旅は、ジョバンニとカムパネルラにとって、お互いの考えを理解し、友人関係を恢復する旅だと見なすことができよう。ただ、意気投合した二人でも、最後は別れることで旅を終える。現実世界に戻ったジョバンニは、カムパネルラの水死を知る。自分にとって重要な友人との死別は、ジョバンニに悲しみを感じさせるに違いない。

これで、初期形〔三〕から後期形にかけての、カムパネルラに関わるいくつかの変容が理解できる。

まず、ジョバンニとカムパネルラの離別には変化が現れている。後期形における両者の死別は、初期形〔三〕におけるカムパネルラの死がはっきり示されていない離別と対比すれば、その別れの重みが強まったことは明白である。しかも、それは後期形に突然に生じた変化ではない。初期形末尾の原稿を確認すると、そこに「カムパネルラをぼんやり出すこと、／カムパネルラの死に遭うこと、／カムパネルラ、ザネリを救はんとして溺る。」（18）という構想メモが残されている。つまり、初期形の早い段階から、後期形のような永遠の別離が構想されている。カムパネルラの自己犠牲的な死を、ジョバンニはどのように受け取るのだろうか。結末では、「いろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へずに」、帰ろうとするジョバンニが描かれている。ここで、ジョバンニの胸に詰まっているものに、自己犠牲に関する思索が含まれていることは間違いないだろう。これは、「学者アラムハイドの見た着物」において提示された、「ほんとうのいいことが何だかを考えないでいられない」という考え方の形象化だと理解できるだろう。自己犠牲についてのジョバンニの考えは、後期形において未決のまま残されている。

次に、ジョバンニの鳥捕りに対する感情にも変化が存在している。初期形〔三〕では、ジョバンニが鳥捕りを邪魔に感じるのは、ジョバンニのカムパネルラに対する憧れに関わっている。前述のように、

初期形〔三〕における銀河鉄道の旅は、ジョバンニとカムパネルラが親密関係を結ぶ旅として理解することができる。ジョバンニにとって、そもそも遠い存在であったカムパネルラとの間に、親密関係を築いたばかりだが、その関係が壊されるという不安をもたらすのは、カムパネルラと頻繁に会話する鳥捕りである。このような鳥捕りに対して、ジョバンニは邪魔だという嫌悪感を持つようになる。しかし、後期形においては、ジョバンニとカムパネルラは幼馴染みの設定であり、しかもジョバンニは二人の関係の親密さに確信を持っていると考えられる。ゆえに、ジョバンニの鳥捕りに対する嫌悪感は、鳥捕りが自分とカムパネルラとの関係を壊す恐れがあるからではない。前節で述べたように、その邪魔だという感情は、ジョバンニが苦しい現実から逃走できないのでは、という、鳥捕りがもたらす不安から生まれたと思われる。言い換えると、ジョバンニの未来に対する不安は、鳥捕りに対する感情に直接に影響しているということである。

4-3. ジョバンニの家族の物語

後期形における重要な改稿は、もう一つ存在する。それは、ジョバンニはカムパネルラの父と出会うことによって、自分の父がもうすぐ帰ってくることを知るようになるということである。初期形〔三〕と対照的なこの設定は、更なる物語の変容を想像させる。ジョバンニの父の帰還は、後期形の結末に突然に現われる出来事ではなく、前半の改稿ですでに暗示されている。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきっと間もなく帰ってくると思ふよ。」

「あゝあたしもさう思ふ。けれどもおまへはどうしてさう思ふの。」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ。」

「あゝだけどねえ、お父さんは漁へ出てゐないかもしれない。」

「きっと出てゐるよ。お父さんが監獄へ入るやうなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかひの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかはるがはる教室へ持って行くよ（19）。

初期形〔三〕における明白な入獄の設定に対して、後期形では、母の「お父さんは漁へ出てゐないかもしれない」という一言によって、ジョバンニの父の行方は曖昧になってしまう。これに対応するのは、後期形の結末にカムパネルラの父が登場することである。カムパネルラの父は、ジョバンニの父から元気な便りが届いたことを語り、ジョバンニの父の帰還を予告する。ここで、初期形から連続的に登場するブルカニロ博士の姿は完全に消え、実験という枠組みが崩れる。このように、「銀河鉄道の夜」はブルカニロ博士の実験報告から、ジョバンニの物語へと変容し、さらにジョバンニの家族の物語とし

ての読解の可能性を示唆している。

「銀河鉄道の夜」後期形は、ジョバンニの母を巡る物語として読めるようにもなっている。後期形の冒頭に加筆された部分から、ジョバンニが苦労するのは母のためであるし、結末におけるジョバンニの父の回帰は、ジョバンニの母にとって、精神上の癒しとなるだろう。また、牛乳というモチーフを巡る変化も、母の重要性をさらに示している。初期形〔三〕では、牛乳を取りに行くジョバンニは、「ちゝ、今日はもうありませんよ」(20)と言われる。そして、ジョバンニは病気のお母さんのために牛乳が必要だと強調しても、「ありませんよ。お気の毒ですけれど」(21)と再度言われる。しかし、後期形では、この状況が変わっている。牛乳を取りに行くジョバンニは、同じく牛乳がない状況に遭っても、「もう少したってから来てください」(22)と、希望が与えられる。そして銀河鉄道の旅の後、再度牛乳屋を訪れた時、牛乳がジョバンニに渡される。これで、ジョバンニの母は、父の帰還という精神上の癒しを得ると同時に、牛乳という栄養品の入手によって、肉体的な病の癒しも得られるようになる。このように、「銀河鉄道の夜」後期形は、ジョバンニの病気の母が、牛乳の入手と父の帰還によって回復するという結末を予感させる物語となる。

それに対して、友人の水死と父の帰還を同時に引き受けるジョバンニは、複雑な気持ちを持つようになるに違いない。後期形の最後は、「ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走」(23)る。家路を急ぐ様子が描かれたが、実際に家に着いたかどうかは宙吊りの状態である。このような結末は、ジョバンニの行方の未決性をも浮上させる。

「銀河鉄道の夜」後期形の結末について、いくつかの重要な指摘が存在する。まずは、天沢退二郎と入沢康夫は、後期形の父の帰還を重視し、ジョバンニが最終的に家に帰ることを主張し、それはある種のハッピーエンディングになると述べている(24)。これは大多数の論者に共通する見方である。それに対して、押野武志は、このような結末から、語ることへの期待、また書くことの始まりの予感を読み、「銀河鉄道の夜」の終りは、「オイディプス的な葛藤の物語の始まりであるとみなすこともできる」(25)と指摘している。さらに、別役実が主張したように、ジョバンニは「カムパネルラの父親と別れ、牛乳びんを持ったまま、病身の母がいる家へ帰らず、停車場から汽車に乗ってその街を離れ、放浪の旅に出た」(26)という見解も存在する。

いずれの見解にも一理あるが、後期形において家族の事情およびジョバンニが母の世話で苦労することが重点的に書かれることに注目すれば、父の帰還は、ある意味では、母の世話という家族の束縛から、ジョバンニが自由になる契機になったと考えられる。ただジョバンニは家に戻るにせよ、戻らないにせよ、変容し続ける「銀河鉄道の夜」について考える際、物語の未完成性を認めるのは、不可欠な視座だと思われる。

5．おわりに

本章の分析によれば、「銀河鉄道の夜」はブルカニロ博士の実験記録から、ハッピーエンドへ収束する初期形〔三〕に辿りつき、それから登場人物の設定が大きく変更され、結末が開かれている後期形までに変身した。このような変容に伴い、「銀河鉄道の夜」には、多様な解釈が提供されている。しかも、作品の未決性に留意することによって、「銀河鉄道の夜」の物語はまだ収束していないと考えることができる。父が帰ってくるというハッピーエンド、あるいはカムパネルラを失うという悲しい結末にも収まらず、ジョバンニは、まさにこのような身近の人間の消失と回帰の中に、新しい人間関係の再構成を迎えるのである。家族だけではなく、後期形の前半に描かれた、級友たちから逃れようとするジョバンニには、ザネリを始めとする学校の級友たちとの関係が改善される可能性への期待がもたらされていると考えられよう。また、ジョバンニは銀河鉄道の旅を経験してから、カムパネルラのことについて、「ぼくはカムパネルラの行った方を知ってゐますぼくはカムパネルラといっしょに歩いてゐたのです」(27)と、他者に語ろうという積極的な姿勢を持つようになる。しかし、自己犠牲行為の認識者としてのジョバンニが、カムパネルラについてどのように語るのかは明白ではない。彼は自己犠牲を「いゝこと」だと認める可能性がある一方、その限界をも意識できるようになるかもしれない。これは、「銀河鉄道の夜」という作品の未決性のもう一つの現れであろう。

無論、「銀河鉄道の夜」の物語は如何に続くのかという問いに対しては様々に解答しうるが、この多様な可能性は、その未完成のテクストの変容に潜在しているとしか言えない。これは「銀河鉄道の夜」の物語に潜在する未決性である。この未決性が浮上しているからこそ、「銀河鉄道の夜」に対する読解は、より一層の広がりを見せるのである。

注

（1）松澤和宏「『銀河鉄道の夜』――初期形、後期形、決定稿」『宮沢賢治研究 Annual』第九号、一九九三年三月、一一二頁

（2）「銀河鉄道の夜」初期形〔一〕、『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』筑摩書房、一九九五年九月、二十頁

（3）同前、二十八頁

（4）「銀河鉄道の夜」初期形〔二〕、『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』同前掲、一一五頁

（5）同前、一三〇‐一三一頁

（6）同前、一三〇頁

（7）「銀河鉄道の夜」初期形〔三〕、『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話Ⅲ　本文篇』同前掲、一三三頁

（8）同前、一三八頁

（9）同前、一四四頁

（10）「銀河鉄道の夜」後期形、『【新】校本宮沢賢治全集　第八巻　童話［Ⅰ］　本文篇』筑摩書房、一九九五年五月、一五〇‐一五一頁

（11）中村文昭「『銀河鉄道の夜』＊陰画としてのザネリと鳥捕り」『童話の宮沢賢治　太母、子供ハ人間ノ父』洋々社、一九九二年三月、五十三頁

（12）吉江久弥「ブルカニロ博士はなぜ消えたか――『銀河鉄道の夜』成立をめぐって」『武庫川国文』第四十一号、一九九三年三月、四十四頁

（13）別役実「父としての鳥捕り――『銀河鉄道の夜』　その5」（『イーハトーボゆきの軽便鉄道』白水社、二〇〇三年九月）を参照。

（14）「銀河鉄道の夜」後期形、同前掲、一四三‐一四四頁

（15）鳥捕りの殺生のイメージについて、西田良子『『銀河鉄道の夜』論」（『宮沢賢治論』桜楓社、一九八一年四月）、および吉本隆明『宮沢賢治』（筑摩書房、一九九六年六月）における鳥捕りが殺生戒を犯しているという指摘を参照。

（16）「銀河鉄道の夜」後期形、同前掲、一五〇頁

（17）同前、一二四頁

（18）入沢康夫監修・解説『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』（宮沢賢治記念館、一九九七年三月、八十二頁）、『【新】校本宮沢賢治全集　第十巻　童話［Ⅲ］校異篇』（筑摩書房、一九九五年九月、一一〇‐一一一頁）を参照。

（19）「銀河鉄道の夜」後期形、同前掲、一二八頁

（20）「銀河鉄道の夜」初期形〔三〕、同前掲、一三五頁

（21）同前

（22）「銀河鉄道の夜」後期形、同前掲、一三二頁

（23）同前、一七一頁

（24）入沢康夫、天沢退二郎『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』（青木社、一九七九年五月、六十頁、一五六頁）を参照。

（25）押野武志「賢治のセクシュアリティ」『宮沢賢治の美学』翰林書房、二〇〇〇年五月、一四八頁

（26）別役実「おわりからはじめる――『銀河鉄道の夜』　その1」『イーハトーボゆきの軽便鉄道』同前掲、二〇二‐二〇三頁

（27）「銀河鉄道の夜」後期形、同前掲、一七〇頁

結語　本論の成果と課題

ここで、改めて本論文の内容を振りかえてみることにしよう。

まず序章では、本論文の基本的なスタンス、研究方法および目的を示し、共生、自己犠牲などのキーワードに関する先行研究を紹介し、本論文との差異を説明した。

第Ⅰ部では、賢治文学における越境と異文化接触を描く作品を中心的に取り上げ、宮沢賢治およびその文学に表現される共生思想を素描した。

第1章では、その切り口として、宮沢賢治のエスペランチストとしての一面に注目した。エスペラント語の歴史や思想および賢治とエスペラント語との関わりを検証することで、エスペラント思想と賢治文学における共生願望との共通性を示した。

第2章からは具体的な作品分析に入ったが、最初に取り上げたのは「氷河鼠の毛皮」と「注文の多い料理店」である。そこで描かれる異文化接触の契機となる越境行為について考察した。二作品に描かれる紳士たちの転落について分析することで、賢治テクストから、異なる種の生き物たちが共生したいという願望とその困難さを読み取った。

第3章では、「鹿踊りのはじまり」、「狼森と笊森、盗森」、「なめとこ山の熊」という植民地主義思想に関わる三部作を一つの作品群として考察してきた。そこで、かつて内国植民地として認識されていた北海道の開拓歴史およびアイヌ民族社会の解体という歴史状況に注意を払いながら、こうした時代状況と賢治文学との照合性を探った。これと同時に、賢治が考えていた共生と異文化交流の困難さ、また賢治が植民地主義を眺める視線を読み解いた。

第4章では、「風〔の〕又三郎」およびその関連作品を取り上げ、初期形から後期形までの改稿プロセスを追い、分析を行った。そこで、異人と人間との境界線を探り、越境行為による新しい人間関係の形成およびその葛藤について語り直した。これによって、当作品を異文化コミュニケーションを描く作品として読むことを試みた。

次の第Ⅱ部は、共生思想から浮上する、弱肉強食の食物連鎖に対する疑問を切り口として論じたものである。その展開には、賢治の生命観、戦争観、それからその農業思想と芸術観についても観照した。第Ⅰ部から第Ⅱ部にかけて、共生思想によって連結されるのは、エスペランチストとしての賢治像とビヂテリアンとしての賢治像である。

第5章では、まずビヂテリアンとしての宮沢賢治像を描き出した。そこから、賢治の実体験を検証することで、そのビヂテリアニズムと徴兵検査との関連を浮上させた。徴兵検査の経験を通じて、賢治は戦争に向き合う機会が得られた。そこから生まれる〈殺す―殺される〉、また〈食べる―食べられる〉関係に対する思索は、賢治童話の中に組み込まれていく問題であることが、この章の論述によって明らかになった。

第６章では、まず「フランドン農学校の豚」に対する考察を通じて、賢治文学における食問題と死生問題との関連性を明示した。その上で、賢治の徴兵検査体験を改めて取り上げることで、賢治の戦争問題に対する矛盾と葛藤に溢れる見解を理解した。その後、「ビヂテリアン大祭」を取り上げ、文学における現実問題の調和法を読解した。

第７章において、賢治の実体験から、農業への関心を持つようになった経緯を辿った。それから、賢治の農業思想を最も反映している「農民芸術概論綱要」およびその実践活動としての羅須地人協会の農業活動に言及した。そこで、白樺派の代表人物・有島武郎や武者小路実篤と比較することで、賢治文学とプロレタリア文学との精神的共鳴および距離感を明示した。

第８章では、賢治の農業に対する思索およびその転向を現す「ポラーノの広場」を取り上げて論じた。ここで、特に注目したのは、賢治とのゆかりのある土地・北海道と産業組合との関わりである。この章の検討によって、賢治が北海道で出会った人々から、その文学創作に影響を与えられたことが証明された。

第Ⅰ部と第Ⅱ部において、賢治の共生理想が彼の文学で表現される一方、その実現の困難さが同時に示唆されている。このような葛藤の中に、賢治が探し出した救済の道は自己犠牲の道である。第Ⅲ部は、賢治が考えていた共生理想の実現法としての自己犠牲について再検討を行った。

第９章では、賢治文学における自己犠牲の系譜をまとめ、その特質を見出した。その上で、関連する先行研究を整理し、賢治文学における自己犠牲に関して、更なる検討の可能性を指摘した。

第１０章では、賢治の自己犠牲思想と仏教思想との関わりを認めた上で、自己犠牲精神を重視する武士道思想を視野に入れる必要性を提示した。そこで、賢治と新渡戸稲造、内村鑑三とのリレーションシップが検証されたと同時に、「グスコーブドリの伝記」を分析することで、武士道思想が賢治文学では、如何に自己犠牲のモチーフを通じて表現されたかを吟味した。

第１１章は、賢治文学における理想世界と自己犠牲を巡り、論を展開するものである。この章では、「銀河鉄道の夜」改稿経緯を確認したうえで、その後期形が自己犠牲の物語として成立するプロセスを追った。その後、賢治文学における個人と全体との対立的関係について分析しながら、自己犠牲のモチーフと賢治文学に現れる理想世界との関係性を考察した。

第１２章では、「銀河鉄道の夜」初期形に目を向けた。作品が複雑な改稿に伴って、ブルカニロ博士の実験記録から、ハッピーエンドへと収束する初期形〔三〕に辿りつき、それから結末が解放された後期形に至るまでの変遷プロセスを明らかにした。これによって、賢治文学の特質を考える時、その未決性への配慮は不可欠な視座であることを指摘した。

以上のような内容を通じて、宮沢賢治文学の様相を改めて示すことができ、今まで充分に論じられていなかった賢治文学と北海道との繋がりも新たに検証された。まず、賢治の植民地主義を眺める視線の背景に存在する北海道開拓の歴史およびアイヌ民族社会の解体

などの歴史状況が照射された。また、賢治と有島武郎、佐藤昌介、新渡戸稲造、内村鑑三などの人物との関連を提示することで、札幌農学校文化圏の人物が、賢治の中に確かな存在感を有していたことが明示され、北海道という場所が賢治にとって重要な意味を持っていたことを浮かび上がらせた。

本論文では、なるべく具体的に作品に寄り添いながら、論を展開することを念頭に置いた。そのため、理論的、原理的な考察を行うという点では不足の感があった。また、賢治文学の意義について追究するものの、宮沢賢治の童話作品を中心的に取り扱っていたため、詩や短歌などの韻文との横断的な関連や展望に関して、その全てに配慮をしたとは言えない。今後はより広い文脈の中で、研究を展開し、進めていく必要があると愚考する。

参考・引用文献一覧

※書籍、雑誌特集、書籍所収論文、雑誌所収論文、作品集・その他の順に配列した。
※各項目は編著者名の姓の五十音順に、発行年の古い順で配列した。
※編著者が複数の場合、最初に表記した者の五十音順に従った。

書籍

アレキサンダー・ベネット『武士の精神とその歩み――武士道の社会思想史的考察――』思文閣、二〇〇九年四月

天沢退二郎『《宮沢賢治》論』筑摩書房、一九七六年十一月

天沢退二郎『謎解き・風の又三郎』丸善ライブラリー、一九九一年十二月

天沢退二郎『宮沢賢治の彼方へ』筑摩書房、一九九三年一月

天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年六月

天沢退二郎『《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて』筑摩書房、二〇〇九年七月

秋枝美保『宮沢賢治　北方への志向』朝文社、一九九六年九月

入沢康夫、天沢退二郎『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』青木社、一九七九年五月

入沢康夫監修・解説『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて』宮沢賢治記念館、一九九七年三月

伊藤信吉『ユートピア紀行――有島武郎・宮沢賢治・武者小路実篤』講談社、一九七三年

稲田浩二『日本昔話通観　第二十八巻　昔話タイプ・インデックス』同朋舎、一九八八年九月

ヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史　十九世紀における空間と時間の工業化』加藤二郎訳、法政大学出版局、一九八二年十一月

上田哲『宮沢賢治　その理想世界への道程』明治書院、一九八五年一月

宇田川洋『イオマンテの考古学』東京大学出版会、一九八九年二月

大角修『イーハトーブ悪人列伝――宮沢賢治童話のおかしなやつら』勉誠出版、二〇一一年二月

小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』泰流社、一九七九年十二月

押野武志『宮沢賢治の美学』翰林書房、二〇〇〇年五月

岡村民夫、佐藤竜一『柳田国男・新渡戸稲造・宮沢賢治――エスペラントをめぐって――』イーハトーブ・エスペラント会、二〇一〇年十月

大島丈志『宮沢賢治の農業と文学　苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林、二〇一三年六月

大島義夫、宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂、一九七四年七月
小埜裕二『童話論　宮沢賢治　純化と浄化』蒼丘書林、二〇一一年七月
笠谷和比古『武士道　侍社会の文化と倫理』ＮＴＴ出版、二〇一四年二月
加藤陽子『徴兵制と近代日本』吉川弘文館、一九九六年十月
河出書房新社編集部編『新文芸読本　宮沢賢治』河出書房新社、一九九〇年九月
菊池邦作『徴兵忌避の研究』立風書房、一九七七年六月
桑原啓善『ほんとうの愛と幸福を探して　宮沢賢治の霊の世界』でくのぼう出版、二〇〇一年六月
黄英『宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築』花書院、二〇〇九年二月
小松和彦『異人論　民俗社会の心性』筑摩書房、一九九五年六月
小松和彦『日本人の異界観』せりか書房、二〇〇六年十月
小森陽一『最新　宮沢賢治講義』朝日新聞社、一九九六年十二月
小森陽一ほか編『岩波講座　文学１　テクストとは何か』岩波書店、二〇〇三年五月
佐伯真一『戦場の精神史　武士道という幻影』日本放送出版協会、二〇〇四年五月
境忠一『評伝宮沢賢治』桜楓社、一九六八年十月
佐々木（ヤンコフスカ）ボグナ『宮沢賢治　現実の遠近法』京都大学学術出版会、二〇一三年三月
佐藤昌彦著、北海道大学文書館編『佐藤昌介とその時代』北海道大学出版会、二〇一一年八月
佐藤泰正編『別冊国文学 No.6　宮沢賢治必携』学燈社、一九八〇年五月
佐藤房隆『宮沢賢治――素顔のわが友（最新版）』富山房、二〇一二年三月
島薗進『日本人の死生観を読む　明治武士道から「いくりびと」へ』朝日新聞出版、二〇一二年二月
菅野覚明『武士道の逆襲』講談社、二〇〇四年十月
鈴木貞美『宮沢賢治　氾濫する生命』左右社、二〇一五年八月
瀬川拓郎『アイヌ・エコシステムの考古学　異文化交流と自然利用からみたアイヌ社会成立史』北海道出版企画センター、二〇〇五年十二月
多田幸正『賢治童話の方法』勉誠社、一九九六年九月
武内哲夫・生田靖『協同組合の理論と歴史』ミネルヴァ書房、一九七六年
田中克彦『エスペラント――異端の言語』岩波書店、二〇〇七年六月
高橋富雄『武士道の歴史』、新人物往来社、一九八六年
高階秀爾、芳賀徹、老川慶喜、高木博志編著、『鉄道がつくった日本の近代』成山堂書店、二〇一四年十一月
高山亮二『有島武郎研究　農場解放の理想と現実』明治書院、一九八四年四月

千葉一幹『賢治を探せ』講談社、二〇〇三年九月
千葉一幹『『銀河鉄道の夜』しあわせさがし』みすず書房、二〇〇五年七月
千葉一幹『宮沢賢治――すべてのさいはひをかねてねがふ――』ミネルヴァ書房、二〇一四年十二月
鶴見俊輔『限界芸術論』筑摩書房、一九九九年十一月
鶴田静『宮沢賢治の菜食思想』晶文社、二〇一三年六月
対馬美香『宮沢賢治　新聞を読む――社会へのまなざしとその文学』築地書館、二〇〇一年七月
永井秀夫『近代日本と北海道　「開拓」をめぐる虚像と実像』河出書房新社、一九九八年四月
永井秀夫『日本の近代化と北海道』北海道大学出版会、二〇〇七年六月
中村文昭『童話の宮沢賢治　太母、子ども八人間ノ父』洋々社、一九九二年三月
南雲道雄『現代文学の底流――日本農民文学入門』リオジン出版センター、一九八三年六月
日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　宮沢賢治Ⅱ』有精堂、一九八三年二月
新渡戸稲造『現代語訳　武士道』山本博文訳、筑摩書房、二〇一〇年八月
西成彦『新編　森のゲリラ　宮沢賢治』平凡社、二〇〇四年五月
西田良子『宮沢賢治論』桜楓社、一九八一年四月
西田良子『宮沢賢治読者論』翰林書房、二〇一〇年三月
原田勝正『鉄道と近代化』吉川弘文館、一九九八年四月
古川哲史『武士道の思想とその周辺』福村書店、一九五七年
藤原浩『宮沢賢治とサハリン――「銀河鉄道」の彼方へ――』東洋書店、二〇〇九年六月
藤原英司『北加伊エゾシカ物語――北海道の環境破壊史』朝日新聞社、一九八五年十月
分銅惇作『宮沢賢治の文学と法華経』水書房、一九八七年八月
別役実『イーハトーボゆきの軽便鉄道』白水社、二〇〇三年九月
松澤和宏『生成論の探求　テクスト・草稿・エクリチュール』名古屋大学出版会、二〇〇三年六月
見田宗介『宮沢賢治　存在の祭りの中へ』岩波書店、二〇〇一年六月
宮川健郎編『近代童話作家資料選集　第五巻　宮沢賢治』クレス出版、二〇一五年四月
松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開　近代日本の宗教的イデオロギー』東京大学出版会、二〇〇五年三月
松岡幹夫『宮沢賢治と法華経――日蓮と親鸞の狭間で』昌平黌出版会、二〇一五年三月
松岡義和『宮沢賢治北紀行』北海道新聞社、一九九六年四月
三宅史平『エスペラントの話』大学書林、一九九三年四月
村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、一九八七年七月
村瀬学『『銀河鉄道の夜』とは何か』大和書房、一九八九年七月

森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』河出書房、一九五六年十二月
孟子『孟子（下）』小林勝人訳、岩波書店、一九七二年六月
盛岡高等農林学校編『盛岡高等農林学校図書館和漢書目録』一九三七年三月
山内修『宮沢賢治研究ノート』河出書房、一九九一年九月
山田伸一『近代北海道とアイヌ民族　狩猟規制と土地問題』北海道大学出版会、二〇一一年五月
弥和順、佐々木啓編『新渡戸稲造に学ぶ　武士道・国際人・グローバル化』北海道大学出版会、二〇一五年五月
吉田司『宮沢賢治殺人事件』文藝春秋、二〇〇二年一月
吉本隆明『宮沢賢治』筑摩書房、一九九六年六月
吉本隆明『宮沢賢治の世界』筑摩書房、二〇一二年八月
ラザーロ・ルドヴィーコ・ザメンホフ『国際共通語の思想――エスペラントの創始者　ザメンホフ論説集』水野義明訳、新泉社、一九九七年六月

雑誌特集

特集・宮沢賢治の世界、『国文学　解釈と鑑賞』第三十八巻第十五号、一九七三年十二月
『宮沢賢治』第一‐一七号、洋々社、一九八一‐二〇〇六年
特集・宮沢賢治―童話の世界、『国文学　解釈と鑑賞』第四十九巻第十三号、一九八四年十一月
特集・賢治童話の手帖、『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻第六号、学燈社、一九八六年五月
特集・宮沢賢治―新しい賢治像を求めて、『国文学　解釈と鑑賞』第五十五巻第六号、一九九〇年六月
特集・宮沢賢治の世界、『国文学　解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一九九三年九月
特集・宮沢賢治、『銀河鉄道の夜』と『春と修羅』『国文学　解釈と教材の研究』第三十九巻第五号、学燈社、一九九四年四月
特集・宮沢賢治の作品――《Versions》あるいは《群》として読む、『国文学　解釈と教材の研究』第四十一巻第七号、学燈社、一九九六年六月
特集・宮沢賢治―謎の世界、『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、一九九九年二月
特集・宮沢賢治　詩と童話、『国文学　解釈と鑑賞』第六十六巻第八号、二〇〇〇年八月
特集・宮沢賢治童話を読む、『国文学』増刊、学燈社、二〇〇三年五月
特集・宮沢賢治を読み直す、『国文学　解釈と鑑賞』第七十四巻第六号、二〇〇九年六月

書籍所収論文

天沢退二郎「《Versions》としての賢治作品・序説」安藤恭子編『日本文学研究論文集成３５　宮沢賢治』若草書房、一九九八年十一月、十六‐二十一頁

天沢退二郎「『新校本宮沢賢治全集』の成立と特色」宮沢賢治没後七十年「修羅はよみがえった」刊行編集委員会編『宮沢賢治没後七十年の展開――修羅はよみがえった』宮沢賢治記念会、二〇〇七年九月、二五七－二七二頁
内藤正敏「宮沢賢治と佐々木喜善――異界・エスペラント・宗教――」安藤恭子編『日本文学研究論文集成３５　宮沢賢治』同前掲、九十六－一二〇頁
柄谷行人「日本植民地の『起源』」『岩波講座　近代日本と植民地４　統合と支配の論理』岩波書店、一九九三年三月
河野基樹「宮沢賢治と岩手国民高等学校―官製社会教育の狭間で―」『近代日本文学思潮史の研究―思索的転進の諸相―』プランニング２１、二〇〇〇年八月、一四三－一五九頁
崎浦誠治「北海道農政と北大」北海道大学編著『北大百年史　通説』ぎょうせい出版、一九八二年、六九九－七一三頁
高橋春雄「農民文学論史ノート」日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　プロレタリア文学』有精堂、一九七一年十月、一七九－一九五頁
祖父江昭二「宮沢賢治の位置」続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成』第十四巻、日本図書センター、一九九二年二月、三二〇－三二八頁
高倉浩樹「先住民問題と人類学――国際社会と日常実践の間における承認をめぐる論争」窪田幸子、野林厚志編『「先住民」とはだれか？』世界思想社、二〇〇九年十一月、三十八－六十頁
田村貞雄「内国植民地としての北海道」大江志乃夫ほか編『岩波講座　近代日本と植民地１　植民地帝国日本』岩波書店、一九九二年十一月、八十七－九十九頁
千葉燎郎「北海道農業論の形成と課題――第一次大戦前を対象に――」湯沢誠編『北海道農業論』日本経済評論社、一九八四年一月、三－二十七頁
坪田譲治「宮沢賢治の童話について」続橋達雄編『宮沢賢治研究資料集成　第十三巻』日本図書センター、一九九二年二月、一三八－一四三頁
中村三春「ブルカニロのいない世界――『ビヂテリアン大祭』の終わらない論争から――」『係争中の主体　漱石・太宰・賢治』翰林書房、二〇〇六年二月、二四七－二六七頁
中村三春「ハイパーテクスト《稿本風の又三郎》」『係争中の主体　漱石・太宰・賢治』同前掲、二六八－二九一頁
宮本正男「エスペランチスト宮沢賢治」『宮沢賢治研究資料集成　第二十巻』日本図書センター、一九九二年、三四一－三五六頁

雑誌所収論文

秋枝美保「〈テクスト評釈〉注文の多い料理店」『国文学　解釈と教材の研究』第三十一巻第六号、一九八六年五月、七十六－九十一頁
阿部正路「民俗文学としての『風の又三郎』」『宮沢賢治』第五号、洋々社、一九八五年三月、七十四－八十三頁
天沢退二郎「詩人《宮沢賢治》の成立――『鹿踊りのはじまり』から

『なめとこ山の熊』へ――」『展望』第一〇九号、一九六八年一月、筑摩書房、一二六‐一四〇頁
天沢退二郎「〈少年〉とは誰か――四つの《少年小説》あるいは四元論の試み――」『国文学　解釈と教材の研究』第二十三巻第二号、一九七八年二月、五十六‐六十六頁
天沢退二郎「《宮沢賢治》と《アーサー王・聖杯》・補足――自己犠牲の問題――」『明治学院論叢』第五六一号、一九九五年三月、一‐十四頁
天沢退二郎、西谷修「賢治、あるいは夜と戦争」『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月、十‐二十二頁
安藤恭子「『ポラーノの広場』論――流動する広場――」『国文学　解釈と鑑賞』第五十三巻第二号、一九八八年二月、九十八‐一〇四頁
伊藤眞一郎「ポラーノの広場」『国文学　解釈と鑑賞』第五十一巻第十二号、一九八六年十二月、一二四‐一二九頁
伊藤眞一郎「宮沢賢治の〝食〟の原風景」『賢治研究』第七十号、一九九六年八月、十六‐二十一頁
五十嵐淳「『注文の多い料理店』の二項対立を超えて――須貝千里氏の読みを検証する」『国文学　解釈と鑑賞』第七十三巻第七号、二〇〇八年七月、一四〇‐一四七頁
色川大吉「賢治の国柱会とベジタリアン大祭」『宮沢賢治研究 Annual』第六号、一九九六年三月、二七四‐二八〇頁
上田哲「賢治とキリスト教」『国文学　解釈と教材の研究』第三十四巻第十四号、一九八九年十二月、三十八‐三十九頁
押野武志「死を巡る言説――『フランドン農学校の豚』を読む――」『日本文学』第四十三巻第十二号、一九九四年十二月、三十‐三十四頁
押野武志「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』のふたつの〈終わり〉――ザネリのために」『国文学　解釈と鑑賞』第七十五巻第九号、二〇一〇年九月、七十三‐八十一頁
大塚常樹「農民芸術概論綱要」『国文学　解釈と鑑賞』第五十一巻第十二号、一九八六年十二月、一三六‐一四一頁
大塚常樹「『グスコーブドリの伝記』」『国文学　解釈と鑑賞』第六十一巻第十一号、一九九六年十一月、一五七‐一六二頁
岡澤敏男「『フランドン農学校の豚』のリアリティ」『国文学　解釈と鑑賞』第六十八巻第九号、二〇〇三年九月、一五五‐一六〇頁
大澤真幸「ブルカニロ博士の消失」『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月、五十四‐六十五頁
大庭みな子「『風の又三郎』、風に似た他者の認識」『国文学　解釈と教材の研究』第二十三巻第二号、一九七八年二月、一四七‐一五〇頁
岡村民夫「賢治的食物」『宮沢賢治』第十三号、洋々社、一九九五年三月、二〇二‐二一三頁
奥山文幸「童話の現実性と現実の童話性」『近代文学研究』第十五号、一九九七年十二月、一一六‐一一八頁
小森陽一「人間にとっての〝農〟と〝食〟のかかわり――宮沢賢治

の童話と詩から」『詩人会議』第四十六巻第十号、二〇〇八年十月、五十八‐六十六頁
五嶋千夏「もの足りない農本主義――宮沢賢治『ポラーノの広場』における産業組合と『家の光』――」『日本文学』第六十二巻第六号、二〇一三年六月、日本文学協会、三十六‐四十七頁
佐藤泰正「賢治とキリスト教――内村鑑三・斎藤宗次郎にふれつつ――」『国文学　解釈と鑑賞』第四十九巻第十三号、一九八四年十一月、三十六‐四十二頁
佐藤泰正「賢治とキリスト教――『銀河鉄道の夜』再読――」『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、二〇〇〇年二月、二十‐二十六頁
斎藤文一「『農民芸術概論綱要』における銀河系意識の誕生」『ユリイカ』第二十六巻第四号、一九九四年四月、八十二‐八十九頁
島村輝「賢治と左翼思想」『国文学　解釈と教材の研究』第三十四巻第十四号、一九八九年十二月、四十‐四十一頁
島村輝「『ビヂテリアン大祭』」『国文学　解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一九九三年九月、一〇六‐一一〇頁
島村輝「『ポラーノの広場』と『産業組合』」『国文学　解釈と鑑賞』第七十四巻第六号、二〇〇九年六月、一六四‐一六八頁
鹿嶋実「賢治童話に見られる『自己犠牲』――その諸側面と構造――」『上越教育大学国語研究』第十九号、二〇〇五年二月、十五‐二十九頁
杉浦静「賢治と仏教」『国文学　解釈と教材の研究』第三十四巻第十四号、一九八九年十二月、三十六‐三十七頁
須貝千里の「その時ふとうしろを見ますと……――『注文の多い料理店』問題――」『日本文学』第四十七巻第八号、一九九八年八月、十二‐二十四頁
田口昭典「宮沢賢治と農業」『国文学　解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一九九三年九月、四十六‐五十一頁
田口昭典「『ポラーノの広場』――二十一世紀の課題として」『国文学　解釈と鑑賞』第六十六巻第八号、二〇〇一年八月、一二六‐一三二頁
多田幸正「宮沢賢治における自給自足経済の試み」『日本文学』第三十一巻第十一号、一九八二年十一月、二十四‐三十六頁
多田幸正「『ポラーノの広場』論――最初形態と最終形態――」日本文学協会『日本文学』第三十七巻第三号、一九八八年三月、四十二‐五十三頁
田近洵一「童話『注文の多い料理店』研究」『日本文学』第二十六巻第七号、一九七七年七月、十九‐二十六頁
田中末男「宮沢賢治と菜食主義」『朝日大学一般教育紀要』第三十三号、二〇〇七年、一‐二十頁
竹腰幸夫「賢治の時空――『銀河鉄道の夜』冒頭三章の検討――」『中央大学国文』第五十号、二〇〇七年三月、一三三‐一四五頁
千葉一幹「宮沢賢治にさからって――文学の多数性をめぐる一考察――」『宮沢賢治研究 Annual』第四号、一九九四年三月、二〇二‐二二二頁

千葉一幹「〔ポランの広場〕、『ポランの広場』、『ポラーノの広場』――ユートピアの欄外から物語の欄外へ」『国文学　解釈と教材の研究』第四十一巻第七号、一九九六年六月、十九－二十五頁
千葉一幹「宮沢賢治が生きた時代」『人文・自然・人間科学研究』拓殖大学人文科学研究科、第十七号、二〇〇七年三月、一－九頁
千葉一幹「描かれた父のイメージ――宮沢賢治とその時代２」『人文・自然・人間科学研究』拓殖大学人文科学研究科、第二十一号、二〇〇九年三月、一－十五頁
続橋達雄「賢治童話『注文の多い料理店』の一考察」『野州国文学』第二十二号、一九七八年十月、三五七－三七一頁
鳥居清治「新渡戸稲造と協同組合運動――洞察の明、先見性に学ぶ――」『新渡戸稲造研究』創刊号、一九九二年九月、一〇五－一五〇頁
鳥居清治「産業組合運動に心を燃やした晩年の稲造」『新渡戸稲造研究』第十一号、二〇〇二年九月、四十七－六十五頁
土佐亨「『風の又三郎』私見――モリブデンの意味――」『香椎潟』第二十六号、一九八一年三月、一四九－一五八頁
中地文「宮沢賢治の童話観（上）――その時代性と独自性――」『日本文学』第七十一号、一九八九年三月、三十七－五十七頁
中地文「宮沢賢治の童話観（下）――心象スケッチとしての童話――」『日本文学』第七十二号、一九八九年九月、五十四－七十頁
中野新治「賢治の死生観」『国文学　解釈と教材の研究』第三十四巻第十四号、一九八九年十二月、三十二－三十三頁
中野新治「『ポラーノの広場』論――夢想者のゆくえ――」『日本近代文学』第四十二号、一九九〇年五月、日本近代文学会、十二－二十四頁
中村晋吾「徴兵忌避者としての宮沢賢治――徴兵検査とその周辺――」『国文学研究』第一六〇号、二〇一〇年三月、六十二－七十三頁
中沢新一「圧倒的な非対称――テロと狂牛病について」『すばる』第二十三巻第十二号、二〇〇一年十二月、十四－二十三頁
中村三春「相互扶助とユートピア　有島武郎と現代社会」『ichiko　特集　「いま」何を考えるべきか』文化科学高等研究院出版局、二〇一五年一月、六十一－六十九頁
西田良子「まことの世界の追求　よだかの星」『日本児童文学』第十四巻第二号、一九六八年二月、五十一－五十四頁
西山泰男「産業組合から賢治文学者へ」『宮沢賢治』第十五号、一九九八年三月、洋々社、一九二－二〇六頁
信時哲郎「鉄道ファン・宮沢賢治――大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」『賢治研究』第三十九巻第十一号、二〇〇五年七月、一－十二頁
信時哲郎「『銀河鉄道の夜』――夜の軽便鉄道に乗って」『国文学　解釈と鑑賞』第七十一巻第九号、二〇〇六年九月、一〇九－一一五頁
信時哲郎「宮沢賢治論――〝鉄道の時代〟と想像力」『国文学　解釈と鑑賞』第七十四巻第五号、二〇〇九年五月、十－十九頁

古屋安雄「武士道から平民道へ」『新渡戸稲造研究』第十三号、二〇〇四年九月、九十一‐一一六頁
藤久保知世「食と命　生命観の相異――宗教的見地から考える宮沢賢治文学作品『ビジテリアン大祭』――」『築紫語文』第二十二号、二〇一三年十月、五十二‐七十五頁
堀澤光儀の「宮沢賢治と産業組合」『新日本文学』第三十九巻第七号、一九八四年七月、六十‐六十二頁
松澤和宏『『銀河鉄道の夜』――初期形、後期形、決定稿」『宮沢賢治研究Annual』第九号、一九九三年三月、一一一‐一二二頁
松澤和宏『『銀河鉄道の夜』の結末（第八三葉）を読む――ミクロ・ジェネティックからマクロ・ジェネティックへ」『日本近代文学』第六十九号、二〇〇三年十月、十六‐二十七頁
松田司郎『『風の又三郎』小論――「風」という異人性」『国文学　解釈と鑑賞』第七十四巻第六号、二〇〇九年六月、一七六‐一七九頁
萬田務「宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』成立考――一つの仮説の試み――」『橘女子大学研究紀要』第十号、一九八二年、七十二‐九十一頁
萬田務『『銀河鉄道の夜』考――〈苹果〉をめぐって――」『国文学解釈と鑑賞』第五十八巻第九号、一三二‐一三九頁
ミシェル・ラフェイ「新渡戸稲造と内村鑑三の武士道」『基督教学』第四十五号、二〇一〇年、三十‐三十九頁
峰芳隆「宮沢賢治におけるエスペラント」『国文学　解釈と鑑賞』第六十五巻第二号、二〇〇〇年二月、十四‐十九頁
村上英一『『銀河鉄道の夜』――鳥捕りをめぐって――」『稿本　近代文学』第十三号、一九八九年十一月、九十二‐一〇一頁
村井紀「産業資本家宮沢賢治の誕生」『現代詩手帖』第三十九巻第十一号、一九九六年十一月、四十四‐五十三頁
吉田玉水「宮沢賢治文学における自己犠牲概念――自己犠牲までの道程――」『愛媛国文研究』第三十八号、一九八八年十二月、三十‐三十九頁
吉田文憲『『ど』の振動、空白の夜の眠り――『風の又三郎』について（1）」『現代詩手帖』第四十二巻第六号、一九九九年六月、一六四‐一七〇頁
吉田文憲『『又』の呪力、『又』の誘惑――『風の又三郎』について（2）」『現代詩手帖』思潮社、第四十二巻第七号、一九九九年七月、一四四‐一五四頁
米村みゆき『『風野又三郎』の〝啓蒙〟――飛行と帝国主義」『国語と国文学』第七十五巻第二号、一九九八年十月、二十八‐四十二頁
吉江久弥「ブルカニロ博士はなぜ消えたか――『銀河鉄道の夜』成立をめぐって」『武庫川国文』第四十一号、一九九三年三月、三十二‐四十八頁
米田利昭「宮沢賢治とシベリア出兵」『日本文化研究』第二号、二〇〇〇年三月、一五四‐一六三頁
渡部芳紀「宮沢賢治文学散歩」『国文学　解釈と鑑賞』第五十一巻第十二号、一九八六年十二月、一四二‐一五七頁

作品集・その他

有島武郎「宣言一つ」『日本近代文学大系　第三十三巻　有島武郎集』角川書店、一九七〇年三月

有島武郎研究会編『有島武郎事典』勉誠出版、二〇一〇年十二月

荒川洋治「美代子、石を投げなさい」『新潮』一九九二年六月

内村鑑三「武士道と基督教」『内村鑑三全集　第二十二巻』岩波書店、一九八二年

内村鑑三「武士道と基督教」『内村鑑三全集　第三十一巻』岩波書店、一九八二年

大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂、一九七二年二月

佐々木喜善「雪窓閑談」『東北評論』第七十三号、一九二三年一月、十六－二十頁

佐藤昌介「論説　農会に対する希望」『北海道農会報』第一巻第一－四号、一九〇一年一－四月

佐藤昌介「北海道庁に対する献策」中島九郎『佐藤昌介』河崎書店新社、一九五六年九月

高岡熊雄「佐藤昌介先生の『大農論』に就いて」『北海道農会報』第三十九巻第四六四号、一九三九年八月

新渡戸稲造「平民道」『新渡戸稲造全集　第四巻』教文館、一九六九年

原子朗『定本　宮沢賢治語彙辞典』筑摩書房、二〇一三年八月

廣松渉ほか編『岩波　哲学・思想事典』岩波書店、一九九八年三月

藤井隆至「産業組合」野村純一、三浦祐一、宮田登、吉川裕子編『柳田国男事典』勉誠出版、一九九八年七月

宮沢賢治『【新】校本宮沢賢治全集』筑摩書房、一九九五－二〇〇九年

宮沢賢治『校本宮沢賢治全集』筑摩書房、一九七三－一九七七年

民俗学研究所編『綜合日本民俗語彙　第一巻』平凡社、一九五五年六月

武者小路実篤「新しき村小問答」『武者小路実篤全集　第二十三巻』新潮社、一九五六年

初出一覧

序章　書き下ろし

第１章　書き下ろし

第２章　「賢治文学における越境と近代文明――『注文の多い料理店』、『氷河鼠の毛皮』を中心に――」中国日本文学会第十五回全国大会＆国際シンポジウムにおける口頭発表（二〇一六年八月十四日、於中国・杭州師範大学）の内容による書き下ろし

第３章　「宮沢賢治文学における植民地主義と越境への意志――『鹿踊りのはじまり』、『狼森と笊森、盗森』、『なめとこ山の熊』――」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第十五号、二〇一五年十二月、九十三－一〇六頁

第４章　「宮沢賢治〈風の又三郎〉論――異人の変奏曲：風の精霊・又三郎と新参者の間――」『日本近代文学会北海道支部会報』第十七号、二〇一四年五月、十九－三十一頁

第５章　書き下ろし

第６章　書き下ろし

第７章　書き下ろし

第８章　「『ポラーノの広場』における産業組合――宮沢賢治三回目の北海道訪問を手がかりとして――」北海道大学国語国文学会『国語国文研究』第一四九号、二〇一六年十月、四十七－五十九頁

第９章　書き下ろし

第１０章　「賢治文学における自己犠牲と武士道思想――『グスコーブドリの伝記』を中心に――」北京日本学研究センター編『日本学研究』第二十六号、二〇一六年十月、三六七－三八二頁

第１１章　書き下ろし

第１２章　「実験記録から未決の物語へ――宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の改稿をめぐって――」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』第十四号、二〇一四年十二月、五十五－七十頁

結語　書き下ろし

後記

日本語を勉強してから十年間、やっと日本語で書かれた博士論文を完成する時期を迎えます。これは、十年前、日本語を勉強し始めた時に考えられなかったことです。ここまでに来られたのは、いろいろな人と出会い、いろいろな支えをいただいたから実現できたことでしょう。この機会を借りて、心から感謝の意を表したいと思います。

まず感謝したいのは、指導教員の押野武志先生です。ご多忙の中でも、いつも素早く学会発表、論文執筆についてのご指導をくださいました。日本が堪能ではなく、研究のセンスもあまりなかった私に対して、最大の寛容さで見守ってくれました。最初に論文を雑誌に投稿した時、その原稿を五回も添削してくださったこと、今でもはっきり覚えています。研究の過程では、前に進む難しさを感じるたびに、押野先生が丁寧に指導してくださることを思い出すと、自分がもう少し頑張らないと！と感じております。また、学業の面だけではなく、長期間の海外生活にわたり、生活の面における困難に遭うたびにも、いつも押野先生から心強い支援をいただきました。そのおかげで、学業に専念することができ、これは博士論文の提出に直接に繋がる要因だと思います。このような指導先生の下で勉強できることは、人生の幸運だとつねに思っております。

また、このような指導先生に出会えるのは、同講座の中村三春先生のおかげです。中村先生のご紹介がなければ、押野先生との出会いもないですし、このように、立派な北海道大学で学生時代を送ることも考えられないでしょう。ここで、中村先生にも、感謝の意を表したいと思います。

人間というのは、ご縁によって結ばれるものだと、人生の道を歩みながら、たびたび感じています。北大とのご縁は、学部時代の山形大学での交換留学に繋がるものです。この二十歳の時の初海外体験に、新たな世界と可能性を広めてくださったのは、当時の指導教員福山泰男先生と国際本部の先生方です。また、この交換留学の機会を提供してくださったのは、ハルビン工業大学の恩師耿鉄珍先生、私の日本語啓蒙者卞紅先生、それから友人のように、私の人生を導いてくださった畢春玲先生です。それから、北大での六年間、友情に恵まれることによって、ここまで来ることができました。一人一人の顔を思い出すと、記憶の風船が膨らんでたまりません。これらのすべての素敵な出会いに感謝します。ここで、特に感謝の意をお伝えしたいのは、修士課程から、論文の未熟な日本語を添削してくださった江尻徹誠さんです。外国語で論文を執筆する不安は、江尻さんのおかげで解消することができていると思います。

大学に入学した時、日本語を勉強するのは第一希望ではなかったのですが、今までの道程をふりかえてみると、当時、日本語学科に編入したのは、誠に幸運なことでした。その意外な運命のきっかけは、今までの経験に繋がり、また自分の未来にも繋がっています。これ

から、日本語能力を生かし、日本に関わる仕事に就くのは、日本とのご縁がある私の使命だと思います。

今までの過程では、勿論辛い思いを抱くこともありました。博士論文を完成する時に、それらのすべてを吐き出そうと、時々思いました。しかし、誠に不思議なことですが、本当にこの時が来ると、私の胸にいっぱいになるのは、それらの辛いことではありません。代わりにあるのは、感謝、それから、この人生の宝物のような経験を、自分や社会のために、役に立たせたいという気持ちです。今の段階では、これは如何なる形で実現できるのかについて、またはっきりした答えを持っていません。これからの人生の道で、いろいろと試みながら、その答えを探り出そうと考えています。

最後に、ずっとずっと無条件で、不足な私を支えてくれた両親に、最大の感謝を捧げたい。親元から離れて十年間、遥かな異国にいる時でも、両親はいつも身近にいるように感じています。あなたたちがそこにいるからこそ、今の私があるのです。